仙台市文化財調査報告書第152集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)

——富沢遺跡第57～68次，
山口遺跡第13・14次発掘調査報告書——

1991年3月

仙台市教育委員会

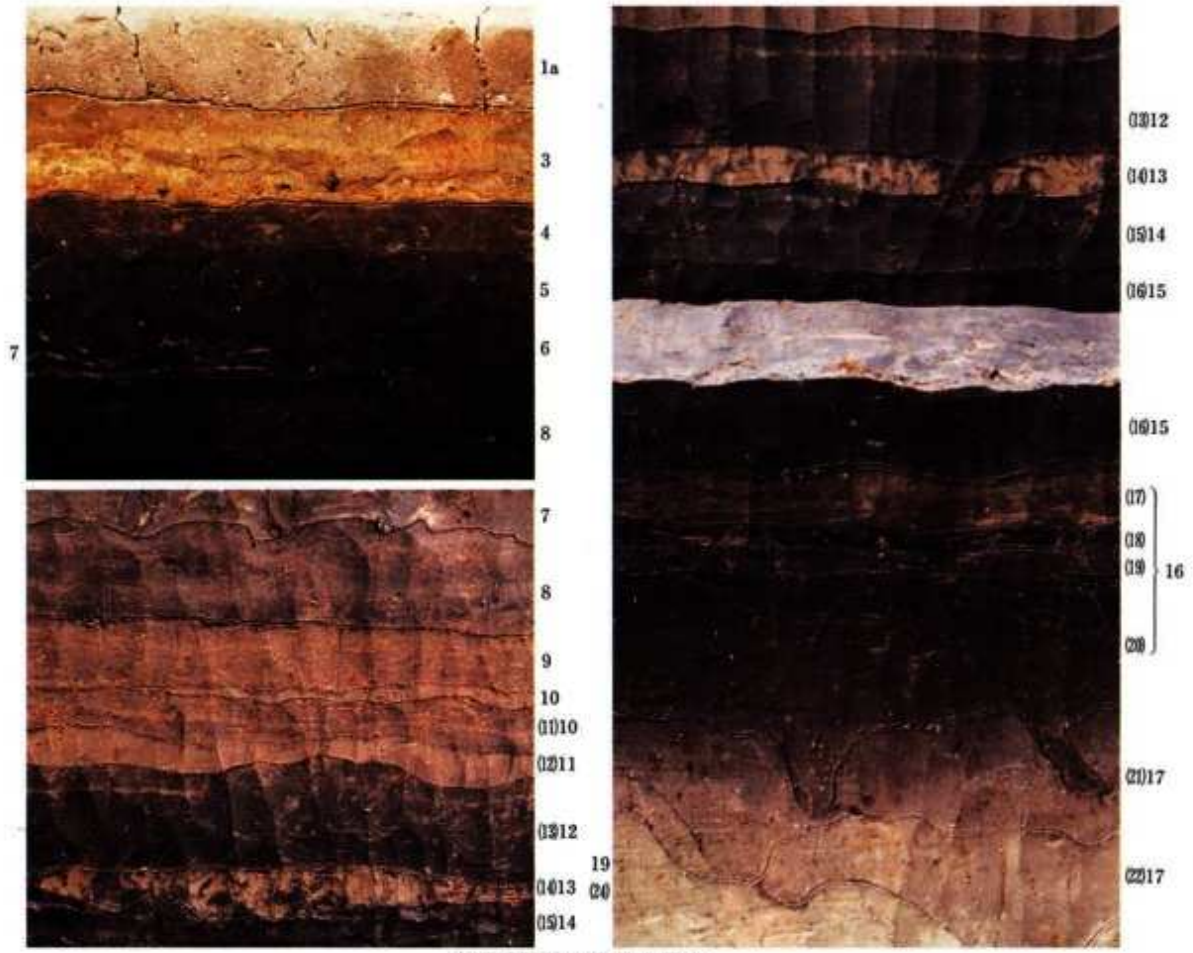
仙台市文化財調査報告書第152集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)

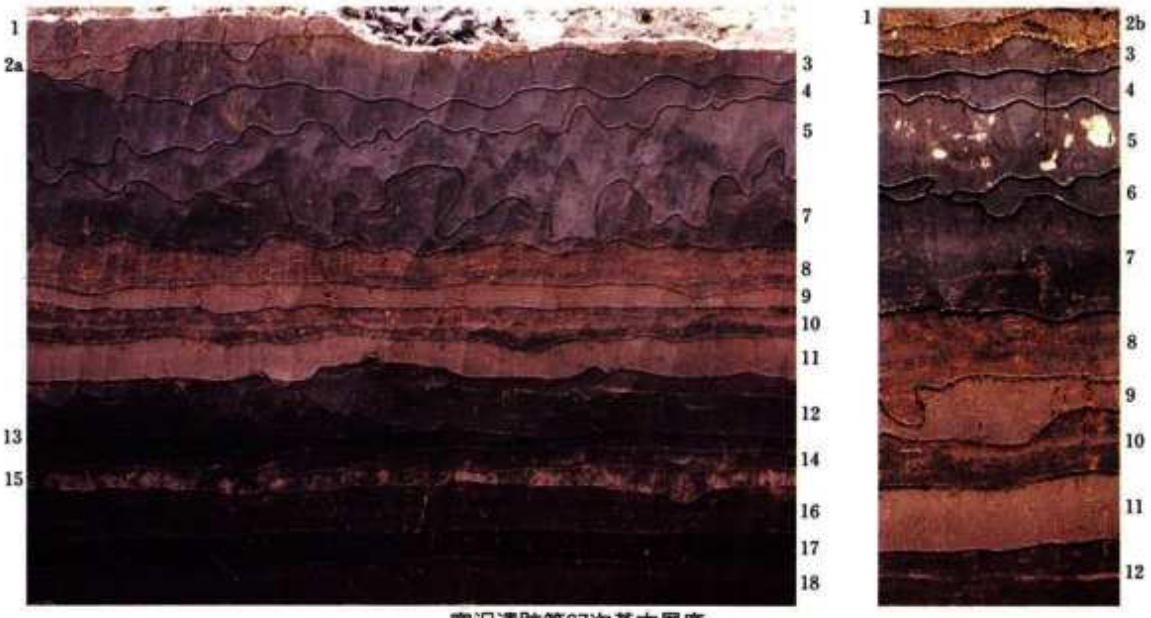
――富沢遺跡第57～68次，
山口遺跡第13・14次発掘調査報告書――

１９９１年３月

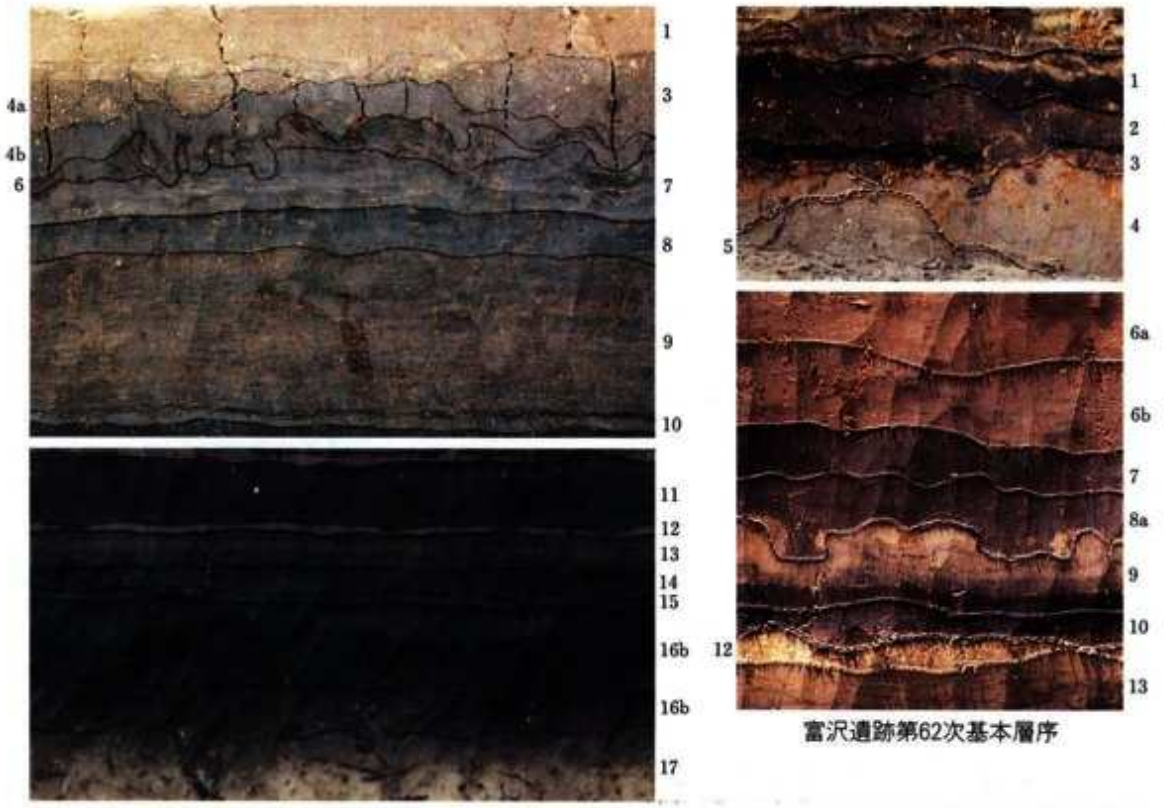
仙台市教育委員会



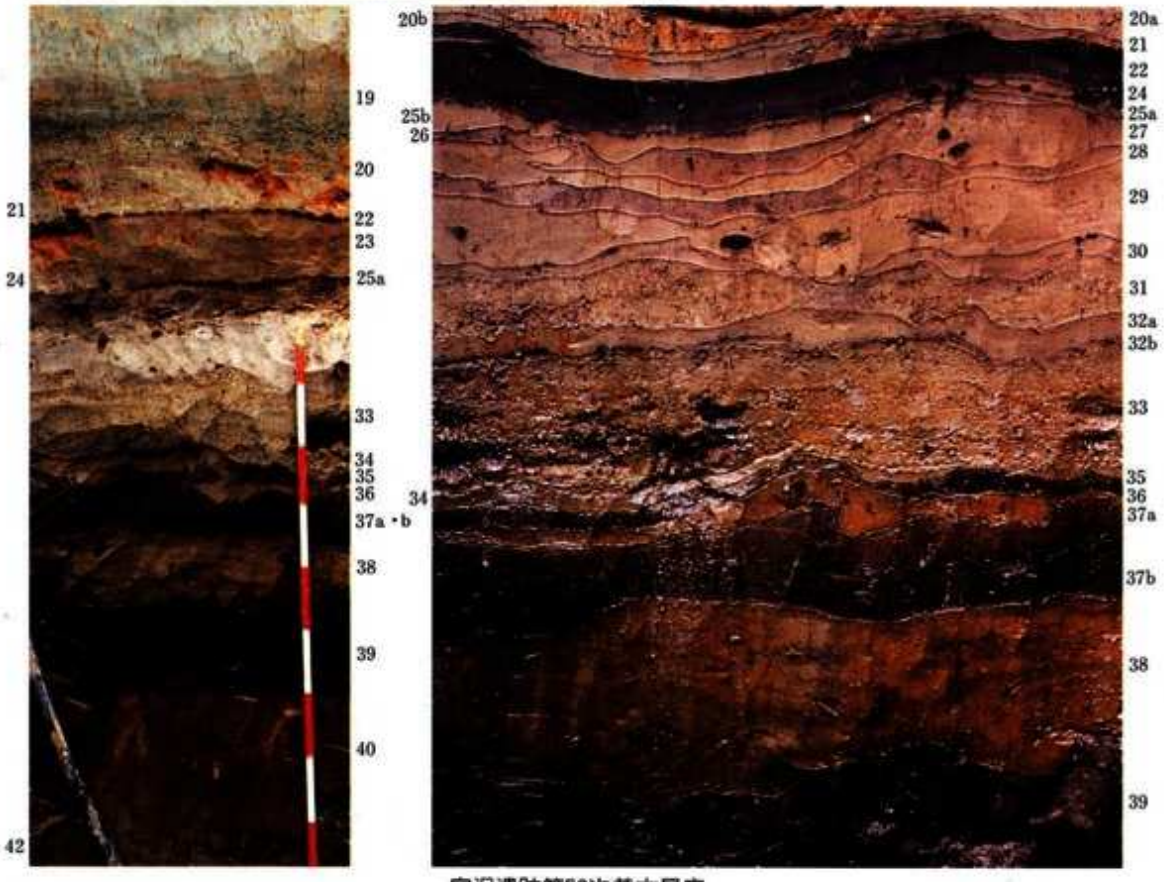
富沢遺跡第57次基本層序



富沢遺跡第67次基本層序



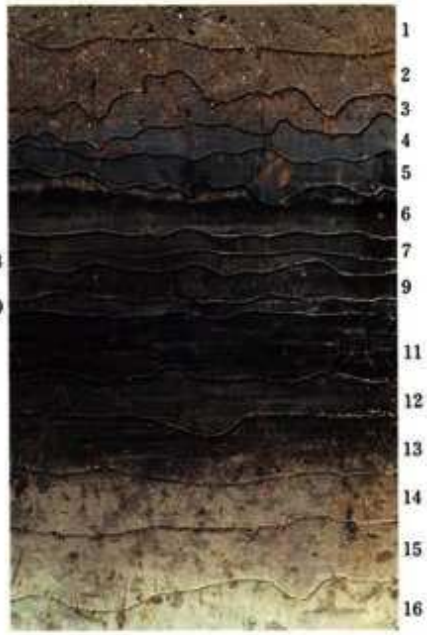
富沢遺跡第62次基本層序



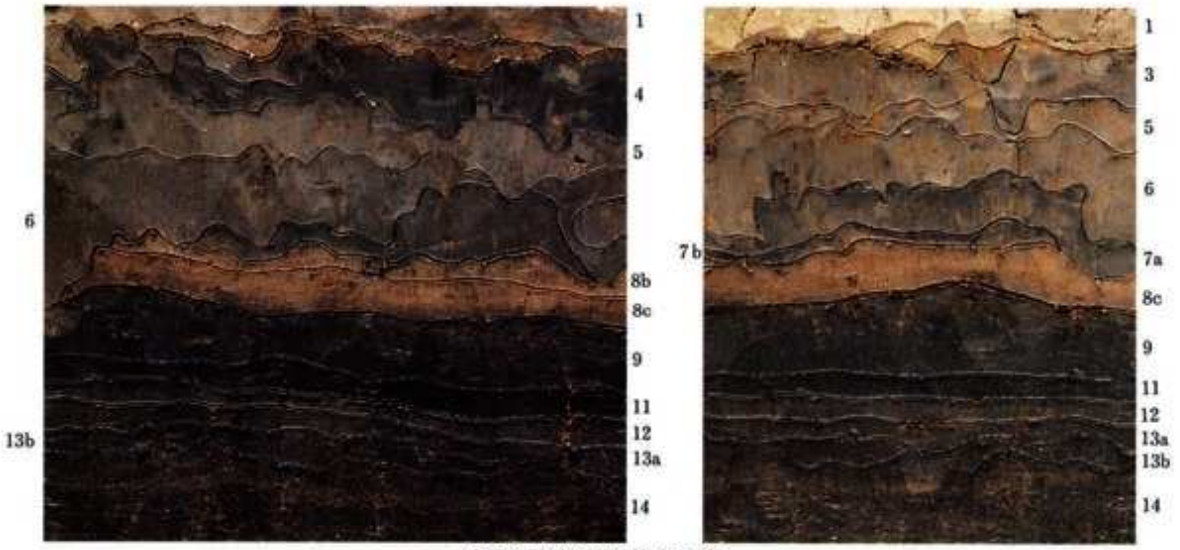
富沢遺跡第58次基本層序

富沢遺跡第59次基本層序

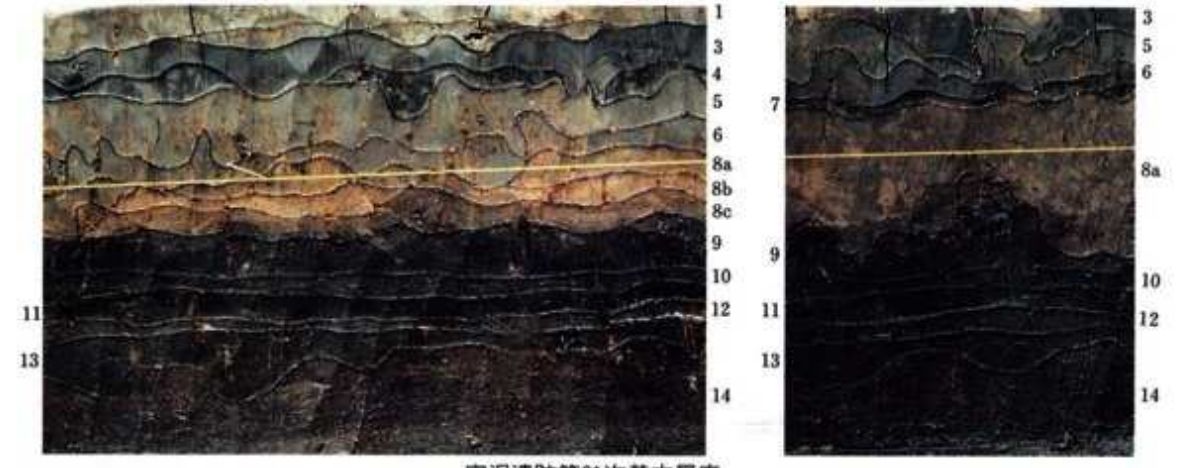
山口遺跡第14次基本層序



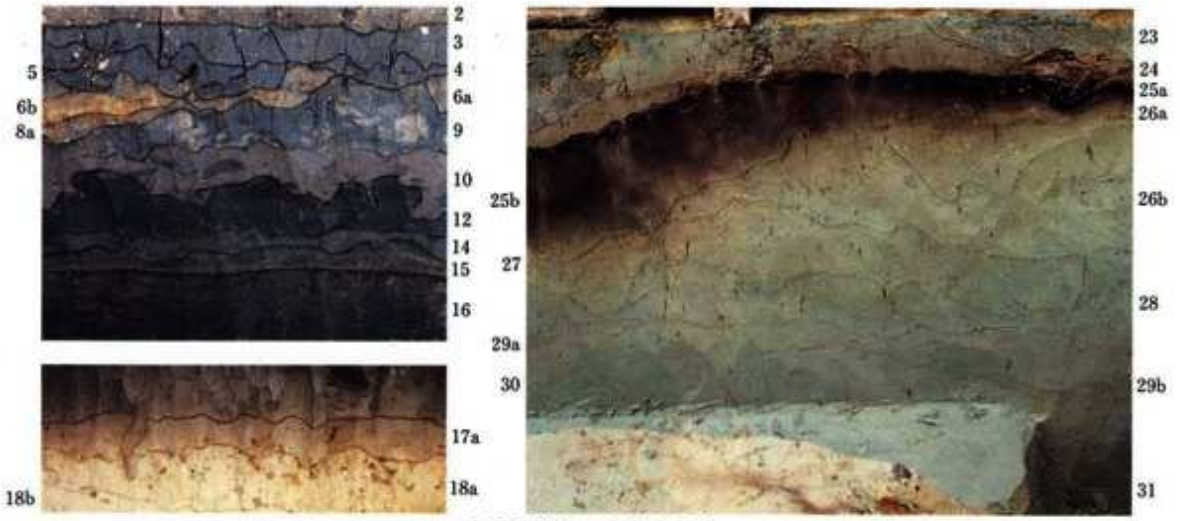
山口遺跡第13次基本層序



富沢遺跡第60次基本層序



富沢遺跡第61次基本層序



富沢遺跡第68次基本層序

富沢遺跡第63次基本層序

富沢遺跡第66次基本層序

富沢遺跡第64次基本層序

富沢遺跡第65次基本層序

富沢遺跡第65次 7 層帯状酸化鉄斑紋

山口遺跡第13次 5 層水田跡擬似畦畔 B

富沢遺跡第58次26層上面樹木出土状況

序　　文

昭和57年、仙台市は山口遺跡において初めて水田跡を検出し、同年より開始した富沢地区の高速鉄道の試掘調査により当地域に広大な水田跡の存在を確認することができました。昭和58年これらの調査結果に地形的条件を加え新たに「富沢水田遺跡」を登録しました。(昭和62年「富沢遺跡」に改称)

富沢遺跡は仙台市南西部の富沢、泉崎、袋東、長町南等に広がる総面積90ヘクタールに及ぶ水田跡を中心とした遺跡で、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野に立地しています。当遺跡は昨年度まで57次に渡る調査が実施され、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されています。このうち、弥生時代の水田跡の検出は東北地方中部における稲作農耕の起源を解明する上での貴重な資料となっています。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺物が確認され、さらにその下層からは2万3000年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生々しい状態で発見されています。

しかし、この富沢地区は昭和50年代の区画整理事業を契機として年毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄開業により、一層都市化が進んでいるところです。このような中にあって、平成2年度は富沢地区に所在する富沢遺跡、山口遺跡におきまして14件の発掘調査を実施致しました。本報告書はその調査成果をまとめたものであります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私たちに課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序と致します。

平成3年3月

仙台市教育委員会

教育長　東海林　恒　英

例　　言

1．本書は、平成２年度富沢地区受託事業に係わる富沢遺跡第57～68次・山口遺跡第13～14次発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。

2．報告書刊行のための遺物整理は、文化財課調査第二係　佐藤洋・佐藤甲二・平間亮輔・中富洋・佐藤淳が担当し、本書の編集は平間亮輔・佐藤甲二・佐藤洋・佐藤淳が行った。

3．関連科学については、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、樹種同定を鈴木三男氏（金沢大学）・能城修一氏（農林省森林総合研究所）、プラント・オパール分析を古環境研究所、石器の石質の鑑定を蟹沢聡氏（東北大学）にお願いした。

4．本文の執筆分担は下記のとうりである。

守田　益宗：第２章第２節5(1)

古環境研究所：第３章

佐藤　洋　：第２章第１・２・10・12節

佐藤　甲二：第１章、第２章第５・11・13節、第４章

工藤信一郎：第２章第14節

平間　亮輔：第２章第３・４・７節

中富　洋　：第２章第９節

佐藤　淳　：第２章第６・８節

5．発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に御指導・御助言・御協力を賜った（順不同・敬称略）

鈴木敬治、中川久夫、松本秀明、守田益宗、岡村道男、竹内貞子、沢田昭夫、蟹沢聰史、杉山真二、鎌田俊昭、梶原洋、小沢一弘、足立順司

6．富沢第58・63・66・68次調査下層で検出された、旧石器時代腐植土層に関しては、今回の報告書では略報とした。なお、これらに関する本報告は、後日刊行する予定である。

凡　　例

1．本報告書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

2．本書の第１図の地形図は、建設省国土地理院発行５万分の１「仙台」を使用した。

3．図中、本文中使用の方位の北（N）は、全て真北である。

4．遺構名の略語として、ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　ＳＲ：河川跡を使用した。

5．土器で中心線が１点鎖線のものは、図上復元実測図である。

6．本文中での「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。

7．本文中での「擬似畦畔Ｂ」とは、水田畦畔の直下層（自然堆積層）上面に認められる畦畔状の高まりをさす（斎野：1987）。

目　　次

第1章　富沢・山口遺跡のあらまし……1
第2章　調査結果……7
第1節　富沢遺跡第57次調査……7
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．下層の調査　5．遺構の所属年代とまとめ
第2節　富沢遺跡第58次調査……14
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物　4．下層の調査
5．遺構の所属年代とまとめ　6．富沢遺跡（第58次調査）の花粉分析
第3節　富沢遺跡第59次調査……27
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第4節　富沢遺跡第60次調査……33
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第5節　富沢遺跡第61次調査……41
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第6節　富沢遺跡第62次調査……49
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第7節　富沢遺跡第63次調査……54
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．下層の調査　5．遺構の所属年代とまとめ
第8節　富沢遺跡第64次調査……73
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第9節　富沢遺跡第65次調査……80
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ　5．着柄鋤鍬の樹種同定

第10節　富沢遺跡第66次調査……90
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物　4．下層の調査
5．近世遺構について　6．遺構の所属年代とまとめ
第11節　富沢遺跡第67次調査……110
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第12節　富沢遺跡第68次調査……114
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物　4．下層の調査
5．遺構の所属年代とまとめ
第13節　山口遺跡第13次調査……128
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構と所属年代のまとめ
第14節　山口遺跡第14次調査……136
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第3章　プラント・オパール分析……146
第4章　富沢地区基本層序案・層位対応関係案……153
第1節　基本層序案・層位対応関係案作成経緯と地区設定……153
第2節　富沢遺跡各地区基本層序案・層位対応関係案（1991年）……153
1．富沢遺跡北部A地区　2．富沢遺跡北部B地区
3．富沢遺跡北部C地区　4．富沢遺跡南部A地区

挿図目次

第1図　週辺の遺跡……3
第2図　富沢遺跡全体図……5・6

（富沢遺跡第57次調査）
第3図　調査区設定図……7
第4図　基本層序……8
第5図　4層水田跡平面・断面図……9
第6図　5層水田跡平面・断面図……10
第7図　5層水田跡出土遺物……10
第8図　6層水田跡出土遺物……10
第9図　6層水田跡平面・断面図……11
第10図　その他の出土遺物……12

（富沢遺跡第58次調査）
第11図　調査区設定図……14
第12図　基本層序……14

第13図　ＳＫ１・２平面・断面図……16
第14図　ＳＫ２出土遺物……17
第15図　４ａ層水田跡平面図、
　　４ａ・４ｂ層水田跡断面図……18
第16図　４ｂ層水田跡平面図……19
第17図　分析資料採取地点……21
第18図　第58次調査の主要な
　　花粉・胞子のダイヤグラム……25

（富沢遺跡第59次調査）
第19図　調査区設定図……27
第20図　基本層序……27
第21図　５層水田跡平面・断面図……28
第22図　６層水田跡平面・断面図……29
第23図　７層水田跡平面・断面図……30
第24図　８層水田跡平面・断面図……30
第25図　12層上面平面図……31
第26図　ＳＤ２断面図……31
第27図　その他の出土遺物……32

（富沢遺跡第60次調査）
第28図　調査区設定図……33
第29図　基本層序……33
第30図　４層水田跡平面図……35
第31図　６層水田跡平面・断面図……36
第32図　６層水田跡出土遺物……36
第33図　７層水田跡平面・断面図……38
第34図　ＳＫ１平面・断面図……39
第35図　その他の出土遺物……39

（富沢遺跡第61次調査）
第36図　調査区設定図……41
第37図　基本層序……41
第38図　５層水田跡平面図……43
第39図　６層水田跡平面図……43
第40図　６層水田跡出土遺物……44
第41図　８ａ層水田跡平面図……45
第42図　５・６・８ａ層水田跡断面図……45
第43図　８ａ層水田跡出土遺物……46
第44図　その他の出土遺物……47

（富沢遺跡第62次調査）
第45図　調査区設定図……49
第46図　基本層序……49
第47図　７層水田跡平面図……51
第48図　７層水田跡出土遺物……51
第49図　ＳＤ１断面図……51
第50図　８ａ層水田跡平面図……52
第51図　８ａ層出土杭断面図……53

（富沢遺跡第63次調査）
第52図　調査区設定図……54
第53図　基本層序……54
第54図　調査区南壁断面模式図……56
第55図　５層水田跡平面・断面図……57
第56図　畦畔２・ＳＤ１断面図……58
第57図　７層上面平面図……59
第58図　ＳＤ３～５断面図……60
第59図　８層水田跡平面・断面図……63・64
第60図　８層水田跡断面図……65
第61図　８層水田跡遺物出土状況……67
第62図　８層水田跡出土遺物……68
第63図　11層上面杭出土状況……69
第64図　11層出土遺物……69
第65図　その他の出土遺物……70

（富沢遺跡第64次調査）
第66図　調査区設定図……73
第67図　基本層序（上役・西壁、下役・北壁）……73
第68図　ＳＤ１・２平面図……75
第69図　ＳＤ１・２出土遺物……76
第70図　４層水田跡平面図……77
第71図　ＳＤ３平面図……78

（富沢遺跡第65次調査）

第72図　調査区設定図……80
第73図　基本層序……80
第74図　6層水田跡平面・断面図……82
第75図　7層平面図……83
第76図　9層水田跡平面図・SD1断面図……85
第77図　SD1出土遺物……86
第78図　その他の出土遺物……87

（富沢遺跡第66次調査）

第79図　調査区設定図……90
第80図　基本層序……91
第81図　4～7層上面平面図
SB1・SD1・SK1・2・5断面図…94
第82図　SK4平面・断面図……95
第83図　5～7層上面平面図、SD2・3断面図…96
第84図　SB2断面図……97
第85図　近世出土遺物……98
第86図　7b層水田跡平面略図……99
第87図　7b層水田跡平面図（I区）、
7a・7b層水田跡断面図（I区）…100
第88図　7b層水田跡平面・断面図（II区）……101
第89図　SD4平面・断面図……102
第90図　12層水田跡平面略図……102
第91図　12層水田跡平面・断面図（I区）……103
第92図　12層水田跡平面・断面図（II区）……104
第93図　13・14層水田跡平面・断面図……105
第94図　12～15層出土遺物……106
第95図　17a層水田跡平面・断面図……106
第96図　17a層水田跡断面図……107
第97図　17a層水田跡出土遺物……107
第98図　その他の出土遺物……108

（富沢遺跡第67次調査）

第99図　調査区設定図……110
第100図　基本層序……110
第101図　4・5層水田跡平面・断面図……112

（富沢遺跡第68次調査）

第102図　調査区設定図……114
第103図　基本層序……114
第104図　3層水田跡平面・断面図……116
第105図　4層水田跡平面・断面図……117
第106図　4・5層水田跡出土遺物……118
第107図　5層水田跡平面・断面図……118
第108図　6層水田跡平面・断面図……120
第109図　7a層水田跡平面・断面図……121
第110図　8b層水田跡平面・断面図……122
第111図　9層水田跡平面・断面図……123
第112図　10層水田跡平面・断面図……124
第113図　SD4平面・断面図……125
第114図　14層水田跡・SD5断面図……125
第115図　14層水田跡平面図……126
第116図　その他の出土遺物……126

（山口遺跡第13次調査）

第117図　調査区設定図……128
第118図　基本層序……128
第119図　SD1平面・断面図……129
第120図　4層水田跡平面図……130
第121図　5層水田跡平面図、
4・5層水田跡断面図……132
第122図　5層水田跡擬似畦畔B平面・断面図……133
第123図　その他の出土遺物……134

（山口遺跡第14次調査）

第124図　調査区設定図……136
第125図　基本層序……136
第126図　SK1平面・断面図……137
第127図　SK2平面・断面図……138
第128図　3層上面平面図……138
第129図　3層下面平面図、4層断面図……139
第130図　3層出土遺物……139
第131図　SD1平面・断面図……140
第132図　SD1・5出土遺物……140

第133図　7層水田跡平面・断面図……142
第134図　7層水田跡出土遺物(1)……143
第135図　7層水田跡出土遺物(2)……144
第136図　その他の出土遺物……144

（プラント・オパール分析）
第137図　イネのプラント・オパールの
　検出状況(1)……151
第138図　イネのプラント・オパールの
　検出状況(2)……152

（富沢地区基本層序案・層位対応関係案）
第139図　設定地区と調査区位置図……154
第140図　富沢遺跡北部A地区土層柱状図…159・160
第141図　富沢遺跡北部B地区土層柱状図……162
第142図　富沢遺跡北部C地区土層柱状図……164
第143図　富沢遺跡南部A地区土層柱状図……166

表　目　次

表1　遺跡地名表……2
表2　平成2年度　富沢遺跡調査要項……4
表3　平成2年度　山口遺跡調査要項……4
表4　花粉・胞子出現表……23・24
表5　富沢遺跡第59次・8次調査区層位対応表……32
表6　7層水田跡畦畔計測表……37
表7　7層水田跡水田区画計測表……37
表8　富沢遺跡第60次・34次調査区層位対応表……40
表9　富沢遺跡第61次・34次調査区層位対応表……48
表10　8層水田跡畦畔計測表……62
表11　8層水田跡水田区画計測表……62
表12　富沢遺跡第63・36次・埋蔵文化財
　発掘調査研究所鹿野三丁目219地区
　基本層序対応表……72
表13　富沢遺跡第67次・57次・30次調査区
　層位対応表……113
表14　山口遺跡第13次・富沢遺跡第8次調査区
　層位対応表……135
表15　プラント・オパール分析結果(1)……147
表16　プラント・オパール分析結果(2)……148
表17　プラント・オパール分析結果(3)……149
表18　富沢遺跡北部A地区
　基本層序及び層位対応表　その1……156
表19　富沢遺跡北部A地区
　基本層序及び層位対応表　その2……157
表20　富沢遺跡北部B地区
　基本層序及び層位対応表……161
表21　富沢遺跡北部C地区
　基本層序及び層位対応表……164
表22　富沢遺跡南部A地区
　基本層序及び層位対応表……166
表23　富沢遺跡第57～61次調査出土遺物集計表…168
表24　富沢遺跡第62～65・68次
　調査出土遺物集計表……169
表25　富沢遺跡第66～67次・山口遺跡第13～14次
　調査出土遺物集計表……170

写真図版目次

遺　構

（富沢遺跡第57次調査）

写真1　4層水田跡　Ⅱ区 …… 176
写真2　5層水田跡　Ⅲ区 …… 176
写真3　5層上面検出足跡（馬？） …… 176
写真4　5層上面検出足跡（牛？） …… 176
写真5　6層水田跡　Ⅱ区 …… 177
写真6　6層水田跡確認状況　Ⅲ区 …… 177
写真7　深掘り区全景　Ⅲ区 …… 177
写真8　断面（北壁） …… 178

（富沢遺跡第58次調査）

写真9　1号土坑 …… 178
写真10　2号土坑 …… 178
写真11　4a層水田跡 …… 179
写真12　4b層水田跡 …… 179
写真13　23・24層上面樹木出土状況 …… 179
写真14　25層上面樹木出土状況 …… 180
写真15　39層中樹木出土状況 …… 180

（富沢遺跡第59次調査）

写真16　5層水田跡 …… 180
写真17　6層水田跡 …… 181
写真18　7層水田跡 …… 181
写真19　8層水田跡確認状況 …… 181
写真20　2号溝跡断面 …… 182

（富沢遺跡第60次調査）

写真21　4層水田跡 …… 182
写真22　6層水田跡 …… 182
写真23　6層水田跡畦畔2断面（南壁） …… 183
写真24　7層水田跡確認状況 …… 183
写真25　7層水田跡 …… 183
写真26　7層水田跡畦畔3断面（東壁） …… 184

（富沢遺跡第61次調査）

写真27　5層水田跡 …… 184
写真28　5層水田跡畦畔断面図（南壁） …… 184
写真29　6層水田跡 …… 185
写真30　8a層水田跡（擬似畦畔B）① …… 185
写真31　8a層水田跡（擬似畦畔B）② …… 185
写真32　8a層水田跡大足状木製品出土状況 …… 186
写真33　8a層水田跡擬似畦畔B断面（西壁） …… 186

（富沢遺跡第62次調査）

写真34　7層水田跡・1号溝跡 …… 186
写真35　8a層水田跡 …… 187
写真36　8a層水田跡畦畔2断面図（南壁） …… 187

（富沢遺跡第63次調査）

写真37　5層水田跡 …… 187
写真38　5層水田跡耕作上上面 …… 188
写真39　5層水田跡畦畔2断面（南壁） …… 188
写真40　5層水田跡畦畔3断面（南壁） …… 188
写真41　1号溝跡 …… 188
写真42　1号溝跡断面（南壁） …… 188
写真43　3号溝跡 …… 188
写真44　3号溝跡断面（北壁） …… 188
写真45　8層水田跡① …… 189
写真46　8層水田跡② …… 189
写真47　8層水田跡③ …… 189
写真48　8層水田跡畦畔4 …… 190
写真49　8層水田跡大足出土状況 …… 190
写真50　8層水田跡畦畔1断面（西壁） …… 190
写真51　8層水田跡畦畔2断面（南壁） …… 190
写真52　8層水田跡畦畔4断面（南壁） …… 190
写真53　8層水田跡畦畔5断面（北壁） …… 190
写真54　8層水田跡畦畔9断面（南壁） …… 190

写真55　8 a － 1 層断面 …… 190
写真56　13層上面縄文土器出土状況 …… 191
写真57　21層上面樹木出土状況 …… 191
写真58　23層上面樹木出土状況 …… 191
写真59　25 a 層上面樹木出土状況 …… 191
写真60　25 b 層上面樹木出土状況 …… 191
写真61　深掘り区断面①（北壁） …… 192
写真62　深掘り区断面②（南壁） …… 192
写真63　深掘り区断面③（西壁） …… 192
写真64　深掘り区断面④（西壁） …… 192

（富沢遺跡第64次調査）

写真65　1 ・ 2 号溝跡 …… 192
写真66　3 号溝跡 …… 193
写真67　3 号溝跡断面（北壁） …… 193

（富沢遺跡第65次調査）

写真68　6 層水田跡 …… 193
写真69　7 層上面帯状酸化鉄斑紋確認状況 …… 193
写真70　9 層水田跡確認状況 …… 194
写真71　1 号溝跡断面図（内壁） …… 194
写真72　1 号溝跡着柄鋤或は鍬出土状況 …… 194

（富沢遺跡第66次調査）

写真73　近世第 1 面全景 …… 195
写真74　1 号掘立柱建物跡 …… 195
写真75　5 号土坑 …… 195
写真76　1 ・ 2 号土坑 …… 195
写真77　4 号土坑 …… 195
写真78　1 号溝跡 …… 196
写真79　1 号溝跡底面陶器出土状況 …… 196
写真80　2 号竪穴建物跡 …… 196
写真81　2 号竪穴建物跡断面（西壁） …… 196
写真82　2 号竪穴建物跡堆積土陶器出土状況 …… 196
写真83　2 号溝跡遺物出土状況 …… 197
写真84　2 号溝跡 …… 197
写真85　3 号溝跡 …… 197
写真86　7 b 層水田跡　Ⅱ区 …… 197
写真87　4 号溝跡 …… 198
写真88　12層水田跡 …… 198
写真89　12層水田跡水口 …… 198
写真90　12層水田跡　Ⅱ区 …… 198
写真91　断面（東壁） …… 198
写真92　13・14層水田跡 …… 199
写真93　17 a 層水田跡 …… 199
写真94　深掘り区断面（南壁） …… 199
写真95　33層樹木出土状況 …… 200
写真96　36層上面樹木出土状況 …… 200

（富沢遺跡第67次調査）

写真97　4 層水田跡 …… 200
写真98　4 層水田跡畦畔断面（南壁） …… 200
写真99　5 層水田跡 …… 201

（富沢遺跡第68次調査）

写真100　3 層水田跡 …… 201
写真101　4 層水田跡 …… 201
写真102　4 層中焼実弾出土状況 …… 202
写真103　5 層水田跡 …… 202
写真104　6 層水田跡 …… 202
写真105　2 ・ 3 号溝跡 …… 203
写真106　7 a 層水田跡 …… 203
写真107　8 b 層水田跡 …… 203
写真108　9 層水田跡 …… 204
写真109　10 a 層水田跡（擬似畦畔 B） …… 204
写真110　14層水田跡確認作業風景 …… 204
写真111　14層水田跡① …… 205
写真112　14層水田跡② …… 205
写真113　5 号溝跡 …… 205
写真114　深掘り区全景 …… 206
写真115　25 b 層上面樹木出土状況 …… 206
写真116　26層上面樹木出土状況 …… 206
写真117　断面（北壁） …… 207
写真118　深掘り区断面①（南壁） …… 207

写真119　深掘り区断面②（西壁）……207

（山口遺跡第13次調査）

写真120　4層水田跡……208
写真121　5層水田跡……208
写真122　5層水田跡
　（擬似畦畔B・白線は新期）……208
写真123　1号溝跡断面（西壁）……209
写真124　4・5層水田跡畦畔断面①（東壁）……209
写真125　4・5層水田跡畦畔断面②（西壁）……209
写真126　5層水田跡新期擬似畦畔B
　断面（東壁）……209
写真127　5層水田跡新期擬似畦畔B
　断面（北壁）……209

（山口遺跡第14次調査）

写真128　3層土面帯状マンガン斑紋確認状況……210
写真129　1号土坑（東壁）……210
写真130　2号土坑……210
写真131　3層水田跡（擬似畦畔B）……210
写真132　1号溝跡……211
写真133　7層水田跡……211
写真134　7層水田跡畦畔断面（南壁）……211

遺　物

写真135　富沢遺跡第57次調査出土遺物(1)……212
写真136　富沢遺跡第57次調査出土遺物(2)……213
写真137　富沢遺跡第58次調査出土遺物……214
写真138　富沢遺跡第59次調査出土遺物……214
写真139　富沢遺跡第60次調査出土遺物……214
写真140　富沢遺跡第61次調査出土遺物……215
写真141　富沢遺跡第62次調査出土遺物……216
写真142　富沢遺跡第63次調査出土遺物(1)……216
写真143　富沢遺跡第63次調査出土遺物(2)……217
写真144　富沢遺跡第64次調査出土遺物……217
写真145　富沢遺跡第65次調査出土遺物……218
写真146　富沢遺跡第66次調査出土遺物(1)……219
写真147　富沢遺跡第66次調査出土遺物(2)……220
写真148　富沢遺跡第66次調査出土遺物(3)……221
写真149　富沢遺跡第68次調査出土遺物……221
写真150　山口遺跡第13次調査出土遺物……222
写真151　山口遺跡第14次調査出土遺物(1)……222
写真152　山口遺跡第14次調査出土遺物(2)……223
写真153　山口遺跡第14次調査出土遺物(3)……224
写真154　富沢遺跡第58次調査
　出土花粉顕微鏡写真……225
写真155　富沢遺跡第65次調査
　出土着柄鋤鍬樹種顕微鏡写真……226
写真156　プラント・オパール顕微鏡写真1……227
写真157　プラント・オパール顕微鏡写真2……228

第1章　富沢・山口遺跡のあらまし

富沢遺跡は仙台市西部の仙台市太白区長町南・富沢・泉崎他に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西に位置する。遺跡は主に低平で湿潤な後背湿地を中心とし、西方を丘陵地、他の三方を自然堤防によって囲まれている。なお、遺跡内西側中央部には、西方丘陵部から東へ延びる微高地が広がっている。遺跡の総面積は、今年度から遺跡の北東部が拡大され約90haとなった。標高は9～16mの間である。昨年度まで57次に渡る調査が実施されている。その結果、弥生時代から近代までの各時代の水田跡が検出されている。これら各時代の水田跡は、一地点で重層し検出される。また、水田跡以外には中世の居住域や縄文時代・後期旧石器時代の遺物・遺構も検出されている。

山口遺跡は富沢遺跡の南に隣接し、名取川支流旧笊川北岸の自然堤防上に位置する。遺跡面積は今年度から南西側が拡大され約25haである。遺跡範囲の北側では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含む。縄文時代・奈良時代・平安時代の集落跡として登録されている遺跡である。昨年度まで12次に渡る調査が実施されている。その結果、自然堤防上部分では上記時代の住居跡が、また、後背湿地部分では弥生時代から近世までの水田跡が検出されている。

なお、富沢遺跡・山口遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊島：1987）・山口遺跡第2次調査報告書（田中：1984）に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

水田跡の認定基準

現在、富沢地区の水田跡の認定基準に関しては、「水田跡の基本的理解－仙台市における水田跡の検出と認定－」（仙台農耕文化勉強会：1990）にその基準が示されている（Ⅰ・ⅡA～E）。以下にその文章を引用し掲載しておく。なお、詳細に関しては、前掲書を参考にされたい。

Ⅰ．1区画以上の水田区画が検出されたもの。

これらの水田跡の水田土壌には、一般的に次のような特徴が認められる。

- 下面の細かな凹凸。
- 下部に直下層を起源とするブロックが存在。

Ⅱ．Ⅰで示した水田土壌と同様な特徴をもつ層で、以下のいずれかの条件を満たすもの。

A．上面で畦畔が1条以上、平面的に検出されたもの。

B．畦畔、擬似畦畔Bとも検出されなかったものの、近接・平行した2条の杭列が検出され、しかも、水田区画の存在が想定されるもの。

C．他層（主に自然堆積層）との境界が平面的に直線的な方向性をもってとらえられ、しかも、断面観察によって境界部の水田土壌と母材となる層との関係が明確なもの。

D．畦畔が検出されなかったものの、直下層上面で擬似畦畔Bが平面的に検出されたもの。

E．畦畔、擬似畦畔Bとも検出されなかったものの、周辺の既検出水田跡との層位の対応ができるもの。

No.	遺跡名	立地	年代	No.	遺跡名	立地	年代
1	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良・平安・近世	41	鉄塚古墳	後背湿地	古墳（後）
2	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良・平安・中世	42	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世
3	弘師塚古墳	自然堤防	古墳（後）	43	富沢清水遺跡	自然堤防	奈良・平安
4	如台東弓条里跡	神鶴平野	奈良・平安	44	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
5	南小泉遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世	45	元袋由遺跡	自然堤防	奈良・平安
6	遠見塚古墳	自然堤防	古墳（前）	46	長東遺跡	自然堤防	古墳・平安
7	若林城跡	自然堤防	古墳・中世・江戸	47	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安
8	仲野城跡	自然堤防	中世	48	北原敷遺跡	自然堤防	奈良・平安
9	神楽遺跡	自然堤防	縄文～平安	49	長町清水遺跡	自然堤防	奈良・平安
10	今泉遺跡	自然堤防	縄文（後）～近世	50	大野田古墳群	自然堤防	古墳（中・後）
11	日辺館跡	自然堤防	室町	51	王の屋古墳	自然堤防	古墳
12	日辺遺跡	河川敷	古墳（中）	52	鳥屋塚古墳	自然堤防	古墳（後）
13	愛宕山横穴群	丘陵	古墳（末）・奈良	53	春日社古墳	自然堤防	古墳（後）
14	大年寺山横穴群	丘陵	古墳（末）	54	伊古奈遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
15	宗禅寺横穴群	河岸段丘	古墳（末）	55	下ノ内浦遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
16	根岸遺跡	河岸段丘	縄文	56	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
17	明塚古墳	自然堤防	古墳（中）	57	六反田遺跡	自然堤防	縄文～江戸
18	茂ヶ崎城跡	丘陵	富北朝～室町	58	五反田古墳	自然堤防	古墳
19	西台畑遺跡	自然堤防	縄文・弥生（中）・古墳	59	富沢館跡	自然堤防	戦国
20	郡山遺跡	自然堤防	古墳（末）・奈良・中世	60	南ノ内遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
21	北戸城跡	自然堤防	室町・江戸	61	鍛冶屋敷A遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
22	欠ノ上丁遺跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良・平安	62	鍛冶屋敷B遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・奈良・平安
23	鹿野屋敷遺跡	丘陵	古墳・奈良・平安	63	八本杉遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
24	一塚古墳	後背湿地	古墳（後）	64	南ノ東遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・奈良・平安
25	鹿野一丁目遺跡	河岸段丘	縄文・弥生・奈良・平安	65	上野遺跡	河岸段丘	縄文（中）・奈良・平安
26	二塚古墳	後背湿地	古墳	66	山田条里遺跡	河岸段丘	縄文・奈良・平安・江戸
27	砂押屋敷遺跡	河岸段丘	奈良・平安	67	船渡官遺跡	河岸段丘	縄文・弥生・奈良・平安
28	砂押古墳	河岸段丘	古墳	68	清太原西遺跡	河岸段丘	縄文・平安
29	芦ノ口遺跡	丘陵	縄文（早・前）・弥生・平安	69	西台裏跡	丘陵	古墳・奈良・平安
30	土手内遺跡	丘陵	縄文～平安	70	山田上ノ台遺跡	河岸段丘	旧石器・縄文（早・前・中・後）・平安・江戸
31	土手内横穴群	丘陵	古墳・奈良	71	杉土手	丘陵	江戸
32	上手内遺跡	丘陵	古墳・奈良	72	北前遺跡	河岸段丘	旧石器・縄文（早・前・中）・平安・江戸
33	富沢南跡	丘陵	古墳・奈良・平安	73	御堂平遺跡	丘陵	縄文・平安・中世
34	二神峯遺跡	丘陵	縄文（前・中）・平安	74	青葉山遺跡	丘陵	旧石器
35	寺山遺跡	丘陵	古墳（中）	75	桜木遺跡	自然堤防	平安・中世・近世
36	金洗沢古墳	河岸段丘	古墳	76	関橋遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
37	長町古墳	河岸段丘	古墳（中）	77	東遺跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
38	金河八幡古墳	後背湿地	古墳（後）	78	安久東遺跡	自然堤防	弥生～近世
39	富沢遺跡	後背湿地	旧石器～近世	79	後河原遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・奈良・平安・中世
40	長崎城遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・古墳・平安・近世	80	大塚山古墳	河川敷	古墳

表1　遺跡地名表

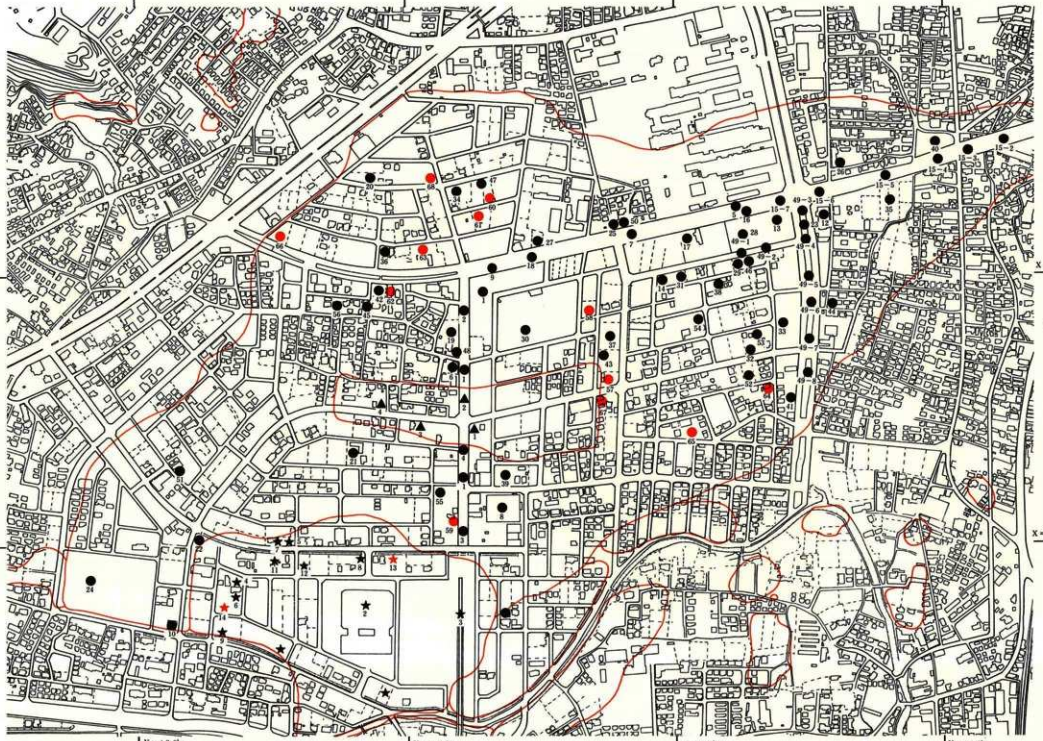
第1図　周辺の遺跡

調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	位置	現況	現標高	旧標高	協力者	担当職員
富沢第57次Ⅰ区	長町南4丁目5-25	平成元年10月20日～11月4日	約 35㎡	後背湿地	中央部	宅地	12.6m	8.7m	小島義治・庄子春吉	中富 洋
富沢第57次Ⅱ区	〃	平成元年11月13日～12月1日	約 41㎡	〃	〃	〃	12.6m	8.8m	〃	太山昭夫
富沢第57次Ⅲ区	〃	平成2年7月9日～8月7日	約 70㎡	〃	〃	〃	12.6m	8.8m	〃	佐藤 洋
富沢第58次	長町南4丁目4	平成2年4月11日～7月3日	約 101㎡	後背湿地	中央部	宅地	――	9.3m	㈱大京	佐藤 洋、太山昭夫、中富 洋
富沢第59次	泉崎1丁目20	平成2年4月12日～4月26日	約 19㎡	後背湿地	中央部	宅地	12.1m	10.6m	㈱仙南ハウス	平間亮輔
富沢第60次	鹿野3丁目23	平成2年5月7日～5月28日	約 112㎡	後背湿地	北西部	宅地	12.2m	11.1m	佐藤新治郎	平間亮輔
富沢第61次	鹿野3丁目24	平成2年5月14日～5月24日	約 25㎡	後背湿地	北西部	宅地	12.1m	11.2m	㈱仙台シティハウス	佐藤甲二
富沢第62次	泉崎1丁目7-51	平成2年6月6日～6月19日	約 28㎡	微高地	北西部	宅地	13.6m	12.3m	㈱仙南ハウス	佐藤 淳
富沢第63次	鹿野3丁目20	平成2年6月11日～8月17日	約 260㎡	微高地	北西部	宅地	13.6m	13.1m	㈱仙台土地開発	平間亮輔
富沢第64次	長町南3丁目16-1	平成2年7月10日～7月31日	約 41㎡	後背湿地	南東部	宅地	9.8m	8.4m	猪股弘志	佐藤 淳
富沢第65次	長町南3丁目20-23	平成2年8月21日～10月18日	約 179㎡	後背湿地	南東部	宅地	10.6m	8.8m	㈱仙南開発	中富 洋
富沢第66次	鹿野3丁目19	平成2年8月27日～10月15日	Ⅰ区約 100㎡ Ⅱ区約 15㎡	微高地	北西部	宅地	17.8m	16.0m	㈱筑波ビル管理	佐藤 洋
富沢第67次	長町南4丁目16 35	平成2年8月30日～9月7日	約 12㎡	後背湿地	中央部	宅地	11.8m	9.1m	稲村正三	佐藤甲二
富沢第68次	鹿野3丁目14	平成2年10月22日～12月20日	約 151㎡	後背湿地	北西部	宅地	12.7m	11.7m	㈱須田産業	佐藤 洋

表2　平成2年度　富沢遺跡調査要項

調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	位置	現況	現標高	旧標高	協力者	担当職員
山口第13次	富沢1丁目1	平成2年6月11日～7月4日	約 61㎡	後背湿地	――	宅地	12.4m	10.9m	㈱丸木医科器械	佐藤甲二
山口第14次	富沢1丁目11	平成2年10月22日～11月14日	約 65㎡	後背湿地	―	宅地	13.6m	13.0m	相原 博	青岡恭平、工藤信一郎

表3　平成2年度　山口遺跡調査要項



第２図　富沢遺跡全体図

第2章　調査結果

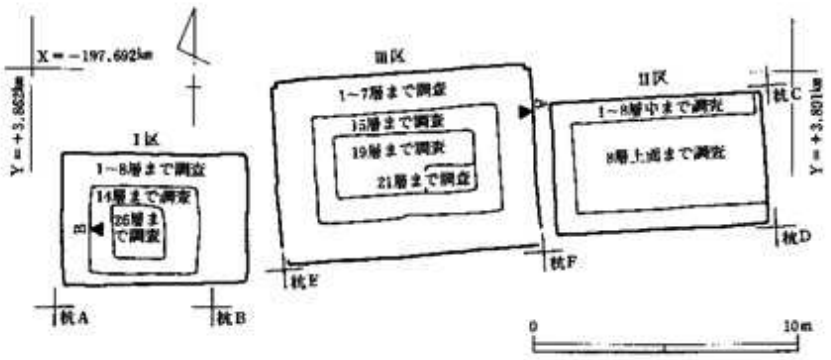
第1節　富沢遺跡第57次調査

1．調査方法

調査区は、調査時期に合わせてⅠ～Ⅲ区と区別している。各調査区の設定面積は、Ⅰ区5×7m（35㎡）・Ⅱ区5×8m（40㎡）・Ⅲ区7×10m（70㎡）である。調査は、盛土及び1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力で行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査はⅠ・Ⅱ区が8層上面、Ⅲ区が7層上面まで全面精査を実施した。また、旧石器時代の層が確認された第30次調査地点（太田、他：1988）との関連を知るため、調査区を縮小して下層の調査をⅠ・Ⅲ区で行った。測量は杭A～Fを基準にして実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（Ⅲ区、杭E：X＝－197.699688km，Y＝＋3.871606km，杭F：X＝－197.698906km，Y＝＋3.881615km）。

2．基本層序

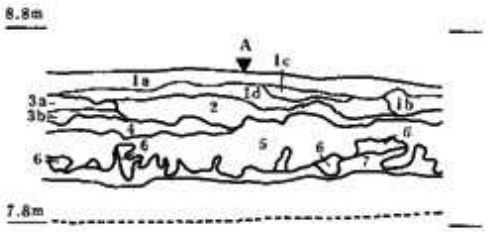
今回の調査では、盛土下に大別26層、細別層を含めると30層が確認された。これらの層の土性は、1～2層がシルト層を主体に、3層が砂、4～6層が粘土、7～16層が泥炭質粘土を主体に（粘土層が介在する）、17・18層が粘土、19層以下が粘土・砂の互層から成っている。6層中に灰白色火山灰ブロックを少量、20層下部で部分的に腐植質粘土[注1]を確認している。旧石器

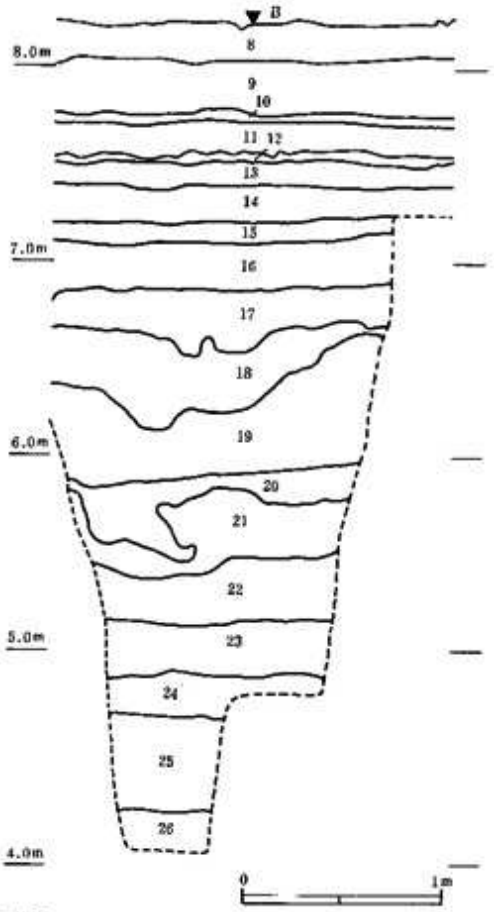


第3図　調査区設定図

時代に関わる樹木等は検出されなかった。グライ化は3・4層及び17層以下で認められる。現代のものを除く水田土壌は4～6層で、いずれもほぼ水平な堆積状況を示している。

遺物は、1層（特に、1b層）で多く出土するが、他は3・5・12・18層で少量出土するに過ぎない。





第4図　基本層序

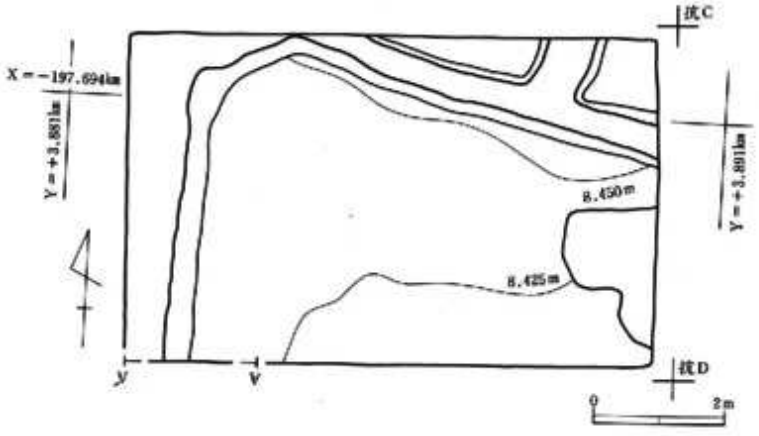
層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1a	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	3cm～16cm	有	―――	水田耕作	
1b	褐色	10YR4/4	シルト質砂	2cm～6cm	有	砂多量	自然堆積	
1c	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	4cm～16cm	有	炭化物粒少量・砂多量	水田耕作	―――
1d	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	2cm～12cm	有	―――	水田耕作	―――
2	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト	3cm～16cm		砂多量	水田耕作	―――
3a	灰色	10YR5/1	砂質シルト	3cm～8cm	有	マンガン粒・下層ブロック	水田耕作	グライ化
3b	灰色	10YR5/1	砂	3cm～8cm	―――	―	自然堆積	河川堆積？
4	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	4cm～10cm	有	マンガン粒・砂	水田耕作	グライ化
5	黒色	10YR2/1	粘土	10cm～20cm	有	炭化物粒・砂少量	水田耕作	
6	黒色	10YR1.7/1	粘土	2cm～18cm	―――	灰白色火山灰ブロック・植物遺体	水田耕作	―――
7	黒色	7.5YR2/1	泥炭質粘土	4cm～14cm	―――	黒褐色粘土層を数層はさむ	自然堆積	―――
8	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	12cm～22cm	―――	―	自然堆積	
9	黒褐色	7.5YR2/2	泥炭質粘土	24cm前後	―――	―	自然堆積	
10	黒褐色	10YR2/2	泥炭質粘土	5cm前後	―――	―	自然堆積	
11	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	16cm前後	―――	植物遺体（クルミなど）	自然堆積	―――
12	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	4cm前後	―	粘土層をはさむ	自然堆積	―――
13	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	12cm前後	―――	植物遺体・砂	自然堆積	―――
14	黒色	2.5Y2/1	粘土	12cm～18cm	―――	植物遺体・粘土層を数層はさむ	自然堆積	―――
15	黒色	7.5YR2/1	泥炭質粘土	10cm前後	―――	―	自然堆積	
16	黒色	7.5YR1.7/1	泥炭質粘土	24cm前後	―――	―	自然堆積	
17	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	18cm～32cm	―――	炭化物粒少量・植物遺体	自然堆積	グライ化
18	緑灰色	7.5GY6/1	粘土	10cm～30cm	―――	炭化物粒少量・植物遺体	自然堆積	グライ化
19	緑灰色	10GY5/1	砂	26cm～64cm	―	植物遺体	自然堆積	グライ化
20	緑灰色	5G6/1	粘土	10cm～30cm	―	植物遺体	自然堆積	グライ化・部分的腐植質粘土
21	緑灰色	5G5/1	砂	16cm～40cm		植物遺体	自然堆積	グライ化
22	緑灰色	10GY6/1	粘土	22cm～31cm		細砂を層状にはさむ	自然堆積	グライ化
23	緑灰色	7.5GY6/1	粘土	28cm前後	―	炭化物少量・植物遺体	自然堆積	グライ化
24	オリーブ灰色	5GY5/1	粘土	22cm前後	―――	炭化物少量・植物遺体	自然堆積	グライ化
25	緑灰色	10GY5/1	砂	50cm前後	―――	―	自然堆積	グライ化
26	緑灰色	7.5GY5/1	粘土	20cm以上	―――		自然堆積	グライ化

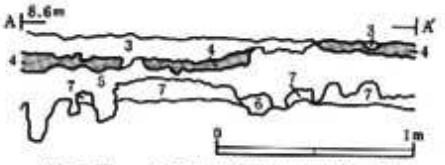
3．検出遺構と出土遺物

（1）4層上面

4層水田跡（第5図，写真1・135・136）

〈遺構状況〉　本水田跡はⅡ区で畦畔を検出したが、Ⅰ・Ⅲ区では検出されなかった。畦畔は3条検出され、畦幅に大小の差が認められる。その特徴は、西端部のものは大畦畔とみてよく、方向はN－4°－Eを示し、下端幅は1.4m以上である。小畦畔は2条検出された。東西方向のものは大畦畔から伸びており、N－75°－Wを示し直交しない。下端幅が0.7～0.8mである。南北方向のものはN－15°－Eを示し、下端幅は約1mである。水田区画は3区画確認できたが、その規模は不明である。田面の標高は8.47～8.42mで、南東方向へ下っていく。





第5図　4層水田跡平面・断面図

〈出土遺物〉　作土中より土師器3点、赤焼土器坏2点、須恵器甕1点、陶器（美濃皿）1点、磁器（肥前染付碗）1点、フレーク2点、クルミ1点が出土している。美濃窯の製品は、長石釉を施釉した志野皿と考えられ、作土上部より出土した。肥前染付碗は草文を描いたもので、作土上面より出土した。これらの陶磁器が、本水田の所属時期を推定する資料となろう。

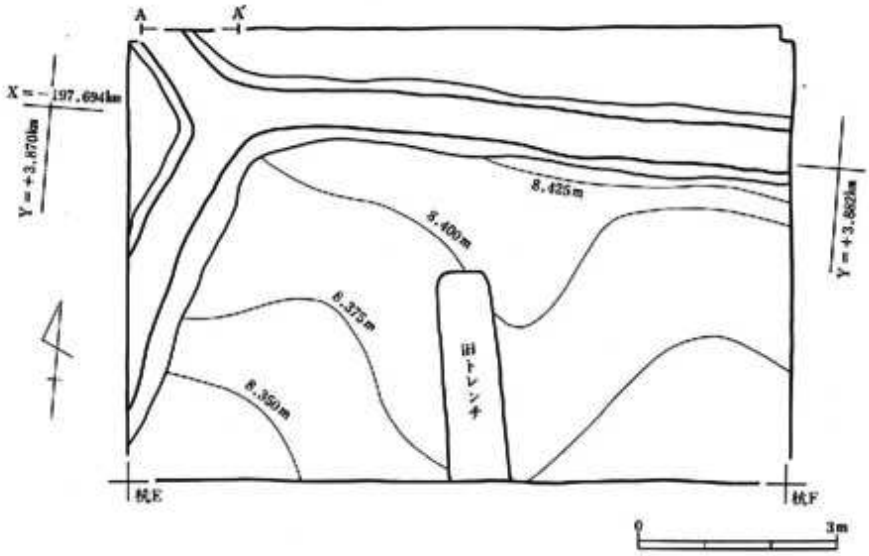
（2）5層上面

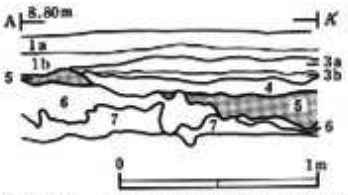
5層水田跡（第6・7図，写真2～4・135・136）

〈遺構状況〉　本水田跡はⅢ区で畦畔を3条検出したが、Ⅰ・Ⅱ区では検出できなかった。東西方向の畦畔は、国家座標の東西に平行し、下端幅1m前後である。南西に伸びる畦畔は、N－21°－Eの方向を示し、下端幅は1.2～1.3mである。北西に伸びる畦畔はN－43°－Wの方向を示し、下端幅は0.9m前後である。畦畔の高さは4～11cmであるが、東側程低くなっていく。水田区画は3区画確認できたが、その規模は不明である。田面は南方へ下がっていく。

〈出土遺物〉　Ⅰ・Ⅲ区の作土中より、土師器片2点、古銭1点、枝2点が出土している。古

銭は中国（北宋）の天聖元宝（第7図1）で、初鋳年は1023年である。この古銭が、水田跡の上限時期を推定する資料となろう。





第6図　5層水田跡平面・断面図

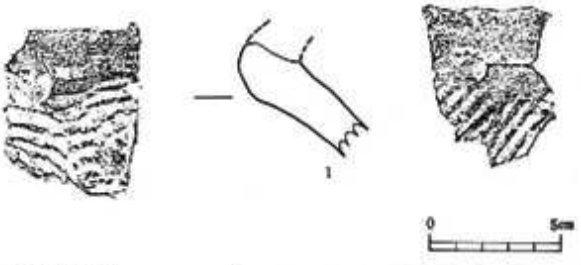
No.	図版番号	出土遺構・層位	銭名	初鋳年	時代	国名	遺存度	備考
1	136－5	Ⅲ区　5層	天聖元宝	天聖元年（1023）	北宋	真書	完	中国銭

第7図　5層水田跡出土遺物

（3）6層上面

6層水田跡（第8・9図，写真5・6・135・136）

〈遺構状況〉　本水田跡はⅡ・Ⅲ区で畦畔を検出したが、Ⅰ区では検出できなかった。畦畔に番号を付して説明する。Ⅱ区の畦畔1は大畦畔と考えられ、下端幅は2m前後と推定される。北部



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	136－6	Ⅰ区　6層	須恵器	壺	体部破片	――	――	――	外面：平行タタキ目、内面：横合部ナデ、体部あて具痕（青海波）

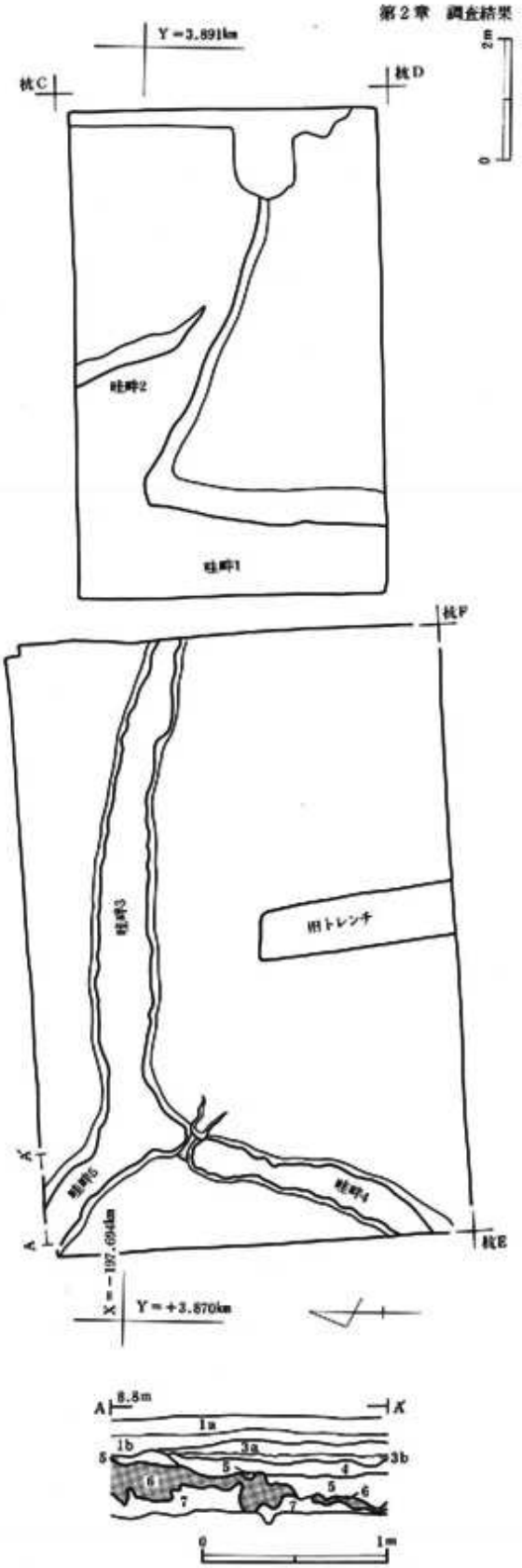
第8図　6層水田跡出土遺物

では、幅が広がる。方向はN－2°－Eを示し、真北に近い。畦畔2は畦畔1から東へ伸びるものだが、保存状態が良くない。方向はN－72°－W前後で、下端幅は約0.7mである。畦畔3は畦畔1から西へ伸びるもので、方向はN－80°－W前後を示し、下端幅は0.6～1.1mである。畦畔4はN－20°－Eの方向を示し、下端幅0.5～0.8mである。北部には水口が検出され、水流は西から東へ流入する。畦畔5はN－50°－Wの方向を示し、下端幅0.8～1mである。畦畔の高さは、大畦畔（畦畔1）で11cm前後、小畦畔（畦畔2～5）で2～4cmである。水田区画は5区画確認できるが、形状は不整であり、規模は不明である。田面は南東方向へ下がる。

〈出土遺物〉　Ⅰ区で土師器片3点、須恵器甕1点、Ⅱ区で時期不明の土器片1点が出土している。第8図1は須恵器甕である。外面は平行叩き、内面には円弧の当て具痕がみられる。外面上部には接合痕が認められ、一般的な接合方法を示している。これらの遺物には、本水田跡の時期を推定できる資料はない。

（4）その他の出土遺物（第10図，写真135・136）

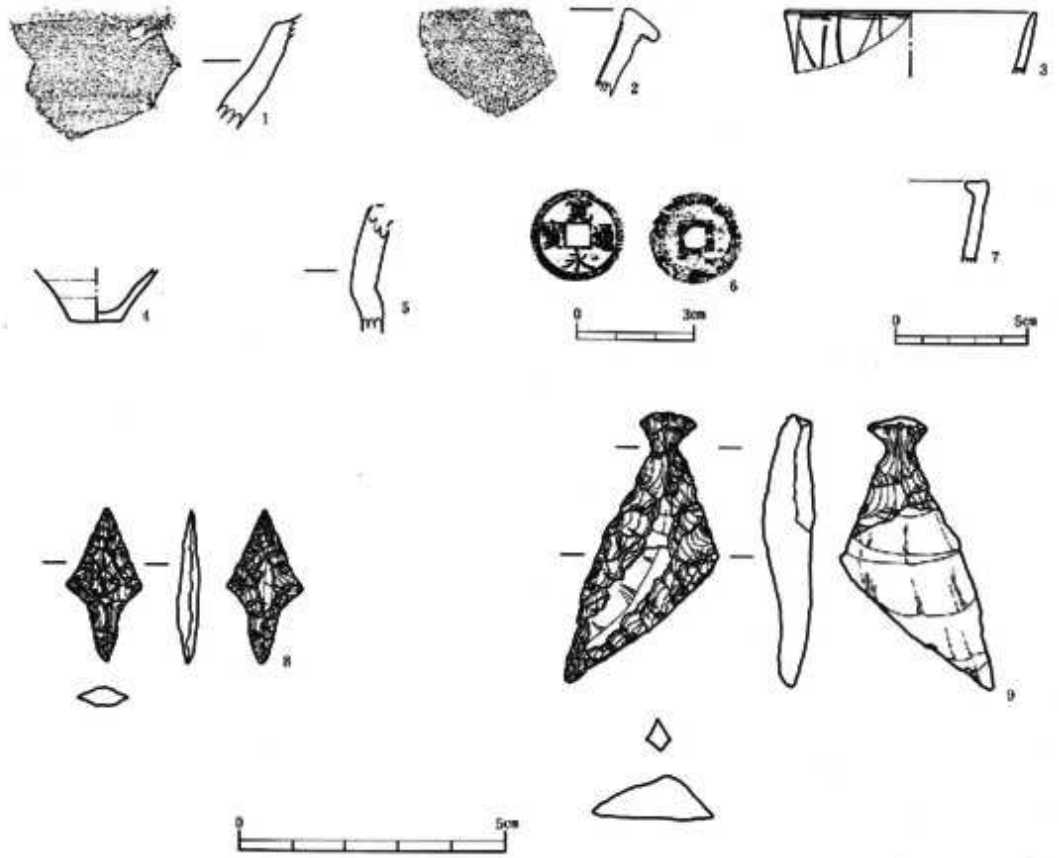
基本層1・2・3・12・18層から遺物が出土し、特にⅢ区で多い。1層は4層に細分できるが、1a層では唐津刷毛文碗・大堀相馬青釉土瓶・肥前染付碗・産地不明の染付銚子（銅版転写）などの陶磁器片7点、熕瓦3点、須恵器2点、1b層では瀬戸・美濃鉄釉擂鉢（第10図1）、産地不明の鉄釉擂鉢（第10図



第9図　6層水田跡平面・断面図

2)、大堀相馬灰釉碗（鉄釉流し）、土師質土器各1点、1c層では磁器1点、大堀相馬碗1点、1a層では熨瓦・土師器・杭・木片各1点がそれぞれ出土している。

また、細分層位が不明だが、1層より肥前染付網目文碗（第10図3）、瀬戸・美濃？飴釉茶入（第10図4）など陶磁器7点、瓦質土器鉢（第10図5）1点、須恵器1点、寛永通宝（第10図6）1点、フレーク1点が出土している。茶入はⅡ区で出土したものだが、Ⅲ区で同一個体と思われる肩部破片が4層上面より出土している。2層では肥前染付碗、美濃志野皿など陶磁



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	135－1	Ⅲ区　1b層	陶器	擂鉢	口縁部破片	――	――	――	瀬戸・美濃、鉄釉、櫛目2本以上、17c？
2	135－2	Ⅲ区　1b層	陶器	擂鉢	口縁部破片	――	――	――	産地不明、鉄釉、櫛目7本単位、17c？
3	135－10	Ⅱ区　1層	磁器	碗	口縁部破片	9.4cm	――	(2.4cm)	肥前、染付、網目文、江戸時代、17c？
4	135－4	Ⅱ区　1層	陶器	茶入？	肩部破片	――	2.0cm	(2.0cm)	瀬戸・美濃、外面上半と内面に施釉、Ⅲ区同一個体破片出土
5	135－3	Ⅰ区　1層	瓦質土器	鉢	口縁部破片	――	――	――	外面ナデ、（ガキ、内面ナデ、中世以降
7	135－6	Ⅱ区　3層	陶器	香炉	口縁部破片	――	――	――	瓦窯、飴釉、江戸時代

No.	図版番号	出土遺構・層位	銭名	初鋳年	時代	書体	遺存度	備考
6	135－14	Ⅱ区　1層	寛永通宝	――	江戸	――	完	古寛永

No.	図版番号	出土遺構・層位	名称	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
8	135－7	Ⅰ区　12層	有茎石鏃	2.9cm	1.9cm	0.4cm	1g	真岩	茎部分に付着物
9	135－8	Ⅰ区　17層	石匙	5.2cm	2.9cm	0.8cm	7g	珪質真岩	つまみ付近のみ両面に二次加工

第10図　その他の出土遺物

器3点、煉瓦3点、鉄製品2点（刀子？・鎹？）、碾片1点、杭1点が出土している。3a層上面で産地不明の飴釉香炉1点（第10図7）が出土している。1a・1b層では明治以後の磁器が出土しているが、1c～3a層までは江戸時代の遺物が多いようである。図示した遺物のうち、陶器類は17世紀代、染付碗も17世紀後半～18世紀前半頃のものであろう。

さらに、I区の下層で石鏃・石匙各1点が出土している。第10図8の石鏃は12層から出土したもので、凸基有茎鏃である。このタイプは時期を特定できないが、縄文時代後期後葉から弥生時代に多くみられる。第10図9は17層出土の縦型石匙で、縄文時代のものと考えられ、層位的にも矛盾しない。

4．下層の調査（写真7）

I区では2×2mの調査区を設定し、15層以下26層まで調査した。さらにIII区でも、2×1mの調査区を設定し、19～21層の調査を行った。両調査区において、20層から腐植質粘土の存在を確認した。いずれもブロック状を呈し、プライマリーな層となっておらず、樹根や枝などは検出できなかった。旧石器時代の生活痕跡の検出を目的として調査を行ったわけであるが、その痕跡を確認することができなかった。

5．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構は4～6層水田跡であるが、ほかに3a層も水田跡の可能性がある。水田跡の時期は、4層で18世紀頃の肥前染付碗、5層で中国の北宋銭が出土したことから、前者は近世、後者は中世と予想できる。6層は時期を推定できる資料はないが、黒色系粘土層で灰白色火山灰を若干含んでいる。これらの層は、近隣の第30次調査などの層相の比較から先の予想は肯定でき、6層についても中世の時期と考えられる。

また、5層では確認できなかったが、4・6層で大畦畔が検出された点が注目される。小畦畔は中世以降現代まで位置がほとんど変化していない点も注目される。

2．下層の調査では、旧石器時代の生活面や樹木が確認できなかったことから、あるいはこの時代の遺跡範囲の限界を示すものかもしれない。さらに、今後の調査でより明確になるものと予想される。

（註1）旧石器時代に相当する層の中には、原形を留める樹根・枝・種果などを包含する黒褐色粘土層が検出され、調査地点によってその枚数は異なる。この粘土層を現在「泥炭質粘土層」又は「腐植質粘土層」と呼んでいるが、層の形成過程が不明であり、より上位の層に存在するヨシを主体とする泥炭質粘土層とも表記上区別しにくい点など問題を残している。したがって、本報告書では以後便宜的に「腐植質粘土層」と呼ぶこととし、形成過程の究明に基づく層名の確定は今後の課題としたい。

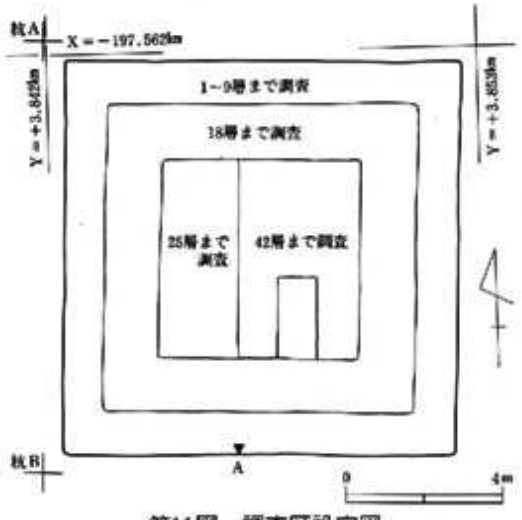
第2節　富沢遺跡第58次調査

1．調査方法

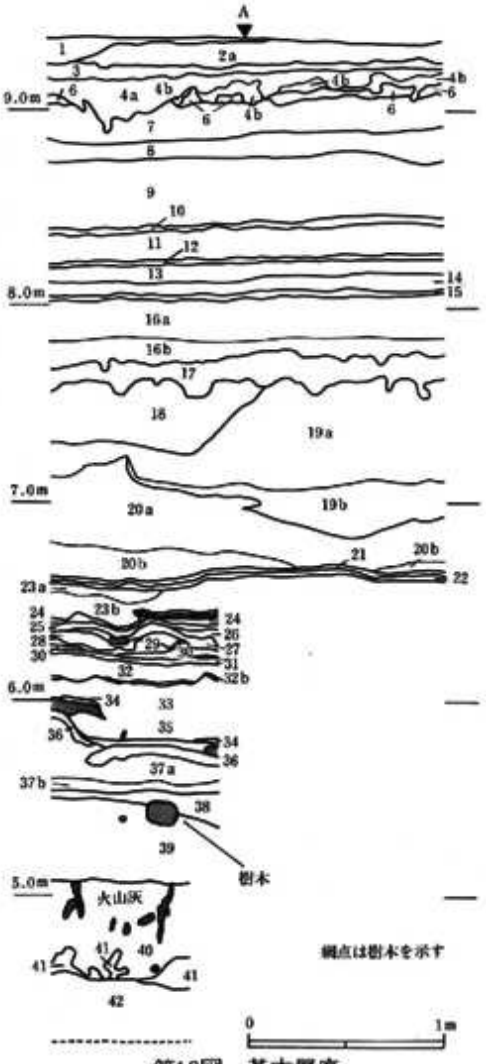
調査区の設定面積は約10×10m（101㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力によった。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。9層上面までは調査区全面を精査し、それ以下の層は第11図のように順次縮小して40層上面まで調査し、以下42層までは確認するに留まった。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。（杭A：X＝−197.561629km、Y＝+3.841955km　杭B：X＝−197.572636km、Y＝+3.841660km）。

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別42層、細別を含めると57層が確認された。層の特徴は、1～3層は砂質シルト、4a～5層は粘土、6～16層は泥炭質粘土あるいは粘土、17層以下は粘土・砂・シルトの互層になっている。水田跡は4a・4b層で検出されたが、他に2a・2b・3・5層が水田土壌である可能性がある。火山灰ブロックは、4a・4b・5



第11図　調査区設定図



第12図　基本層序

層序	土色	土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	黒褐色 2.5Y3/2	砂質シルト	8cm～16cm	――	砂	水田耕作(現代)	――
2a	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	6cm～13cm	有	砂	水田耕作	部分的分布
2b	黒褐色 2.5Y3/1	砂質シルト	3cm～12cm	――	砂質ブロック	水田耕作	部分的分布
3	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	4cm～16cm	有	砂	水田耕作	下面起伏
4a	黒色 10YR2/1	粘土	4cm～24cm	有	砂・灰白色火山灰	水田耕作	下面起伏・不連続な分布
4b	黒色 2.5Y2/1	粘土	8cm～28cm	――	灰白色火山灰・下層粘土ブロック	水田耕作	下面起伏・不連続な分布
5	黒褐色 10YR3/1	粘土	5cm前後	――	灰白色火山灰・植物遺体	水田耕作？	部分的分布
6	褐色 7.5YR4/4	泥炭質粘土	2cm～7cm	――	――	自然堆積	――
7	黒褐色 2.5Y3/1	泥炭質粘土	8cm～20cm	――	暗黄灰色粘土ブロック	自然堆積	――
8	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	10cm～20cm	――		自然堆積	――
9	黒色 7.5YR2/1	泥炭質粘土	36cm前後	――	――	自然堆積	――
10	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	4cm前後	――	植物遺体	自然堆積	――
11	黒色 10YR1.7/1	粘土	16cm前後	――	植物遺体	自然堆積	――
12	黒褐色 2.5Y3/2	粘土	3cm前後	――	植物遺体	自然堆積	――
13	黒色 10YR2/1	泥炭質粘土	8cm前後	――	――	自然堆積	――
14	黒色 10YR1.7/1	粘土	6cm前後	――	植物遺体多量	自然堆積	――
15	褐色 2.5Y2/1	粘土	3cm前後	――	植物遺体多量	自然堆積	――
16a	黒色 10YR1.7/1	粘土	12cm～20cm	――	植物遺体多量	自然堆積	――
16b	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	10cm～18cm	――	植物遺体	自然堆積	
17	オリーブ褐色 2.5Y4/3	粘土	8cm～20cm	――	砂・礫・植物遺体	自然堆積	グライ化
18	灰色 7.5Y5/1	粘土	8cm～22cm	――	砂・礫・植物遺体	自然堆積	不連続な分布・グライ化
19a	緑灰色 7.5GY5/1	粘土	18cm～36cm	――	砂・植物遺体	自然堆積	グライ化
19b	緑灰色 10G5/1	粘土	6cm～28cm	――	細砂	自然堆積	不連続な分布・グライ化
19c	緑灰色 5G6/1	粘土	18cm前後	――	砂	自然堆積	不連続な分布・グライ化
19d	緑灰色 5G6/1	粘土	9cm前後	――	砂	自然堆積	不連続な分布・グライ化
19e	緑灰色 5G6/1	粘土	4cm～12cm	――	砂	自然堆積	不連続な分布・グライ化
19f	緑灰色 5G5/1	砂	5cm前後	――	粘土を層状に含む	自然堆積	不連続な分布・グライ化
19g	暗緑灰色 5G4/1	砂	10cm～30cm	――	粘土ブロック・粘土を層状に含む	自然堆積	不連続な分布・グライ化
20a	緑灰色 5G5/1	砂	20cm～40cm	――	粘土ブロック・粘土を層状に含む	自然堆積	グライ化
20b	緑灰色 5G5/1	砂	18cm～40cm	――	礫・植物遺体(枝・種果など)	自然堆積	グライ化
21	オリーブ灰色 2.5GY5/1	粘土	3cm前後	――	植物遺体（枝・種果など）	自然堆積	グライ化
22	暗赤褐色 5YR2/3	腐植質シルト	7cm～18cm	――	植物遺体多量（種子・枝・種果など）・昆虫遺体	自然堆積	――
23a	オリーブ灰色 2.5G5/1	砂	6cm前後	――	植物遺体（根株など）	――	――
23b	オリーブ灰色 2.5G5/1	砂	7cm～27cm	――	粘土層・植物遺体（枝・種果など）・昆虫遺体	自然堆積	グライ化
24	オリーブ灰色 2.5G5/1	粘土	2cm～9cm		植物遺体（枝・幹・種子など）・昆虫遺体	自然堆積	グライ化
25a	黒褐色 2.5Y3/2	腐植質シルト	3cm前後	――	植物遺体多量（枝・葉・種果など）・昆虫遺体	自然堆積	――
25b	オリーブ灰色 2.5G5/1	粘土	3cm～11cm	――	植物遺体	自然堆積	グライ化
26a	灰オリーブ色 7.5Y5/2	粘土	2cm～10cm	――	植物遺体多量（根株・枝・種果・種子など）・昆虫遺体	自然堆積	腐植質粘土層をはさむ グライ化
26b	灰オリーブ色 7.5Y5/2	粘土	2cm～8cm	――	植物遺体	――	グライ化・部分的に白色粘土を含む
27	オリーブ灰色 10Y5/2	粘土	6cm～18cm	――	植物遺体(種果・種子など)・昆虫遺体	自然堆積	グライ化
28	オリーブ黒色 5Y3/2	粘土	4cm～10cm		植物遺体多量（根株など）	自然堆積	グライ化・部分的に白色粘土を含む
29	オリーブ灰色 2.5GY5/1	粘土	4cm～24cm	――	鉄分・植物遺体(種果など)・昆虫遺体	自然堆積	グライ化
30	オリーブ灰色 2.5GY5/1	粘土	4cm前後	――	植物遺体多量（種果など）	自然堆積	グライ化
31	オリーブ灰色 10Y5/2	砂	4cm～20cm		φ5mm前後の礫・植物遺体	自然堆積	グライ化
32a	オリーブ灰色 2.5GY5/1	粘土	9cm～18cm	――	細砂・植物遺体	自然堆積	グライ化
32b	暗赤褐色 7.5YR2/3	腐植質粘土	2cm前後	――	植物遺体多量（種果など）・昆虫遺体	自然堆積	――
33	オリーブ灰色 2.5GY5/1	砂	32cm～60cm		φ10cm前後の礫・植物遺体（種果・幹など）	自然堆積	グライ化
34	オリーブ灰色 10Y5/2	粘土	4cm前後		植物遺体（種果など）	自然堆積	グライ化
35	暗赤褐色 5YR3/2	腐植質粘土	3cm～10cm	――	植物遺体多量（枝・種果・種子など）・昆虫遺体	――	――
36	灰オリーブ色 7.5Y5/2	粘土	5cm～14cm	――	植物遺体	自然堆積	グライ化
37a	暗褐色 7.5YR3/3	腐植質粘土	18cm～26cm	――	植物遺体多量（枝・種果・種子など）・昆虫遺体	自然堆積	縞状
37b	暗褐色 5YR3/2	腐植質粘土	10cm前後		鉄分を層状にはさむ・植物遺体多量（枝・種果・種子など）・昆虫遺体	自然堆積	縞状
38	オリーブ灰色 10YR5/2	粘土	36cm～60cm	――	植物遺体を層状にはさむ	自然堆積	グライ化
39	暗赤褐色 5YR3/2	腐植質粘土	34cm～38cm		植物遺体多量（根株・枝・種子など）・昆虫遺体	自然堆積	縞状
40	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	100cm前後	――	火山灰ブロック・植物遺体（種果・種子など）	自然堆積	恰良 Ta 火山灰
41	緑灰色 7.5GY5/1	粘土	10cm～32cm		――	自然堆積	層の起伏大きい・グライ化
42	オリーブ灰色 5GY5/1	砂	70cm以上	――	粘土を層状にはさむ	自然堆積	グライ化

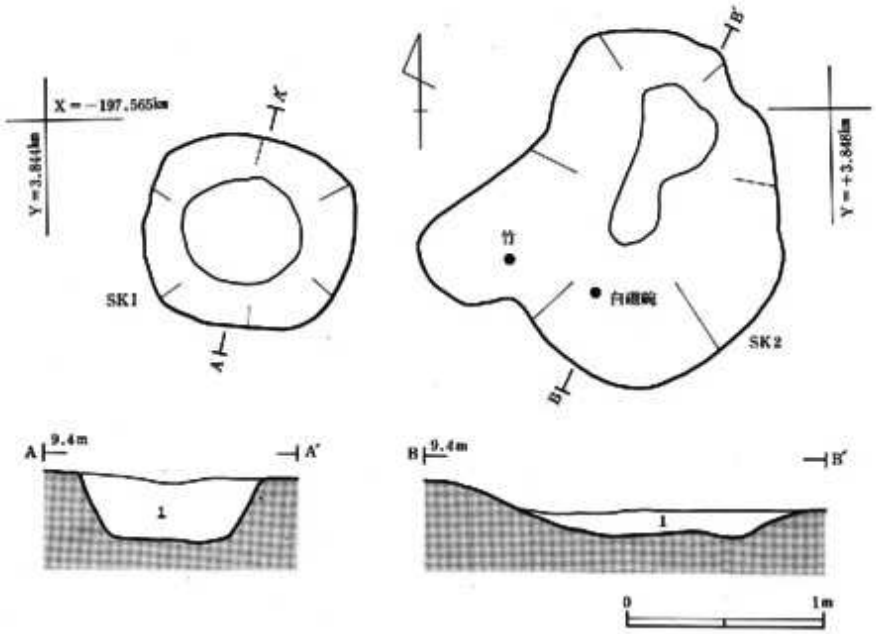
・40層で確認できるが、4a～5層のものは、より下層にあったものが巻き上げられたものであろう。また、比較的層厚の厚い腐植質粘土は、22・25a・35・37・39層である。層のグライ化は、17層以下で認められる。遺物の出土層は1・4a・4b層である。

3．検出遺構と出土遺物

（1）土坑（第13・14図，写真9・10・137）

〈SK1〉　調査区北西寄りに位置し、4a層上面で検出した。規模は1.07×0.98m、深さ約38cmで、楕円形を呈している。断面は鍋底状を呈している。埋土は暗灰黄色シルトの単層であるが、黒褐色泥炭質粘土ブロック（6・7層起源か）が多量に含まれ、人為的な堆積状況を示している。遺物は出土していない。なお、本土坑は4a層水田跡を切って、7層まで達する。

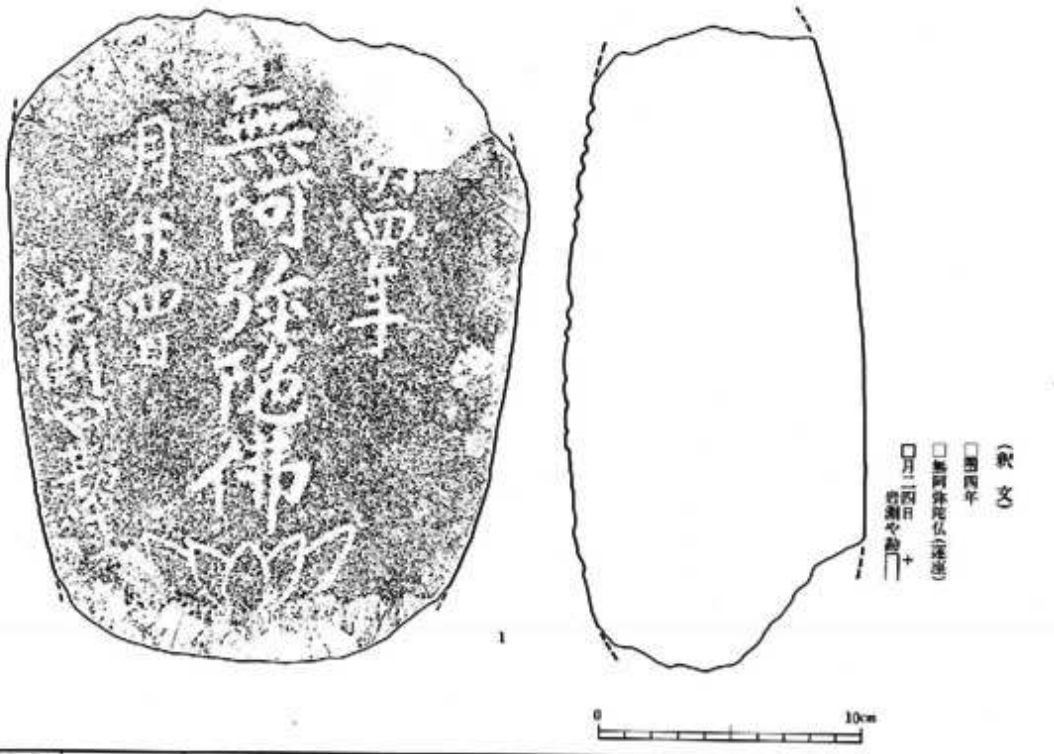
〈SK2〉　調査区北西寄りに位置し、3層上面で検出した。規模は1.85×1.84m、深さ27cmで不整形である。断面は起伏のある皿状を呈している。埋土は黒色粘土であるが、上部では他の土がブロック状に混入している。埋土中に礫3個・墓石1個（第14図）・白磁碗破片（写真137－3）が出土し、いずれも南部に集中していた。礫は、墓石と同様の大きさである。また、南東寄りには竹製の杭が打ち込まれていた。その他に、人骨や副葬品と思えるものは全く出土していない。



SK1堆積土土層註記
① 黒色　5Y2/1　泥炭質粘土　小礫を少量含む

SK2堆積土土層註記
① 黒色　5Y2/1　泥炭質粘土　小礫を少量含む

第13図　SK1・2 平面・断面図



No.	図版番号	出土遺構・層位	名　称	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　質	
1	137－4	SK2　1層上	墓　石	24.9cm	19.8cm	11.9cm	――	――	上下端部欠損、天明4年？

第14図　ＳＫ２出土遺物

（2）４ａ層上面

４ａ層水田跡（第15図，写真11）

〈遺構状況〉本水田跡では、南北に通る畦畔とこれに取付く東西方向の畦畔の３条が検出された。南北方向の畦畔は、Ｎ－４°－Ｅの方向を示し、下端幅は1.4～1.7ｍである。東西方向の畦畔は、東側のものがＮ－84°－Ｗを示し、下端幅は1.5～1.9ｍであり、西側のものは湾曲して方向が一定せず、下端幅は1.1～1.2ｍである。畦高はおよそ３～４㎝代であるが、南北畦畔の南端部では７㎝前後と高くなる。水田区画は４区画確認でき、田面は南東側へ下がっていく。

〈出土遺物〉遺物は沈線の巡る須恵器口縁部破片１点のみである。

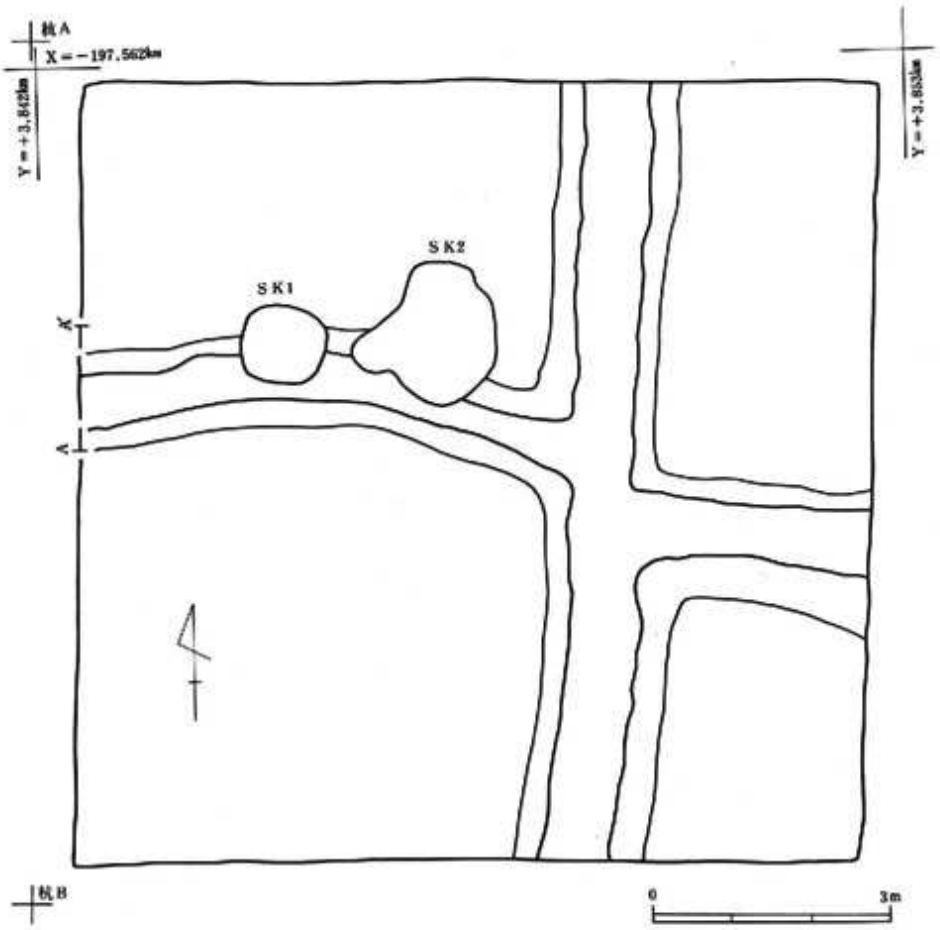
（3）４ｂ層上面

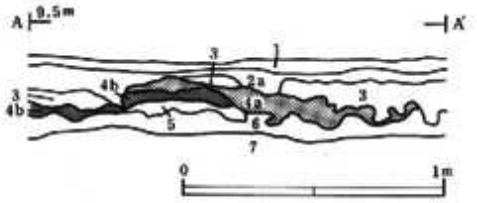
４ｂ層水田跡（第15・16図，写真12）

〈遺構状況〉本水田跡では４条の畦畔が検出された。畦畔１はＮ－12°－Ｅの方向を示し、下端幅は0.9～1.0ｍである。畦畔２はＮ－81°－Ｗの方向を示し、下端幅は0.6～0.7ｍである。畦畔３はＮ－44°－Ｗの方向を示し、下端幅は0.5～0.6ｍである。畦畔４はＮ－82°－Ｅの方

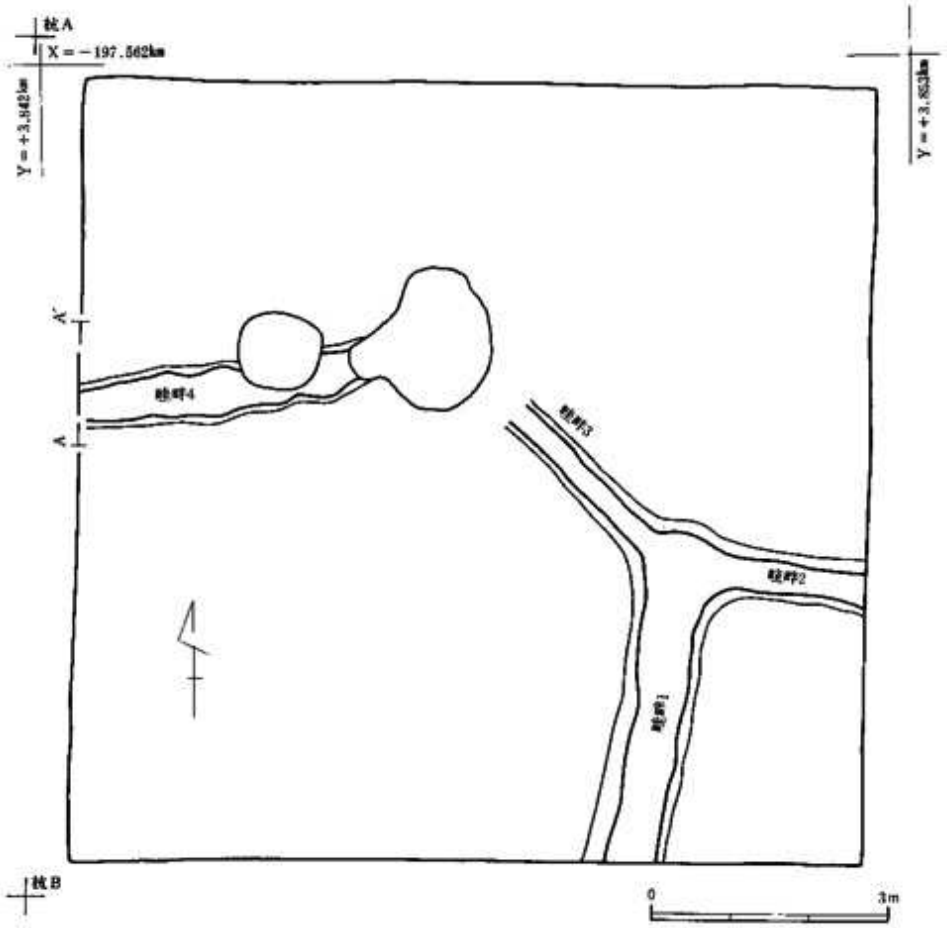
向を示し、下端幅0.6～0.8mである。２基の土坑跡に切られている。また、ＳＫ２の位置から北側へ伸びる畦畔も予想されたが、判然としない。畦畔の高さは３～５cmであるが、畦畔１の南部が６cmあり高くなっていくようである。水田区画は現状では３区画確認され、田面は南東側へ下がる。

〈出土遺物〉遺物は、硯の破片と思われるもの１点と回転糸切無調整の須恵器坏１点である。前者の遺物が硯とみてよければ、石製で定型的なものとなろうし、時期は中世以後と予想されよう。





第15図　４ａ層水田跡平面図、４ａ・４ｂ層水田跡断面図



第16図　４ｂ層水田跡平面図

（４）その他の出土遺物（写真137）

基本層１層より陶器４点、瓦１点が出土している。陶器は鉄釉擂鉢、鉄化粧の甕（鉄釉流し掛け）、海鼠釉大鉢（写真137－２）、唐津系かと思われる糸目文（白化粧土）碗（写真137－１）で、近世～近代のものと考えられる。

４．下層の調査（写真13～15）

旧石器時代に相当する層の調査については、５×５ｍの調査区を設定し、18～26層上面まで精査を行った。さらに、調査区を縮小して40層上面まで調査した（第11図）。

調査の結果、旧石器時代相当と考えられる植物遺体（枝・葉・毬果など）は20ｂ層から出土し始め、40層まで及ぶ。倒木（幹）は、24層上面・25ｂ～26層上面・39層中で確認できる。根株は、23ｂ・28・39層において認められる。樹木や落葉などを多量に含む腐植質粘土層は、主

なものでも22・25a・32b・35・37a・37b・39層の7層が確認され、その他にも層中に薄く介在するものが多数認められる。昆虫遺体は22～29・35・37・39・40層で出土し、22・25a・39層で多い。

穂果・種子については、福島大学の鈴木敬治先生に現地で実見していただいたところ、アカエゾマツ・グイマツ・チョウセンゴヨウなどがみられる。22層でアカエゾマツ・グイマツが多く認められ、37b層では群集するチョウセンゴヨウの種子が多数みつかっている。

ところで、40層中には、灰白色土ブロックが幾つか認められたが、分析を御願いしたパリノ・サーヴェイ株式会社の早田勉氏によれば、蛤良Tn火山灰（AT）であることが判明した。市内の旧石器時代の遺跡では、初めての確認である。なお、この分析結果の詳報は、本報告に譲ることにする。

5．遺構の所属年代とまとめ

1．土坑については、まずSK2から墓石が出土し墓坑の可能性が示唆されたが、土坑の形状や墓石そのものも上下に剥離痕があり文字が読めない部分があるなど、すでにその目的を失っているものと考えられることから、墓坑としての可能性は低い。SKIについても、積極的に用途を推定できる遺物が出土しておらず、性格不明と言わざるを得ない。

2．水田遺構は4a・4b層水田跡が検出されたが、他に2a・2b・3・5層にその可能性がある。水田跡の時期は、まず3層上面で検出されたSK2から天明4（1784）年とみられる墓石が出土したことから、SK2より上位の層はこれより新しい。また、3層は江戸時代とみてよいであろう。さらに、4b層では中世以後の硯かとみられる遺物が出土している。一方、近接する第57次調査との層相の比較では、4a層が57次の4層と、以下4b層が5層、5層が6層と類似してその対応関係が認められる。また、これまでの富沢遺跡の成果を考慮して、3層・4a層水田跡は近世、4b層水田跡・5層は中世以降と考えられる。水田の特徴については、充分に指摘することができない。

3．旧石器時代については、遺構や遺物の発見ができなかったが、第30次調査の遺構・遺物発見（太田・他：1988）と関連して、当時の生活面が東側へ拡大される可能性がでてきた。また、多数の樹木を含む層や火山灰（AT）の発見など新たな知見を得ることができた。

6．富沢遺跡（第58次調査）の花粉分析

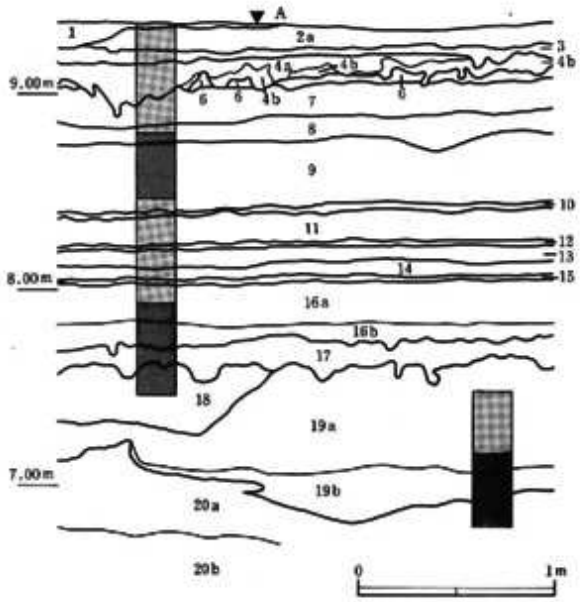
守　田　益　宗

はじめに

富沢遺跡は、仙台市南部の富沢を中心とする地区に広がる面積約82haの遺跡である。今回の第58次調査の調査区は、旧石器時代の遺物が出土し話題となった第30次調査区の東隣に位置する。調査の結果、近世～中世に至る3時期の遺構のほか、下層からは第30次調査の場合と同様に、樹根・樹幹・毬果などの旧石器時代の遺物が多数検出された。旧石器時代に関しては別の機会に述べることとし、ここでは時代の比較的新しい2a～20a層について行った花粉分析の結果を報告する。

材料および方法

花粉分析用試料は、2a～20a層からそれぞれ1試料を採取した。試料採取地点とその層位を第17図に示す。試料は、KOH－$ZnCl_2$－Acetolysis法によって処理した。花粉・胞子の同定は顕微鏡の倍率を250～1250倍にして行った。イネ科（Gramineae）花粉の区別は、各試料について別途50粒のイネ科花粉を中村（1974）に基づき位相差像の観察により行った。1試料について高木花粉（Tree Pollen）の総計が200粒以上になるまで同定を続け、その間に出現するすべての花粉・胞子を記録した。花粉・胞子の出現率の算出は、高木花粉は高木花粉総数を基本数として、それ以外の花粉・胞子はそれらの総数を基本数として百分率で求めた。



第17図　分析資料採取地点

結果および考察

各試料について検出された花粉・胞子を表4に示し、主要な花粉・胞子のダイアグラムを図18に示す。なお、17～20a層には花粉・胞子がほとんど含まれておらず、また16b層（図中、白ヌキで示した部分）は高木花粉が200粒に満たないため考察から除外する。

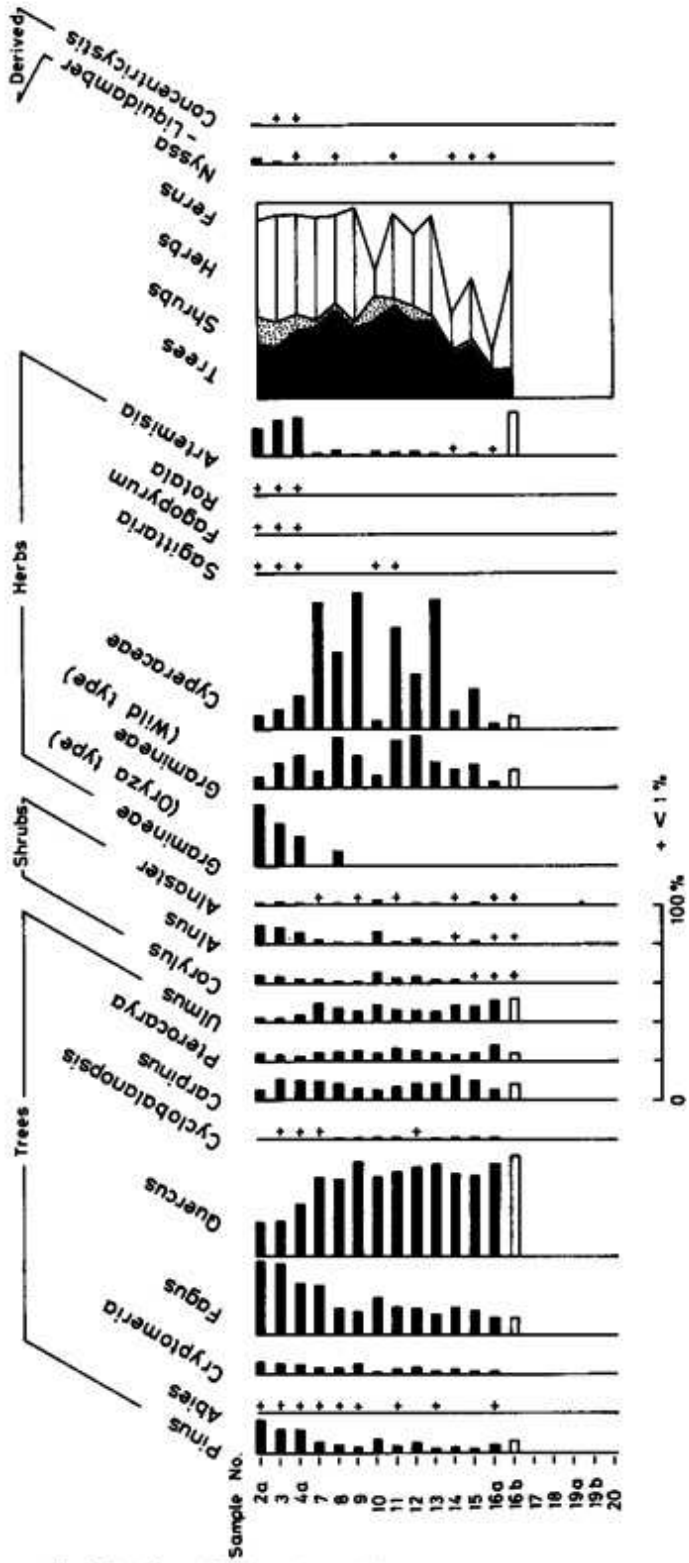
全層を通じて高木花粉の比率は比較的低く、50%を超すことはない。高木花粉のうち、7層以下では *Quercus* が最優勢で40～50%の出現率を示し、*Fagus*, *Carpinus*, *Ulmus－Zelkova* は10～20%前後の値を示す。*Pinus*, *Cryptomeria* は低率である。4a層より上部では *Quercus* が急減し、*Ulmus－Zelkova* もやや減少する。かわって、*Fagus* が30～40%の出現率を示して最優勢となり、*Pinus* もやや増加する。*Cryptomeria*, *Carpinus*, *Pterocarya* の出現率にあまり変化はない。

高木花粉の出現傾向はこれまでの富沢遺跡の花粉分析結果とほぼ同様であり（畑中1982、三好1982、守田1987、1988、1991）遺跡周辺の植生変遷も同様に考察される。すなわち、*Pinus* はアカマツ、*Cryptomeria* はスギ、*Fagus* はブナ、イヌブナ、*Quercus* はコナラ、ミズナラ、Carpinus の大部分はアカシデ、Pterocarya はサワグルミ、*Zelkova* はケヤキから由来したものであり、いずれも丘陵帯以上に生育する植物である。7層までは、周辺の丘陵にはナラ類を主としアカシデ、ケヤキ、イヌブナを混じえるいわゆる暖帯落葉樹林が繁茂していた。植生に対する人為干渉はあったろうが、アカマツ二次林が拡大するほど強いものではなかった。4a層では、周辺の丘陵に対する人為干渉の度合が強くなりアカマツの二次林が拡大するとともに、丘陵に生育する他の樹種から由来する花粉の量も減少した。その結果、人為の影響があまり及んでいない山地帯から飛来するブナの花粉が相対的に増加することとなり、現在に至った。

草木花粉では、10層を除く7～13層でCyperaceae が高い出現率を示し、野生型（Wild type）のGramineae がこれに次ぐ。両者の出現傾向は類似する。イネ型（*Oryza* type）のGramineae は8層および4a層以上で認められる。シダ胞子は10層と14層以下で極めて高率に出現する。二次堆積化石である *Nyssa*, *Liquidamber* はしばしば検出されるが、4a層以上では *Concentricystis* とともにその出現が目立つ。以上のことは、7層の時代までの調査地点付近が、イネ科、カヤツリグサ科、シダ植物を主とする草地であったことを物語っている。遺構の検出から、この地点では4a層以後稲作が行われていたと言えるが、Gramineae（*Oryza* type）および水田によくみられる植物である *Sagittaria*, *Rotala* が4a層以後その出現の目立つことも水田として利用したことを支持している。また、4a層以後乾燥した立地を好む *Artemisia* の出現率が上昇し、畑作植物の *Fagopyrum* も産出することから、付近に畑地の存在または乾田の利用が広がった可能性を指摘できる。8層では遺構が確認されていないが、Gramineae（*Oryza* type）の出現率から判断して、この地点付近のどこかで稲作が行われてい

		2a	3	4a	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16a	16b	17	18	19a	19b	20a
Pinus	マツ属	39	33	47	21	13	13	17	23	15	9	9	8	16	4	1	9	1	2	1
Abies	モミ属	2	2	2	1	3	1		3		3			1						
Picea	トウヒ属	3	1								2		1		1					
Tsuga	ツガ属	1										1	1							
Cryptomeria	スギ属	15	17	18	15	12	22	4	20	11	7	8	6	6				1		1
Sciadopitys	コウヤマキ属										1			1	1					
Cupressaceae	ヒノキ科					1			1		1									
Pterocarya	サワグルミ属	9	9	12	21	20	24	10	43	16	17	11	14	27	3			1		
Juglans	クルミ属	1		3	5	16	15	8	34	7	39	6	19	11	1					
Betula	カバノキ属	10	12	20	8	6	3	9	4	5	9	6	2	2						
Carpinus	クマシデ属	13	31	39	38	34	27	14	46	25	39	39	32	19	6					
Fagus	ブナ属	89	98	105	95	49	50	49	86	41	46	44	40	31	6	2		1		1
Quercus	コナラ属	42	49	104	114	149	191	104	263	130	196	124	120	155	33	4		4	3	1
Cyclobalanopsis	アカガシ属		2	3	2	4	5	3	6	2	4	1	3	4						
Castanea	クリ属	1	1	2	1	1	2		3			2	2	3				1		
Ulmus	ニレ属	6	6	15	38	28	26	23	39	20	24	27	27	36	8	2				
Zelkova	ケヤキ属			2	5	3	3	2	9	3	4	4	4	5						
Celtis－Aphananthe	エノキ属・ムクノキ属								1		1	1								
Cercidiphyllum	カツラ属						2			2	1									
Acer	カエデ属	2	3	6	2	2	2	1	7	1	3		5	5	1					
Aesculus	トチノキ属				1	5	5	6	5	4	2	5	5	2				1		
Tilia	シナノキ属				1			1												
Ephedra	マオウ属									1				1						
Salix	ヤナギ属						2	1		2	1	3								
Corylus	ハシバミ属	28	32	16	16	8	10	23	20	17	11	18	7	17	1			1		1
Alnus	ハンノキ亜属	64	70	47	13	7	8	28	9	11	6	7	12	8	1					
Alnaster	ヤシャブシ亜属	7	14	12	6	5	3	12	5	6	6	2	9	6	4	1			1	
Viscum	ヤドリギ属			1																
Phellodendron	キハダ属						1		1	3				1						
Rhus	ウルシ属	1	2				1													
Ilex	モチノキ属	1		1		1		2		1			1	1						
Vitis	ブドウ属			1							2									
Araliaceae	ウコギ科	3	3	1	1			9	1	1		1	1	1						
Ericaceae	ツツジ科	4	2	1				4		3										
Symplocos	ハイノキ属	1																		
Fraxinus	トネリコ属			1	2		2	4	2	4	1	1		1						
Ligustrum	イボタノキ属		1																	
Viburnum	ガマズミ属	1																		
Weigela	タニウツギ属								1					1						
Gramineae	イネ科	231	268	227	61	145	124	27	159	113	87	111	99	88	41	4	1	3	4	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	43	79	122	426	166	492	17	344	125	423	105	162	74	32	4		4	2	1
Typha	ガマ属		2		4								1	1						
Sagittaria	オモダカ属	1	1	1				1	2											
Alisma	ヘラオモダカ属	1	4	4																
Monochoria	ミズアオイ属	3	10	3																
Eriocaulon	ホシクサ属					2														
Liliaceae	ユリ科		1					2					2							
Iridaceae	アヤメ科	1	2		2	1					2		1							
Lysichiton	ミズバショウ属							1					1							
Moraceae	クワ科						3		1	2	1	5	2							
Urticaceae	イラクサ科	1	1	2		1		1												
Persicaria	サナエタデ属	6	13	9	3	4	9	1	8	4	7	10	13	10	2					
Fagopyrum	ソバ属	5	3	1																
Reynoutria	イタドリ属		1	2																
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	3																	
Chenopodiaceae　Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科	3	1	3								1								
Thalictrum	カラマツソウ属		2	3		2	1	1				1	1		13	2	1	1		
Ranunculus	キンポウゲ属	1																		
Cruciferae	アブラナ科	1				1														
Sanguisorba	ワレモコウ属			1																
Other　Rosaceae	バラ科				1				1	1										
Leguminosae	マメ科									1	1	3	5	1						
Impatiens	ツリフネソウ属													1						
Lythrum	ミソハギ属				1							4	1	18						
Rotala	キカシグサ属	5	2	3																
Actinostemma	ゴキヅル属											1		1						
Haloragis	アリノトウグサ属	14	7	4																
Geranium	フウロソウ属		1																	
Umbelliferae	セリ科	7	6	13	7	2		5	5	3			1	6	3					
Lysimachia	オカトラノオ属																			
Gentiana	リンドウ属			1	1					2										
Menyanthes	ミツガシワ属					2		1												
Labiatae	シソ科		1	1				1	1						1					
Patrinia	オミナエシ属	1																		
Galium	ヤエムグラ属			1																
Artemisia	ヨモギ属	87	141	146	17	16	11	12	17	12	12	10	13	16	97	13	1		3	
Xanthium	オナモミ属			2																
Carduoideae	キク亜科	7	9	6	11	2	2	7	11	1	4	5	19		52	1		1		
Cichorioideae	タンポポ亜科	2	2								2			6						
1－lete　type　FS	単条溝型シダ胞子	54	42	48	71	45	22	198	57	166	56	772	388	1976	169	23	6	21	24	37
3－lete　type　FS	三条溝型シダ胞子	12	4	9	2	1	1	20	4	1	1	1	6	5	6		1			
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属		1	2																
Osmundaceae	ゼンマイ科	4	11	2	1	1	4	5	3	4	2	2		1						
Botrychium	ハナワラビ属	1	1	2				1							5	2		2		
Ophioglossum	ハナヤスリ属	1	1	1																
Sphagnum	ミズゴケ属	4	2																	
Trees	高木花粉	233	264	378	368	346	391	251	593	282	408	291	289	324	64	9	9	10	5	4
Shrubs	低木花粉	110	124	83	38	21	27	83	39	49	27	32	30	37	6	1		1	1	1
Herbs	草本花粉	424	560	555	531	344	642	77	549	264	339	256	321	222	241	24	3	9	9	4
Ferns	シダ胞子	72	60	64	74	47	27	224	64	111	59	775	394	1982	180	25	7	23	24	37
Unknowns	不明	23	29	33	33	26	38	38	48	22	24	35	34	35	9	1		2	1	1
Liquidamber	フウ属	6	3	1		1								2						
Nyssa	ヌマミズキ属	13	10	1		2			1			1	1	1						
Concentricystis	環紋藻	6	3	6																
Oryza/Gramineae	イネ属/イネ科	42/50	31/50	24/50	0/50	12/50	0/50	0/50	0/50	0/50	0/50									
資料番号		No.1	No.1	No.1	No.1	No.2	No.2	No.2	No.2	No.3	No.3	No.3	No.3	No.3	No.4	No.4	No.4	No.5	No.6	No.6

表4　花粉・胞子出現表



第18図　第58次調査の主要な花粉・胞子のダイアグラム

たと考えられる。隣接する第30次調査区では、弥生時代～近世に至る10時期の水田跡が確認されているほか、11層からはGramineae（*Oryza* type）の花粉やプラント・オパールも検出されており稲作の可能性が指摘されている（守田1991、杉山1991）。今回の8層は、上記の第30次調査のいずれかの層に対比される可能性が高い。

引用文献

古環境研究所（1991）　仙台市富沢遺跡第30次調査におけるプラント・オパール分析．富沢遺跡第30次調査報告書第1分冊，389～404

中村　純（1974）　イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza* sativa）を中心として　第四紀研究　第13巻．187～193

畑中健一（1982）　農耕史の花粉分析学的研究－仙台市鍋田遺跡－．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学．昭和57年度年次報告．422～423

三好教夫（1982）　農耕史の花粉分析学的研究－仙台市泉崎前遺跡－．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学．昭和57年度年次報告．424～425

守田益宗（1987）　富沢遺跡の花粉分析的研究．富沢遺跡第15次発掘調査報告書　仙台市教育委員会439～460

守田益宗（1988）　富沢遺跡（第28次調査）の花粉分析．富沢遺跡第28次発掘調査報告書　仙台市教育委員会97～113

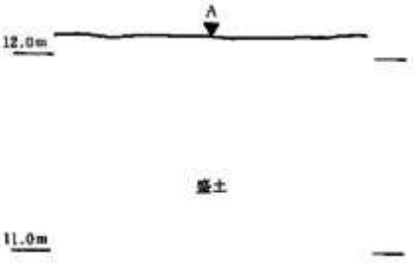
守田益宗（1991）　富沢遺跡（第30次調査）の花粉分析．富沢遺跡第30次調査報告書第1分冊，405～424

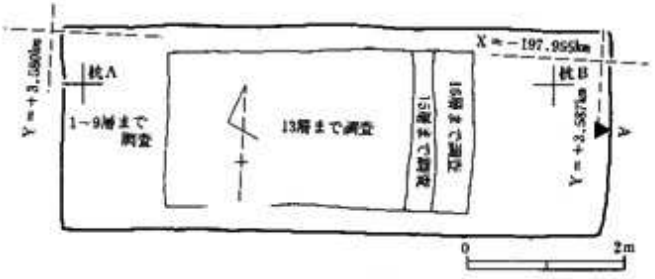
第3節　富沢遺跡第59次調査

1．調査方法

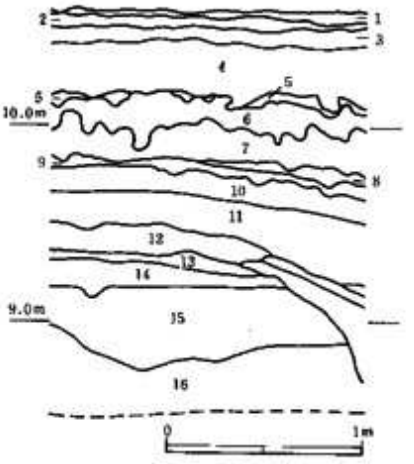
調査区の設定面積は2.7×6.9m（約19㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。9層上面までは、調査区全面の精査を実施し、9層以下は、2×4mの試掘区を設けて掘り下げた（13層上面から15層上面までは0.8×2m、15層上面から16層下部までは0.5×2m）。

遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.





第19図　調査区設定図



第20図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	オリーブ黒色	7.5Y3/1	シルト質粘土	2cm～14cm	――	粗砂少量	水田耕作(現代)	――
2	オリーブ褐色	2.5Y4/3	シルト質粘土	3cm～14cm	斑鉄	粗砂多量	水田耕作？	――
3	黄灰色 暗灰黄色	2.5Y5/1 2.5Y4/1	砂 粘土	6cm～24cm			自然堆積	互層
4	灰黄色	2.5Y6/2	粗砂	10cm～40cm	下面近く集積	――	自然堆積	互層
5	黒褐色	10YR2/2	粘土	4cm～19cm	――	植物遺体少量	水田耕作	下面緩しく起伏
6	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	4cm～28cm	――	植物遺体少量	水田耕作	下面緩しく起伏
7	黒褐色	10YR3/2	粘土	8cm～28cm	――	植物遺体少量・上面近くに灰白色火山灰ブロック	水田耕作	下面緩しく起伏
8	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	4cm～12cm	―	植物遺体少量	水田耕作	下面緩しく起伏・部分的で不連続な分布
9	灰色	5Y4/1	粘土	4cm～10cm	――	植物遺体少量	自然堆積	
10	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	4cm～18cm	――	植物遺体多量	自然堆積	――
11	黒褐色	10YR2/3	泥炭質粘土	10cm～30cm	――		自然堆積	――
12	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	6cm～16cm	――	―	水田耕作？	下面やや起伏
13	褐灰色	10YR4/1	泥炭質粘土	4cm～10cm	――	――	自然堆積	――
14	黒褐色	2.5Y3/1	泥炭質粘土	8cm～18cm	――	――	自然堆積	ややグライ化
15	灰色	5Y5/1	粘土	20cm～40cm	―	植物遺体少量	自然堆積	グライ化
16	緑灰色	10GY5/1	粘土	43cm以上	―	植物遺体少量	自然堆積	グライ化顕著

955684km　Y＝+3.580431km　杭B：X＝−197.955348km　Y＝+3.586416km)。

2．基本層序

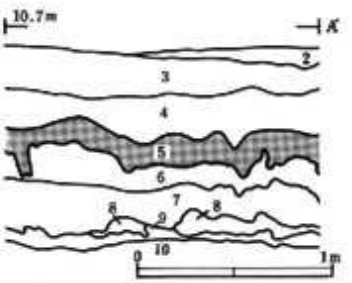
調査では、盛土下に16層が確認された。各層の土質は1・2層がシルト質粘土、3・4層が砂、5～10層までが粘土、11～14層までが泥炭質粘土、15・16層が粘土である。グライ化は14層から漸次進む。各層の傾きは全て南東側へ下っているが、これは13層段階において調査区南部を東西に走る水路の影響とも考えられる。現代のものを除く水田土壌は2・5・6・7・8・10層であるが、9・12層も水田土壌の可能性がある。なお7層上面及び上部からは部分的に灰白色火山灰が検出されている。遺物出土層は4・6・8・12層である。

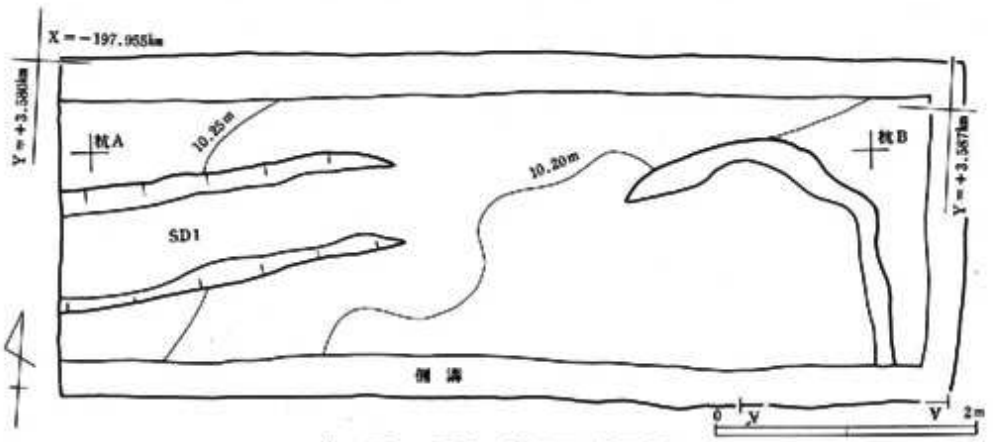
3．検出遺構と出土遺物

(1) 5層上面

5層水田跡（第21図，写真16）

〈遺構状況〉　段差と溝1条（1号溝跡－SD1）及び人の足跡多数を検出した。段差は高さ1～7cmで、ほぼ直角に屈曲し、西端部が不明瞭となって消失する。SD1は段差の西方延長線にほぼ平行した北側に認められ、上端幅約80cm、下端幅約60cm、深さは3～6cmである。また、足跡には上層の4層の砂が入り込んでおり、深いものは10cm以上の深さがある。調査区全面に認められ、分布や方向に規則性は認められなかった。段差・溝の性格については断定できないが、富沢遺跡内の他の調査区では畦畔の一部が段差として検出された例や、畦畔に隣接・平行した溝が認められる場合もあること、また第8次・39次調査区との層の対応から、これらは水田の畦畔に伴う遺構であると推定される。なお遺物は出土しなかった。





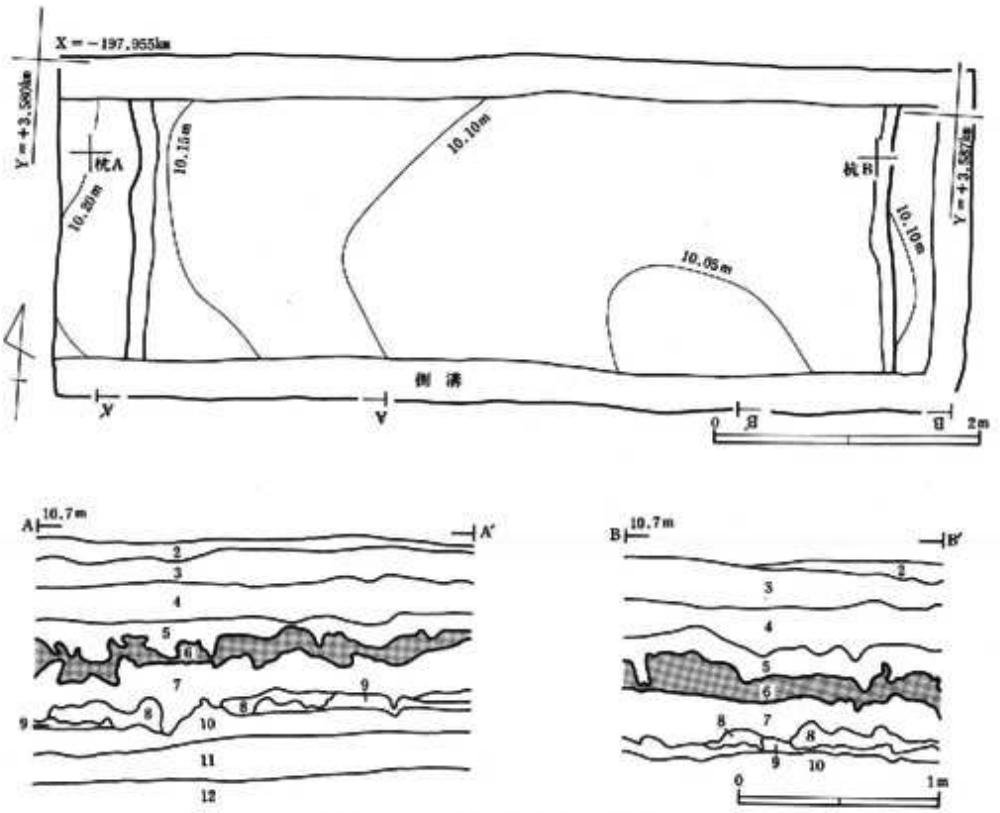
第21図　5層水田跡平面・断面図

（2）6層上面

6層水田跡（第22図，写真17）

〈遺構状況〉　調査区の東端と西端でそれぞれ南北方向に延びる段差を検出した。段差の下端間の距離は約5.5mで、高さは1～4cmである。これらの段差については5層で述べた事例の他、第8次調査区との層の対応から畦畔の一部であると推定される。

〈出土遺物〉　層中からロクロ使用の土師器坏の小破片が1点出土したのみである。図化はできなかった。

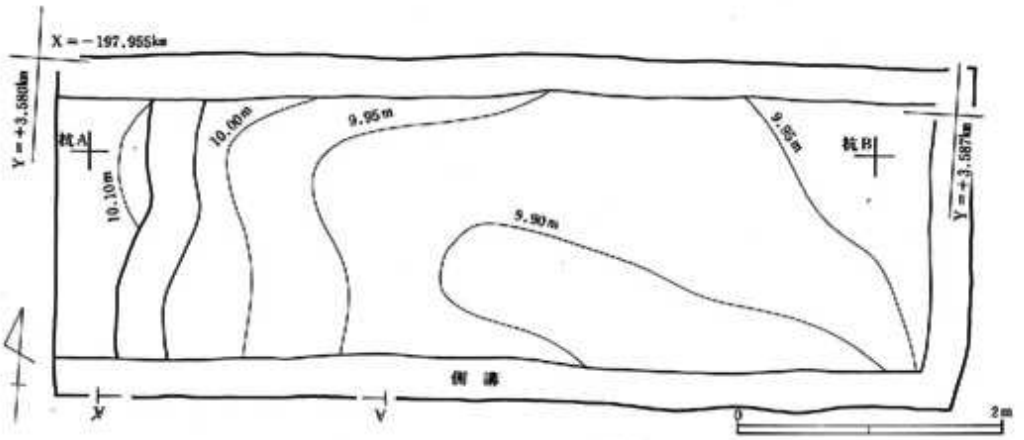


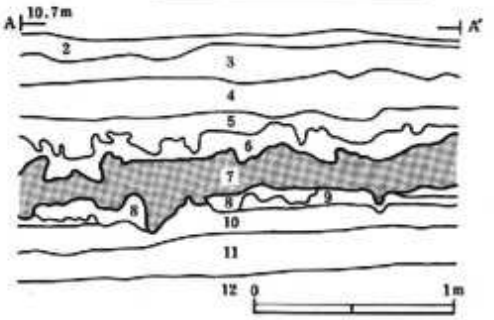
第22図　6層水田跡平面・断面図

（3）7層上面

7層水田跡（第23図，写真18）

〈遺構状況〉　調査区西端で南北方向に延びる段差を検出した。高さは約7cmである。これは5層で述べた事例の他、山口第13次調査区との層の対応から畦畔の一部であると推定される。なお遺物は出土しなかった。



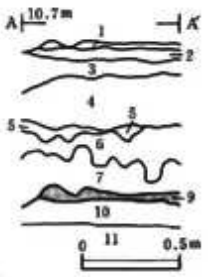


第23図　7層水田跡平面・断面図

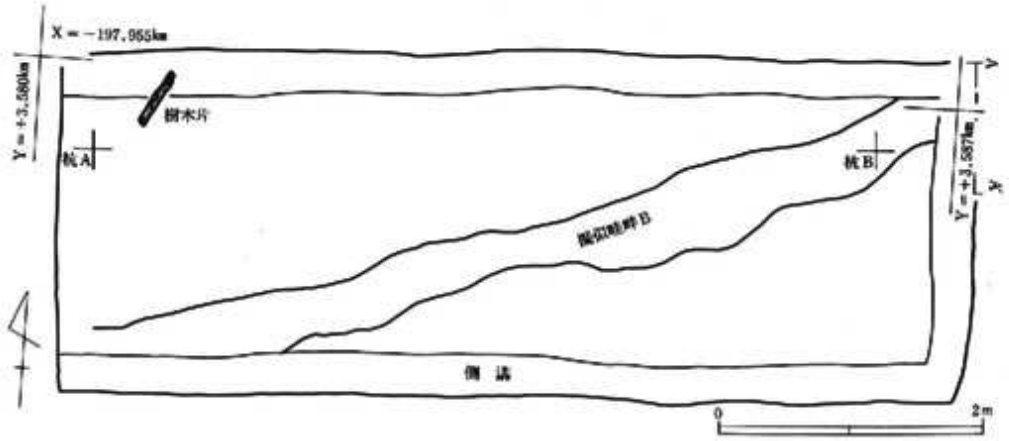
（4）8層上面

8層水田跡（第24図，写真19）

〈遺構状況〉　8層上面では遺構は検出できなかったが、7・8層下部で9層の帯状の盛り上がり（擬似畦畔B）を検出したため、8層を水田跡と認定した。8層は7層の耕作土によってかなり攪乱されており、部分的にしか遺存しない。このために7層下部でも9層の盛り上がりを確認できたと考えられる。擬似畦畔の幅は25～65cm、方向はN－70°－Eである。区画は不明である。耕作土は基本層8層で灰黄褐色の粘土で、厚さは4～12cm、層下面は起伏がある。



なお、擬似畦畔Bを形成している9層については層の状況から自然堆積層と考えているが、プラント・オパール分析結果からすると水田土壌の可



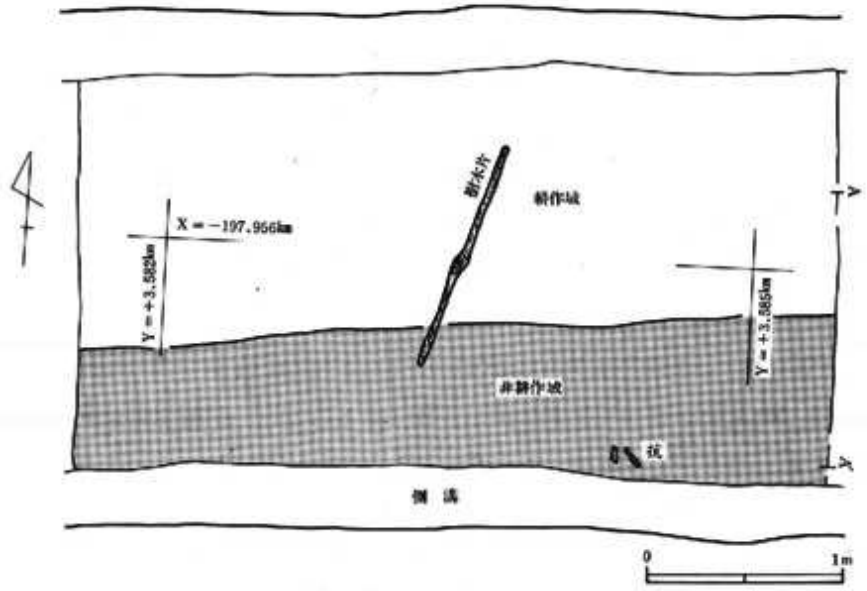
第24図　8層水田跡平面・断面図

能性もある。遺物は樹木片が1点出土したのみである。

（5）12層上面（第25図）

〈遺構状況〉　12層は黒色の泥炭質粘土で、下面はやや起伏がある。また、ＳＤ２の堆積土の一部を切って、ＳD2の北側にのみ分布している。ただ12層とＳD2の堆積土とは非常に類似しているために平面では層の境界を識別できず、断面観察によって確認している。このような層の分布状況と層下面の状況から12層は水田土壌である可能性が高い。この場合、ＳD2の埋没途中の段階でまだＳD2が埋まりきらない低い場所を避けて北側のみを耕作したと考えられる。

〈出土遺物〉　層中及び南側のＳＤ２堆積土上面（非耕作域）から杭１本と樹木片、礫が出土した。杭はどの層から打ち込まれたものか特定することは困難である。また遺存状況が非常に悪く、先端部も遺存しないため図化はできなかった。

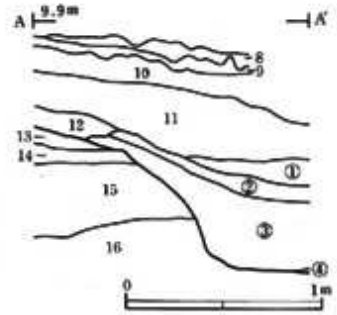


第25図　12層上面平面図

（6）13層上面

２号溝跡－ＳＤ２（第26図，写真20）

平面的な精査は実施できなかったが、断面観察によって13層段階において溝が存在することが確認された。底面には砂が堆積しているので水路であると推定される。ほぼ東西方向に延びると思



ＳＤ２堆積土土層註記
① 黒褐色　2.5Y3/1　泥炭質粘土
② 黒色　2.5Y2/1　泥炭質粘土
③ 黒褐色　2.5Y3/1　泥炭質粘土
④ 灰色　7.5Y4/1　砂

第26図　ＳＤ２断面図

われる。確認できた範囲では深さ約75cmで、南側の肩が未検出のため幅は不明である。なお、人工の水路か自然流路であるのか確定はできなかった。

（7）その他の出土遺物（第27図，写真138）

その他、基本層8層から自然木、4層中からロクロ使用の土師器片、赤焼土器片、須恵器片、炉壁片が12点出土している。土器類はほとんどが小片で、図化できたのは1点のみであった（第1図）。なお炉壁片はスサ入りの粘土で、内面が硬化している。厚さは約5.5cmである。磁性はわずかに認められる程度で窯壁の可能性も考えられ、性格は特定できない。図化はできなかった。

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	138	4層	土師器	坏	口縁部～体部破片			——	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、平安時代

第27図　その他の出土遺物

4．遺構の所属年代とまとめ

検出遺構は2・5・6・7・8・10層水田跡、SD1・2（SD1は5層に伴う）である。このうち5・6・7層は耕作土上面の段差、2・10層は耕作土のみの検出であるが、層の対応が可能であった第8・39次・山口第13次調査区で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した。またその他、9・12層も水田土壌の可能性がある。

これらの年代については耕作土中から遺物がほとんど出土しなかったため確定しがたいが、4層中から出土した遺物がすべて平安時代のものであることと、7層上部に灰白色火山灰が認められること、また第8次調査を中心とした他調査区との対応関係から以下のように推定される。

2　層　近世
5・6層　平安時代（灰白色火山灰降下以降）
7　層　平安時代（灰白色火山灰降下以前）
8　層　古墳時代
10　層　弥生時代（桝形囲式期）

表5　富沢遺跡第59次・8次調査区層位対応表

第59次		第8次			備考
層位	検出遺構	層位	検出遺構	所属年代	
2	耕作土	3	畦畔	近世	
5	上面の段差	4	耕作土	——	第39次調査区で畦畔検出
6	上面の段差	5A	畦畔	平安（灰白色火山灰降下以降）	——
7	上面の段差	5B	耕作土	平安（灰白色火山灰降下以前）	山口第13次調査区で畦畔検出
8	擬似畦畔B	7B	耕作土	古墳	山口第13次調査区で畦畔検出
10	耕作土	8B	畦畔	弥生（桝形囲式期）	——

第4節　富沢遺跡第60次調査

1．調査方法

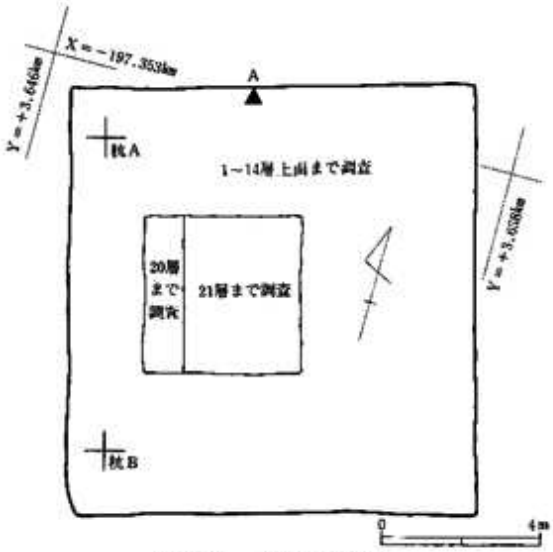
調査区の設定面積は10.3×11.0m（約112㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。14層上面までは、調査区全面の精査を実施し、14層以下は、4×4mの試掘区を設けて掘り下げた（20層以下21層中までは3×4mに縮小した）。

遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.354729km　Y＝＋3.647836km　杭B：X＝－197.362465km　Y＝＋3.649839km）。

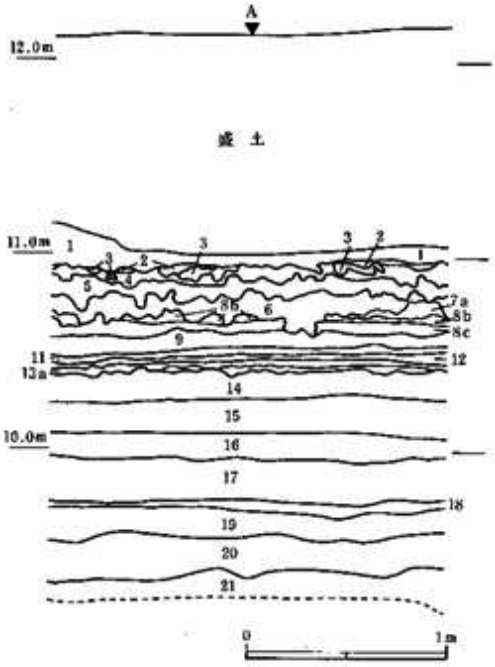
2．基本層序

調査では、盛土下に大別20層、細別では23層が確認された。各層の土質は1・2層が粘土質シルト、3～7層が粘土、8～16層までが泥炭質粘土、17～21層が粘土、22層がシルト質粘土である。グライ化は15層から漸次進み、21層では顕著である。各層の傾きは全て東側へ向かって緩やかに下っている。

現代のものを除く水田土壌は3・4・5・6・7a・13a層であるが、その他12層も水田土壌の可能



第28図　調査区設定図



第29図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土質シルト	4cm～24cm	有（多量）	細砂少量	水田耕作(現代)	――
2	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	2cm～6cm	下面に集積	細砂少量	水田耕作？	下面やや起伏
3	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	3cm～10cm	――	細砂少量・灰白色火山灰粒少量	水田耕作	下面著しく起伏
4	黒色	2.5Y2/1	粘土	4cm～12cm	――	灰白色火山灰粒少量	水田耕作	下面著しく起伏
5	褐灰色	10YR4/1	粘土	4cm～18cm		下部に灰白色火山灰ブロック少量	水田耕作	下面著しく起伏
6	黒褐色	10YR2/2	粘土	3cm～16cm	――	植物遺体少量・下部に7層ブロック多量	水田耕作	下面著しく起伏・部分的で不連続な分布
7a	黒褐色	10YR2/2	粘土	4cm～10cm	――	植物遺体少量・7層ブロック多量	水田耕作	下面起伏・部分的で不連続な分布
7b	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	3cm前後	――		自然堆積	――
8a								61次調査に分布
8b	暗褐色	7.5YR3/4	泥炭質粘土	4cm～10cm		――	自然堆積	
8c	暗褐色	7.5YR3/4	泥炭質粘土	4cm～14cm		――	自然堆積	
9	黒色	10YR1.7/1	泥炭質年度	2cm～12cm		――	自然堆積	
10								61次調査に分布
11	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	2cm～6cm		――	自然堆積	
12	褐灰色	10YR4/1	泥炭質粘土	2cm～8cm		――	水田耕作？	――
13a	黒褐色	10YR3/1	泥炭質粘土	4cm～10cm		――	水田耕作	下面やや起伏
13b	黒褐色	10YR2/2	泥炭質粘土	2cm～6cm	――	――	自然堆積	部分的分布
14	黒褐色	10YR2/2	泥炭質粘土	30cm前後	――	――	自然堆積	――
15	黒褐色 暗灰黄色	2.5Y3/1 2.5Y4/2	泥炭質粘土 泥炭質粘土	18cm前後	――	――	自然堆積	互層・ややグライ化
16	黒褐色 灰色	2.5Y3/1 2.5Y4/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	13cm前後	――	――	自然堆積	互層・ややグライ化
17	黒色	2.5Y2/1	粘土	20cm前後		植物遺体少量	自然堆積	ややグライ化
18	黒褐色	10YR3/1	粘土	2cm～8cm		植物遺体少量	自然堆積	
19	黒色	2.5Y2/1	粘土	11cm～18cm		植物遺体少量	自然堆積	ややグライ化
20	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	16cm～24cm		黄灰色粘土・植物遺体少量	自然堆積	ややグライ化
21	オリーブ灰色	5GY5/1	シルト質粘土	22cm以上		植物遺体少量	自然堆積	グライ化顕著

性がある。なお3・4・5層中からは灰白色火山灰が検出されているが、特に5層下部に多量に含まれていることから本来6層上面にあったものが5層以降の耕作によって巻き上げられた可能性がある。遺物出土層は1～6層である。

3．検出遺構と出土遺物

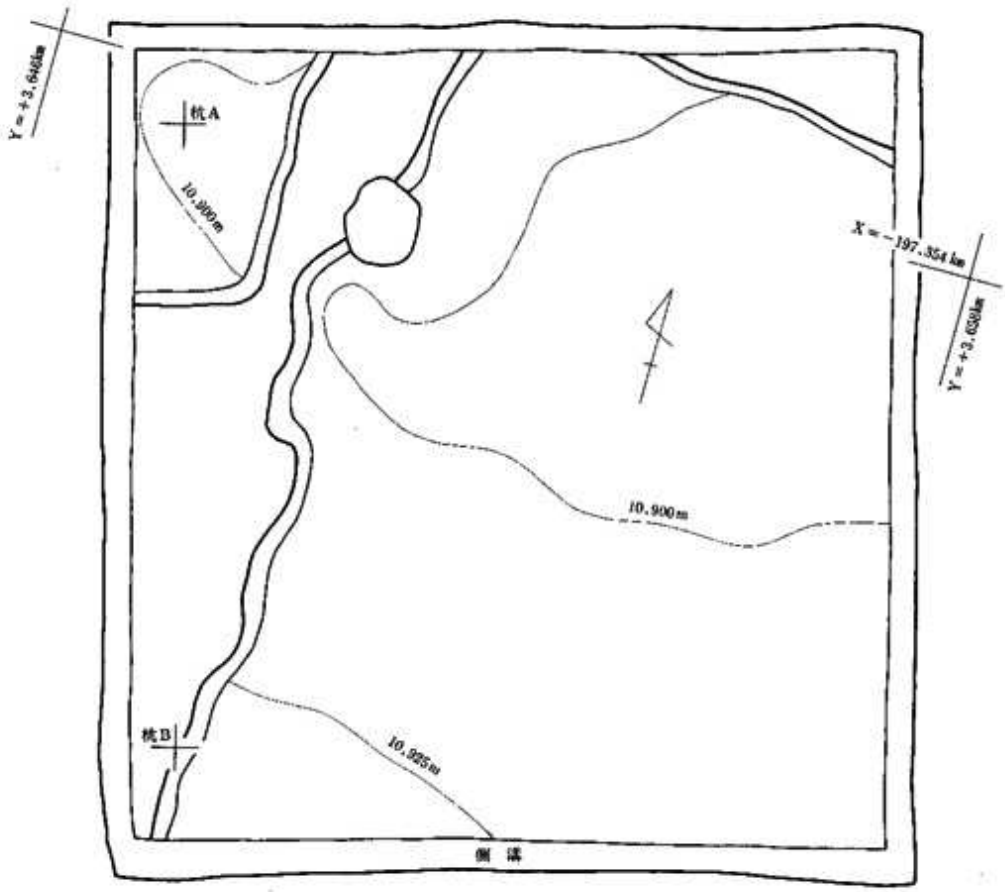
（1）4層上面

4層水田跡（第30図，写真21）

〈遺構状況〉　南北方向の畦畔と東西方向の段差によって構成されている。畦畔や耕作土上面は3層の耕作土によって攪乱されており、遺存状況はあまり良くない。

耕作土は基本層4層で、黒色の粘土である。厚さは4～12cmで一定しない。下面の起伏は顕著で5層中にまで食い込んで攪乱している。

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、高さ約3cm、上端幅40～150cm、下端幅80～180cmである。なお南部では西側の肩を検出できなかったため、この部分では段差のみとなっている。段差部分も含めた方位はN－6°－Eで、真北からやや東に振れる。東西方向の段差は調査区の北東コーナーに位置するが、畦畔の一部のみを検出した可能性もある。高さは1～2cmである。部分的な検出のため方向は確定できないが、南北方向の畦畔とはほぼ直交すると推定される。



第30図　4層水田跡平面図

水田区画は方形を基調とすると推定され、規模は東西8.3m以上、南北11.5m以上である。

〈出土遺物〉　須恵器坏の破片が1点出土したが、5・6層出土の破片と接合しているので下層から巻き上げられたものと推定される。

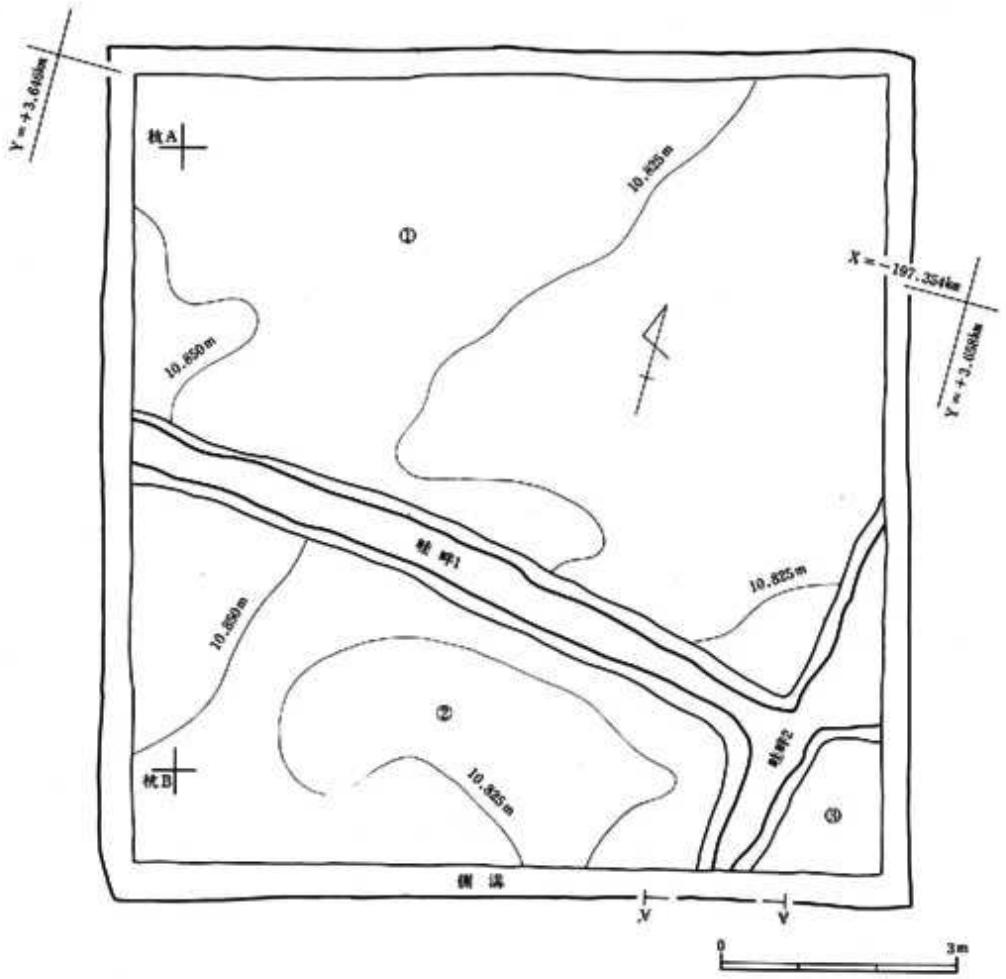
（2）6層上面

6層水田跡（第31・32図，写真22・23・139）

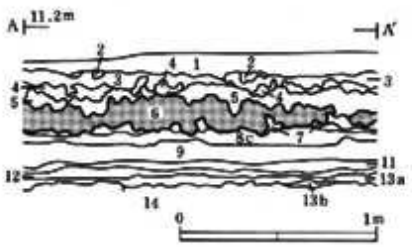
〈遺構状況〉　同規模の畦畔2条によって構成されている。畦畔や耕作土上面は上層（主に5層）の耕作土によって攪乱されており、遺存状況はあまり良くない。

耕作土は基本層6層で、黒褐色の粘土である。厚さは3～16cmで一定しない。下面は起伏が激しく、7・8層の大部分を攪乱し、一部は9b層にまで達する。

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、東西方向の畦畔1と南北方向の畦畔2が「T」字状に接するが、畦畔2には一部東側へ突き出る部分があるので、ここからさらに東へ延びる畦畔が取りついていた可能性が高い。方向は畦畔1がN－81°－W、畦畔2がN－9°－Eで、真北からやや東に振れる。規模は上端幅25～50cm、下端幅70～90cm、高さ1～5cm、である。



第31図　6層水田跡平面・断面図



No.	図版番号	出土遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	口　径	底　径	器　高	特　徴
1	139－1	4・5・6層	須恵器	坏	口縁部破片	――	――	――	内外面ロクロナデ

第32図　6層水田跡出土遺物

水田区画は3区画認められた。全体を検出できた区画はないが、いずれも方形を基調とすると推定される。規模は①が東西11m以上、南北7.7m以上、②が東西8.4m以上、南北4.5m以上である。区画内の比高差及び各区画間の比高差については全体を検出できた区画がないため不明であるが、調査区内における区画内の比高差は区画①が6cm、区画②が5cmとなっている。

〈出土遺物〉　土師器・坏2点、須恵器・坏1点、赤焼土器・坏7点が出土したがいずれも小片である。土師器は磨滅のためほとんど調整は不明であるが、1点のみ内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。図化できたのは須恵器・坏1点（第32図）のみで、これは4・5層出土の破片と接合したものである。

（3）7層上面

7層水田跡（第33図，表6・7，写真24～26）

〈遺構状況〉　ほぼ直角に交わる同規模の畦畔によって構成されている。畦畔や耕作土上面は6層の耕作土によってかなり攪乱されており、特に耕作土の遺存状況が悪い。

耕作土は基本層7a層で、黒褐色の粘土である。厚さは4～10cmで一定しない。下面は起伏が激しく、直下の7b層の大部分を攪乱し、一部は9b層にまで達する。

畦畔はNo.1～5まで5条検出した。これらの畦畔は主として耕作土7a層を盛り上げて作られているが、部分的に直下の自然堆積層である8層をブロック状に含む。通常の耕作土を盛り上げて作る畦畔とはやや異なっているが、これは本来畦畔の直下に8層の盛り上がりである擬

表6　7層水田跡畦畔計測表

No.	方向	検出長(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備　考
1	NS	10.4	24～42 (34)	44～74 (60)	2～4	北部は段差のみ検出
2	NS	10.6	27～40 (34)	54～70 (60)	2～4	
3	N－85°－W	2.0	20～30 (28)	49～58 (54)	2～5	部分的に検出
4	N－84°－W	10.3	28～37 (33)	50～64 (58)	1～4	西部は段差のみ検出
5	N－87°－W	6.9	29～39 (33)	50～62 (57)	1～3	東端は未検出

（　）内は複数の測定値の平均

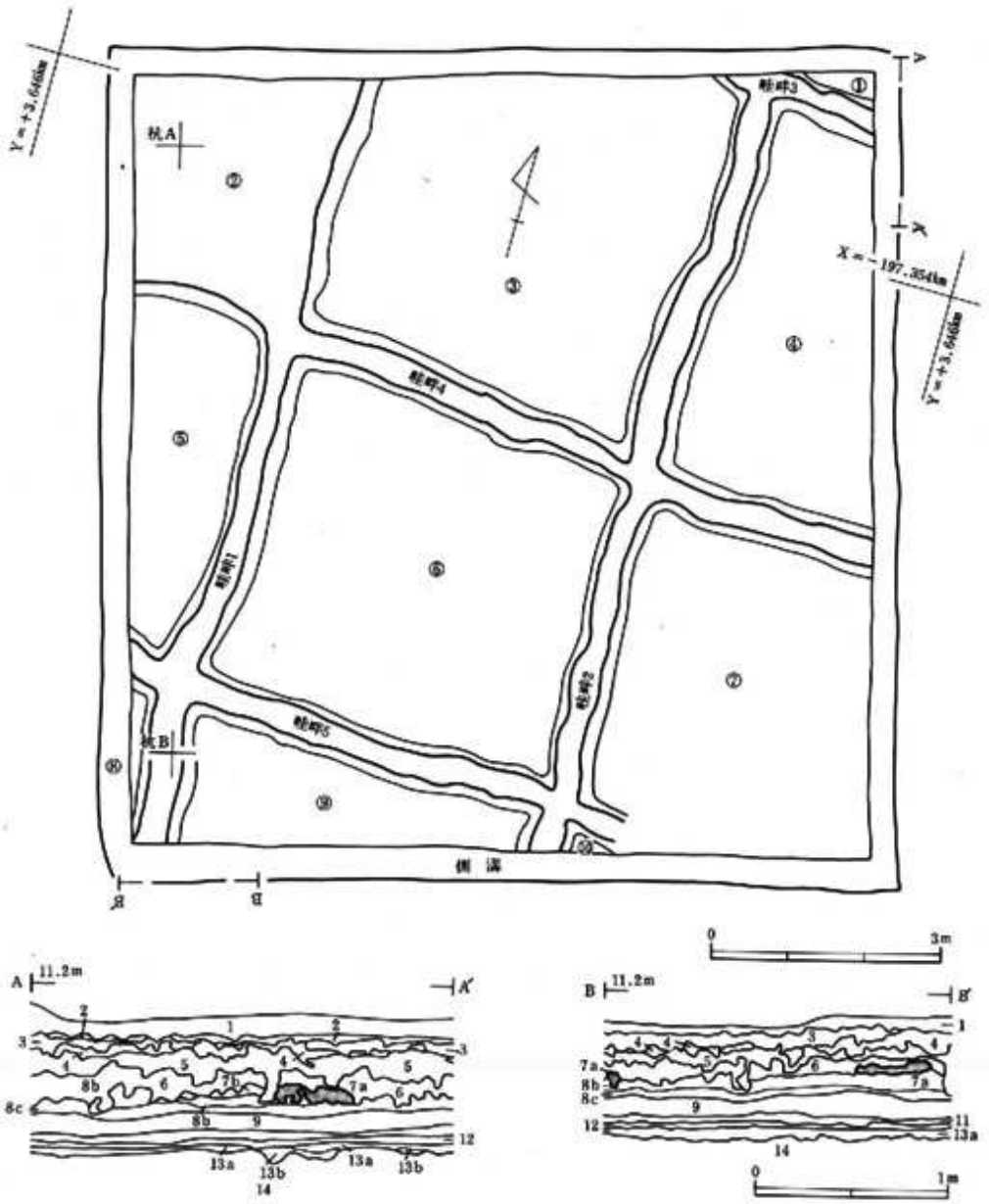
表7　7層水田跡水田区画計測表

No.	標　高(m)	比高差(cm)	傾斜方向	東　辺(m)	西　辺(m)	南　辺(m)	北　辺(m)	面　積(㎡)	推定規模(m)	備　考
①	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	部分的に検出
②	10.80～10.82	(2)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	区画範囲不明
③	10.77～10.79	(2)	ほぼ水平	4.74	推定4.70	4.30	推定4.50	推定21	4.72×4.40	
④	10.74～10.76	(2)	西→東	不明	4.84	2.78以上	1.26以上	9.6以上	4.84×　?	
⑤	10.82～10.83	(1)	不明	4.35	不明	0.50以上	1.70以上	4.6以上	4.35×　?	
⑥	10.77～10.80	3	西→東	3.90	4.10	4.62	4.32	17.6	4.00×4.47	
⑦	10.75～10.77	(2)	西→東	不明	3.86	1.70以上	2.85以上	13.7以上	3.86×　?	
⑧	不明	不明	不明	1.60以上	不明	不明	不明	不明	不明	部分的に検出
⑨	10.78～10.79	(1)	不明	0.52以上	1.68以上	不明	4.50	以上	?　×4.50	
⑩	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	部分的に検出

比高差は各区画内の比高差で、（　）は調査区内にかかる部分のみの数値を表わし、区画全体の比高差を示すものではない。

似畦畔Bが存在し、両者の大部分が6層の耕作によって攪乱された結果と推定される。畦畔の規模はほぼ同じで、上端幅約30cm、下端幅約60cm、高さ約3cmである。方向は、南北畦畔は真北を示すが東西畦畔は3～5°東に振れている。

水田区画は№①から⑩まで10区画検出した。全体を検出できた区画は№⑥だけであるが、③も区画の復元が可能であり、また、④・⑤・⑦・⑨については区画の一辺の長さが判明している。これらのことから区画を復元すると、平面形はやや歪んではいるが、一辺約4～4.7mの



第33図　7層水田跡平面・断面図

方形を基調としていると推定される。

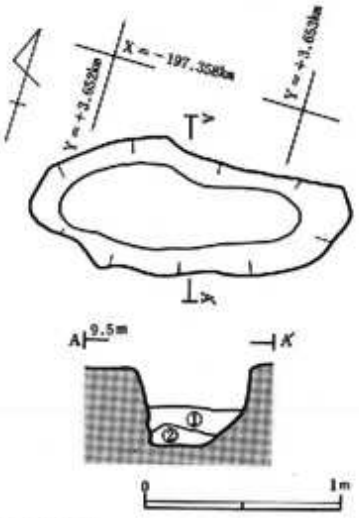
各区画の水田面はごく緩やかに西から東に傾斜しているが、区画③のようにほとんど水平なものも認められる。区画間の比高差については全体を検出できた区画がないため不明である。

なお遺物は出土しなかった。

（4）20層上面

1号土坑－ＳＫＩ－（第34図）

平面プランは当初20層上面で確認したが、湧水のために明確なプランを確定することができなかったため21層まで掘り下げてから確認した。平面形は楕円形で、大きさは164×71cm、深さは約40cmと推定される。堆積土は２層に分層されるがいずれも基本層20層が流入したものと考えられる。遺物は出土せず、性格は不明である。



ＳＫ１堆積土土層註記
① 黄灰色　2.5Y4/1　粘土　植物遺体を少量含む
② 黄灰色　2.5Y4/1　粘土　植物遺体を少量含む

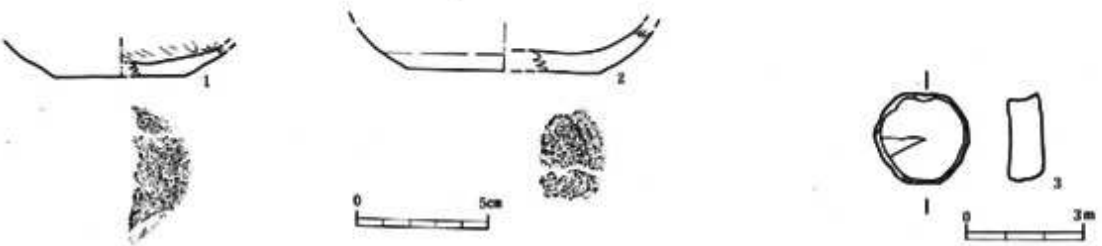
第34図　ＳＫ１平面・断面図

（5）その他の出土遺物（第35図，写真139）

水田土壌である３・５層及び他の基本層１・２層からも遺物が出土している。

３層中からは土師器片11点、赤焼土器片２点、須恵器片１点、陶器片４点、種子（モモ？）１点が出土した。陶器のうち１点は瀬戸産の梅瓶で、15世紀と推定される。他の３点は相馬産の碗で、この内２点は幕末以降の所産である。土師器・赤焼土器はいずれも小片で、磨滅が激しいため調整技法が判るものは皆無である。須恵器は坏の底部破片で、回転糸切り無調整のものである。これらのうち図化できるものはない。

５層中からは土師器片８点、赤焼土器片９点、須恵器片２点、石製品１点が出土した。赤焼



№	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	139－3	５層	赤焼土器	坏	底部破片	――	5.0cm	(1.5cm)	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、回転糸切無調整
2	139－2	５層	赤焼土器	坏	底部破片	――	7.4cm	(1.9cm)	内外面ロクロナデ、回転糸切無調整

№	図版番号	出土遺構・層位	名称	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
3	139－4	５層	六角形石製品	2.4cm	2.4cm	0.9cm	6.5g	――	用途不明

第35図　その他の出土遺物

土器は2点図化できた（第35図1・2）。ロクロ調整後内外面に粗いヘラミガキを施すものである。土師器のうち2点はロクロ使用の坏と鉢であるが、他は磨滅のため詳細は不明である。須恵器2点はいずれも坏の破片で、このうち1点は6層出土の破片と接合した。土師器・須恵器共に図化できるものはない。石製品は平面六角形の板状を呈する。性格は不明であるが、遊戯具の可能性も考えられる。

1層からは陶器1点、磁器2点のほか種子（モモ？）、瓦片、レンガ片等が出土した。このうち磁器は、産地は特定できないが色絵と染付けの碗で、明治以降に比定される。陶器については産地・年代共に特定できない。なお図化できるものはなかった。

2層からは陶器片が2点出土したのみである。1点は瀬戸あるいは常滑産の急須で、18世紀以降に比定される。他の1点は堤焼きと推定される擂鉢で、年代は特定できない。図化はできなかった。

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出した遺構は3・4・5・6・7・13a層水田跡とSK1である。このうち3・5・13a層水田跡は耕作土のみの検出であるが、層の対応が可能であった第34・47・61・68次調査区で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した。その他2・12層も主に第34次調査区との対応及びプラント・オパール分析結果から水田土壌である可能性がある（表8）。

2．遺構の年代は、遺物の量が少ないことに加え、確実に遺構に伴う遺物を限定することが困難なこともあって細かく限定することは出来ない。ただ、5・6層から出土した遺物が平安時代のものに限られることと灰白色火山灰の出土状況、および主に第34次調査を中心とした他調査区との層位の対応から以下のように想定される。

3層　近世　　6層　平安時代（灰白色火山灰降下前）
4層　中世　　7a層　古墳時代以降、平安時代初頭以前
5層　平安時代（灰白色火山灰降下頃以降）　13a層　弥生時代

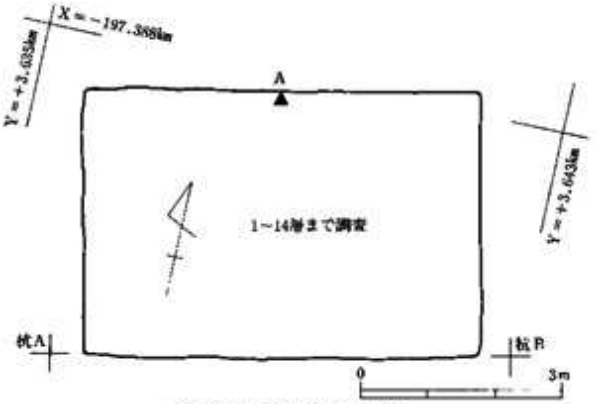
表8　富沢遺跡第60次・34次調査区層位対応表

第60次		第34次			備　考
層位	検出遺構	層位	検出遺構	所属年代	
3	水田耕作土	2	水田耕作上	近　世	第68次で畦畔検出
4	畦　畔	3	畦　畔	中　世	
5	水田耕作土	4	畦　畔	平安時代（灰白色火山灰降下以降）	第47次で時期決定資料出土
6	畦　畔	5	畦　畔	平安時代（灰白色火山灰降下前）	----
7a	畦　畔	6a	畦　畔	古墳時代～平安時代初頭	——
12	水田耕作土？	9	水田耕作土？	弥　生	第47次で石器出土
13a	水田耕作土	10	畦　畔	弥　生	

第5節　富沢遺跡第61次調査

1．調査方法

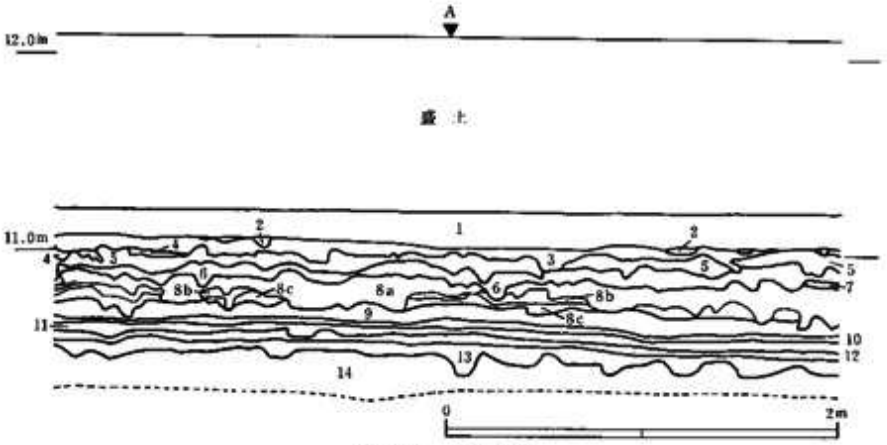
調査区の設定面積は約6.0×4.0m（25㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197392.941m　Y＝＋3636.096m　杭B：X＝－197391.530m　Y＝＋3642.932m）。



第36図　調査区設定図

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別14層、細別では16層が確認された。各層の土質は6層までが粘土、7層以下は泥炭あるいは泥炭質粘土である。現代のものを除く明確な水田土壌は3・4・5・6・8a・13層の各層である。また、2・12層は、下面の起伏状況、下層ブロックの巻き上げ、イネのプラント・オパール分析結果などより水田土壌の可能性が高い。遺物出土層は



第37図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	15cm前後	下面に集積、濃い斑紋	細砂微量	水田耕作(現代)	下面起伏
2	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	1cm～5cm	上面に集積	細砂少量・部分的に粗砂多量	水田耕作？	下面著しく起伏・部分的で不連続な分布
3	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	4cm～15cm	管状斑紋	灰白色火山灰粒少量・風化褐灰岩粒・下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏・粘性強
4	黒色	2.5Y2/1	粘土	1cm～10cm	濃い管状斑紋	灰白色火山灰粒少量・風化褐灰岩粒・下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏・部分的で不連続な分布・粘性強
5	褐灰色	10YR4/1	粘土	5cm～20cm	管状斑紋	灰白色火山灰ブロック少量(層下半多量)・下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏
6	黒褐色	10YR2/2	粘土	2cm～12cm	濃い管状斑紋	植物遺体少量・下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏
7	黒色	10YR1.7/1	泥炭	1cm～3cm	薄い管状斑紋	粘土分少量	自然堆積	部分的で不連続な分布
8a	暗灰黄色	2.5Y4/2	泥炭質粘土	1cm～2.5cm	薄い管状斑紋	下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏
8b	褐色	10YR4/4	泥炭質粘土	1cm～8cm	薄い管状斑紋	――	自然堆積	不連続な分布
8c	暗褐色	10YR3/3	泥炭	1cm～8cm	薄い管状斑紋	粘土分少量	自然堆積	不連続な分布
9	黒色	10YR1.7/1	泥炭	10cm前後	薄い管状斑紋	粘土分少量	自然堆積	――
10	黒褐色	10YR3/1	泥炭質粘土	3cm前後	薄い管状斑紋	植物遺体少量	自然堆積	黒色の横縞が入る
11	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	3cm～7cm	薄い管状斑紋	粘土分少量	自然堆積	下面若干起伏・部分的に白色粘土の横縞が入る
12	褐灰色	10YR4/1	泥炭質粘土	3cm前後	――	――	水田耕作？	下面若干起伏
13	黒褐色	7.5Y1/3	泥炭質粘土	2cm～16cm	――	下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏
14	黒褐色	10YR3/2	泥炭	30cm以上	――	――	自然堆積	黒色の細かい横縞が入る

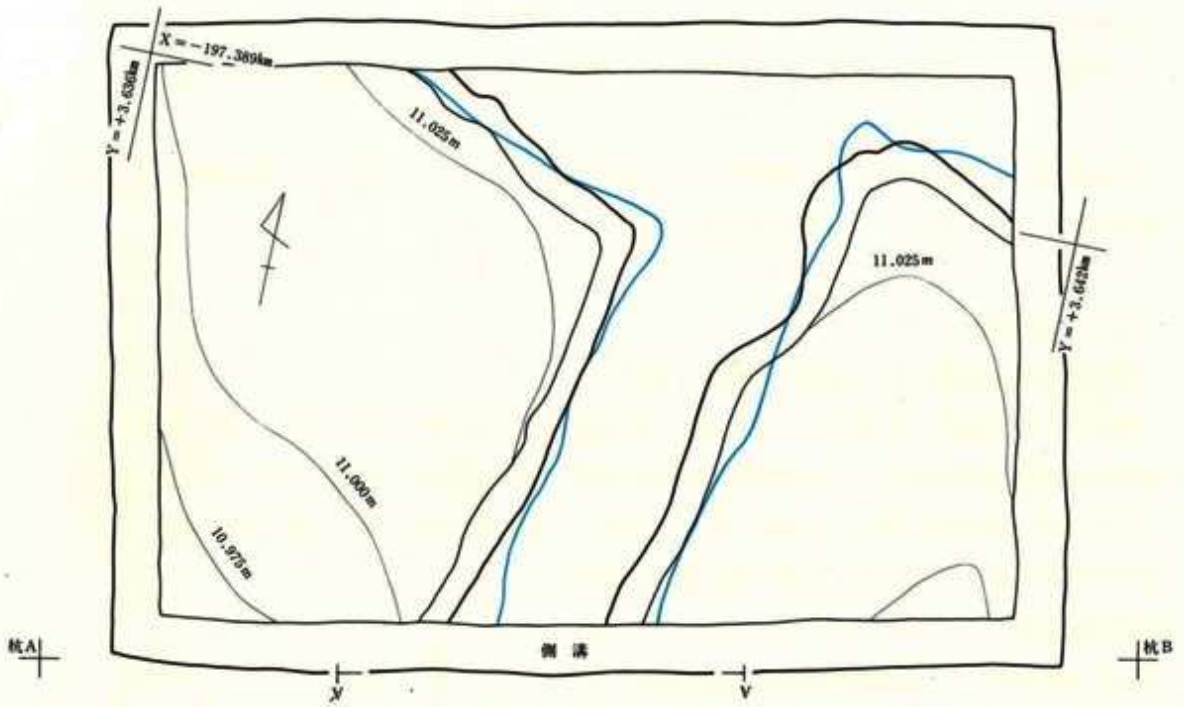
5・6・8a・10層である。3・4・5層中からは、灰白色火山灰が検出されている。特に5層下部に多量に含まれていることから本来6層上面にあったものが、5層以降の耕作によって巻き上げられた可能性がある。各層の傾きとしては、1～8層までは南西方向へのごく緩やかな下り傾斜を示すが、9層以下では北東方向にも緩やかに下がり、中央部がやや高くなる。なお、当調査区の基本層序は、隣接調査区の基本層序と対応関係が認められる。

3．検出遺構と出土遺物

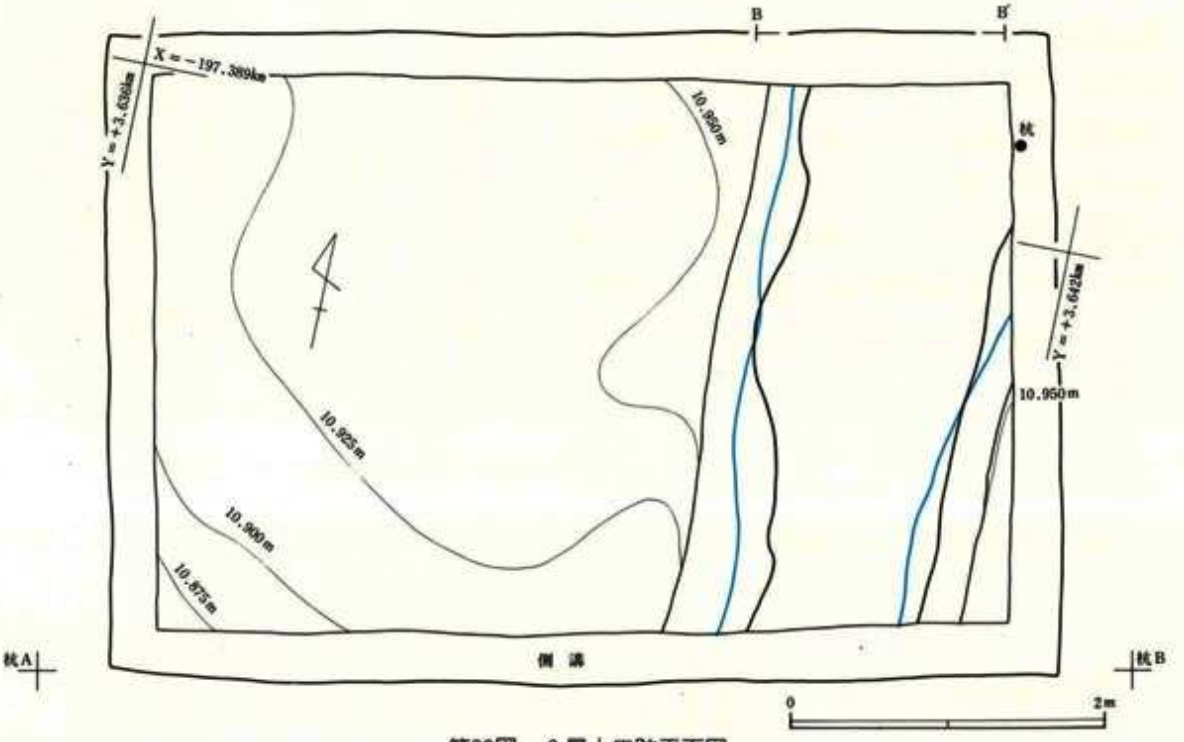
(1) 5層上面

5層水田跡（第38・42図，写真27・28）

〈遺構状況〉　北東－南西方向（N－14°－E）の直線的に延びる畦畔とこれにほぼ直角に交わる畦畔からなる2区画の水田が検出された。それぞれの区画の形状及び規模は調査範囲が狭く不明である。畦畔の検出面は4層中または3層中である。3層中で検出されたのは、3層の攪乱によって4層が断片的にしか存在しないためである。北東－南西方向の畦畔を挟んで直交方向の畦畔はややずれており、畦畔の交わり方が「＋」状であるかどうかは、直交方向の畦畔幅が調査区内では確認できなかったため不明である。畦畔は耕作土と同一土壌－5層－を盛り上げ作られている。耕作土上面からの高さは4cm前後で、北東－南西方向の下端幅は約1.2m前後である。両畦畔とも水口は検出されていない。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは平均で12cm位で、下部では下層ブロックを含む。また、耕作土中には灰白色火山灰の小ブロックが少量含まれるが、層下半に多く認められる。なお、畦畔部分では耕作が深



第38図　5層水田跡平面図



第39図　6層水田跡平面図

く及ばなかったためか、直下の6層上面が畦畔状の高まりとなって残っており、当畦畔に伴う擬似畦畔Bの可能性がある。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は11.00m前後で、両区画とも南西方向の緩やかな下り傾斜を示すが、区画間の比高差は余り認められない。

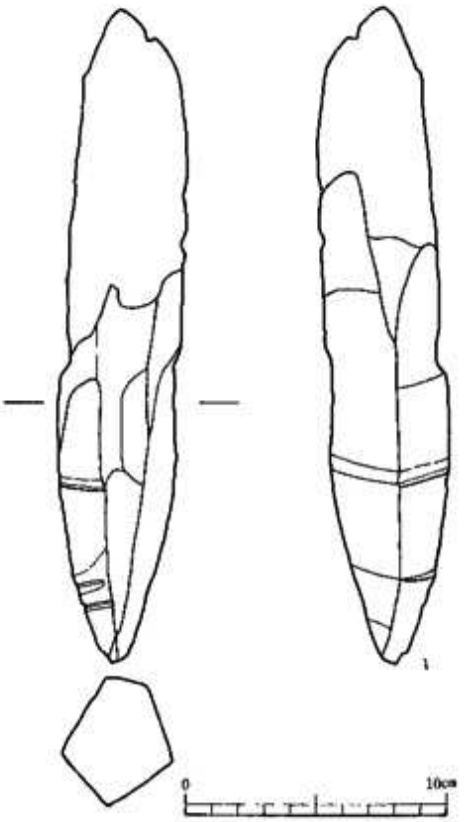
〈出土遺物〉　図化不可能な土師器片が2点出土している。いずれもロクロ使用の坏の口縁部資料である。内1点には、内面に黒色処理が認められる。

（2）6層上面

6層水田跡（第39・40・42図，写真29・140）

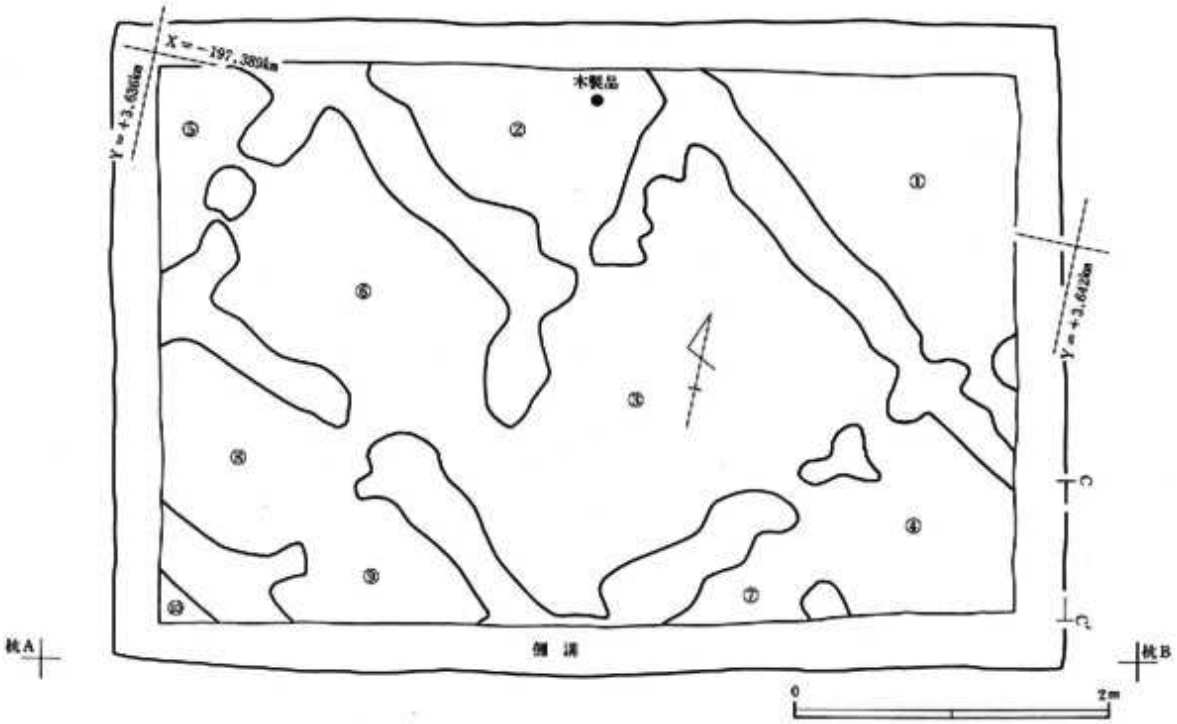
畦畔が1条と杭が1本検出されたのみで、出土遺物はない。畦畔の検出面は5層下面である。畦畔はほぼ真北方向をとり、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌－6層－を盛り上げ作られている。下端幅は約1.8m前後と広い。耕作土上面からの高さは、上層の水田跡によって削平を受けており2cm前後と残存状況が悪い。水口は検出されていない。耕作土の土質は粘土であるが、下層を巻き込んでいる影響か植物遺体を含む。下面の起伏は顕著で、畦畔部分以外では8a層上面まで耕作が及んでおり、これらブロックを下部に含む。直上層の影響で、一部耕作土の認められない部分もあるが、厚さは平均で8cm位である。畦畔部分では耕作が深く及ばなかったためか、直下の7層が擬似畦畔Bとなって残っている。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は10.90m前後で、西側の区画は南西方向の緩やかな下り傾斜を示すが、東側の区画の傾斜及び両区画間の比高差は不明である。

なお、東側側溝の畦畔上と思われる所でやや南西方向に打ち込まれた杭（第40図1）が検出されている。この杭は先端加工部しか残存しておらず、上位層から打ち込まれたものと考えられる。

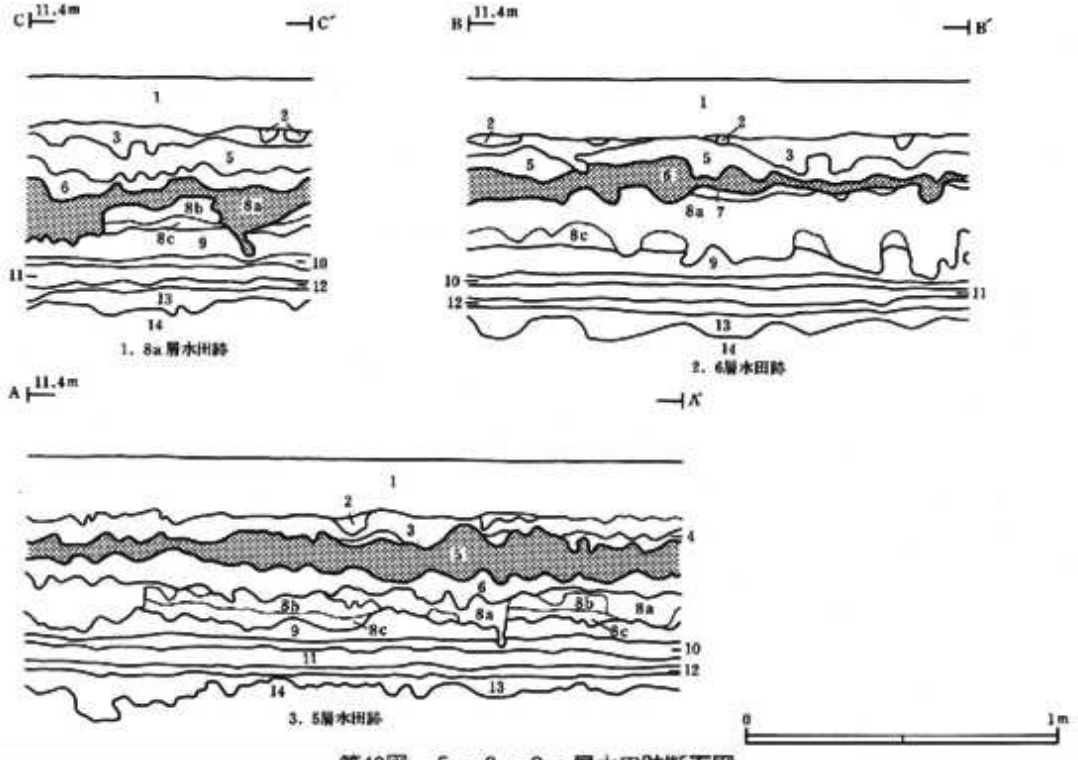


No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材	長さ	幅・長径	厚さ	先端加工	表面加工	備考
1	140　2	6層	杭	――	丸木	25.1cm	4.5cm	4.9cm	5方向		先端加工部のみ残存

第40図　6層水田跡出土遺物



第41図　8 a 層水田跡平面図



第42図　5・6・8 a 層水田跡断面図

（3）8a層上面

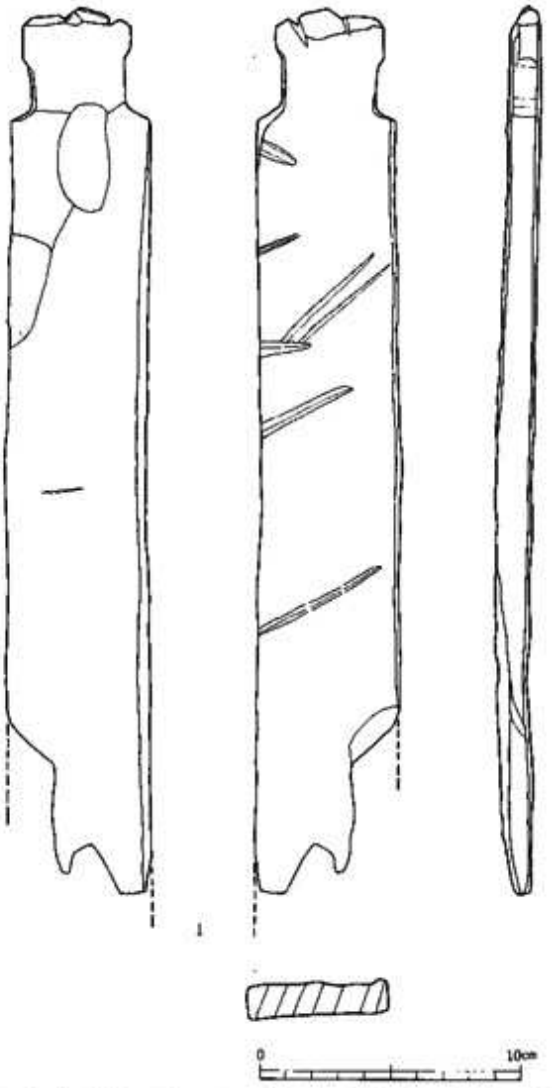
8a層水田跡（第41～43図，写真30～33・140）

小区画の水田が10区画検出された。ただし、8a層上面は6層水田跡の耕作によって削平を受けており、このため畦畔は上面では検出されず、層下面で直下層（多くは8b層）の高まり、すなわち擬似畦畔Bとして検出された。各区画の水口の有無については、擬似畦畔Bによる検出のため不明である。

〈擬似畦畔Bの規模と配列〉　畦畔は幅30cm前後の狭いもので、N－22～44°－E方向のものとこれにほぼ直交するN－52～60°－W方向のものからなる。畦畔には不連続なものが多いが、北西－南東方向のものには連続するものも認められる。畦畔の交わり方は「＋」状・「T」字状の両者がみられる。

〈水田1区画の形状と規模〉　10区画検出されている（区画①～⑩）。この内、区画全体が検出されたものは2区画（③・⑥）であるが、他のものもこれらと同様にほぼ方形を呈するものと考えられる。区画面積は③が4.2㎡、⑥が2.1㎡で、復原可能な②で2.3㎡、⑧で1.4㎡、⑨で1.3㎡である。

〈耕作土〉　8b～9層上部までの各層を攪拌し、泥炭質粘土を耕作土としている。耕作深度が深い部分では、10層をも攪拌している。耕作土の分解の度合いは、耕作土中に母材となる層のブロックを多量に含み、分解が進んでいない状況を示す。耕作土の厚さは、下面の起伏が顕著な上、調査区東側では耕作深度が深く、また、6層水田跡の耕作の影響で、一部耕作土の認められない部分もあり安定していないが、平均で15cm前後、最大で36cmである。下面には



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材	長さ	幅	厚さ	備考
1	140－1	8a層	大足状木製品	――	柾目	34.0cm	5.5cm	1.4cm	欠損品

第43図　8a層水田跡出土遺物

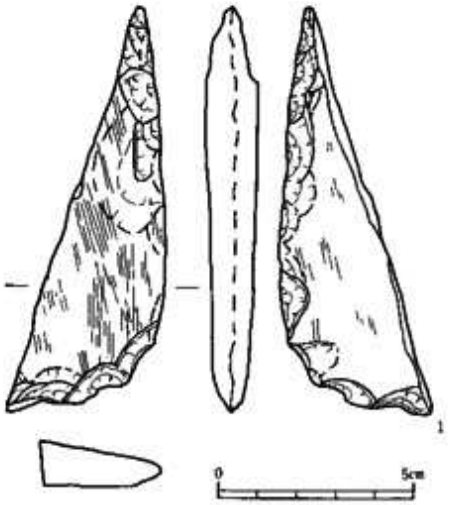
鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の傾斜〉　全体の水田面の標高は10.90m前後で、全体的な傾斜及び各区画内ごとの傾斜・標高差は不明である。

〈出土遺物〉　水田区画②の上部から大足状の木製品が1点出土している（第43図1）。幅5.5cm、厚さ1.4cmの板状のもので、一方の端部側を欠損し全長は不明である。残存端部側の両側面には端部側に開いた「V」字状の削り込みを入れ、幅を狭くしている。表面・両側面は平滑に仕上げられて入るが、裏面は粗い作りとなっている。形状からは大足の足板あるいは枠の横木に類似するが、他の用途の木製品であることも考えられる。

（4）その他の出土遺物（第44図，写真140）

10層上面より石鏃が1点出土している（第44図1）。打製のもので、刃部の一部を残す破片資料である。刃部を除く剥離面は不明瞭で、全体的に滑らかな感じとなっており、刃部が再調整されたことが考えられる。表裏面とも刃部に対して縦方向の擦痕が認められる。



No.	図版番号	出土遺構、層位	名　称	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　質	備　考
1	140－4	10層上	石鏃	10.4cm	3.2cm	1.3cm	37.0g	石英安山岩？	脚部が著しい、欠損品

第44図　その他の出土遺物

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構としては、3層・4層・5層・6層・8a層・13層の6期の水田跡が検出された。この内、3層・4層・13層の各水田跡は耕作土のみの検出であるが、層の対応が可能であった隣接第34・60・68次調査区で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した（表9）。

2．2層は、その層相より水田土壌の可能性が高い。また、12層は第60次調査区対応層を加えたイネのプラント・オパール分析結果及び第34次調査区対応層の検討結果（第4章第3節3）より、水田土壌の可能性が指摘される。

3．5層水田跡の直下層（6層）上面では、5層水田跡畦畔と同位置に「畦畔状の高まり」が確認された。6層水田跡では、この位置と異なる部分に畦畔が検出され、さらにこの畦畔の直下層（7層－自然堆積層－）上面で、6層水田跡畦畔に伴う「擬似畦畔B」が検出されて

いる。従って、6層上面の「畦畔状の高まり」は、6層水田跡の畦畔とは考え難く、その位置関係より、5層水田跡畦畔の直下層へ及ぼした畦畔痕跡と考えられる。しかしながら、「擬似畦畔B」の認定に関しては、現在のところ水田土壌の直下層が「自然堆積層」であることを条件としており、そのためこの「畦畔状の高まり」に関しては、現状では「擬似畦畔B」の可能性を指的するにとどめた。このように、直下層が耕作土の場合でも明らかに上層の畦畔痕跡－擬似畦畔B－を識別出来る場合もあり、「擬似畦畔B」が形成される直下層の条件については、今後の検討課題と考える。

4．検出遺構・各層の所属年代であるが、出土遺物が皆無、あるいは数量的に乏しいことより、出土遺物からの時代決定は困難であるが、5層下部に灰白色火山灰が混じること、第34次調査区及び他の調査区との層の対応関係が可能であったことより（表9）、以下のような所属年代が想定される。

- 3層水田跡－近世
- 4層水田跡－中世
- 5層水田跡－平安時代（灰白色火山灰降下以降）
- 6層水田跡－平安時代（灰白色火山灰降下前）
- 8a層水田跡－弥生時代以降　奈良時代以前
- 12層－弥生時代　・13層水田跡－弥生時代

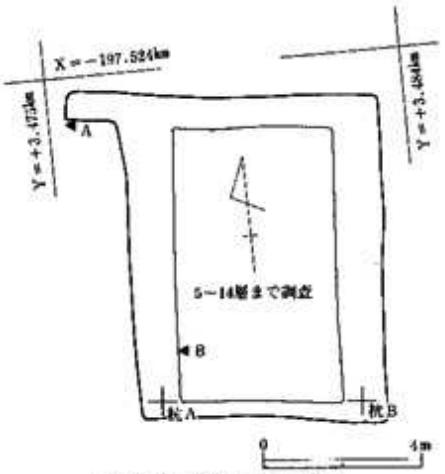
表9　雷沢遺跡第61次・34次調査区層位対応表

第61次		第34次			備　考
層位	検出遺構	層位	検出遺構	所属年代	
3	水田耕作土	2	水田耕作土	近　世	第68次で畦畔検出
4	水田耕作土	3	畦　畔	中　世	
5	畦　畔	4	畦　畔	平安(灰白色火山灰降下以降)	第47次で時期決定資料出土
6	畦　畔	5	畦　畔	平安(灰白色火山灰降下前)	——
8a	擬似畦畔B	7a	擬似畦畔B	——	——
12	水田耕作土？	9	水田耕作土？	弥　生	第47次で時期決定資料出土
13	水田耕作土	10	畦　畔	弥　生	

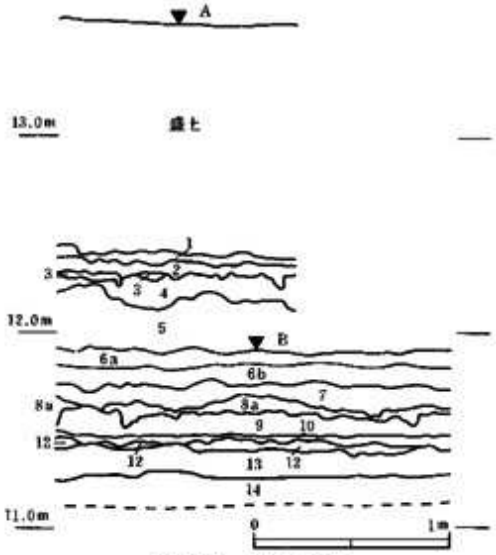
第6節　富沢遺跡第62次調査

1．調査方法

調査区設定面積は7×4m（約28㎡）である。調査は設定面積よりやや大きめの範囲を設定し、厚さ約1.2mの盛土を重機により除去したところ、その直下に自然堆積の砂層が確認された為、砂層より下層は人力により掘り下げていった。また調査区周囲には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は1層から4層までが調査区外の一部での断面観察で、調査区内においては5層から14層までとし、これより下層については設定面積の小さいことから掘込みは行わなかった。



第45図　調査区設定図



第46図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	黒色 灰色	2.5Y2/1 10Y4/1	粘土 粘土	3cm～7cm	――	――	自然堆積	互層
2	灰色	5Y4/1	砂質シルト	4cm～12cm	有	下層粘土ブロック	水田耕作？	下面起伏
3	黒色	10YR1.7/1	粘土	2cm～3cm	有		水田耕作？	下面起伏・不連続な分布
4	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	3cm～17cm	有		水田耕作？	下面起伏
5	灰黄褐色	10YR6/2	粗砂	34cm～50cm	――	層の間中に小礫	自然堆積	粘性シルトを層状にはさむ
6a	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	2cm～12cm		植物遺体多量	自然堆積	互層
6b	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	8cm～14cm	------	植物遺体多量	自然堆積	互層
7	黒色	5Y2/1	泥炭質粘土	4cm～16cm	――	植物遺体多量・下層粘土ブロック	水田耕作	下面起伏
8a	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	4cm～16cm	――	植物遺体多量・下層粘土ブロック	水田耕作	下面起伏
8b	黒色	5Y2/1	泥炭質粘土	1cm前後	――		自然堆積	部分的で不連続な分布
8c	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	2cm前後		――	自然堆積	部分的で不連続な分布
9	灰色 黒色	10Y5/1 10YR1.7/1	粘土 泥炭質粘土	3cm～14cm	――	植物遺体多量 ――	自然堆積	互層
10	黒色	2.5Y2/1	砂質シルト	2cm～8cm	――	植物遺体多量	水田耕作	――
11	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土	2cm～8cm	――	植物遺体多量	水田耕作？	不連続な分布
12	オリーブ灰色	5GY6/1	粗砂	2cm～10cm	――		自然堆積	部分的分布
13	灰色	5Y4/1	粘土	3cm～18cm		植物遺体多量	互層・自然堆積	――
14	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	16cm以上		――	自然堆積	――

遺構の計測は杭A・Bを基準として実施した。基準杭は平面直角座標第X系を使用している。
杭A：X＝－197,532.481　Y＝3,477.218　杭B：X＝－197,532.948　Y＝3,482.193

2．基本層序

調査では、盛土下に大別14層、細別17層が確認された。各層の土質は1・3層が粘土で、2・4層がやや砂質のシルト、5層が部分的に小礫及びシルト層を層状に挟む粗砂で、わりと厚く堆積している。6層以下は粘土を主体とし、7層から9層の間は泥炭質が強くなっているが、それ以下では10層の砂質シルト土や12層のように部分的堆積の粗砂層がみられる。各層とも土質のグライ化はみられない。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。

7・8a・10層は水田土壌と考えられ、また2・3・4層も層下面が著しく起伏していることから、水田土壌の可能性が考えられる。7・8a層においては畦畔が検出されており、7層中より弥生土器片が少量出土している。

3．検出遺構と出土遺物

（1）7層上面

7層水田跡（第47・48図，写真34・141）

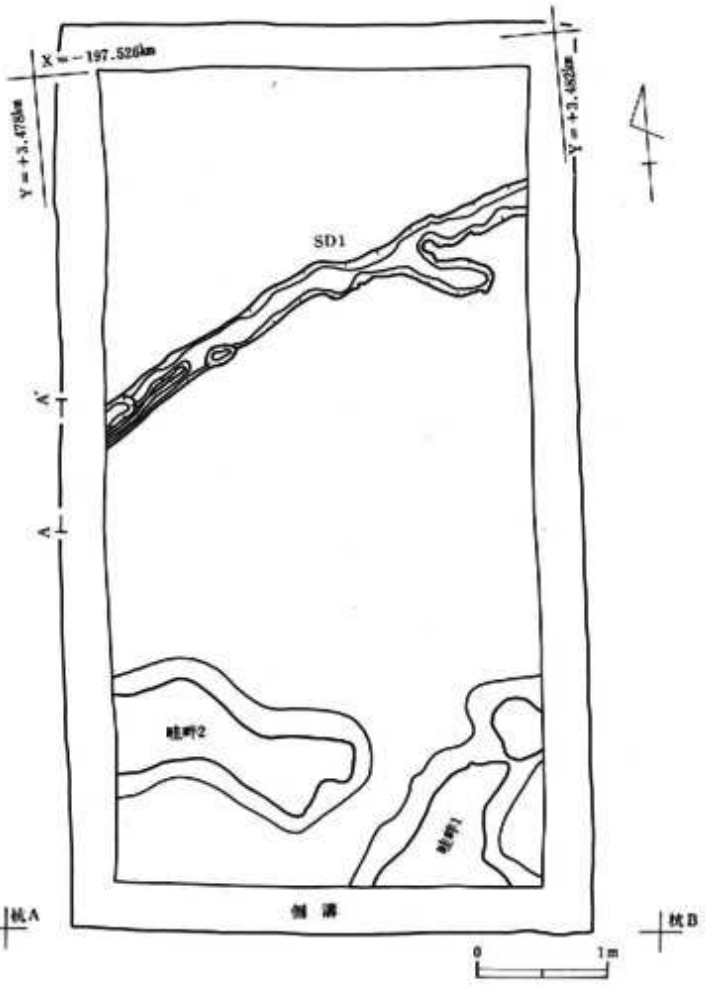
〈遺構状況〉　平面観察と断面観察によって、ほぼ十字に直交すると思われる畦畔（畦畔1・2）を検出した。これによって区画される水田区画は4区画と思われる。畦畔1は方向N－35°－E、下端幅は50～70cmで、耕作土上面からの高さは3～5cmである。畦畔2は方向N－55°－W、下端幅は70～100cmで、耕作土上面からの高さは3～4cmである。畦畔2は畦畔1と接する部分についてはほぼ直交しているが、直線的ではなく、調査区西壁付近においてややくびれる。耕作土は7層で畦畔はいずれも耕作土と同じ7層を盛り上げて作られており、上面に多少の起伏が認められるが、耕作土との質的違いはみられない。また耕作土は黒色の泥炭質粘土で、同じ泥炭質粘土の8a層を攪拌することによって形成されており、下面の起伏が著しい。層厚は4～16cmで、水田面の標高は11.7～11.8mの間で、僅かであるが東に下っている。

〈出土遺物〉　耕作土中より弥生土器片が7点出土した。撚糸文（L）の地文のみのもので、器種、時期ともに不明である。

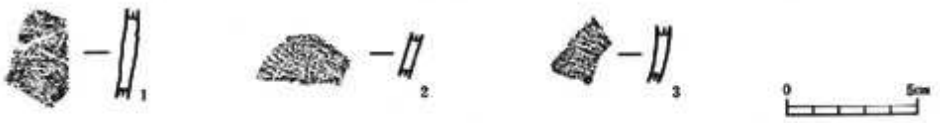
1号溝跡－SD1（第49図，写真34）

調査区やや北よりに位置し、東西方向にほぼ直線的に横切る溝跡で、方向はN－23°－Eである。上端幅は20～30cm、下端幅は5～20cmで、深さは平均2・3cm程度の浅いものである。

断面形は浅い舟底状を呈し、堆積土は黒色粘土の単層で、6層とほぼ同質のものである。この溝跡は7層の耕作土上面で検出されたが、畦畔とは方向が異なり、形成時期が7層水田の最終耕作の後のものであることから、水田に伴うということ以外に、単独で存在した人為的なものの、また自然流路の可能性も考えられる。

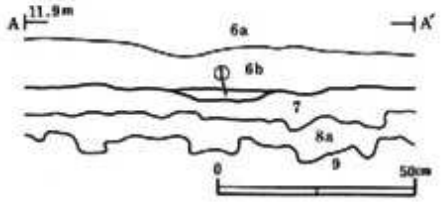


第47図
7層水田跡平面図



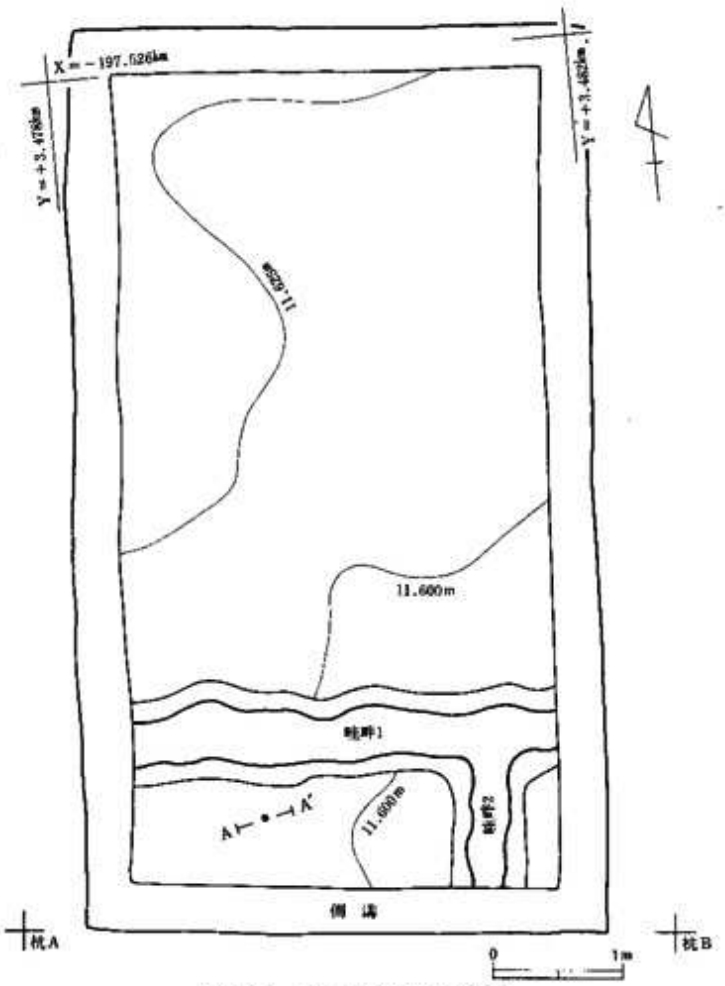
No.	図版番号	出土遺構、層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	141 − 5	7層	弥生土器	――	体部小片	――	――	――	外面L横糸文、内面磨滅
2	141 − 2	7層	弥生土器	――	体部小片	――	――	――	外面R横糸文、内面磨滅
3	141 − 4	7層	弥生土器	――	体部小片	――	――	――	外面R横糸文、内面磨滅

第48図　7層水田跡出土遺物



SD1堆積土土層註記
① オリーブ黒色　5Y3/2　粘土　植物遺体を多量含む

第49図　SD1断面図



第50図　８ａ層水田跡平面図

（２）８ａ層上面

８ａ層水田跡（第50図，写真35・36）

〈遺構状況〉　Ｔ字に直交する畦畔（畦畔１・２）を検出した。これによって区画される水田区画は３区画である。畦畔１は方向Ｎ－87°－Ｗ、下端幅は60～66cmで、耕作土上面からの高さは２～６cmである。畦畔２は方向Ｎ－６°－Ｅ、下端幅は55cm前後で、耕作土上面からの高さは４～６cmである。畦畔１の方がやや幅が広く、２本の畦畔は直線的で、これにより区画される８ａ層水田跡は規則的なものであることが想定される。また図上では表現できなかったが、畦畔１に沿って耕作土上面より僅かに窪む溝状のものが平行してみられた。耕作土は８ａ層で、畦畔はいずれも耕作土と同じ８ａ層を盛り上げて作られているが、耕作土との質的違いはみられない。８ａ層の耕作土は下層の８ｂ・８ｃ・９層と、いずれも白色粘土と黒色泥炭質粘土の互層を攪拌することによって形成されており、８ａ層の下面は起伏が著しく、主として９層を

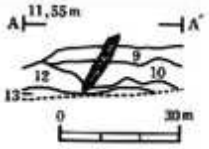
巻き上げているのが明瞭にわかる。層厚は4～16cmで、水田面の標高は11.6m前後であるが、畦畔1より北側の水田区画の方が南側に比して若干低くなり、また畦畔とのレベル差もその分大きいものとなっている。

〈出土遺物〉　耕作土中より土器片が1点出土した。小破片で文様はみられず、裏面はミガキが施されている。器種、時期とも不明である。

（3）8a層下面

杭（第51図）

調査区の南西近くの8a層の下面近くにおいて杭を検出した。杭先端には加工痕が認められ、12層中まで入っていた。杭上端については欠損しており不明である。杭はその位置から7層畦畔の下端部近くに検出され、7層或いは8a層水田跡に伴うものとみられるが、いずれのものかは不明である。



第51図
8a層出土杭
断面図

4．遺構の所属年代とまとめ

1．断面の一部でしか確認できなかった3層の上層で、42・63次調査では畦畔が検出され、42次調査では出土遺物、灰白色火山灰のあり方から平安期のものとしている。また42次調査では本調査区の5層対応層より溝跡、土壙跡数基が検出されている。

2．本調査でいう7層水田跡は63次調査の8層水田跡と対応できるものであるが、63次調査においては耕作土中より土師器とみられるものの出土があり、弥生土器の出土した7層水田跡との時期的検討が必要とされる。

3．8a層水田跡の畦畔検出は近辺調査においては初のものであり、上層などの様子から弥生期の可能性が強いが、今後の調査により具体的な時期が決定できるものと思われる。

第7節　富沢遺跡第63次調査

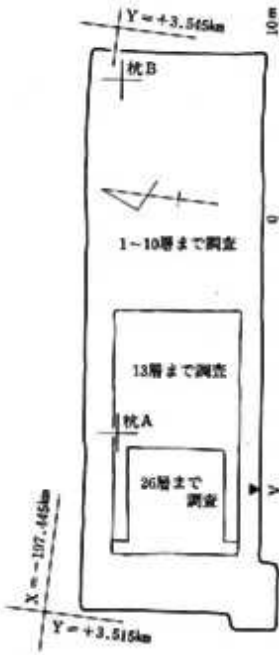
1．調査方法

調査区の設定面積は8.8×28.6m（約260㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。10層上面までは、調査区全面の精査を実施し、10層以下は、6×12mの試掘区を設けて掘り下げた。（13層以下26層中までは5×5.5mに縮小した。）

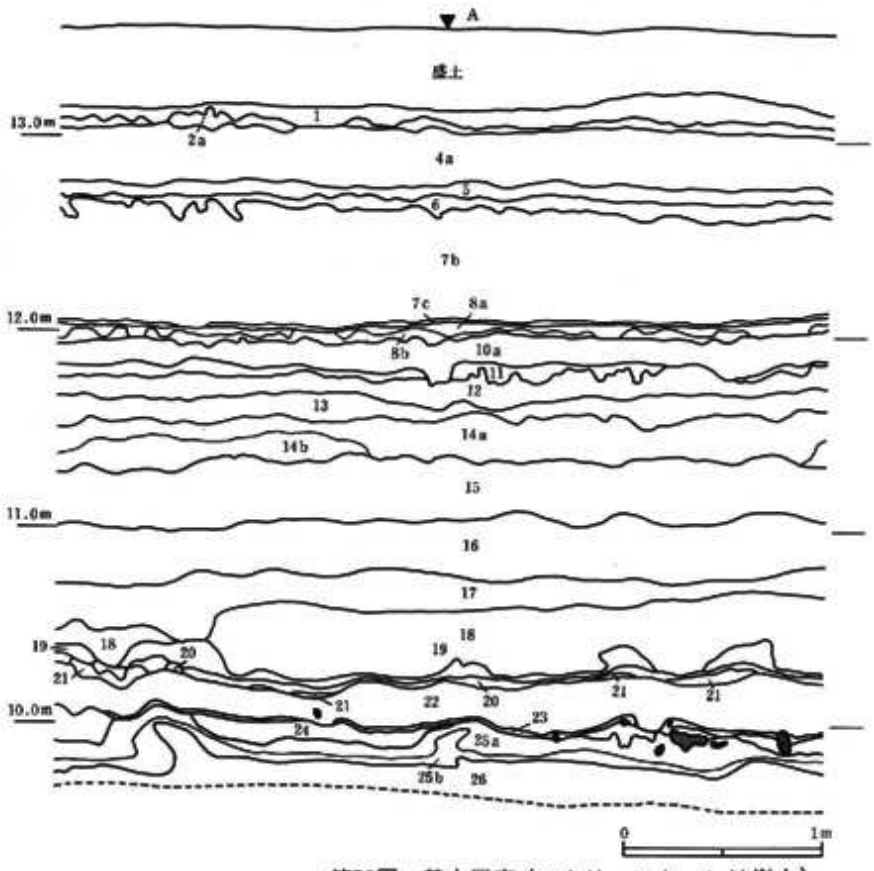
遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.447493km　Y＝＋3.524507km　杭B：X＝－197.445462km　Y＝＋3.542386km）。

2．基本層序

調査では、盛土下に大別26層、細別では38層が確認された。各層の土質は1～3層がシルト



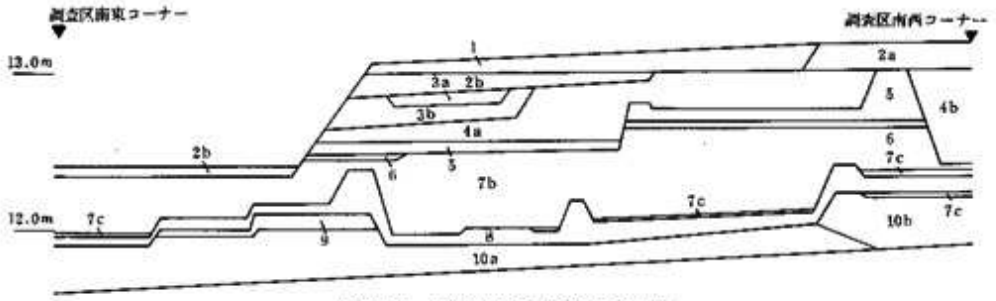
第52図　調査区設定図



第53図　基本層序（スクリーントーンは樹木）

質、4層が砂質、5・6層が粘土質、7層が砂質、8・9層が粘土質、10層が砂質、11・12層が泥炭質粘土、13・14層がシルト質粘土、15～17層がシルト質、18層が砂、19層がシルト、20層が粘土、21層が粘土質シルトと腐植質粘土の互層、22層が砂、23層が粘土質シルトと腐植質粘土の互層、24層が砂、25層が粘土質シルトと腐植質粘土[注1]の互層、26層が砂である。グライ化

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	8cm～38cm	斑紋少量	小礫少量	水田耕作(現代)	――
2a	灰色	5Y5/1	砂質シルト	5cm～18cm	――	凝灰岩粒・細砂少量	水田耕作？	下面著しく起伏
2b	灰オリーブ色	5Y4/2	シルト	10cm～20cm	――	凝灰岩粒・粗砂少量	水田耕作？	下面やや起伏
3a	にぶい黄色	2.5Y6/3	シルト	3cm～10cm	上部に集積層	マンガン粒・植物ブロック・φ3cm前後の礫少量	水田耕作？	下面やや起伏・部分的分布
3b	暗灰黄色	2.5Y5/2	粘土質シルト	4cm～18cm	有（多量）	マンガン粒・φ3cm前後の礫少量	水田耕作？	下面やや起伏・部分的分布
4a	にぶい黄褐色	10YR6/3	細砂	30cm～52cm	―	φ3cm前後の礫少量	自然堆積	河川堆積
4b	灰黄褐色 にぶい黄褐色	10YR5/2 10YR6/3	粘土質シルト 細砂	2cm～4cm	・	――	自然堆積	互層・部分的分布
5	黒褐色	2.5Y3/2	シルト質粘土	4cm～11cm	――	褐色シルト多量	水田耕作	下面やや起伏
6	黒褐色	10YR3/2	粘土	10cm～22cm	管状斑紋少量	凝灰岩粒・粗砂多量・φ1cm前後の礫少量	水田耕作？	下面やや起伏
7a	灰色 灰色 灰色 にぶい黄褐色 褐灰色	5Y5/1 5Y6/1 5Y5/1 10YR6/4 10YR4/1	砂質シルト 砂質シルト 細砂 粗砂 粘土	14cm～36cm	――	・・・・	自然堆積	互層・部分的分布
7b	にぶい黄褐色	10YR6/3	粗砂	20cm～70cm	・	φ3cm前後の凝灰岩・閃緑褐色粗砂・φ3cm前後の砂多量	自然堆積	部分的に砂のみの層 河川堆積？
7c	にぶい黄褐色 灰色 黒褐色 にぶい黄色	10YR4/3 5Y5/1 2.5Y3/1 2.5Y6/3	粘土 粘土 粘土 粗砂	8cm～14cm	――	・・・・	自然堆積	互層
8a-1	黒褐色	10YR3/1	シルト質粘土	4cm～16cm	――	にぶい黄橙色粗砂ブロック多量・粗砂・植物遺体少量	水田耕作	部分的分布
8a	黒褐色	2.5Y3/1	泥炭質粘土	6cm～21cm		細砂少量	水田耕作	下面著しく起伏
8b	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	6cm～20cm		細砂少量	水田耕作？	下面起伏
8c	黒色	5Y2/1	泥炭質粘土	2cm～4cm	――	――	自然堆積	――
9	灰色	5Y4/1	粘土	8cm～20cm	――	細砂・植物遺体少量	水田耕作？	下面起伏・ややグライ化
10a	暗灰黄色	2.5Y5/2	粗砂	10cm～44cm	――		自然堆積	部分的に灰オリーブ泥炭質粘土と互層・ややグライ化
10b	灰色 黄褐色 灰色	5Y5/1 2.5Y5/3 5Y5/1	細砂 粗砂 シルト質粘土	14cm～28cm	――	――	自然堆積	互層・粘土を下とする
11	暗褐色	10YR3/3	泥炭質粘土	4cm～8cm	・	――	自然堆積	――
12	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	――	――			――
13	灰黄褐色	10YR4/2	シルト質粘土	10cm～20cm	――	粗砂・植物遺体少量	自然堆積	グライ化
14a	にぶい黄橙色	10YR6/4	シルト質粘土	12cm～28cm	――	粗砂少量	自然堆積	グライ化
14b	浅黄色	2.5Y7/3	シルト質粘土	10cm～28cm	―	――	自然堆積	グライ化
15	緑灰色	7.5GY6/1	粘土質シルト	20cm～38cm	―	――	自然堆積	グライ化顕著
16	緑灰色 緑灰色	10GY6/1 10GY6/1	細砂 粘土質シルト	20cm～50cm	――	――	自然堆積	互層・グライ化顕著
17	緑灰色	5G6/1	粘土質シルト	20cm～46cm	―	――	自然堆積	グライ化顕著・硬い
18	緑灰色	10G6/1	細砂	16cm～46cm		――	自然堆積	部分的に明緑灰色粘土質シルトと互層・グライ化顕著
19	オリーブ灰色	10Y4/2	シルト	2cm～22cm	――	――	自然堆積	グライ化顕著・非常に硬い
20	オリーブ灰色	2.5GY6/1	粘土	2cm～10cm	――	――	自然堆積	グライ化顕著
21	灰黄褐色 黒褐色	10YR5/2 10YR3/2	腐植質粘土 粘土質シルト	2cm～10cm	――	植物遺体多量（樹木・種果など）	自然堆積	互層
22	緑灰色	7.5GY6/1	細砂	12cm～28cm	・・	植物遺体微量（種果など）	自然堆積	部分的にオリーブ灰色粘土質シルトと互層・グライ化顕著
23	にぶい黄褐色 黒褐色	10YR4/3 10YR3/2	腐植質粘土 粘土質シルト	6cm～36cm	・・・・	植物遺体少量（樹木、種果など）	自然堆積	互層
24	オリーブ灰色	5GY6/1	粗砂	6cm～18cm	――	植物遺体微量（種果など）	自然堆積	グライ化顕著
25a	黄灰色 黒褐色	2.5Y6/1 10YR3/2	腐植質粘土 粘土質シルト	2cm～20cm	――	植物遺体少量（樹木・種果など）	自然堆積	互層
25b	暗灰黄色 黒褐色	2.5Y4/2 10YR3/2	粘土 粘土質シルト	2cm～26cm	――	植物遺体少量（樹木・種果など）	自然堆積	互層
26	オリーブ灰色	5GY6/1	粗砂	70cm以上	――	―	自然堆積	グライ化顕著



第54図　調査区南壁断面模式図

は9層から漸次進み、13層では顕著である。各層の傾きは12層以下は調査範囲が狭いので不明であるが、1層から11層までは全て南西から北東側へ向かって下っている。勾配は11～20cm／10m程度とややきつい。

現代のものを除く水田土壌は5・6・8a・8b層であるが、その他2a・2b・3a・3b・9層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は1・4・5・7・8・11・13層である。

3．検出遺構と出土遺物

（1）5層上面

5層水田跡（第55図，写真38～42）

〈遺構状況〉　大・小の水路と畦畔から構成されている。調査区の東半部は2・3層によって削平されているため遺存しないが、その他の部分は4層の砂礫層に覆われているため良好に遺存している。

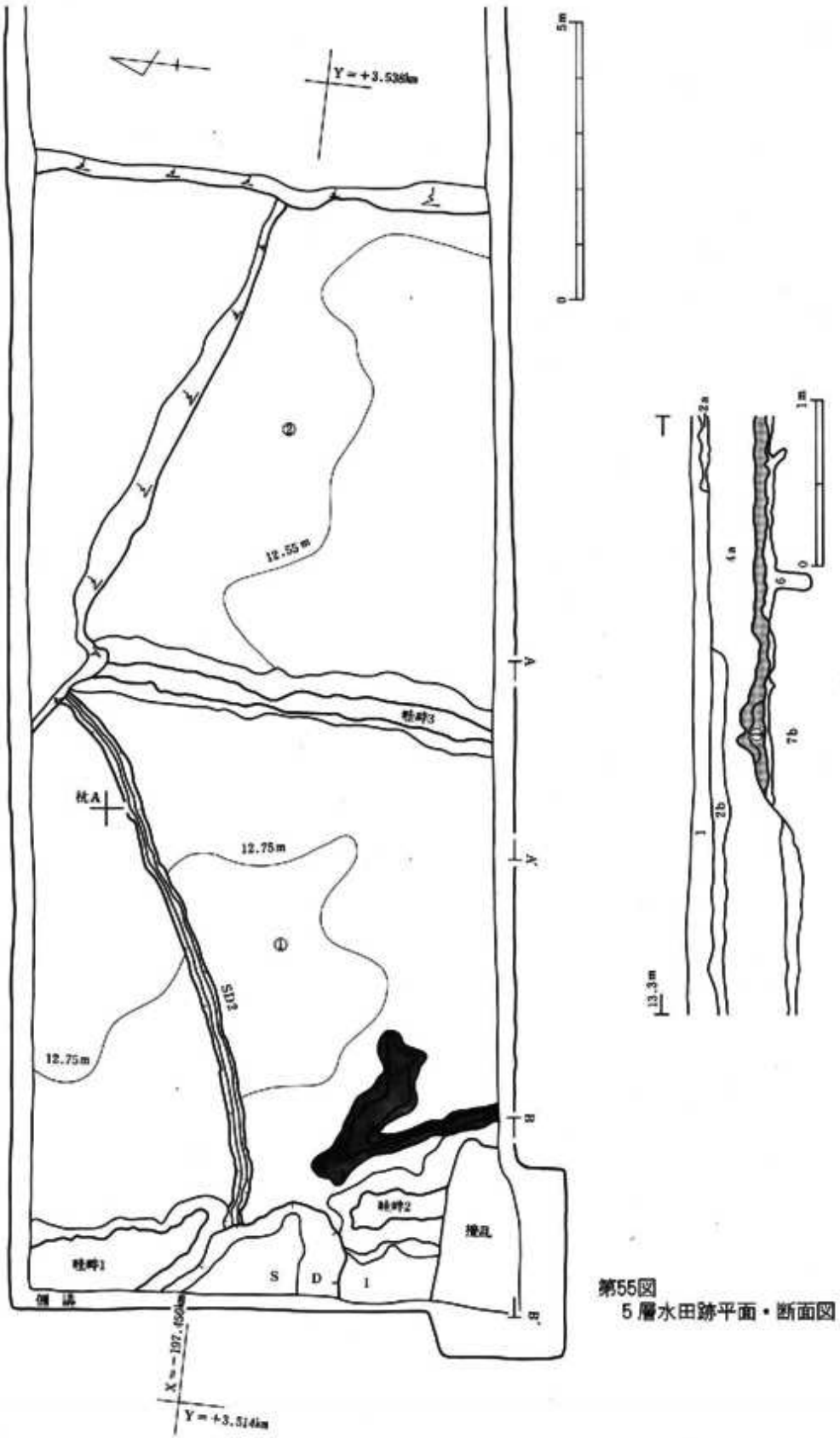
耕作土　耕作土は基本層5層で、下面はあまり乱れず、やや起伏が認められる程度である。

畦畔　南北方向のものを3条検出した。このうち畦畔1・2はSD1の東岸の土手で、耕作土とは異なる数種類の土を盛り上げて作られており、何度か作り直された可能性がある。畦畔3は基本的に耕作土を盛り上げて作られているが、下層にはやや異った土も認められる。耕作土上面からの高さは畦畔1・2が約30cmで、畦畔3は区画①から約10cm、区画②から約30cmである。方向は、畦畔1・2については検出部分が短いのではっきりしないが真北からやや西に振れると思われ、畦畔3はN－3°－Eでやや東に振れる。

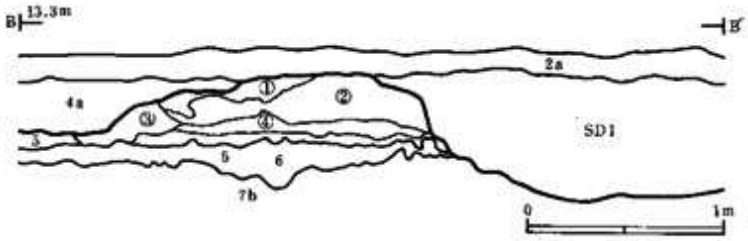
水田区画　①・②の2区画が認められた。①は東西8.5m前後で、SD2によって分断されるかたちとなっているが、後述するようなSD2の性格から一区画として捉えている。その他詳細は不明である。

水路　1号溝跡－SD1－と2号溝跡－SD2－を検出した。

SD1は調査区西端に位置し、やや西に振れた南北方向に延びると推定される。東側には土



第55図
5層水田跡平面・断面図



畦畔2土層註記
① にぶい黄橙色　10YR7/3　粘土質シルト　砂、凝灰岩粒を少量含む
② にぶい黄橙色　10YR4/3　粘土　凝灰岩粒を少量含む
③ 黄褐色　10YR5/6　砂質シルト　シルト質粘土を層状に含む
④ 黄褐色　10YR5/8　砂

第56図　畦畔2・SD1断面図

手の機能をもつ畦畔1・2が取り付く。幅は西側の肩が未検出なため不明であるが、1.8m以上ある。水田面からの深さは約35cmあるが、土手が途切れる箇所の底面はさらに約20cm程抉られて窪んでいる。堆積土は径10cm前後の礫を主とし、土手が途切れる部分から南東方向に向かってあふれていた。なお、水田面を覆っている基本層4層はこのSD1を起源とすると推定される。溝の性格は、規模が大きいことや礫の堆積状況から基幹水路であると推定される。

SD2は畦畔1の南端から北東方向に延びるが、東端部は削平されて不明となっている。上端幅20～30cm、下端幅4～10cm、深さ約5cmで、堆積土は灰白色の粗砂である。底面のレベルはほぼ水平であるが、水田面は東に向かって低くなる状況を考慮すると、この溝の性格はSD1から分岐する給水路と推定される。なおSD2の両側には畦畔は認められず、規模も小規模であることから水田を区画するような恒久的なものではなく、区画①内でごく短期間機能していた水路であると推定される。

水口　畦畔1と2の間の部分にSD2が取り付くのでこの部分が水口（SD1からの取水口）と推定される。

水田面の標高と傾斜　調査区内における区画①の標高は12.71～12.77m、区画②の標高は12.53～12.57mで、区画間の比高差は約20cmである。区画内の傾斜は3cm／10m前後で、層全体の勾配が大体20cm／10mであることを考えると傾斜面を水平に近く整えていることが伺える（第54図）。

水田面の状況　畦畔2の東側の水田面は深さ1～5cmの不整な溝状に窪んでいた（図中アミ点部分）。これは、この付近にはSD1からあふれた礫が帯状の流れを作って堆積していたことから洪水等による水流によって水田面が抉られた結果と推定される。また、区画②の南部を中心として上層（4層）の砂が入り込んだスジ状の痕跡が認められ（写真38）、掘り込んだ結果、径5～10cm、深さ1～5cmの不定型のピットが連続する状況であった。耕作痕の可能性があるが断定は出来ない。

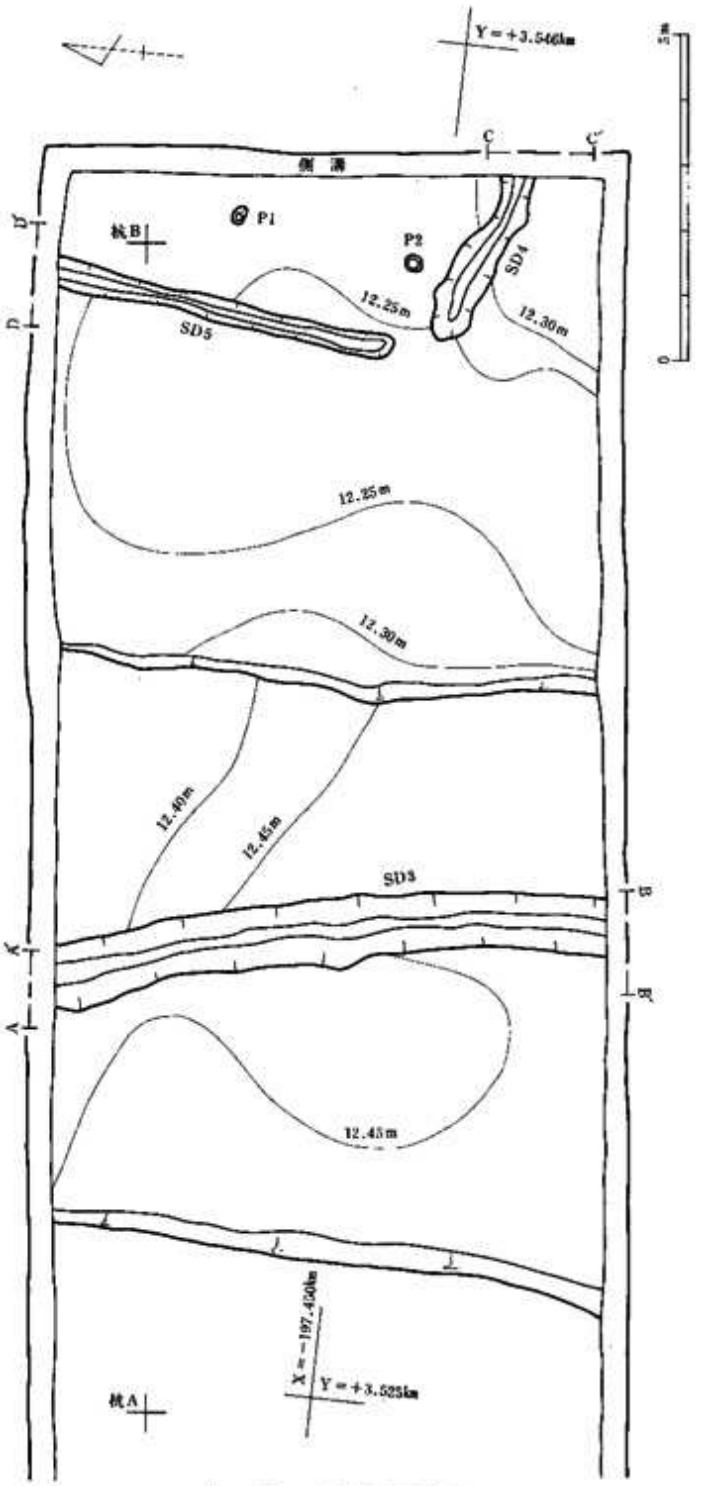
〈出土遺物〉　ＳＤ１堆積土中から２次加工のある剥片が１点出土したが、他から混入したと考えられる。また層中からは赤焼土器片６点、磁器片１点、鉄製品１点が出土した。陶器片は白磁の小皿で、産地・年代共に不明である。赤焼土器片及び鉄製品は全て小片である。遺構に伴う遺物は確定できず、図化できるものもない。

（２）７層上面

（第57・58図，写真43・44）

〈遺構状況〉　７層上面は２ｂ層と５層によって階段状に削平されており、本来の面を留めてはいないが、溝３条－ＳＤ３～５－とピット２基(Ｐ１・Ｐ２)を検出した。

３号溝跡－ＳＤ３－は上端幅80～110cm、下端幅10～30cm、深さ約30cmの比較的大きな溝で、断面は「Ｕ」字あるいは緩やかな「Ｖ」字状を呈する。堆積土は主に基本層６層が流入したものと考えられる。方向はやや湾曲するためはっきりしないが、大体Ｎ－10°－Ｗを示す。なお堆積土から考えて、このＳＤ３は６層下面の溝である可能性がある。性格については、掘り込み面の７層が砂層であるこ



第57図　７層上面平面図

とから水路の可能性は少ないと考えられ、何らかの区画の溝と推定される。

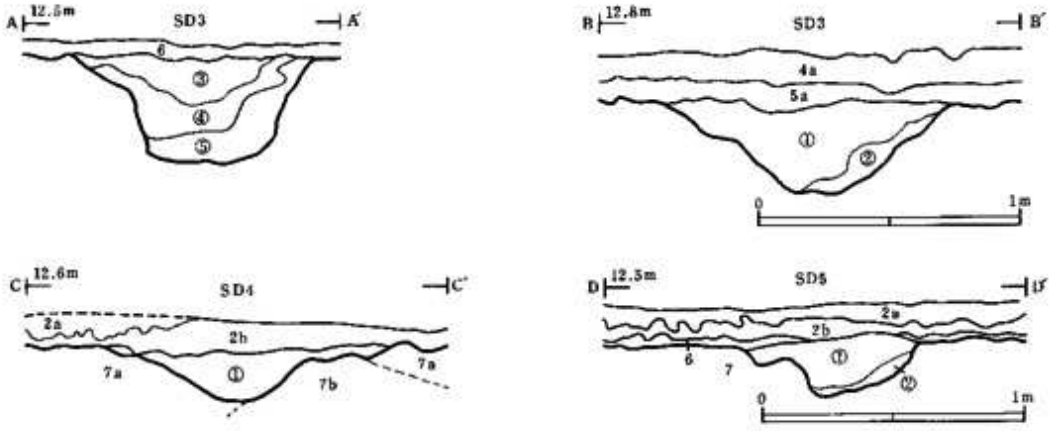
4号溝跡－ＳＤ４－は上端幅40～65cm、下端幅約10cm、深さ約15cmで、断面は緩やかな「U」字状を呈する。堆積土は単層で、方向はＮ－57°－Ｗを示す。

5号溝跡－ＳＤ５－は上端幅20～45cm、下端幅約10cm、深さ約10cmで、断面は緩やかな「U」字状を呈する。堆積土はほぼ単層で、方向はＮ－７°－Ｅを示す。

ピット２基－Ｐ１・Ｐ２－は径20～25cm、深さ約30cmで、ピット間の芯心距離は2.75mである。堆積土は単層で柱痕は認められなかった。

ＳＤ４・５およびＰ１・Ｐ２の配置はＳＤ４・５がピットの位置する区域を他と画するような配置となっており、しかも２基のピットを結ぶラインはＳＤ５と平行している。これらのことからＰ１・Ｐ２は掘立柱建物跡の一部である可能性があり、ＳＤ４・５は建物に伴う区画の溝である可能性が考えられる。なおＳＤ３については前述したように６層下面の溝である可能性があり、これらとは別個の遺構であると思われる。

〈出土遺物〉　Ｐ１から赤焼土器片１点、ＳＤ３から赤焼土器片１点、ＳＤ４から赤焼土器片２点、ＳＤ５から赤焼土器片２点とロクロ土師器片および非ロクロ土師器片等が計４点出土した。図化できるものはない。



ＳＤ３堆積土土層註記

①	黒褐色	10YR2/3	粘土		凝灰岩小ブロックを多量含む
②	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト		凝灰岩小ブロックを若干含む
③	黒褐色	2.5Y3/2	粘土質シルト		砂粒、凝灰岩粒を多量含む
④	黒褐色	2.5Y3/2	粘土質シルト	ブロック	砂ブロックを少量含む
	黒色	2.5Y2/1	粘土	状に混合	砂粒、凝灰岩粒を少量含む
⑤	にぶい黄色	2.5Y6/3	砂		泥炭質粘土を層状に含む

ＳＤ４堆積土土層註記

①	黄灰色	2.5Y4/1	シルト質粘土	砂粒、凝灰岩粒を多量含む

ＳＤ５堆積土土層註記

①	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	砂粒、凝灰岩粒、炭化物粒を少量含む
②	灰黄褐色	10YR5/2	粘土質シルト	

第58図　ＳＤ３～５断面図

（3）8層上面

8層水田跡（第59～62図，表10・11，写真45～55・142）

〈遺構状況〉　規模の異なる畦畔13条（№1～13）と水路（6号溝跡－ＳＤ6－）によって構成される。遺構面は大部分が7ｃ層（粘土と粗砂の薄い互層・自然堆積層）によって覆われていて遺存状態は良好であるが、7ｂ層（粗砂と凝灰岩小ブロックからなる自然堆積層）によって削平された部分もある。

耕作土　耕作土は基本層8ａ・8ｂ層で、黒褐色あるいは黒色の泥炭質粘土である。ただし8ｂ層は調査区南東部のやや高い部分（区画⑧・⑨付近）では砂質シルトに漸次変化する。基本的には8ａ層が耕作土の上層部分となっているが、8ａ層が認められずに8ｂ層のみが認められる部分もある（区画⑤・⑥・⑧・⑨付近）。母材層は直下の黒色泥炭質粘土層（8ｃ層…自然堆積層）と推定されるが、部分的にしか遺存しない。また区画⑤・⑥の北半部には8ａ層と粗砂がブロック状に入り交じった状態で認められた（8ａ－1層・写真55）。層上面や断面の観察では単純に窪みに砂が入り込んだような様子ではなく、攪拌されたような状況を呈している。成因は確定できないが、部分的に粗く耕起されたか、あるいは砂に覆われた軟泥の状態の水田面を人などがあるいた結果とも考えられる。

畦畔　№1～13まで検出した。ただ№13については調査区北側の壁面（畦畔3と4の間）が長さ約6ｍにわたって盛り上がり、積み土が認められたため（第59図）、この部分に畦畔があったものと推定した。遺存状況は良好なものが多いが、一部では7ｃ層の上に畦畔の上部が崩落した状況が認められ（第60図）、また7ｂ層によって削平された可能性のある畦畔もある。

全ての畦畔は基本的には周辺の耕作土を盛り上げて作られているが、耕作土以外の各種の土が積んである場合も多い。また、下部には8ｃ層その他の自然堆積層や9層の盛り上がり（擬似畦畔Ｂ）が認められた（第59・60図）。なお、№1・3・4には小枝などの樹木片や破損した木製品が多量に埋め込まれていた。

幅はばらつきがあるが、№6・10・11・12がやや小さい。水田面からの高さは区画②・⑧・⑨のレベルが高いため、これらに接する畦畔は両側の高さが異なっているが、大体20cm前後のものが多い。ただ№6・10・11・12は1～4cmと極端に低いが、これらの畦畔の周囲は直接7ｂ層が覆っているので、上部を削平されている可能性もある。なお、方向にまとまりは認められない。

水田区画　①～⑨まで9区画認められた。平面形は方形を基調とすると思われるが、③・④のように不整形の区画も認められる。面積が確定できるものはないが、③・④・⑤・⑥・⑧・⑨は区画の一辺の長さが判明しており、それによると⑧・⑨が他と比べて小さい区画となっている。なお、区画の方法については不明である。

水口　№1～5まで5箇所確認できたが、すべて南北畦畔あるいは南北畦畔に接する箇所に設けられていた。また、№4は他の水口とは異なり、水路（ＳＤ6）への排水の機能を有するものである。なお、畦畔6の南端部も途切れているが、水口とは断定できなかった。

6号溝跡－ＳＤ6－畦畔8と12の間を東西に走る。主に7ｂ層の小礫が堆積しており、7ｂ層によって抉られた痕跡（後述する）である可能性があるので、溝跡とするにはやや問題があるが、畦畔8と12の間の部分が他と比べると不自然に細長い区画となっていることから一応溝跡とした。溝の範囲もはっきりしないが、畦畔9の西側の溝状に低い部分は調査区南壁では確認できないことや他にも同様の溝状の窪みが認められること（後述）からこの部分は水路ではなく、畦畔8と12の間のみが溝の範囲であると推定される。なお、畦畔8と12は水路の土手の機能も有すると推定される。溝の幅は畦畔の上端間で2～3m、下端間で1.3～2m、深さは西端部付近は7ｂ層によって抉られているため一段低くなっているが、他は水田面からの深さが3cm程度で非常に浅い。なお、畦畔8に沿って更に低い箇所があるが、この部分は他と同様に7ｂ層によって抉られた可能性もある。

表10　8層水田跡畦畔計測表

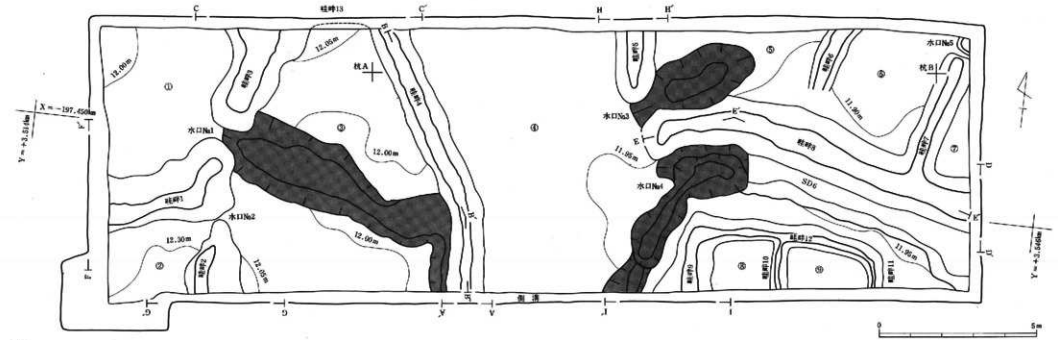
№.	方　向	長　さ(m)	上端幅　(cm)	下端幅　(cm)	高さ(cm)	積み土	備　考
1	N－74°－E	3.9以上	37～ 81 (57)	146～198 (177)	3～38	粘土	
2	N－1°－W	2.3以上	44～ 51 (47)	132～173 (156)	1～29	シルト	
3	N－14°－E	3.4以上	78～130 (96)	165～263 (173)	13～19	粘土	
4	N－5°－W N－30°－W	8.8以上	25～ 56 (42)	102～130 (118)	10～22	粘土	途中で屈曲
5	N－3°－W	2.2以上	24～ 51 (40)	123～130 (127)	13～27	砂質シルト	
6	N－17°－E	2.0以上	32～ 47 (41)	68～ 89 (81)	1～3	砂質シルト	南端部不明瞭
7	N－16°　E	3.6以上	26～ 39 (33)	95～108 (101)	9～15	砂質シルト	
8	N－76°－W	10.9以上	53～ 88 (69)	150～192 (172)	8～30	砂質シルト	
9	N	1.5以上	34～ 54 (43)	118～190 (143)	11～38	砂質シルト	
10	N	1.3以上	11～ 17 (14)	49～ 59 (52)	1～4	砂質シルト	
11	N－6°－W	0.8以上	9～ 11 (10)	51～ 59 (54)	1～6	砂質シルト	
12	N－87°－W	4.7	14～ 25 (20)	60～ 85 (70)	1～10	砂質シルト	

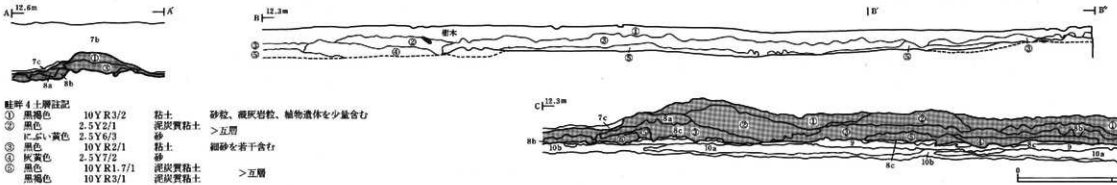
(　)内は複数測定値の平均

表11　8層水田跡水田区画計測表

№.	標　高　(m)	比高差(cm)	傾斜方向	東　辺(m)	西　辺(m)	南　辺(m)	北　辺(m)	推定規模(m)	備　考
①	11.94～12.01 (11.97)	7	北→南	4.3以上	?	2.5以上	?	不　明	南半部は水流で流出？
②	12.29～12.31 (12.30)	2	水　平	2.4以上	?	?	3.3以上	不　明	
③	11.99～12.05 (12.02)	6	西→東	8.8以上	9.1以上	?	?	? ×1.8～6.4	平面形は台形に近い
④	11.95～11.99 (11.96)	4	ほぼ水平	8.2以上	8.7以上	?	?	? ×6.0	
⑤	11.90～11.92 (11.91)	2	西→東	2.6以上	2.3以上	4.8	?	? ×4.8	
⑥	11.87～11.90 (11.88)	3	西→東	4.2以上	3.0以上	3.0	?	? ×3.0	
⑦	11.86～11.87 (11.87)	1	不　明	?	2.9以上	1.2以上	?	不　明	部分的に検出
⑧	12.11～12.12 (12.11)	1	水　平	1.5以上	1.5以上	?	1.9	? ×1.9	
⑨	12.07～12.10 (12.07)	3	水　平	0.8以上	1.3以上	?	2.3	? ×2.3	

(　)内は複数測定値の平均





畦畔4土層註記

①	黒褐色	10Y R3/2	粘土	砂粒、礫灰岩粒、植物遺体を少量含む
②	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	>互層
	にぶい黄色	2.5Y6/3	砂	
③	黒色	10Y R2/1	粘土	細砂を若干含む
④	灰黄色	2.5Y7/2	砂	
⑤	黒色	10Y R1.7/1	泥炭質粘土	>互層
	黒褐色	10Y R3/1	泥炭質粘土	

畦畔13土層註記

①	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	細砂を若干、シルト質粘土をブロック状に含む
②	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	>ブロック状に混合
	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂	
③	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	砂をブロック状に含む、植物遺体を若干含む
④	オリーブ黒色	5Y2/2	泥炭質粘土	部分的に砂を層状にはさむ
⑤	オリーブ黒色	5Y3/1	泥炭質粘土	
⑥	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	>ブロック状に混合
	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂	

畦畔8土層註記

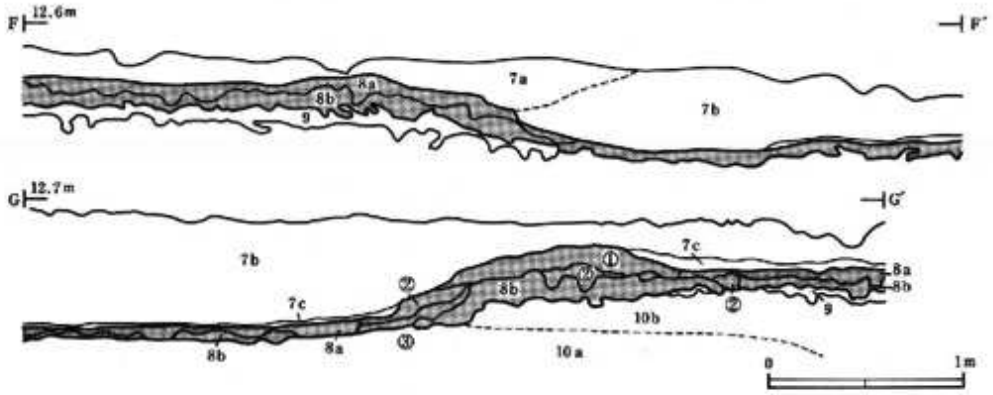
①	黒褐色	10Y R3/2	砂質シルト	細砂、礫灰岩粒を多量含む	①	黒色	10Y R2/1	シルト質粘土	植物遺体を若干含む >互層
②	黒褐色	10Y R2/2	砂質シルト	細砂、礫灰岩粒、植物遺体を少量含む		暗褐色	10Y R3/3	砂質シルト	
③	にぶい黄褐色	10Y R5/3	砂	黒色シルトブロックを少量含む	⑤	黒褐色	10Y R3/2	粘土質シルト	細砂、礫灰岩粒を多量含む

第59図 8層水田跡平面・断面図

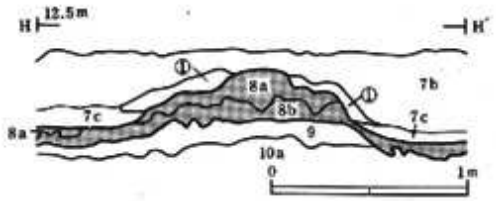
水田面の標高と傾斜　全体を検出できた区画がないため区画内の比高差や各区画間の正確な比高差は不明であるが、調査区内におけるデータからは次のようなことが認められる。

区画内の比高差は約3㎝で、勾配は水平に近いものから最大10㎝／10m前後となっている。全体の地形面の勾配が約13㎝／10mで勾配がきついため、各区画の水田面を階段状に作って区画内を水平に近く整えていることが窺える（第54図）。

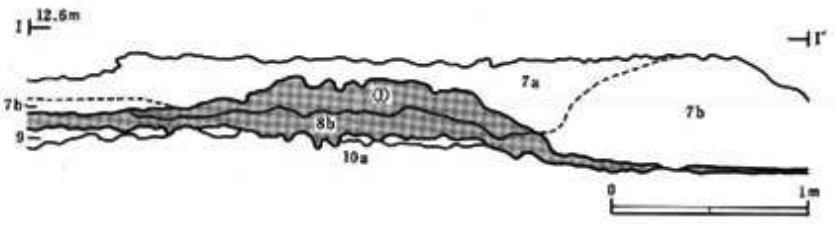
各水田面の平均標高は11.87～12.30mで、区画②が最も高く、⑧・⑨も一段高くなっている。次に高いのが③、つぎが①・④でほぼ同じ高さ、さらに⑤・⑥・⑦の順に低くなる。地形全体の傾斜（南西から北東へ下る）とやや合わない点もあるが、これは②から③へ続く部分と⑧・



畦畔2土層註記
① 暗褐色　10YR3/4　シルト　砂粒、凝灰岩粒を若干含む
② 黒褐色　10YR3/2　粘土　褐色粘土ブロックを少量含む
③ 黒褐色　10YR3/2　粘土　植物遺体を少量含む



畦畔5土層註記
① にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト　細砂　凝灰岩粒を少量含む



畦畔9土層註記
① 褐色　10YR4/4　粘土質シルト　酸化鉄粒、細砂を多量含む

第60図　8層水田跡断面図

⑨の付近に舌状の張り出しがあるためと考えられ、区画はほぼ地形に沿って造られていると考えられる。

水田面の状況　耕作土上面には楕円形または溝状に深さ10～15cm程の窪みが認められ（第59図の網点部分）、７ｂ層の小礫が堆積していた。７ｂ層は洪水などによって短期間に堆積したと思われる砂層および小礫層であるが、主に小礫のみが堆積している箇所がある。この箇所は洪水の際の主な流路と推定されるが、耕作土上面の窪みの場所とほぼ一致して調査区の南半部を蛇行し、ＳＤ６にぬける。また、窪みは水口の下流側が深くなっており、畦畔の手前で屈曲している。これらのことから耕作土上面の窪みは洪水などの水流によって抉られた結果形成されたものであると考えられる。

その他、調査区のほぼ全面に黄褐色粘土が入り込んだ円・楕円形の小さな窪みが多数認められた。窪みは畦畔上にも認められるので（写真48）耕作痕ではないと思われるが、性格は不明である。また、区画④の南東部と北部ではこれらの円形の窪みに混じって砂の入った人の足跡が認められた。南東部の足跡は耕作土上面の窪みの西側に沿って畦畔８の近くまで分布し、北部のものは畦畔５の南端から西方にかけて分布しているが、形が崩れているものが多いため、歩行方向などは不明である。

なお、直接水田面を覆っている７ｃ層の性格からすると、この水田が廃絶した後しばらくは流れのごく緩やかな冠水状態にあったことが窺える。その時間幅については明らかではないが、畦畔が良好に遺存していたことからすればそう長い期間ではないと思われる。そしてその後７ｂ層によって完全に埋没したと考えられる。

〈出土遺物〉　耕作土中からは非ロクロ調整の土師器片が１点出土した。また、畦畔１・３・４中からは小枝等の自然木が多数出土したが、それらに混じって畦畔３の下部からは木製品が３点出土した。

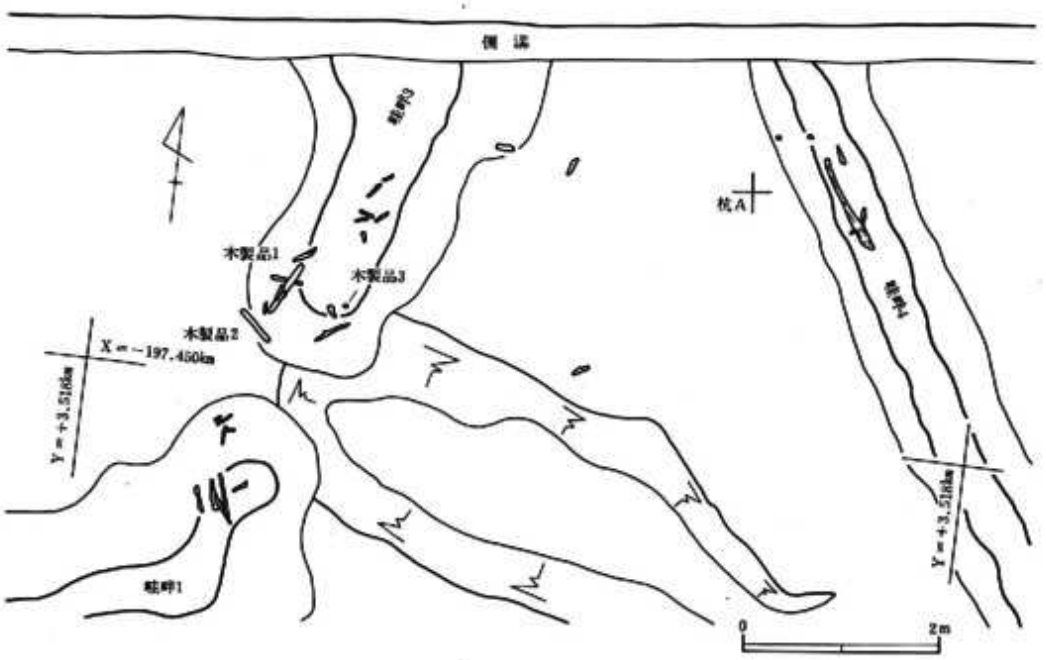
土師器片は小片で磨滅しているため図示できないが壺と推定される。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土に砂粒をほとんど含まない。このような特徴は古墳時代中期の土器に多く認められることからこの土器もそれに近い時期のものである可能性がある。

木製品は大足の縦枠が２点（第62図１・２）と加工痕のある木片が１点（第62図３）である。

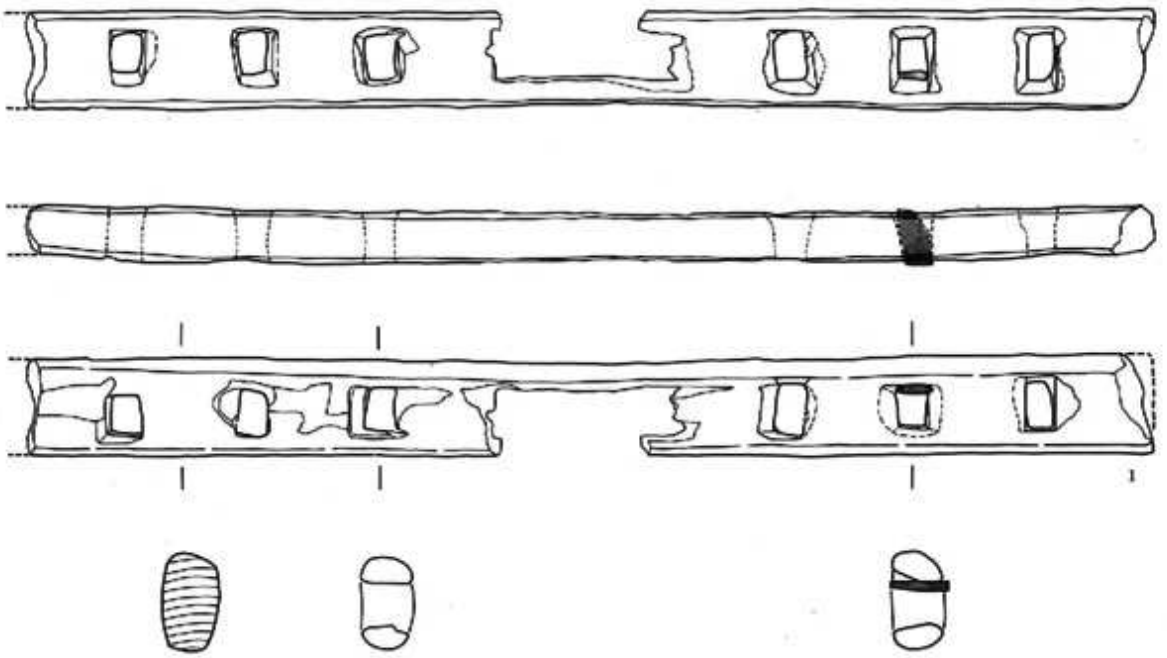
縦枠のうち図の１は一方の端部がわずかに遺存していると観察されるが、断定はできない。図の２は両端とも破損している。この２点は遺存長からすると同一個体ではなく、対になると考えられる。大きさは幅５cm前後、厚さ約３cmで、断面形は大部分がやや丸みを帯びたカマボコ状を呈する。穿孔部は長方形で、大きさはやや不揃いであるが大体1.5×３cm（内法で大体1.5×２cm）、孔の断面からすると両側から穿孔したと考えられる。孔の周囲には浅く抉ったような痕跡があり、明瞭な段が認められる部分もある。孔は図１では６箇所認められるが、中央の

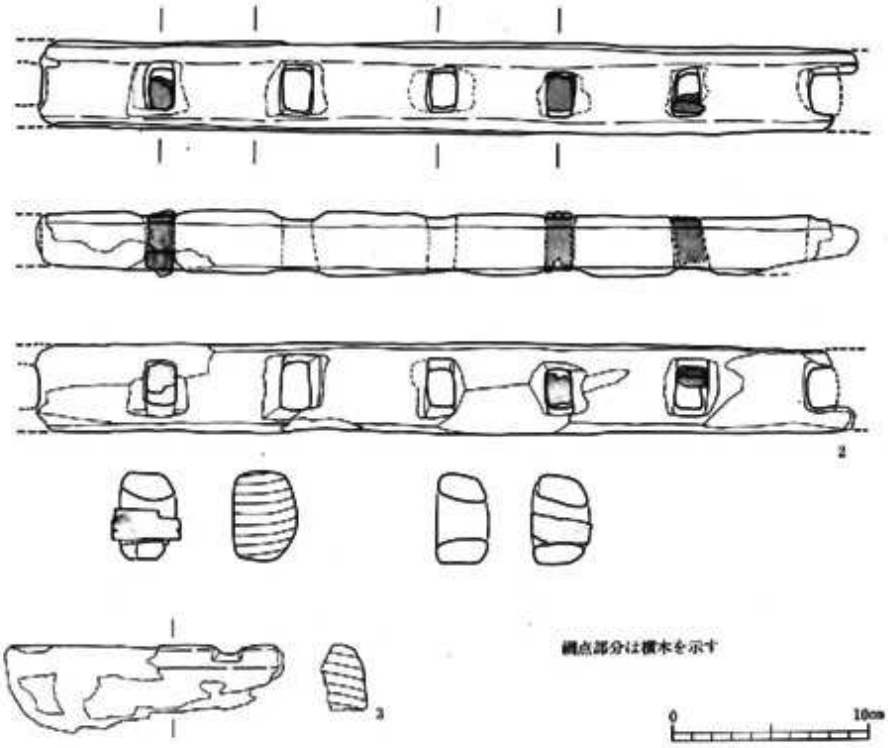
破損部分に2箇所あったとすると8孔以上あったと推定され、間隔は4.7～5.0cmと一定している。また2点とも数カ所の孔には割れた横木（桟木）が遺存していた（図中の網点部分）。なお、使用時における上下・内外の方向は不明である。

第62図3は板状の製品である。加工面が一部しか遺存しないため形状は不明であるが、側面の一箇所には深さ約0.5cmの「コ」字状の抉り込みが入っている。用途は不明であるが、大足の一部である可能性も考えられる。



第61図　8層水田跡遺物出土状況





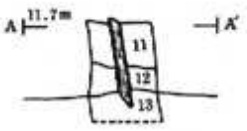
網点部分は樹木を示す

0　10cm

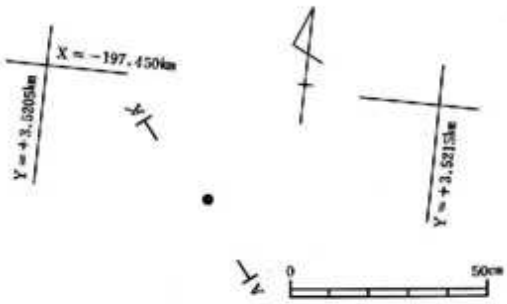
No.	試掘番号	出土遺構、層位	形　別	長　さ	幅	厚　さ	備　考
1	142－1	8層　軸呼中	大足の網枠	57.5cm	4.7~5.1cm	2.2~2.9cm	――
2	142－2	8層　軸呼中	大足の網枠	41.4cm	4.2~4.6cm	2.6~3.3cm	――
3	142－3	8層　軸呼中	板状の素材	14.1cm	4.5cm	2.3cm	「コ」の字状のえぐり込み

第62図　8層水田跡出土遺物

（4）11層上面（第63・64図，写真143）

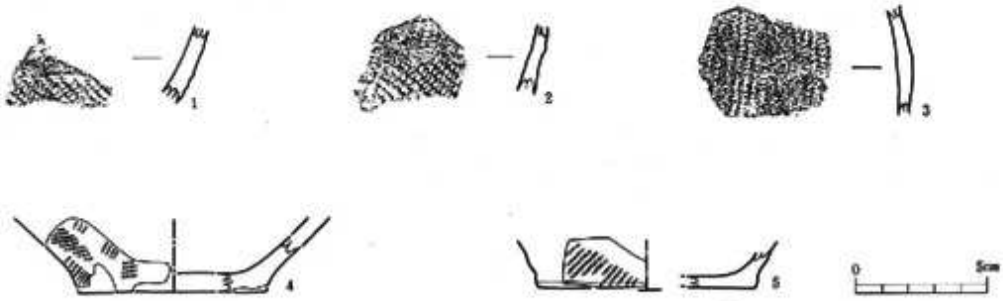


遺構は検出できなかったが、調査区北東部で杭を1本検出した。単独の検出のため、どの層から打ち込まれたものか不明で、遺存状態が悪いため図化はできなかった。また、調査区南部の層中からは弥生土器片が50数点一括して出土した。



第63図　11層上面杭出土状況

〈出土遺物〉　弥生土器片は大部分が磨滅していたため図示できるものは5点のみであった（第64図）。これらは3種類に分類できたので、少なくとも3個体があったと考えられる。1～3はRL縄文が施される体部破片である。そのうち1には無文帯が認められるが、一応同一個体と思われる。4は細かいRL縄文が施されており、体部はやや開き気味に立ち上がる。5は細かいLR縄文が施されており、体部の立ち上がりは4ほどは開かない。



No.	図版番号	出土遺構、層位	種別	器種	遺存度	底径	特徴
1	143－1	11層	弥生土器	――	体部破片	――	外面無文帯＋RL縄文、内面：ナデ
2	143－2	11層	弥生土器	――	体部破片	――	外面RL縄文、内面：ナデ
3	143－3	11層	弥生土器	――	体部破片	――	外面RL縄文、内面磨滅
4	143－4	11層	弥生土器	――	底部破片	(7.2cm)	外面RL縄文、内面ナデ（指オサエ？）
5	143－5	11層	弥生土器	――	底部破片	8.4cm	外面LR縄文、内面ナデ

第64図　11層出土遺物

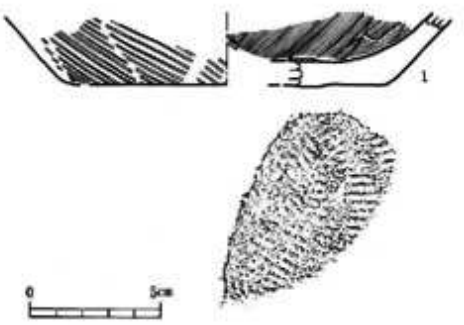
（5）13層上面（写真56）

遺構は検出できなかったが、13層上面で土器片が約2×3mの範囲に集中して出土した。土器の色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。破片数は150数点あるが磨滅が著しく、数点の土器にわずかにLR縄文が認められる程度であるので図示はできなかった。胎土等の特徴から縄文土器であると推定されるが詳しい時期については確定できない。

（6）その他の出土遺物（第65図，写真142）

1層中からは土師器・赤焼土器・須恵器・陶器・磁器・鉄製品が出土した。土師器・赤焼土器・須恵器はすべて細片で、下層から巻き上げられたものと推定される。陶器は7点あるが、そのうち6点は堤・相馬産の幕末以降のもので、他の1点は渥美産の壺（13世紀中頃以前）である。磁器は肥前産の筒茶碗と在地産の徳利で、それぞれ江戸、幕末以降の所産である。鉄製品3点のうち1点は蹄鉄で近代以降のもの、他の2点は明らかに現代の製品と考えられる。これらのうち図示できるものはない。

4層中からは赤焼土器2点と須恵器1点の他が出土した。須恵器（第65図）は甕の底部破片である。赤焼土器は細片のため図示できなかった。また、4層上面で確認した土坑内から焼夷弾または通常爆弾の破片と思われる鉄片が、出土している。



7層からは土師器14点と須恵器1点、杭材1点が出土した。土師器のうち3点は非ロクロ調整で、その他は磨滅しているため調整技法は不明である。須恵器は甕の底部破片である。これらはいずれも細片のため図示はできなかった。なお、杭材は横になって出土したので7層の堆積の際に他から混入したものと推定される。

No.	図版番号	出土遺構、層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	142－4	4層	須恵器	甕？	底部破片	———	12.2cm	(3.8cm)	外面平行タタキ、外底面平行タタキ（磨滅）、内面指ナデ、付着物あり

第65図　その他の出土遺物

4．下層の調査（写真57～64）

13層以下は調査区を約5×5.5mに縮小して調査したが、21層から25層（標高約9.6～10.3m）において樹木、毬果などを含む腐植質粘土層(注1)を確認した。

出土した遺物は結果的に自然遺物のみであったが、南東約250m離れた第30次調査で確認された後期旧石器時代の生活跡・樹木群と関連する可能性があるため平面的な調査を実施した。

調査に際しては肉眼で確認できた樹木、毬果は平面図を作成して取り上げたが、その他に層中に微細な種子・昆虫などが含まれている可能性があるため、水洗用のサンプルを採取している。

調査結果については、現在のところサンプル土の水洗や各種の自然科学的分析が終了していないため以下に概要を述べる程度に留めておきたい。

縄文時代と推定される13層の下層には粘土・シルト・砂が約1.3m堆積し、その下の非常に硬いシルト層（19層）と粘性の非常に強い粘土（20層）とが、腐植質粘土層を覆っている。

腐植質粘土層は21・23・25a・25b層の計4層に大別したが、これらは単層ではなく、それぞれが腐植質粘土層と粘土層との薄い互層になっている。各層は波うつような凹凸があり、上下の層と入り組んだ状況で接しているため明確に分層できない部分もある。また、層厚も一定せず、部分的に途切れる場合もある（第53図・写真61～64）。

樹木は21・23・25a・25b層上面で検出したが、すべてが層上面に乗っているわけではなくほとんどが層中の細かい互層にまたがっている。したがって同一時に存在した樹木を厳密に限定することは困難であると思われる。毬果は層中に散在する状況を示し、特に集中する面は認められなかった。また、樹木、毬果は21・23・25a・25b層だけでなく、量は少ないが間の22・24層中にも含まれている。なお、各層の状況は以下のとおりである。

21層（写真57）腐植質粘土層は主に調査区北半部に認められ、枝のような小さな樹木と針葉樹らしい木の葉が含まれている。

23層（写真58）腐植質粘土層は非常に希薄である。調査区南西部で細い根株を一箇所確認している。また、幅20～30cm、長さ4.5m以上の樹木（内部が腐植して樹皮のみが遺存）を検出しているが、この樹木は断面観察によると22層下部に含まれる可能性が高い。

25a層（写真59）腐植質粘土層はやや希薄であるが、調査区南東部で細い根株を一箇所確認した他数カ所で樹根や幹らしい部分が認められた。

25b層（写真60）腐植質粘土層はやや厚く、断面の色調も他よりやや暗い。調査区北西部ではほとんど樹皮しか遺存していなかったものの、多数の樹木が重なった状況で認められた。また、針葉樹らしい木の葉も多数含まれている。

なお、下層の26層は約60cm掘り下げたが腐植質粘土層は認められなかった。

5．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構は5・6・8層水田跡とそれらに伴うSD1・2・6、および7層上面の遺構群（SD3～5、P1・P2）である。このうち6層は耕作土のみの検出であるが近接する第36次調査区との層位の対応関係から水田跡と認定した。またこの他2a・2b・3a・3b・9層も水田土壌の可能性がある。

2．当調査区付近には第36・42・62・66次調査区および埋蔵文化財発掘調査研究所による1985年の調査区（鹿野三丁目219地区）がある。この付近は富沢遺跡の中でも扇状地性微高地の縁辺に当たり、土砂の供給が盛んであるために層序が複雑である。このために層位の細かな対応は困難であるが、近接した第36次調査区と埋蔵文化財発掘調査研究所の調査区のみを対象として大まかな対応を試みた（表12）。この結果によると、当調査区の4～8層に対応す

る層の堆積状況は、上層から順にみると砂層（4層）、粘土層（5・6層）、灰白色火山灰（当調査区では未確認）、粘土層（当調査区では未確認）、砂層（7層）、泥炭質粘土層（8層）の順に認められる。

なお、埋蔵文化財発掘調査研究所の報告では検出した畦畔状の遺構を水田跡とは認定していないが、これまでの調査結果からすると明らかに水田跡と認められるので、水田跡として対応させている。

3．遺構の時期は出土遺物が少ないため確定しがたいが、7層上面の遺構出土の土器が赤焼土器とロクロ土師器を主とすることと7層中から出土した土師器のうち調整技法が判明したものはすべて非ロクロ調整であること、さらに前述した他調査区との層の対応関係も含めて考慮すると以下のように推定される。

5層　　中世以降　　11層　弥生時代

6層　　中世　　13層　縄文時代

7層上面　平安時代（灰白色火山灰降下以前）

8層　　古墳時代（中期の可能性があるが断定できない）

4．21～25層の時期については旧石器時代の可能性があるが、未整理であり層の対応ができないことから現段階では一応不明としておきたい。

（註1）　第2節　第58次調査を参照

表12　富沢遺跡第63・36次・埋蔵文化財発掘調査研究所鹿野三丁目219地区　基本層序対応表

第63次		第36次		埋文研究所		主たる色調	主たる土質	備考
層位	検出遺構	層位	検出遺構	層位	検出遺構			
4a b		4		4		にぶい黄褐色	砂 一部礫層	砂の供給源は63次ＳＤ１と埋文研究所調査区１号溝跡と推定される
5	畦畔	5 6	耕作土？	5a b	畦畔	黒褐色	シルト質粘土	
6	耕作土	7	畦畔	6		黒　色	粘　土	36次調査区で中世陶器片が出土
		8	耕作土？	7a b c		褐灰色	粘　土	埋文研究所調査区では７ａｂｃ層共に灰白色火山灰を含むが、特に７ｃ層にブロック状に含む
		9	耕作土？			オリーブ黒色	粘　土	灰白色火山灰降下以前の上壌と推定
7a						灰　色	砂・砂質シルトの互層	63次調査区内に部分的に分布
7b	上面で溝・Pit	10a		8		にぶい黄褐色	砂	36次調査区の層上面で検出した灰白色火山灰は本来36次調査区の８層下面に含まれる可能性がある
7c		10b c d		9 10 11	9層上面で溝	褐灰色	粘土・砂の互層	
8a b	畦畔	11	耕作土？	12	畦畔	黒褐色	泥炭質粘土	埋文研究所調査区では耕作土中からハケメ調整と思われる土師器・甕が出土
9	耕作土？	12 13		13a b		灰　色	泥炭質粘土	

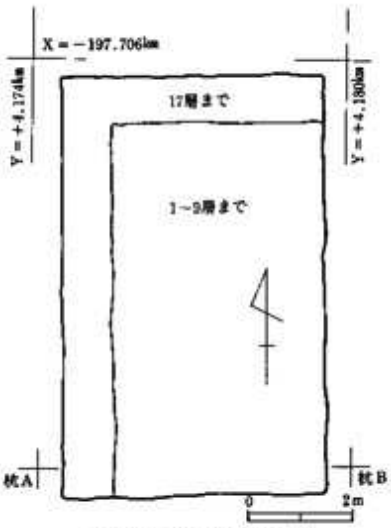
第8節　富沢遺跡第64次調査

1．調査方法

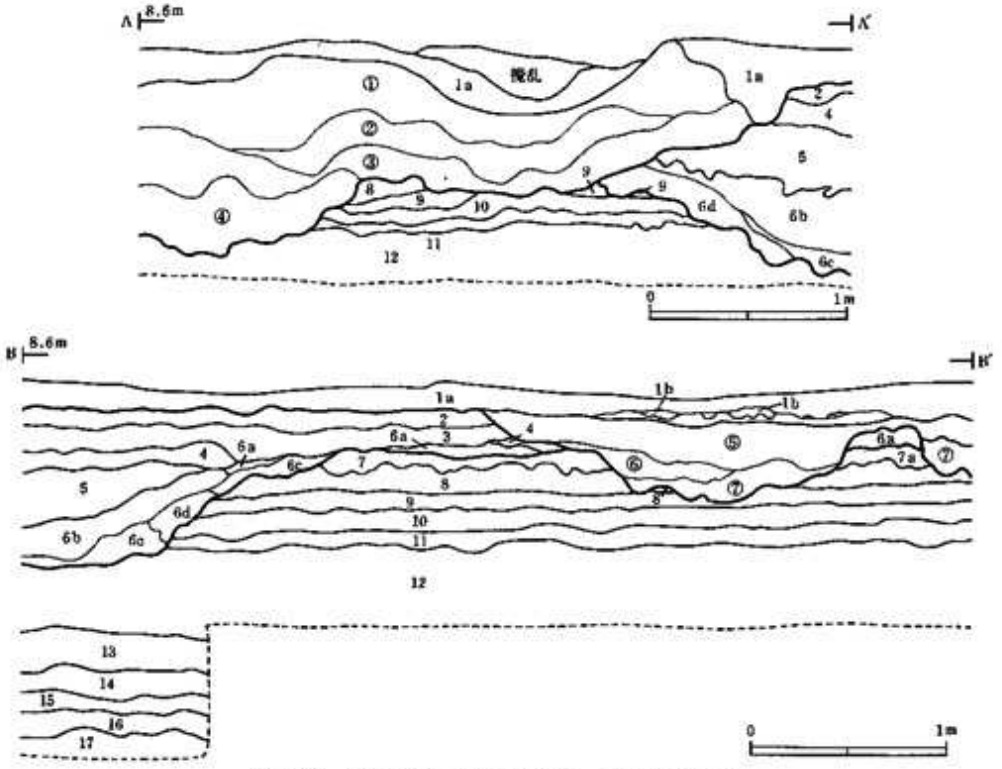
調査区設定面積は8×5m（約40㎡）である。調査は厚さ約1.5mの盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機により除去し、以下は人力により掘り下げていった。また調査区周囲に土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は9層までは調査区全体の掘込みを行い、9層以下は北壁及び西壁ぎわに、幅約1mの深掘区を設けて掘り下げていった。

遺構の計測は杭A・Bを基準として実施した。基準杭は平面直角座標系Xを使用している。

杭A：X＝－197.532481km　Y＝3.477218km　杭A：X＝－197.532948km　Y＝3.482193km



第66図　調査区設定図



第67図　基本層序（上段・西壁，下段・北壁）

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1a	緑黒色	5G2/1	シルト	10cm～40cm	有（多量）	――	水田耕作（現代）	――
1b	黒色	N1.5/	粘土	2cm～5cm	――	白色粘土ブロック	水田耕作（現代）	部分的分布
1c	灰色	5Y4/1	粘土質シルト	4cm～12cm	――	――	水田耕作（現代）	部分的分布
2	灰色	10Y4/1	粘土	2cm～14cm	有（多量）	――	水田耕作？	下面起伏
3	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	2cm～18cm	有（少量）	下層ブロック・マンガン粒	水田耕作	下面起伏・不連続な分布
4	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	2cm～20cm	有（多量）	――	水田耕作	不連続な分布
5	灰色	5Y4/1	粘土	4cm～20cm	上面に有（多量）	白色粘土ブロック	――	下面一部起伏・SD3内分布
6a	オリーブ褐色	2.5Y4/3	粘土	2cm～8cm	有	――	水田耕作？	下面起伏・不連続な分布
6b	黒色 黄灰色	10YR1.7/1 2.5Y4/1	粘土質シルト 粘土	4cm～22cm	――	植物遺体多量	自然堆積	互層・SD3内分布
6c	黒褐色	10YR3/1	粘土	2cm～20cm	――	――	自然堆積	互層・SD3内分布
6d	褐灰色	10YR5/1	粘土	10cm～20cm	――	――	――	7層崩落土（7層単位）
7	褐灰色	10YR5/1	粘土	6cm～16cm	有	――	水田耕作？	下面起伏
8	黄灰色 褐灰色	2.5Y6/1 10YR4/1	粘土 粘土	10cm～16cm	上面に有		自然堆積	互層
9	灰色	10Y6/1	粘土	2cm～18cm		――	自然堆積	グライ化
10	灰色 黒色	5Y5/1 10YR1.7/1	粘土 粘土	6cm～14cm	――	――	自然堆積	互層
11	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	4cm～14cm	――	――	自然堆積	――
12	黒色 黄灰色	10YR1.7/1 2.5Y4/1	粘土 粘土	2cm～44cm	――	植物遺体多量 植物遺体多量	自然堆積	互層
13	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	16cm～20cm	――	――	自然堆積	――
14	灰色	7.5Y4/1	粘土	10cm～15cm	――	植物遺体少量	自然堆積	――
15	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	5cm～11cm	――	――	自然堆積	
16	灰色	7.5Y4/1	粘土	8cm～12cm	――	植物遺体少量	自然堆積	
17	黒褐色	10YR3/1	粘土	16cm以上	――	植物遺体少量	自然堆積	

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別17層、細別22層が確認された。各層の土質は現代の耕作土である1層がシルトで、2層以下17層にかけてはかなり粘性の強い粘土となる。11層は泥炭質の植物遺体を含む層で、グライ化は9層についてのみ顕著に認められた。現代のものを除く水田土壌は、3・4・5層である。また、2・6a・7層は下面の起伏状況やイネのプラント・オパール分析結果などより、水田土壌の可能性が高い。各層の傾きとしては、2～12層までは南西方向の緩やかな下り傾斜を示すが、調査区南半ではややきつくなる。遺物出土層は1・4・7層である。なお、当調査区の基本層序は隣接調査区の基本層序と対応関係が認められる。

3．検出遺構と出土遺物

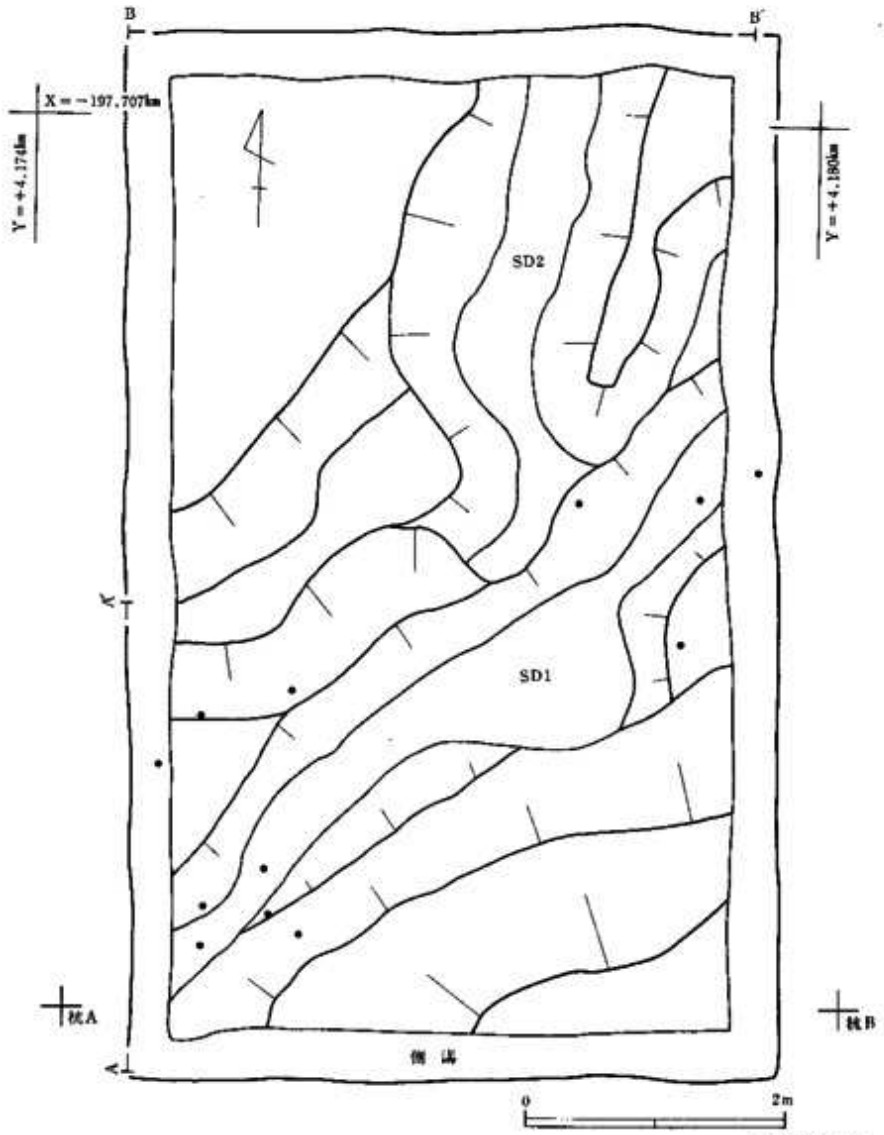
（1）2層上面

1号・2号水路跡－SD1・SD2－（第67～69図，写真65・144）

SD1は調査区を北東から南西に向かって斜めに縦断する水路跡で、方向はN－45°－E前後である。SD2はSD1の北岸へ取付く小水路跡で、ほぼ北方向より南下し、SD1に合流している。SD1の上端幅は450cm、下端幅は上端幅に比べて狭く50cm程度で、深さは100cm内のものである。壁面は緩やかで、幾つかの稜線及び段差がみられる。SD2の上端幅は120～170cm、下端幅は50cm前後、深さは50cmで、SD1に比べて規模、深さとも小さい。SD2とSD

1の合流地点には30cm程の段差がみられる。

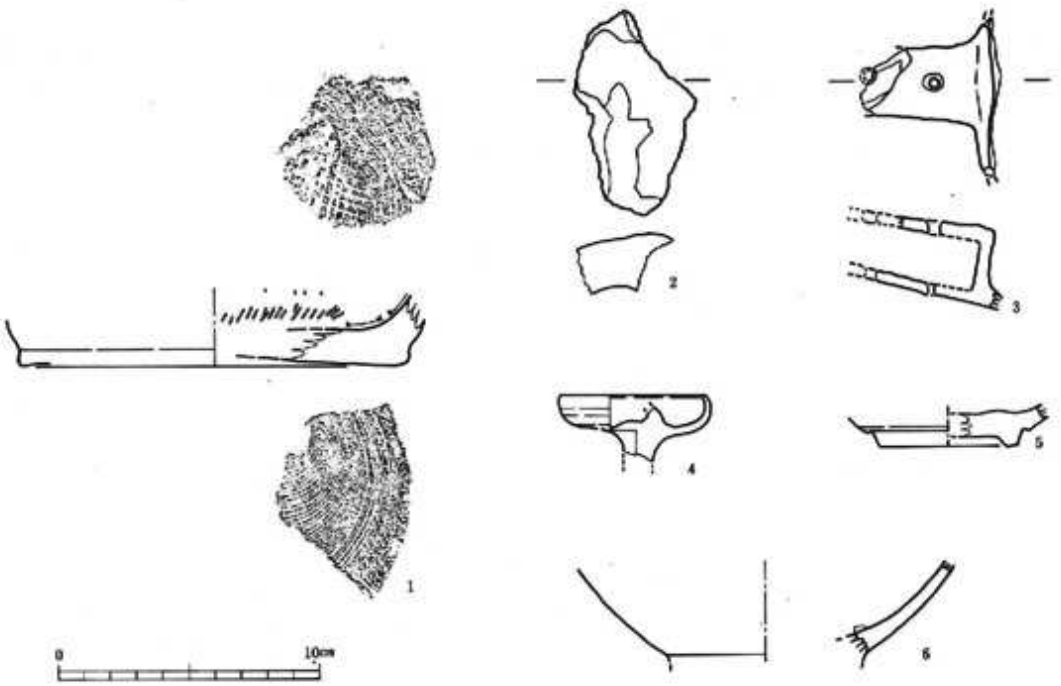
堆積土は検出段階においてプランの違いが判別できなかった為に、ＳＤ１内の堆積土には①～④層、ＳＤ２には⑤～⑦層の共通層位を付した。これら２つの水路跡についてはその掘込み時期においては同時期のものかは不明であるが、機能停止時期については、同質土により埋ま



ＳＤ１・２堆積土土層註記

①	灰色	10Y4/1	粘土質シルト	細砂を含む
②	灰色	10Y4/1	粘土質シルト	砂を多量含む
③	灰色	7.5Y4/1	粘土	炭化物粒を含む
④	灰色	7.5Y4/1	粘土	炭化物粒を多量含む
⑤	灰色	10Y4/1	粘土	酸化鉄を含む
⑥	灰色	7.5Y4/1	粘土	酸化鉄を含む
⑦	灰色	5Y4/1	粘土	酸化鉄を含む

第68図　ＳＤ１・２平面図



No.	図版番号	出土遺構、層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	144－1	ＳＤ１　①層	陶器	擂鉢	底部破片	――	14.8cm	(2.7cm)	内外面露胎（上部に鉄釉？）、17C？
3	144－4	ＳＤ１　③層	陶器	焙烙	把手部分破片	――	――	――	瓶窯、無釉、把手部に二箇所孔あり、19C？
4	144－5	ＳＤ１　③層	陶器	ひょうそく	受皿部破片	5.6cm	――	(2.6cm)	相馬大堀、内外面飴釉、芯受け端部欠損、脚部露胎、19C
5	144－7	ＳＤ１　③層	陶器	碗	底部破片	5.2cm	――	(1.6cm)	瀬戸美濃、鉄釉天目茶碗？、削り出し高台（露胎）、17C？
6	144－6	ＳＤ１　③層	陶器	碗	体部破片	――	――	(3.9cm)	唐津、外面長石釉、内面白化粧土→透明釉、内面にはあと、18C以降

No.	図版番号	出土遺構、層位	種別	器種	長さ	外径	内径	特徴
2	144－3	ＳＤ１　①層	土製品	羽口	――	(6.8cm)	(3.2cm)	――

第69図　ＳＤ１・２出土遺物

っていることから、同時期である可能性が強い。

水路内より12本の杭が打ち込まれた状態のまま検出された。これらは主にＳＤ１内で、調査区東壁及び西壁近くにみられ、ＳＤ１との関係では底面から法面中ほどまでの範囲に集中し、ＳＤ１の上端近くには見られない。検出面としてはＳＤ１の堆積土である①～③層とまちまちで、杭先端部についてもＳＤ１堆積土中に収まるものもあれば、基本層まで入り込むなど様々であった。これらの杭は特に列をなすものや、附随する施設などが見られないが、一部についてはＳＤ１底面の両端に位置し、内側方向に傾くものなどがあることから、ＳＤ１に伴う施設であることは確かである。中にはＳＤ１内の堆積がかなり進んだ状況での打ち込みもあるが、杭の性格上、各々の杭の時期や関連性について詳細は不明である。

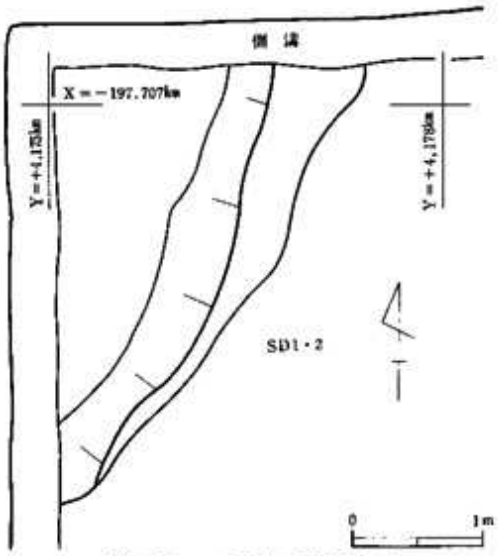
〈出土遺物〉　ＳＤ１・２より出土した遺物は、土師器３点、須恵器１点、土師質土器２点、瓦質土器２点、陶器17点、磁器７点、土製品１点、瓦５点、石器１点、石製品１点、杭16本、

木製品5点と、様々な種別、時期のものがある。量的には幕末から明治期にかけての陶器が最も多く、中には第69図1・5のように17C頃とも考えられる陶器も含まれているが、遺物の時期が必ずしも水路内層位の新旧と対応するものではない。

（2）4層上面

4層水田跡（第70図）

〈遺構状況〉　SD1・2の攪乱等によりごく部分的にしか検出されなかった。耕作土の土質は粘土で、厚い部分で20cmを測る。下面は起伏が顕著で、鉄分の集積層は認められない。調査区北西部において北西側の低い段差を検出した。方向はN－30°－E、法面幅30～50cm、段差上面から下面までの高低差は11～19cmである。段差の東側はSD1・2により失われており、かつては畦畔状を呈していた可能性も考えられるものである。この段差は4層の段差或いは畦畔の可能性が考えられると同時に3層の耕作による擬似畦畔の可能性も十分に考えられる。



第70図　4層水田跡平面図

〈出土遺物〉　段差部分の耕作土中より杭が1本出土したが、打ち込まれていたものではない。

（3）7層上面

3号溝跡－SD3－（第67・71図，写真65・66）

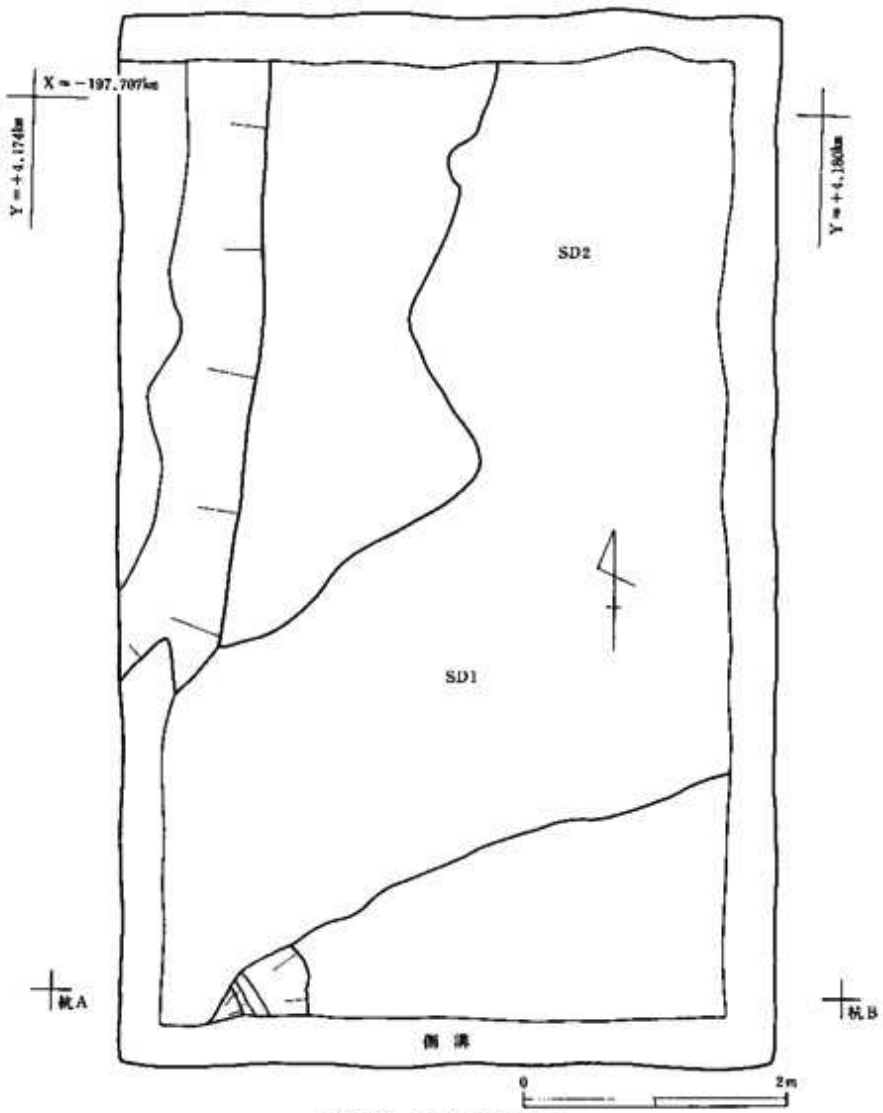
〈遺構状況〉　溝跡は調査区西壁ぎわに検出されたが、西側肩は調査区外で、全体は検出できなかった。溝跡は南半をSD1により削平されており、SD1を境に北側と南側とに分かれる。北側は方向がほぼ南北を示し、上端幅110cm、下端幅50cm以上で、深さは60cm前後である。SD1と接する部分においてはほぼ南北方向だったものがやや西方向にカーブする。底面レベルは北高南低である。南側の溝跡は方向がやや東を向いており、法面のみの検出となった。上端幅90cm以上であるが、下端幅、深さについては不明である。この2つの溝跡はその方向性から別のものの可能性もあるが、一括してSD3としている。堆積土は基本層6b～d層で、この内6c層は7層崩落土と考えられる。また、6b・c層は溝跡内のみに互層の自然層として堆積している層である。溝跡の両脇に畦畔状の高まりを伴ったかどうかは不明である。この溝跡は、6c・b層の堆積により一旦機能を停止するが、溝跡上に窪は残り、6a層段階でもこれを利用し、再び溝跡として機能させたことが断面観察より窺える。5層段階になると窪は埋没

して溝跡としての機能は消失し、溝跡上は水田化したものと考えられる。

〈出土遺物〉　耕作土中より、図化不能な土師器片が1点出土したが、細片の上、内外面とも摩滅しており製作技法・器種の判別はできなかった。

（4）その他の出土遺物

基本層1層から砥石が1点出土した。



第71図　ＳＤ３平面図

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構としては、3層・4層・5層の3期の水田跡とSD1・2・3が検出された。この内、3期の水田跡とも畦畔が検出されなかったが、層相及び層の対応が可能であった隣接調査区で、畦畔が検出されていることより水田跡と認定した（第4章第2節1）。また、2・6a・7層もその層相及びイネのプラント・オパール分析結果より水田土壌の可能性が高い。

2．2層上面検出の水路跡であるSD1・2は、当地域の土地区画整理前まで機能し、南流して笊川に合流していたものである。また文政5年の「名取郡北方根岸村・平岡村入合絵図」において本水路跡と思われるものが描かれていることから、本水路跡は文政年間以前より現在に至るまで機能し続けたものと考えられるが、堆積土の状況やその出土遺物、また検出杭の状況から溝の時期的変遷を把握することはできなかった。

3．7層上面では幅1m以上、深さ60cm前後の比較的立派な溝跡（SD3）を伴っている。7層が水田土壌であった場合、この溝跡は水路として機能していた可能性が強く（6a層も同様）、自然地形が下がる部分を掘削し造られたものと考えられる。また、この溝跡は規模を小さくするものの、6a層段階でも溝として利用しており、5層段階になって消滅することが認められた。

4．各水田跡の所属年代であるが、出土遺物が皆無あるいは乏しいことより、隣接調査区との層位の対応関係によって、以下のような所属年代が想定される。

3層水田跡－近世　4層水田跡－平安時代（灰白色火山灰降下前）？

5層水田跡－古墳時代以降　平安時代以前

第9節　富沢遺跡第65次調査

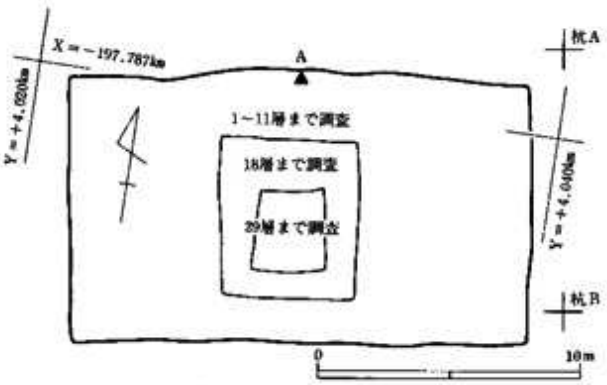
1．調査方法

調査区の設定面積は約204㎡である。調査は、盛り土および直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行なった。なお、調査区内には土層観察および排水用の測溝を設けた。11層上面までは調査区全面の精査を実施した。11層以下は調査区を縮小した。（18層上面までは5×6m、18層以下は3×3m）。遺構の測量は杭A・Bを基準とした。また、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内における正確な位置を把握している（杭A：X＝−197.78359km、Y＝+4.03968km　杭B：X＝−197.79345km、Y＝+4.04132km）。

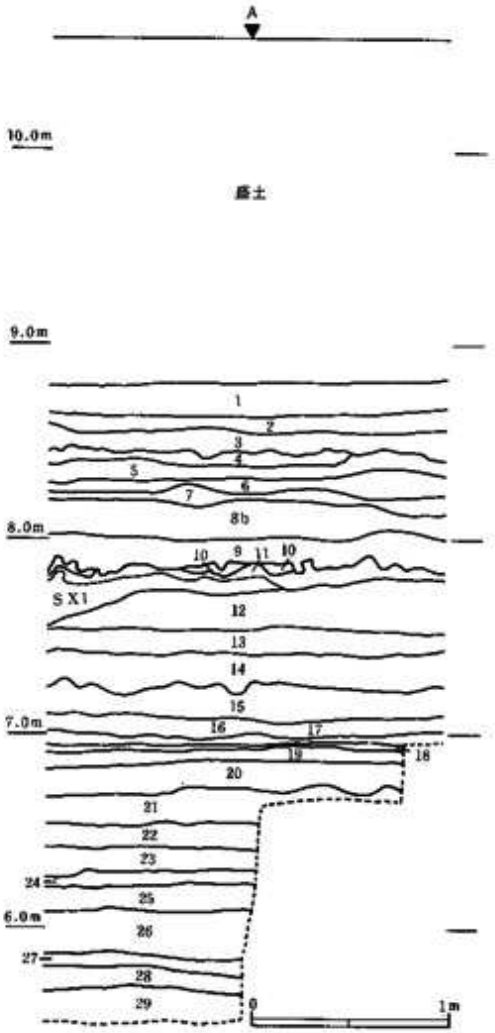
2．基本層序

今回の調査では盛り土下に大別で29層、細別では30層が確認された。土質は1層から最下層の29層まで、粘土が主体をなしている。10層（弥生時代中期相当）以下では、泥炭質の粘土層がみとめられるが、一様に泥炭の含有量は少ない。また明瞭な泥炭層は存在しない。

富沢遺跡の南東部では、一般的に粘性の強い粘土層が分布する傾向がうかがわれるが、本調査区で観察される粘土層にも強い粘性がみられ、とりわけ4～7層で顕著である。2～8a層には酸化鉄の斑紋



第72図　調査区設定図



第73図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	灰黄褐色	10YR5/2	シルト質粘土	15cm前後	有	――	水田耕作(現代)	――
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト質粘土	6cm～19cm	有	マンガン粒	水田耕作？	
3	黒褐色	10YR3/2	粘土	10cm～30cm	有	マンガン粒・風化凝灰岩粒少量	水田耕作？	下面起伏
4	暗灰黄色	2.5Y5/2	粘土	4cm～12cm	有（多量）	マンガン粒少量・灰白色火山灰粒少量	水田耕作？	下面若干起伏・不連続な分布
5	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	6cm～18cm	有（多量）	マンガン粒・層上部に灰白色火山灰ブロック少量	水田耕作？	下面若干起伏・不連続な分布・粘性強
6	黄灰色	2.5Y5/1	粘土	6cm～14cm	有（多量）	マンガン粒	水田耕作	下面若干起伏・不連続な分布・マンガン粒の集積層・粘性強
7	褐灰色	10YR5/1	粘土	4cm～22cm	有（多量）	――	水田耕作	下面若干起伏・不連続な分布・粘性強
8 a	黒褐色	10YR3/1	粘土	6cm～16cm	―	8 b層の小ブロック少量	自然堆積？	互層・下面起伏・不連続な分布・粘性強
8 b	黒褐色 黒色	2.5Y3/1 7.5Y2/1	粘土 泥炭	4cm～26cm	――	――	自然堆積	互層・不連続な分布・粘性強
9	暗灰黄色	2.5Y5/2	粘土	8cm～20cm		植物遺体少量	水田耕作	下面著しく起伏・粘性強
10	黒褐色	2.5Y3/1	泥炭質粘土	4cm～18cm	――	―	水田耕作？	下面著しく起伏・部分的で不連続な分布
11	黒色 暗オリーブ灰色	2.5Y2/1 2.5GY4/1	泥炭 粘土	6cm～22cm	――	――	自然堆積	不連続な分布
12	オリーブ黒色 黒色	5Y3/1 5Y2/1	粘土 泥炭質粘土	8cm～22cm	――	――	自然堆積	― ―
13	オリーブ黒色	2.5Y3/1	泥炭質粘土	6cm～14cm	――	――	自然堆積	
14	黒色	7.5Y2/1	泥炭質粘土	4cm～20cm		――	自然堆積	――
15	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土	6cm～22cm	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
16	黒色	5Y2/1	泥炭質粘土	6cm～18cm	――	――	自然堆積	――
17	オリーブ灰色	2.5GY5/1	粘土	2cm～12cm	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
18	オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土	6cm～16cm	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
19	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土	4cm～16cm	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
20	黒色	5Y2/1	粘土	12cm～16cm	――	植物遺体少量	自然堆積	粘性強
21	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土	14cm前後	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
22	黒色	5Y2/1	粘土	12cm前後	――	植物遺体少量	自然堆積	粘性強
23	黒色 オリーブ灰色	10YR1.7/1 2.5GY5/1	泥炭質粘土 粘土	12cm前後	――	――	自然堆積	互層
24	灰色	10Y4/1	粘土	8cm前後	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
25	黒色	7.5Y2/1	粘土	12cm前後	――	層上面に灰白色の火山灰ブロック・植物遺体少量	自然堆積	粘性強
26	黒色 オリーブ灰色	10YR1.7/1 2.5GY5/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	22cm前後	―	―	自然堆積	互層
27	灰色	10Y4/1	粘土	6cm前後	――	植物遺体少量	自然堆積	弱いグライ化・粘性強
28	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土	10cm前後	――	植物遺体少量	自然堆積	グライ化・粘性強
29	オリーブ灰色	2.5GY5/1	シルト質粘土	20cm以上	――	炭化物粒少量・植物遺体少量	自然堆積	グライ化

を多く含むが、4～7層で特に発達している。また、6層には多量のマンガン斑紋の集積が観察される。これら酸化鉄・マンガンの斑紋はそれぞれ、上層いずれかの水田経営時における水位変動によって形成された可能性が考えられるが、いずれもどの層の段階に伴うものか判然としない。グライ化は15層から漸次進み、28層以下で明瞭である。

現代のものを除く水田土壌は6・9層である。また、2・3・4・5・7・10層も下面に乱れがみられることや、近隣の調査区との層序対比からその可能性が考えられる。また4・5層からは少量の灰白色火山灰が検出されているが、5層の上面および上部に多い傾向がみられ、5層の段階に近い時期に降下したものと思われる。なお、25層上面からも灰白色の火山灰ブロックを検出したが、標高や層序から第28次調査（佐藤：1988）29層で確認された火山灰と同一のものである可能性も考えられる。ちなみに、第28次調査区の火山灰に与えられている推定年代は5,500ｙＢＰである。各層はほぼ水平な堆積状況を示しているが、全体的にわずかに東方

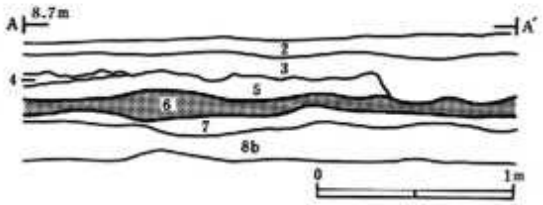
向へ下っている。遺物の出土層は2・3・4・5層および9層ＳＤ1堆積土1層である。

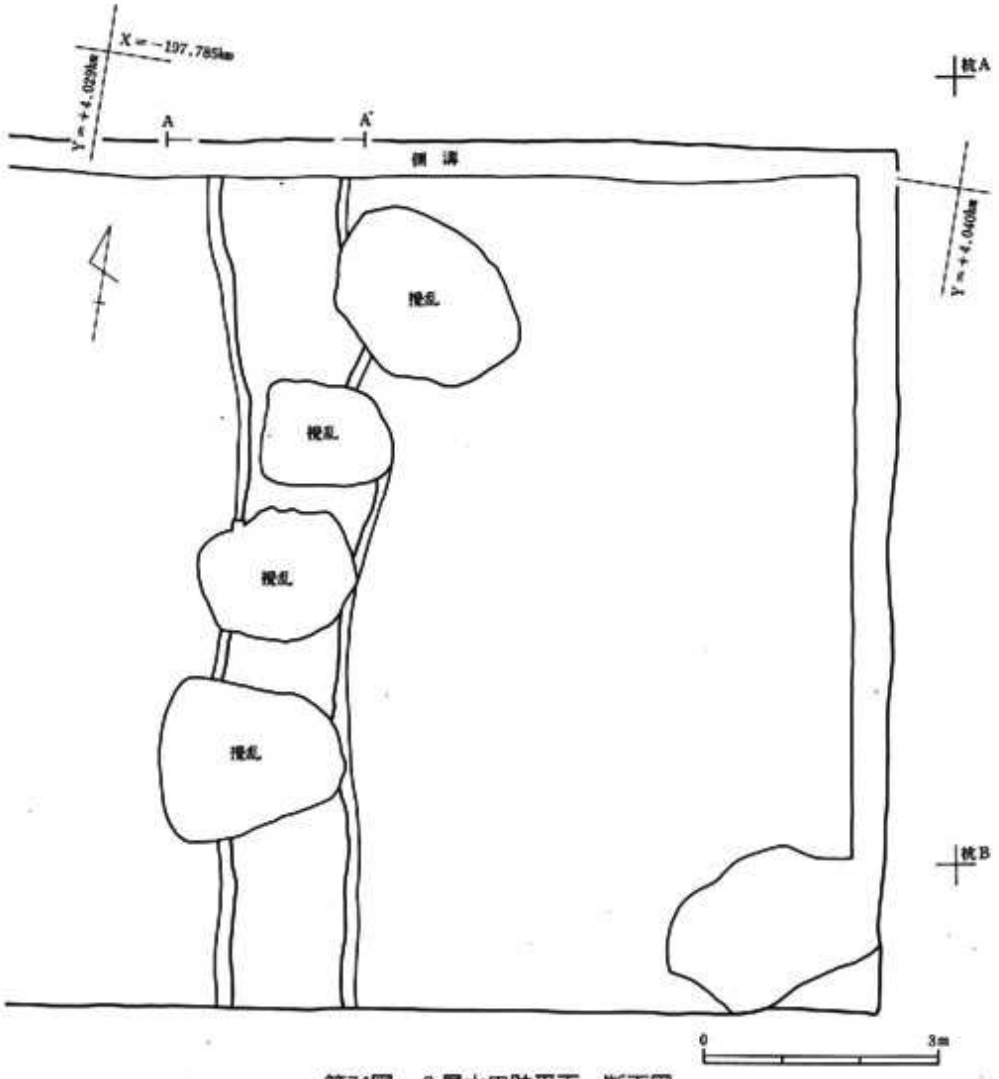
3．検出遺構と出土遺物

（1）6層上面

6層水田跡（第74図，写真68）

6層上面では、南北方向に延びる畦畔1条を検出した。畦畔の上端幅は1.5m前後で比較的規模の大きなものであるが、これに取りつくそ





第74図　6層水田跡平面・断面図

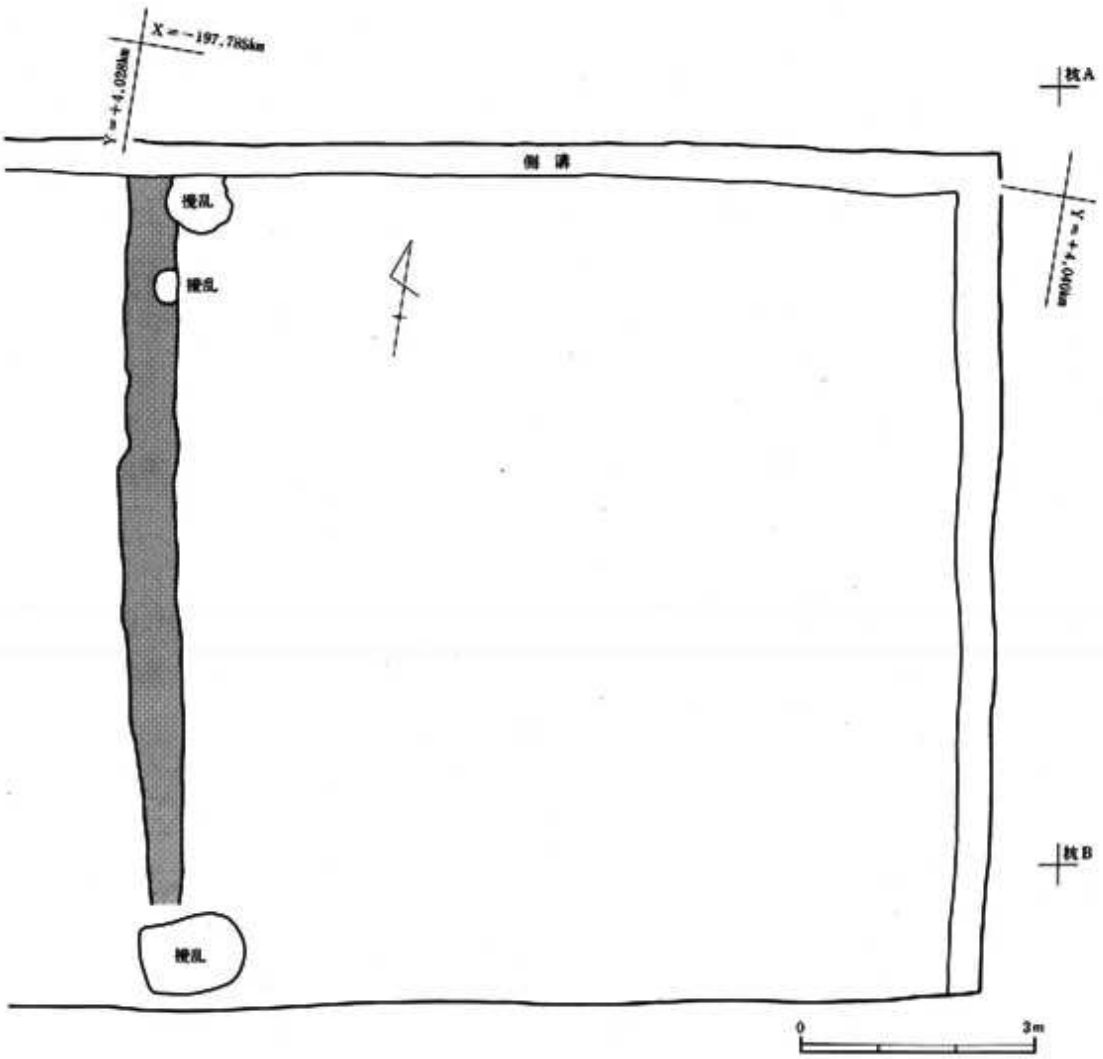
の他の畦畔は確認されず、水田区画の規模・形状等は不明である。検出された畦畔の方向はN－9°－Wで、耕作土上面との比高差は4㎝程度である。

耕作土6層は粘性の強い粘土で、層中全体にマンガン斑紋を含むほか、酸化鉄の斑紋も観察される。層厚は平均で10㎝前後である。また上層による削平のためか、調査区内では分布しない部分もあり、全体的に層の残存は不良である。層中から遺物の出土はなかった。

（2）7層中

帯状酸化鉄斑紋（第75図，写真69）

〈遺構状況〉　7層の上面では畦畔等を確認することはできなかったが、この層中で南北方向



第75図　7層平面図

に平行、直線的に延びる2本の酸化鉄斑紋の帯を検出した。これは形状などから畦畔の痕跡と推測される。しかしながら、その形成過程は不明でこれが検出層7層に伴うものか、あるいはそれ以外の層の影響によるものか判別はできない。2本の帯状斑紋の間隔は40～70cm、方向はN－10°－Wである。なお7層は全体的に弱い還元状態が観察されるが、帯状斑紋にはさまれた部分は、より明瞭な還元状態を示している。7層中から遺物の出土はない。

（3）9層上面

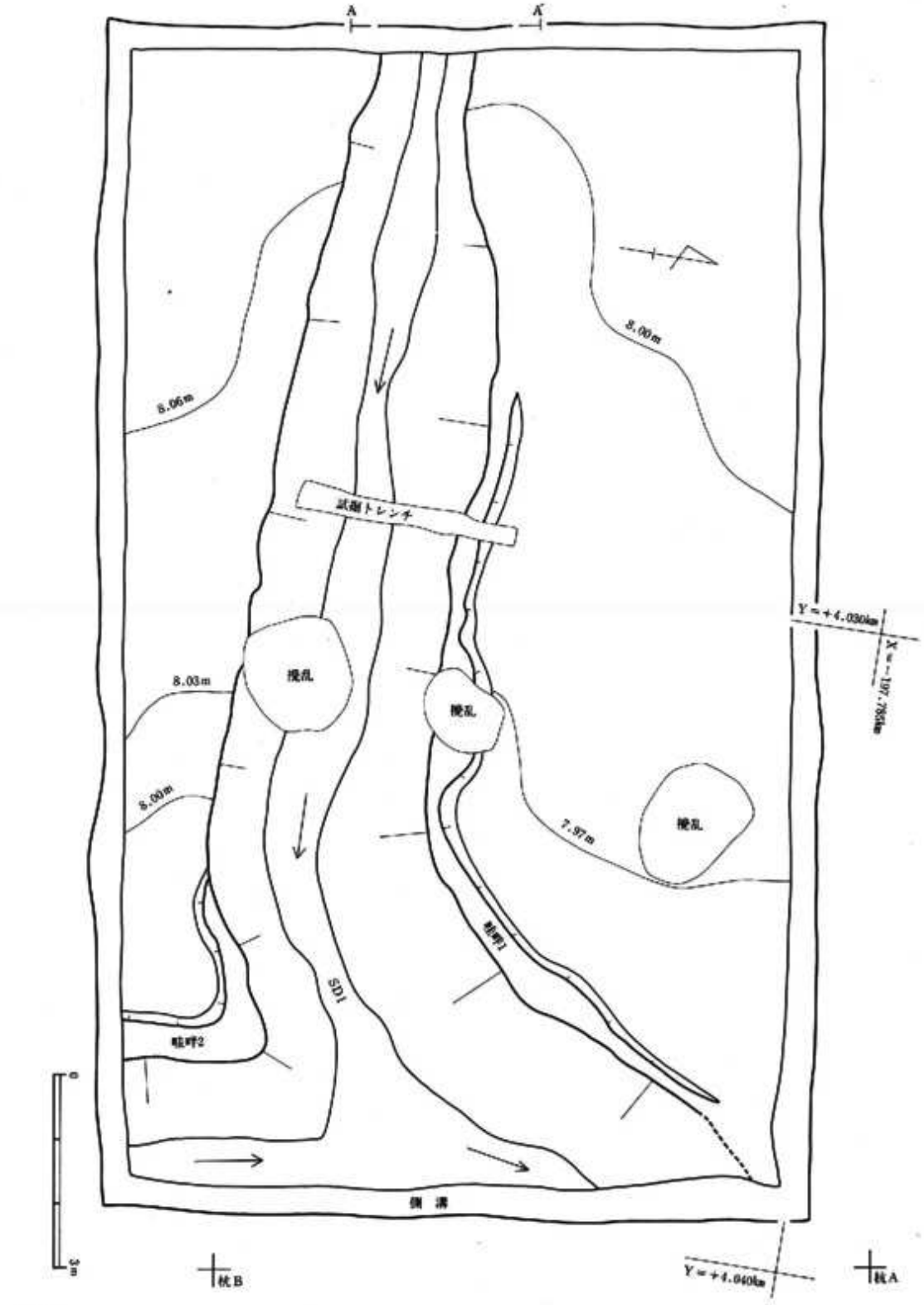
9層水田跡（第76・77図，写真70～72・145）

〈遺構状況〉　9層上面では調査区内で分岐する溝跡（ＳＤ1）と、この両岸に取りつく畦畔2条（畦畔1．2）を検出した。ＳＤ1は調査区西壁のほぼ中央部から東南方向に直進し、調査区東端部付近で南北に分岐して、「T」字状を呈しながら調査区外に延びる。上端幅は西壁で1.4mであるが、徐々に広がって3.0～3.5m程となる。深さは20～30cmの間である。断面形はやや不整形な逆台形を呈し、壁はきわめてゆるやかに立ち上がる。堆積土は泥炭質粘土および草本質の泥炭からなり、比較的ゆるやかに埋没したことが考えられる。

畦畔1はＳＤ1の北岸に取りつく畦畔である。上端幅は15～65cm程度、耕作土上面からの高さは1cm前後である。畦畔2はＳＤ1の南岸東端部にわずかに存在する畦畔で、上端幅は40～65cm程、耕作土上面からの比高差は1cm前後である。畦畔1．2はともに遺存状態が悪く途中で消滅するが、本来はＳＤ1の両岸ほぼ全域に存在した可能性もある。なおこれら以外の畦畔は検出されず、水田区画の規模・形状等は不明である。耕作土上面の標高はＳＤ1を境に南側と北側で差がみられ、全般的に南側が高い。南側の標高は8.05～7.95mの間で、東南方向の下り傾斜を示す。北側は8.03～7.91mで同じく東南方向に下っている。

耕作土9層は植物遺体をわずかに含む粘性の強い粘土で、分解はあまり進んでいない。直下層の10層も水田土壌の可能性が高い層であるため、この水田の母材となった土層の様相については不明である。層の下面には著しい起伏が観察され、酸化鉄・マンガン斑紋の集積はみとめられない。層厚は平均で15cm程度である。

〈出土遺物〉　9層中からは遺物の出土はなかったが、ＳＤ1堆積土①層より弥生土器片1点と木製品1点、および種別の判定がつかない土器片1点が出土した。弥生土器は、細片であるために器種・所属時期などの詳細は不明であるが、外面には撚糸文、内面にはナデ調整が観察される（第77図1）。木製品は着柄鋤・鍬である（第77図2）。これに組み合う柄が出土しなかったために、鋤・鍬のいずれとも判断しがたい。材にはクヌギの柾目材が、縦位に利用されている。残存は比較的良好であるが、身部両側面の大部分と先端部は欠損しており、刃部の形状は分からない。後面は軸部から身部にかけて平坦面が作り出されているが、身部上位からゆる



SD1堆積土土層註記
① 黒褐色 2.5Y3/1 泥炭質粘土
② 黒色 10Y2/1 泥炭質粘土

第76図 9層水田跡平面図・SD1断面図

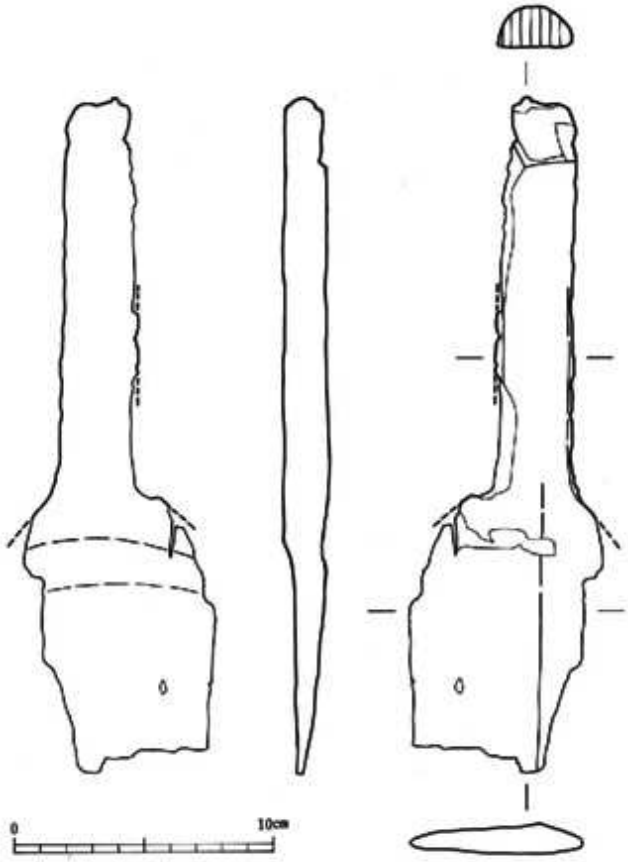
い傾斜がつけられて、徐々に厚みが減じていく。前面は、身部では中心線上に稜が観察され、軸部は半円形の削り出しを受けて、断面形はかまぼこ形を呈する。また、軸部上端部前面には緊縛のためのえぐりが入れられている。

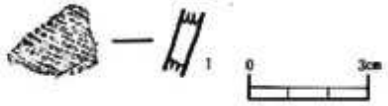
（4）その他の出土遺物（第78図，写真145）

基本層2・3・4層から土師器、須恵器、土師器質土器、陶器、磁器、石器が出土したが、ほとんどが小さな破片で、図化し得たものは2点のみである。

2層からの出土遺物は土師器（1点）、土師質土器（1点）、陶器（3点）、磁器（1点）である。土師器は細片で、器種その他詳細は不明である。土師質土器は底部破片で、器種の特定はできないが、回転糸切り痕が観察される。陶器片のうち、ある程度様相の分かるものは2点で産地不明の土灰釉のすり鉢（17C代？）と相馬大堀産の碗（近世末？）である。磁器は肥前産の碗か皿で時期は不明である。

3層からは土師器（28点）、須恵器（2点）、土師質土器（2点）、陶器（1点）、磁器（1点）が出土した。土師器はすべて細片で、ロクロ使用・内面黒色処理の坏が大部分を占めている。この他高台付坏、甕の破片もあるが、細片のため詳細は分からない。土師質土器は鉢とすり鉢である。鉢（第78図1）はロクロ調整で復元口径が29.0cm、内外面とも黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。産地は不明で、所属時期もあまり明確ではないが、一応17c代と考えておきたい。すり鉢（第78図2）もロクロ調整のもので、口縁





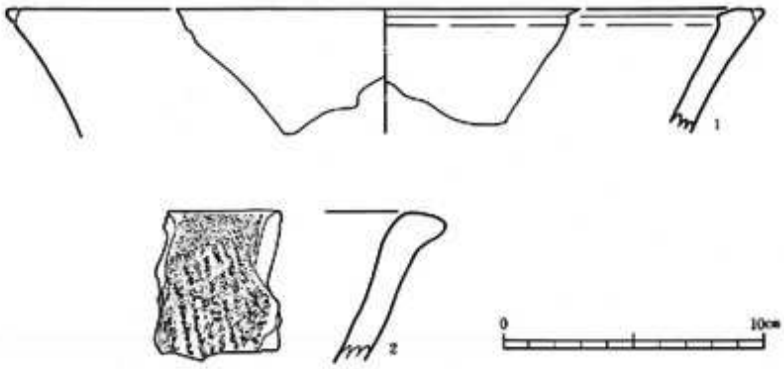
No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	145－3	9層水田跡SD1堆①	弥生土器	――	体部小片	――	――	――	外面R撚糸文、内面ミガキ

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材	長さ	軸長	軸中	軸厚	身部厚	備考
2	145－4	9層水田跡SD1堆①	若柄鉋or鍬	クスギ	柾目	(26.6cm)	14.8cm	約3.0cm	約1.0cm	0.9cm	弥生時代

第77図　SD1出土遺物

部が外側に屈曲する特徴を持ち、内面には7条一対のすり目が観察される。胎土には多量の砂粒を含み、色調は外面が橙色、内面は灰褐色を呈する。所属時期は17c代と推測され、産地は不明である。陶器は美濃産（志野焼）の皿で、所属年代は17cである。

4層からは土師器（5点）、須恵器（1点）が出土した。土師器片のうち、器種の判別がつくものはすべてロクロ使用・内面黒色処理の坏である。須恵器は坏の底部片で、回転糸切り痕が観察される。



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	145－2	3層	土師質土器	鉢	口縁部破片	29.0cm	――	(4.8cm)	内外面ロクロナデ、年代不明（中世？）
2	145－1	3層	土師質土器	擂鉢	口縁部破片	――	――	――	内外面ロクロナデ、擂目7本単位、年代不明（中世？）

第78図　その他の出土遺物

4．遺構の所属年代とまとめ

1．今回の調査では6・7・9層で水田遺構を検出したが、その他基本層とした2・3・4・5・10層にも水田跡としての可能性が考えられる。これら各層の年代は、時期決定資料に乏しいものの、第28次調査をはじめとする周辺調査区との層位対比や火山灰のありかた等から、以下のように考えられる。

- 6層…古墳時代以降、平安時代以前
- 7層…不明
- 9層…弥生時代拠形囲式期以降、十三塚式期以前（第28次調査区10d層相当）

- 2層…近代以降
- 3層…近世
- 4層…平安時代（灰白色火山灰降下以降）
- 5層…平安時代（灰白色火山灰降下前）
- 10層…弥生時代拠形囲式期（第28次調査区11a層相当）

2．6層上面では、南北方向に延びる畦畔1条を検出したが、区画の規模や形状等、水田跡の

詳細を明らかにすることはできなかった。なお、今回の報告では6層上面を一応水田跡としておくが、ここで検出された畦畔は本来この層に伴うものではなく、直上層5層段階の水田の影響で形成された可能性も考えられる。6層は5層の削平を受けて全体的に残存の悪い層であるのに係わらず、周辺よりも高い部分である畦畔が、このような連続性を持った高まりとして残るとは考えにくいからである。これは、本来5層上面で同じ位置に畦畔が存在したために、その直下が耕作による攪拌を免れて残されたもので、擬似畦畔B（斎野：1987）と同様の形成過程を持つものとの解釈も成り立つであろう。

3．7層では層中で、二列平行して延びる帯状酸化鉄斑紋を検出した。これは形状や、7層の上下に水田土壌が連続している状況から、明らかに畦畔の痕跡と考えられる。現在、酸化鉄・マンガン・炭酸鉄等の集積状況の観察が、水田探査の一方法として着目されている（東日本の水田跡を考える会：1990）。しかし、その集積・形成メカニズムには未解明な部分も残されており、今回検出された帯状酸化鉄斑紋もどの層の段階の水田畦畔に伴うものか、現状では判断がつかない。今後の考古学的データおよび、土壌学的研究成果の蓄積を待ちたい。

4．9層水田跡では調査区内で分岐する溝跡（ＳＤ1）と、その両岸につく畦畔（畦畔1．2）を検出した。しかし、これ以外の畦畔等の施設が確認されなかったため、詳しい水田区画の規模・形態を明らかにすることはできなかった。ＳＤ1についても、これに伴う水利施設は検出されず給・排水等の機能を特定することはできない。

また、これまでこれと同時期の水田土壌が、遺跡内北部の東側地区を中心に確認されているが（佐藤：1988、平間他：1989、平間他：1990など）、本調査区はその最も南に位置し、この時期の耕作域が少なくともここまで広がっていることが理解される。しかしながら、本調査区により近接する41・52・64次調査区では、これに該当する水田土壌がみられず、この耕作域は不整形な広がりを呈する可能性が考えられる。

なお、ＳＤ1堆積土中から出土した着柄鋤・鍬は弥生時代のものとしては、東北地方で初めての報告例である。

5．本調査区も含めて富沢遺跡北部の南東側地区では、一般的に粘性の強い粘土層が発達し、泥炭の形成が不良という土層状況の特徴を持つ。これは、泥炭がよく発達している北部他地区との環境の差異を示すものと捉えられ、水田の成立を考えるうえで重要である。今回は、環境解析に係わる調査を実施することはできなかったが、今後この点を明らかにしていくことが、課題の一つとしてあげられよう。

5．着柄鋤鍬の樹種同定

鈴木三男（金沢大・教養・生物）
能城修一（農水省森林総合研究所）

仙台市富沢遺跡第65次調査で出土した弥生時代中期の着柄鋤鍬1点の樹種を調査した。

この材は（標本番号ＭＹＧ－747）は年輪の始めに大道管が同心円状に並び，晩材部では小型で丸く厚壁の道管が放射方向に連なっている，道管の穿孔は単一，柔組織は同心円状の独立帯状である，放射組織は単列同性のものと極めて大きい複合状のものがあること，などの形態的特徴を有していることから，ブナ科コナラ属のクヌギ節の材であることが分かった。現在の日本にはクヌギ節の樹種は本州北部から九州にかけての低地から山地帯下部に広く分布するクヌギ Quercus accutissima Carr. と関東以西の平野部から山地帯下部に分布するアベマキQ. varabilis Blume の2種があり，材構造での区別は困難である。しかしアベマキは関東より東北にはまったく分布しないこと。クヌギは仙台市付近の低湿地に普通にみられることなどからここで出土した材はクヌギである可能性が考えられる。

弥生時代から古代にかけての木製の鋤鍬類は関東地方以西では常緑のカシ類を専ら用いているが，それより東北になるとクヌギ節の類例が多くなる。当仙台市でも富沢遺跡泉崎前地区でやはり弥生時代中期の類例が知られている（木村中外，仙台市教育委員会「富沢水田遺跡」：p．199；1984）。

第10節　富沢遺跡第66次調査

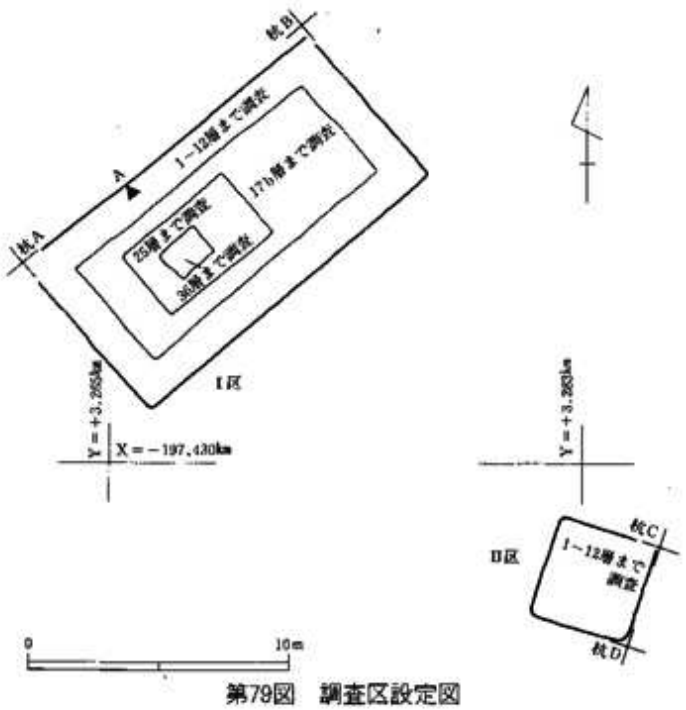
1．調査方法

調査区（Ⅰ区）の設定面積は約7.2×14m（100㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力によった。また、Ⅰ区の南東側に約4×4m（15㎡）の調査区を設定しⅡ区とした。Ⅰ区と同様の調査方法をとっている。なお、それぞれの調査区には土層観察及び排水用の側溝を設けた。Ⅰ・Ⅱ区とも12層までは調査区全面を精査し、それ以下の層は、Ⅰ区では第79図のように順次縮小して36層まで調査したが、Ⅱ区では15層まで層を確認するに留めた。遺構の測量は、Ⅰ区で杭A・Bを、Ⅱ区で杭C・Dを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.413206km　Y＝＋3.272320km　杭B：X＝－197.422320km　Y＝＋3.261716km　杭C：X＝－197.433176km　Y＝＋3.286053km　杭D：X＝－197.437001km　Y=+3.284811km）。

2．基本層序

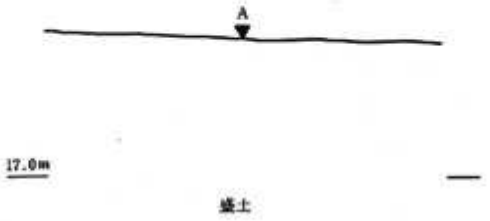
今回の調査では、盛土下に大別36層、細別64層が確認された。各層の土質は1層が粘土、2～3b層が砂、4a～5層がシルト主体、6a～6c層が砂、7a・7b層が粘土質シルト、8a～11b層が砂主体、12～15層が粘土、16a～16d層が砂、17a～17c層は泥炭質粘土主体、18～23b層は砂主体、24～26層は粘土質シルトである。27層以下は粘土・シルト・砂の互層から成っている。グライ化は13層以下で認められ、特に25層以下で著しい。灰白色火山灰粒は13層下部で少量認められる。

水田土壌は7a・7b・12・13・17a層であるが、14層も可能性が高い。15層については判断を留保し、他の機会を待ちたい。



第79図　調査区設定図

その他の特徴として、17c・19・22a層が有機分を含んで黒色土壌化が進んだ土層と判断された。また、18層上面でピット群、25層上面で不整形な落ち込みとピット群が検出された。これらは、根株や樹根の痕跡と考えられる。さらに、23a・28a・29a層の上面では溝状の落ち込みが検出され、自然流路と判断された。



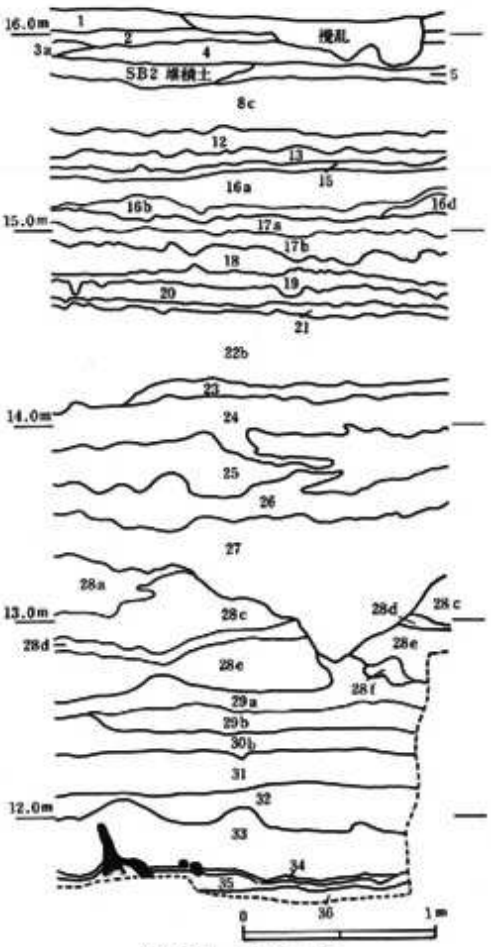
3．検出遺構と出土遺物

（1）4～7層上面

細別層位の4a・4d・4e・7a層の上面で、一定の時間幅に納まる生活面をなす。4層は西側すなわち居住域側に分布し、東側では3層下に7a層（水田跡）がみられる。このような特徴は、傾斜地を掘削し平坦化したためと考えられる。

1号掘立柱建物跡－SB1－（第81図，写真74）

I区南東部に位置し、東西・南北に1間分ずつ柱穴3基を検出した。4a層上面で検出したP_3も建物跡と関連する可能性がある。南北柱列方向はN－2°－Wである。柱穴は、東辺側のP_2・P_4は15cm前後の略方形、深さ約6cmであるが、北辺側のP_1は42×39cm、深さ約15cmである。柱痕跡はP_2・P_4が直径9cmの円形、P_1は20×27cmの略方形である。P_1とP_2・P_4では、規模・形状に大きな差がある。また、P_1付近に炭の分布が認められた。柱間寸法は、P_1～P_2間が2.3m（約7.5尺）、P_2～P_4間が2.18m（約7尺）である。P_1・P_2付近から円礫が検出された。



第80図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1a	オリーブ黒色	10Y3/1	粘土	5cm～20cm	―	砂少量	水田耕作(現代)	―
1b	オリーブ黒色	10Y3/1	砂	2cm～5cm	―	―	自然堆積	II区に分布
1c	オリーブ黒色	10Y3/1	粘土	5cm～14cm	―	砂多量	水田耕作(現代)	II区に分布
2	暗オリーブ灰色	5GY3/1	砂	6cm～16cm	有	炭化物・砂・礫少量	自然堆積	―
3a	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂	6cm～19cm	有	マンガン粒多量・酸化物粒少量	自然堆積	部分的分布
3b	黄褐色	2.5Y5/4	砂	5cm～12cm	有（多量）	マンガン粒少量・炭化物少量	自然堆積	西側の部分的分布

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
4 a	黄褐色	10YR3/1	砂質シルト	6 cm～12cm	有（少量）	マンガン粒多量・炭化物少量・礫少量	自然堆積	西側の部分的分布
4 b	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	5 cm～12cm	有（少量）	炭化物少量・細砂	自然堆積	西側の部分的分布
4 c	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	10cm～20cm	有	マンガン粒少量	自然堆積	西側の部分的分布
4 d	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土質シルト	6 cm～12cm	有（多量）	マンガン粒少量	自然堆積	北側の部分的分布
4 e	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	8 cm～18cm	有（多量）	マンガン粒多量・炭化物少量・小礫少量	自然堆積	北側の部分的分布
5	黄灰色	2.5Y4/1	シルト	6 cm～26cm	有（少量）	炭化物少量・小礫少量	自然堆積	西側の部分的分布
6 a	暗オリーブ灰色	5 GY4/1	砂	3 cm～ 6 cm	有（少量）	マンガン粒少量・炭化物	自然堆積	北側の部分的分布
6 b	灰黄褐色	10YR5/2	砂	4 cm～ 9 cm	有	――	自然堆積	北側の部分的分布
6 c	黄褐色	2.5Y5/3	砂	2 cm～ 5 cm	有（少量）	――	自然堆積	北側の部分的分布
7 a	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	6 cm～10cm	有（多量）	マンガン粒少量・炭化物粒	水田耕作	下面若干起伏・東側の部分的分布
7 b	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	2 cm～ 5 cm	有（多量）	マンガン粒少量・炭化物粒・砂・小礫	水田耕作	下面若干起伏
8 a	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂	4 cm～20cm	有（少量）	炭化物少量・粗砂・φ1～3 cmの礫	自然堆積	南側の部分的分布
8 b	褐色	7.5YR6/8	砂礫	10cm～26cm	――	粗砂・φ1～5 cmの礫	自然堆積	南側の部分的分布
8 c	黄灰色	2.5Y5/1	砂	4 cm～18cm	有（多量）	炭化物少量・小礫少量	自然堆積	部分的分布
9	黄褐色	10YR5/6	砂	8 cm～28cm	有（少量）	小礫少量	自然堆積	北側の部分的分布
10	オリーブ灰色	2.5GY5/1	砂	10cm～28cm	有（少量）	粘土ブロック	自然堆積	北側の部分的分布
11 a	褐色	7.5YR4/6	砂	8 cm～14cm	有	礫多量	自然堆積	東側の部分的分布
11 b	灰黄褐色	10YR5/2	砂	5 cm前後	有	〃	自然堆積	東側の部分的分布
12	灰色	10YR4/1	粘土	6 cm～30cm	有（多量）	マンガン粒少量・砂	水田耕作	下面若干起伏
13	灰色	7.5Y4/1	粘土	6 cm～13cm	――	下部に灰白色火山灰ブロック少量・砂多量	水田耕作	グライ化
14	オリーブ黒色	5 Y3/1	粘土	2 cm～ 5 cm	――	――	水田耕作	部分的分布・グライ化
15	緑灰色	10GY5/1	粘土	6 cm～14cm	有（少量）	砂	自然堆積？	グライ化
16 a	暗緑灰色	5 G4/1	砂（細砂）	8 cm～30cm		シルト質の間層あり	自然堆積	グライ化
16 b	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	砂（細砂）	6 cm～18cm		粘土ブロック	自然堆積	グライ化
16 c	オリーブ灰色	5 GY5/1	砂（細砂）	6 cm～14cm		黒色粘土層との互層	自然堆積	互層・グライ化
16 d	緑灰色	5 G5/1	砂	4 cm～ 9 cm	――	――	自然堆積	部分的分布・グライ化
17 a	黒色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	6 cm～12cm	――	砂多量	水田耕作	下面若干起伏
17 b	黒色	2.5Y2/1	砂（泥炭質）	10cm～30cm	――	小礫・粘土ブロック	自然堆積	―
17 c	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	4 cm～10cm	――	砂少量・植物遺体	自然堆積	部分的分布
18	灰色	10Y4/1	砂（粗砂）	8 cm～32cm	――	φ4～5 cmの礫多量	自然堆積	グライ化　ピット群（樹根跡）
19	オリーブ黒色	7.5Y3/1	砂（粗砂）	4 cm～15cm	――	φ5 cm前後の礫少量	自然堆積	グライ化
20	オリーブ灰色	2.5GY5/1	砂	4 cm～18cm	――	礫	自然堆積	グライ化
21	オリーブ灰色	2.5GY5/1	シルト質粘土	4 cm～ 8 cm	――	植物遺体少量	自然堆積	グライ化
22 a	オリーブ黒色	2.5GY2/1	砂（粗砂）	7 cm前後	――	植物遺体・粘土ブロック	自然堆積	22 b層が土壌化したものか？
22 b	オリーブ灰色	2.5GY5/1	砂（粗砂）	10cm前後	――	円礫多量	自然堆積	グライ化
23 a	暗オリーブ灰色	5 GY4/1	粘土質シルト	2 cm～10cm	――	――	自然堆積	グライ化　自然流路
23 b	オリーブ灰色	5 GY5/1	砂（粗砂）	3 cm～ 7 cm	――		自然堆積	グライ化
24	黒褐色	2.5Y3/1	粘土質シルト	6 cm～33cm		炭化物少量・植物遺体少量	自然堆積	グライ化
25	緑灰色	7.5GY6/1	粘土質シルト	6 cm～26cm	――	砂・植物遺体少量	自然堆積	グライ化　樹根跡
26	緑灰色	10GY6/1	粘土質シルト	12cm～30cm	――	炭化物少量・砂多量・植物遺体	自然堆積	グライ化
27	緑灰色	5 G6/1	粘土	20cm～70cm	――	植物遺体少量	自然堆積	グライ化
28 a	緑灰色	5 G5/1	砂質シルト	5 cm～24cm	――	――	自然堆積	グライ化
28 b	緑灰色	5 G6/1	シルト	12cm～36cm		――	自然堆積	グライ化
28 c	緑灰色	5 G5/1	砂	6 cm～38cm	――	粗砂と細砂の互層	自然堆積	互層・グライ化
28 d	緑灰色	5 G6/1	粘土	4 cm～20cm	――		自然堆積	グライ化
28 e	緑灰色	5 G5/1	砂	6 cm～36cm	――	粘土質シルト層を層状にはさむ	自然堆積	グライ化
28 f	緑灰色	5 G6/1	粘土	6 cm～12cm	――	下部に砂層あり	自然堆積	グライ化
29 a	緑灰色	5 G6/1	粘土	10cm～24cm	――	――	自然堆積	グライ化　自然流路？
29 b	緑灰色	7.5G Y6/1	砂	10cm前後		――	自然堆積	グライ化
30 a	暗オリーブ灰色	5 GY4/1	粘土質シルト	20cm前後	――	細砂層との互層・植物遺体（葉・枝など）	自然堆積	互層・グライ化・腐植質粘土を含む
30 b	暗オリーブ灰色	5 G5/1	砂	4 cm～10cm	――		自然堆積	グライ化
30 c	オリーブ灰色	2.5GY5/1	シルト	10cm前後	――	砂・植物遺体少量	自然堆積	グライ化
31	オリーブ灰色	2.5GY5/1	砂	8 cm～20cm	――	炭化物粒多量	自然堆積	グライ化
32	オリーブ灰色	5 GY5/1	砂	8 cm～22cm	――	炭化物少量・植物遺体・種実	自然堆積	グライ化
33	オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土質シルト	30cm前後	―	植物遺体・腐植質粘土層との互層・根果	自然堆積	互層・グライ化
34	灰色	5 Y4/1	腐植質粘土	2 cm前後	-	植物遺体（樹木・種実など）	自然堆積	――
35	オリーブ灰色	2.5G5/1	粘土	3 cm前後		植物遺体少量（樹木・種実など）	自然堆積	グライ化
36	オリーブ灰色	2.5G5/1	砂	12cm以上	――	植物遺体（樹根など）	自然堆積	グライ化

これらの特徴から、東側に庇をもつ南北棟の建物と予想され、庇は柱穴の貧弱さから土庇と考えられる。出土遺物はない。

1号土坑－ＳＫ１－（第81図，写真76）

１区北部に位置し、４ｄ層上面で検出した。規模は約2.98×0.95m、深さ11cmで、平面形は長方形を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。遺物は出土していない。

2号土坑－ＳＫ２－（第81図，写真76）

Ｉ区北部に位置し、４ｄ層上面で検出した。規模は2.6以上×1.17m、深さ約11cmで、平面形は中膨みの長方形と予想され、底面は平坦である。埋土は単層である。遺物は出土していない。なお、ＳＫ４とは重複関係は認められないが、調査時の所見からＳＫ２が新しいと考えられる。

4号土坑－ＳＫ４－（第81・82図，写真77）

Ｉ区北部に位置し、４ｄ層上面で検出した。規模は2.6×1.03m、深さ21cmで北側では浅くなる。平面形は不整楕円形で、断面は皿状を呈する。埋土は６層確認でき、堆積状況から掘り直しを１度しているようだ。埋土４層は炭層であるが、層中より竹１点、栗堅果１点、小豆？６点、麦類？31点、米４点、その他（種子）105点が出土した。これはゴミ穴であろう。

5号土坑－ＳＫ５－（第81図）

Ｉ区南部に位置し、４ａ層上面で検出した。規模は2.42×1.07m、深さ３cmで、平面形は不整形で、底面はほぼ平坦である。埋土は単層である。遺物は出土していない。P_5を切っている。

1号溝跡－ＳＤ１－（第81・85図，写真78・79・147）

Ｉ区中央を南北に伸びる溝跡である。４ａ・４ｂ層上面で検出した。規模は溝幅42～87cm、深さ約18cmで、方向は約Ｎ－５°－Ｅを示す。埋土は３層認められる。この溝跡には、後述する土手状遺構が接続する。また、北部に張り出しが検出されたが、これは西側から伸びてきてＳＤ１に接続する溝の一部と考えられ、周辺（土手状遺構付近まで）に薄い砂の堆積が認められた。

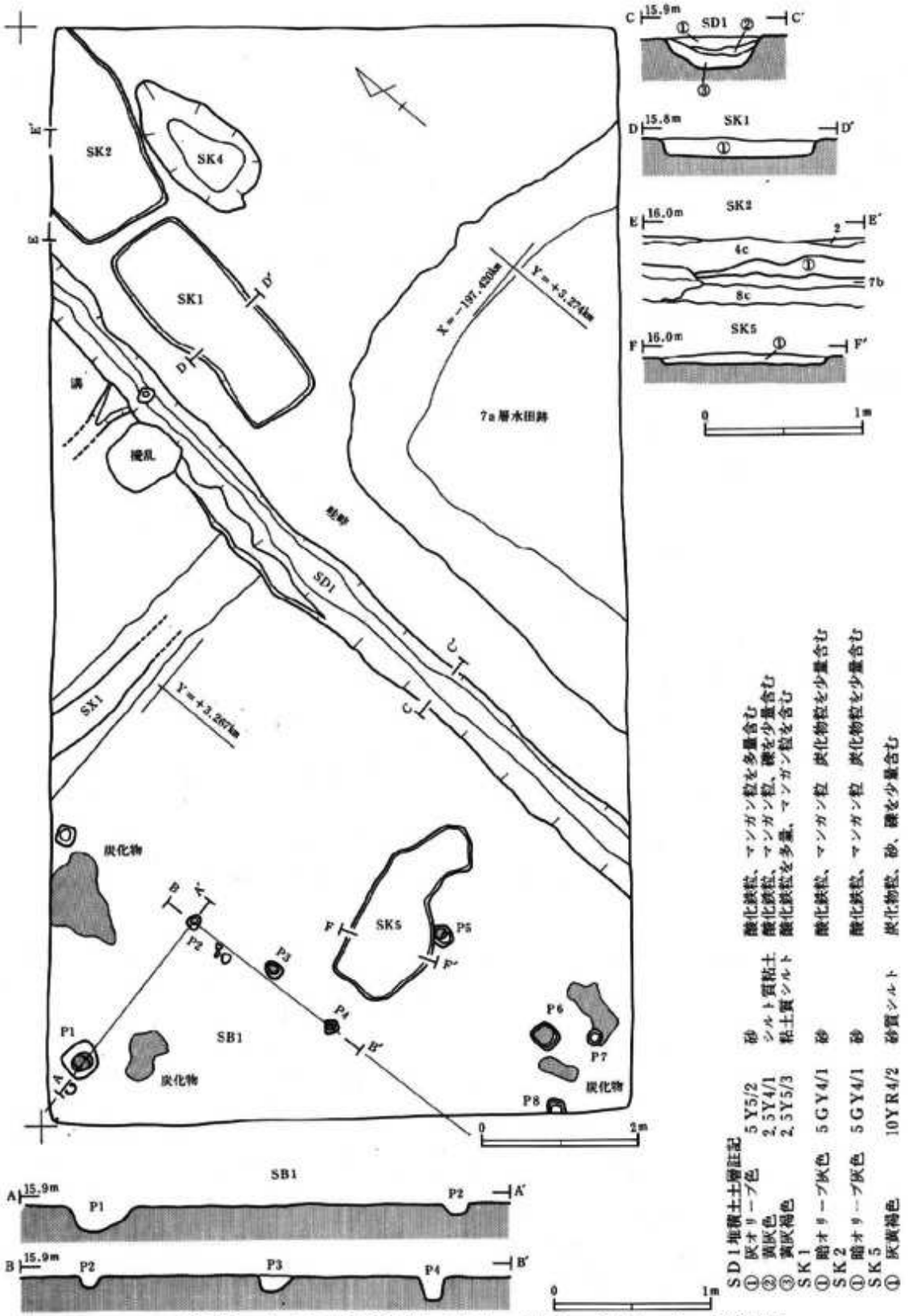
遺物は、北端部で唐津鉄絵皿（第85図６）が底面より出土した。目跡は胎土目であり、唐津の初期の製品である。畳付はかなり磨耗している。時期は16ｃ末～17ｃ初と考えられる。

土手状遺構－ＳＸ１－（第81図）

Ｉ区中央西寄りに位置し、４ａ層で構成される。４ａ層の高まりが帯状をなし、ＳＤ１に接続する。規模は60～80cm、高さ７～８cmで、方向はＮ－86°－Ｗである。本遺構の北側には薄い砂の堆積が認められ、溝から水が氾濫することがあったのであろう。遺物は出土していない。

７ａ層水田跡（第81図）

１区北東部で、水田区画の一部を検出した。畦畔は西側で１条検出したが、北側では判然としない。西側の畦畔は上端幅で0.8～１mあり、水田作土とは異なる礫混りの土で構成され、



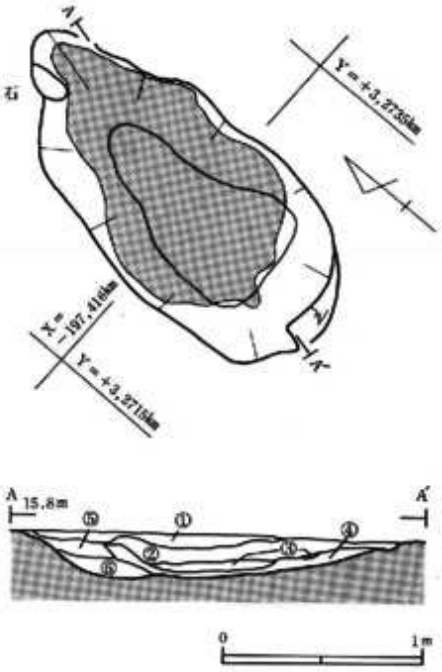
SD1堆積土土層註記
① 灰オリーブ色　5Y5/2　砂　酸化鉄粒、マンガン粒を多量含む
② 灰色　2.5Y4/1　シルト質粘土　酸化鉄粒、マンガン粒、礫を少量含む
③ 黄灰褐色　2.5Y5/3　粘土質シルト　酸化鉄粒を多量、マンガン粒を含む
SK1
① 暗オリーブ灰色　5GY4/1　砂　酸化鉄粒、マンガン粒　炭化物粒を少量含む
SK2
① 暗オリーブ灰色　5GY4/1　砂　酸化鉄粒、マンガン粒　炭化物粒を少量含む
SK5
① 灰褐色　10YR4/2　砂質シルト　炭化物粒、砂、礫を少量含む

第81図　4～7層上面平面図、SB1・SD1・SK1・2・5断面図

非常に堅く締まっている。この畦畔にはＳＤ１が伴うが、さらに後述するＳＤ２や７ｂ層水田跡の各時期にも伴って全く動いていないと判断され、長期間利用されていたものと考えられる。畦畔はＮ－４°－Ｅの方向を示し、ＳＤ１・２と平行する。以上のことから、本水田跡は居住域側で２時期変遷する間利用されていたものと考えられる。

出土遺物は、須恵器甕片３点、土師器片１点、昆虫羽１点である。時期を決定できる資料はなく、むしろ溝跡出土遺物で判断すべきものであろう。

なお、居域側にはこの他に柱穴・ピット・炭化物の集中がみられた。P_7では埋土中より、二枚貝の被膜・種子・顔料の付着した岩片・穀物？が出土している。



ＳＫ４堆積土土層註記

①	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	酸化鉄粒、炭化物粒を多量含む
②	灰色	7.5Y4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を多量、炭化物粒を少量含む
③	黄灰色	2.5Y4/1	砂質シルト	
④	黒色	10YR1.7/1	（炭化物層）	酸化鉄粒を少量、植物遺体を含む
⑤	オリーブ黒色	5Y3/1	砂質シルト	酸化鉄粒、炭化物粒を少量含む
⑥	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂	酸化鉄粒を含む、下部に炭化物層

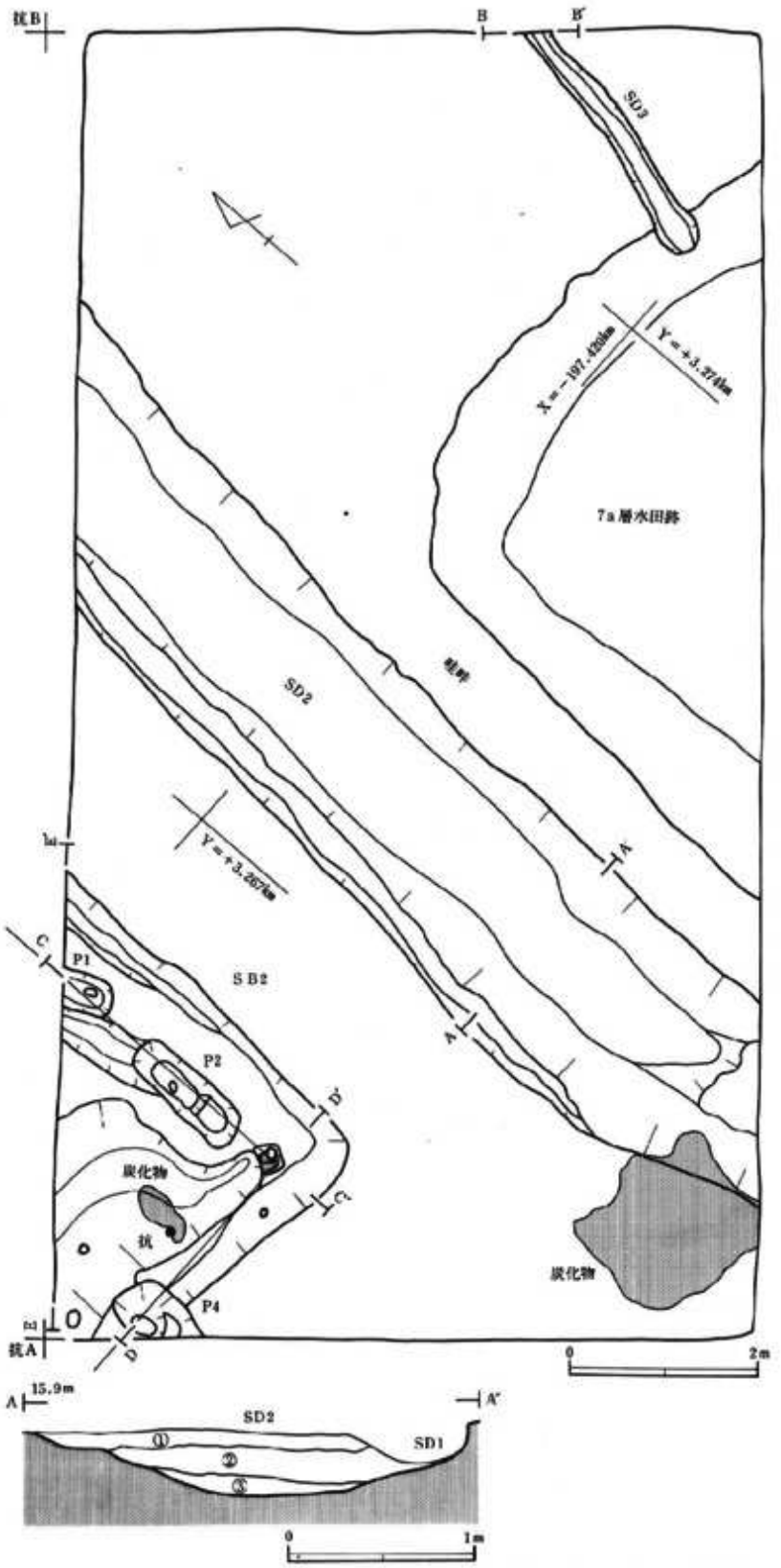
第82図　ＳＫ４平面・断面図

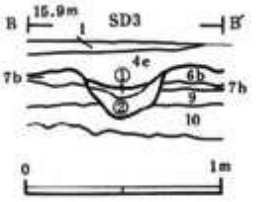
（２）５～７層上面

ここでは、細別層位の５・６ｂ・７ａ層などの上面で検出され、一定の時間幅に納まる遺構群を扱う。なお、５層はＳＤ２を境にして西側に分布する。

１号竪穴建物跡－ＳＢ２－（第83・84図，写真80～82）

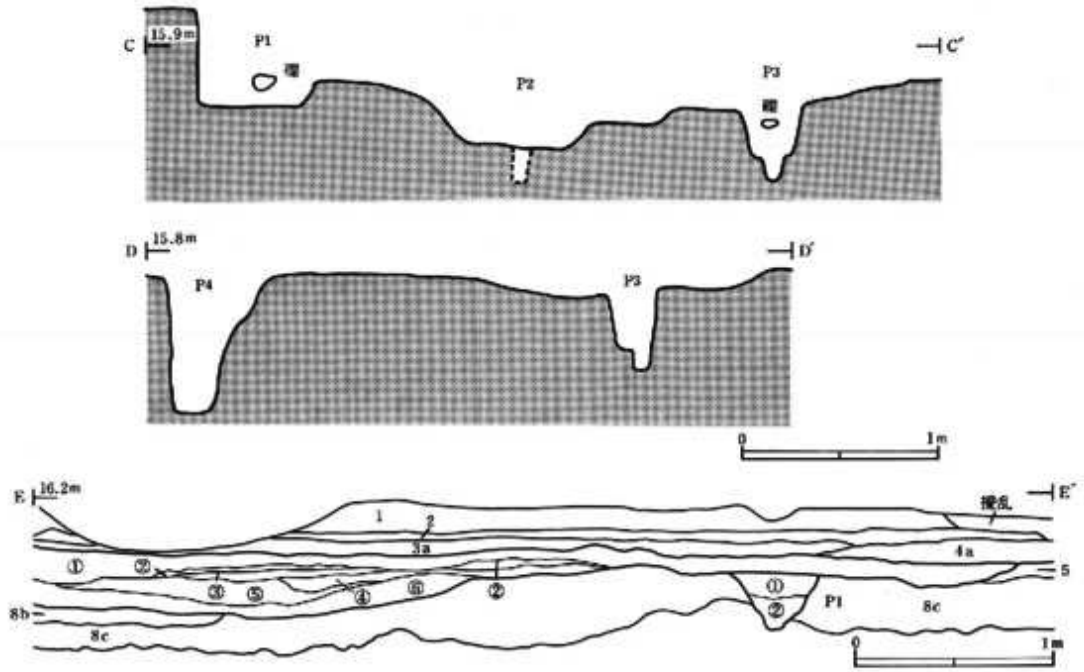
Ｉ区南西部に位置し、５層上面より検出した。浅い竪穴を伴う掘立柱建物跡と理解される。竪穴部分は東辺4.2m以上、南辺で2.9m以上の規模で、深さ10～26cmである。埋土は６層確認でき、いずれも炭化物の含有が目につく。底面はほぼ平坦であるが、南側で不整形の落ち込みが検出され、南辺の柱穴（P_4）は埋土６層より掘り込まれていることから、埋土６層は床面下の掘り方埋土と考えられる。東壁際とP_2の北部で浅い溝が検出され、壁際のものは周溝とも考えられる。柱穴は４基検出され、東辺側２間分、南辺側１間分になる。P_1・P_2は長楕円形の掘り方で、P_2は1.4×0.48mの規模で中央北寄りに直径約10cmの柱痕跡が検出された。P_1は柱痕跡は検出できなかったが、内部で円礫が１点出土した。P_3は方形の掘り方内に、直径約10cmの柱痕跡がある。P_4は0.6×0.9m以上で、深さ0.8mを測り、柱痕跡も不明瞭であるが直径約20cm前後あるものと考えられる。柱間寸法は、東辺側1.26m（約４尺）南辺側2.3m





SD2堆積土土層註記			
①黄灰色	2.5Y4/1	シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を多量、砂、礫を含む
②黄灰色	2.5Y4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を多量、マンガン粒を少量含む
③オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土	砂、礫を少量含む
④オリーブ黒色	10Y3/1	粘土	炭化物粒を少量含む
⑤暗オリーブ灰色	5GY3/1	粘土	炭化物粒、粗砂を少量含む
SD3堆積土土層註記			
①暗灰黄色	2.5Y4/2	シルト	酸化鉄粒を少量、粗砂を含む
②黒褐色	10YR3/1	砂	酸化鉄粒を含む

第83図　5～7層上面平面図、SD2・3断面図



SB2堆積土土層註記

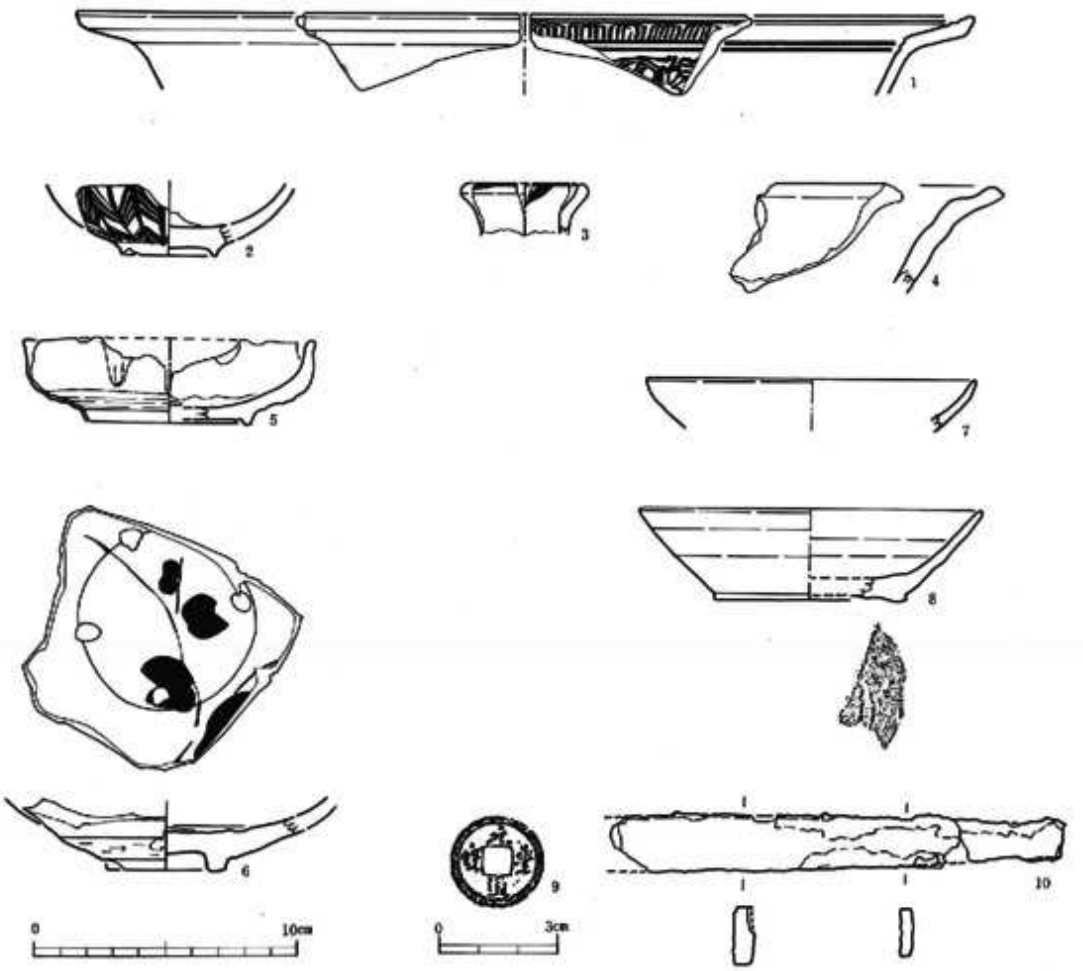
①		灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	酸化鉄粒少量、マンガン粒多量、炭化物粒多量、小礫少量含む
②		黒色	10YR2/1	(炭化物層)	
③		黒褐色	10YR3/1	砂質シルト	酸化鉄粒少量、マンガン粒多量、炭化物粒少量含む
④		黒褐色	10YR3/2	シルト	マンガン粒多量、酸化物粒少量、黄色粘土ブロックを含む
⑤		黒褐色	10YR3/1	シルト	酸化鉄粒少量、マンガン粒多量、炭化物少量含む
⑥		黒褐色	10YR3/1	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒、炭化物粒少量含む
P1	①	黒褐色	10YR3/1	砂質シルト	酸化鉄粒多量、マンガン粒少量、炭化物粒少量含む
P1	②	黒褐色	10YR3/2	シルト	酸化鉄粒多量、粗砂多量含む

第84図　SB2断面図

(約7.5尺)である。また、柱穴と関連するかどうか不明だが、南壁寄りで打ち込み杭や小ピット、埋土6層中で炭化物の集中や円礫が検出されている。出土遺物は北部の埋土1層より志戸呂陶器2点、土師質土器皿2点、土師器坏1点、須恵器坏1点が出土し、いずれも破片である。また、P_1より昆虫羽1点が出土した。このうち図示できるものは静岡県志戸呂窯の鉄釉輪花皿(第85図5)である。棒状工具を押圧して輪花にしているが、単位は不明である。底部は削り出し輪高台である。内外面に鉄釉が掛けられているが、外面体部下半以下、内面見込みが無釉となる。漬け掛けによるものと思われる。、また、見込みに目跡1ケが認められる。

2号溝跡－SD2－(第83・85図，写真83・84・146・147)

I区中央を南北に伸びる溝跡である。SD1の直下に位置し、5層上面で検出した。規模は溝幅2～2.3m、深さ30～39cmで、方向はN－5°－Wである。ただし、南端では深さ18cm前後で底面に段差があり、方向も変化するようである。埋土は3層で構成されるが、2・3層はグライ化している。断面形は鍋底状で、西壁には段差がある。重複関係は、SD1に切られSD4を切る。底面の標高は、ほぼ一定している。



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	146－1	1層	陶器	大鉢	口縁部破片	(34.2cm)	――	(3.1cm)	唐津、三島手像嵌大鉢、17C後半～18C
2	146－3	1層	陶器	碗	1/6	――	3.5cm	(2.6cm)	肥前染付、矢羽文、蛇目高台、18C
3	146－7	SD2 2層上	陶器	徳利？	口縁部小片	4.4cm	――	(2.0cm)	唐津、鉄絵→長石釉、16C末～17C初
4	146－10	SD2 3層上	陶器	大鉢	口縁部破片	――	――	――	美濃、黄瀬戸釉、内面の一部に煤釉、16C末～17C初
5	146－6	SB2 1層	陶器	輪花皿	1/4	(11.0cm)	4.2cm	(3.2cm)	志戸呂、鉄釉漬け掛け？、見込み蛇目、目跡、16C末
6	146－5	SD1 底面	陶器	皿	底部破片	――	4.5cm	(2.8cm)	志野、鉄絵(草文)、長石釉、削り出し高台、施上目、目跡4箇所、16C末～17C初
7	147－2	SD2 3層上	土師質土器	皿	口縁部破片	12.6cm	――	(2.0cm)	内外面ロクロナデ、油煙付着
8	147－1	SD2 3層	土師質土器	皿	1/4	13.2cm	7.4cm	3.5cm	内外面ロクロナデ、回転糸切痕調整、砂粒多く含む

No.	図版番号	出土遺構・層位	銭名	初鋳年	時代	書体	遺存度	備考
9	146－6	SD2 1層	元豊通宝	元豊元年（1078）	北宋	真書	完	中国銭

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	長さ	幅	厚さ	備考
10	147－4	SD2 底面	茎	鉄	(17.35cm)	2.2cm	0.6cm	長刀？　反りあり

第85図　近世出土遺物

遺物は唐津窯系皿片２点・徳利１点、美濃窯系黄瀬戸釉大鉢片２点・志野向付１点、土師質土器皿２点、中国銭１点、鉄滓１点、茎片（刀）１点、板片・曲物（側板）・木屑（切片）各１点、モモ？核19点、昆虫羽９点、土師器片４点、赤焼土器片２点、須恵器片３点、磨石・フレーク・スクレイパー・石錘？各１点、木片１点の合計56点が出土している。このうち、図示できるものは６点である。第85図３は唐津窯系鉄絵？徳利の口縁部破片である。長石釉が掛け

られている。同図4は美濃窯製品で黄瀬戸釉大鉢の破片である。この他、同一個体と思われる破片が1点あり、内面に緑釉が認められる。流し掛けかどうかは不明である。図示できなかった志野鉄絵向付は、撂座が付き鉄絵部分は黒色を呈する古手のものである。同図7・8は土師質土器皿である。いずれもロクロ調整で、8は底部回転糸切であるが板状圧痕はみられない。7は内面に油煙が付着し、燈明皿として使用されたものである。いずれもロクロ目は不明瞭である。同図9は中国銭（北宋）で、元豊通宝である。同図10は腐食の著しい刀の茎片と考えられる。反りがみられ、茎長が17cm以上ある点から長刀ではないかと予想される。茎尻の形状や目釘穴の有無など詳細は不明である。長刀であれば、伝世品の可能性もあろう。なお、中国磁器を含まない点は居住者の階層を反映している可能性があり、注目されよう。

3号溝－SD3－（第83図，写真85）

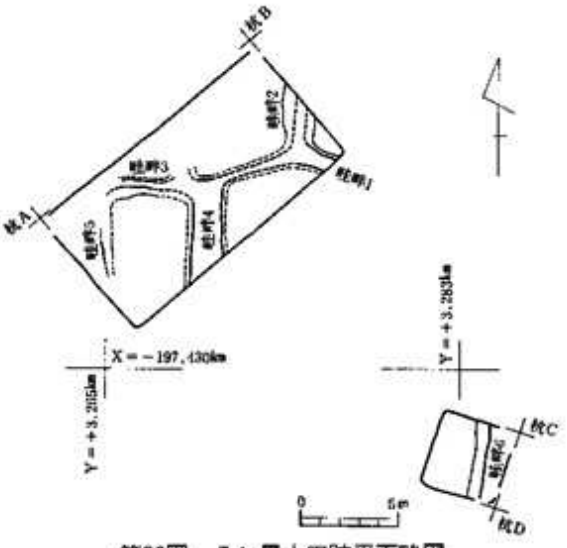
Ⅰ区北部に位置し、6b層上面で検出した。規模は溝幅21～48cm、深さ25cmで、方向はN－13°－Wである。断面形は「U」字形に近い。埋土は2層で構成される。7a層水田跡と重複が認められ、同時期かあるいは古いと判断される。出土遺物はない。

その他に、前述した7a層水田跡はこの時期に開田された可能性もある。また、Ⅰ区南部に位置する炭化物集中は、その一部がSD2の壁に流入しているものだが、ここから枝片71点・加工のある木片1点・野バラ？のトゲ1点・種子47点・米などの穀類と思われるもの37点・二枚貝の殻皮と思われる破片10点が出土している。

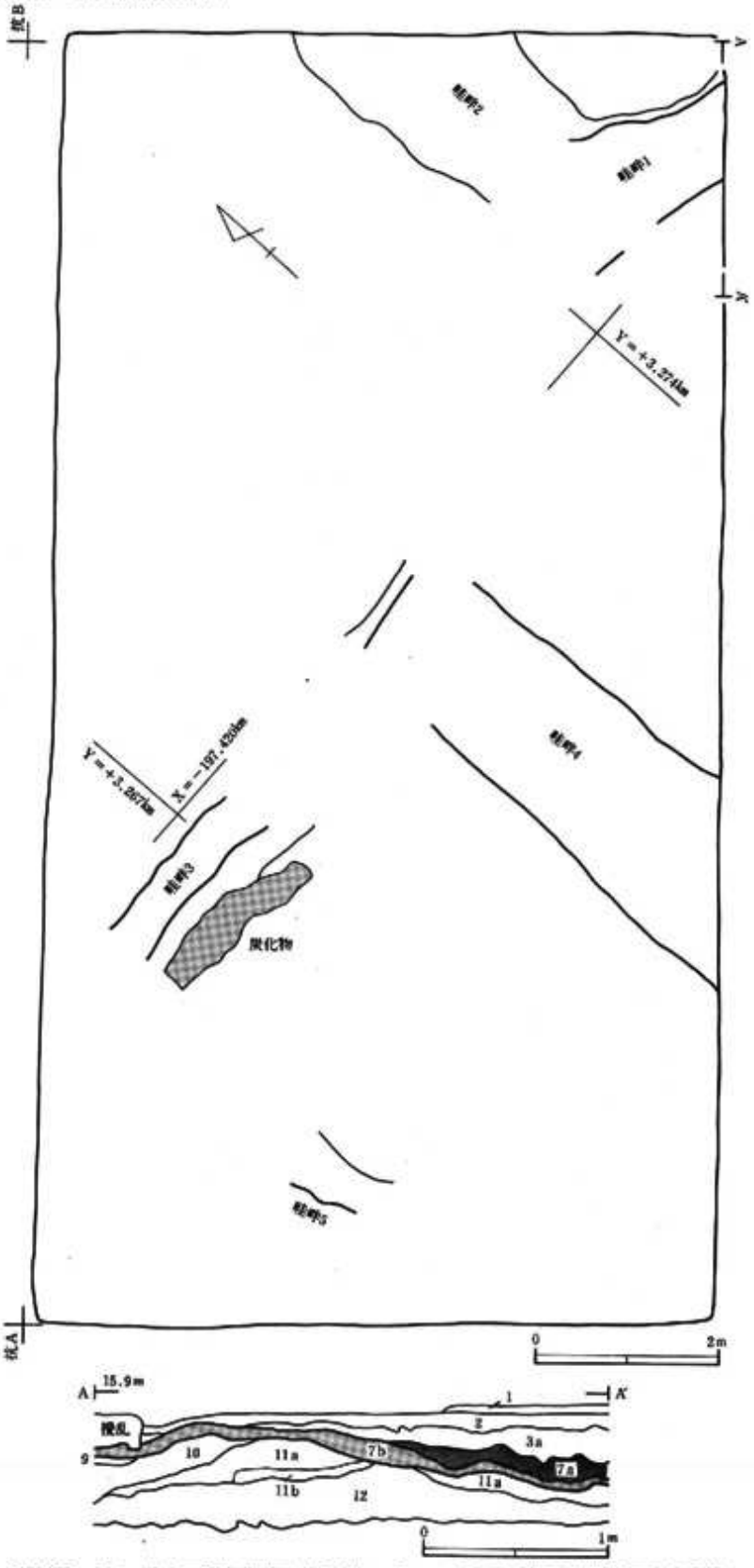
（3）7b層上面

7b層水田跡（第86・87図，写真86）

〈遺構状況〉　本水田では上層の遺構群によって攪乱を受け判然としない部分もあるが、畦畔をⅠ区で4条、Ⅱ区で1条検出した。畦畔1はN－76°－Wの方向を示し、下端幅は不明瞭であるが約1.4m前後である。畦畔2は約N－4°－Eの方向を示し、下端幅1.4～1.7mである。畦畔3は国家座標の東西方向におよそ平行し、下端幅は北辺側で判然としないが1m以上あったものと予想される。北辺が判然としない点は、その北側で7b層が検出できないことと関連するものと思われる。むしろ、構造的には段差に近い特徴をもつ。



第86図　7b層水田跡平面略図

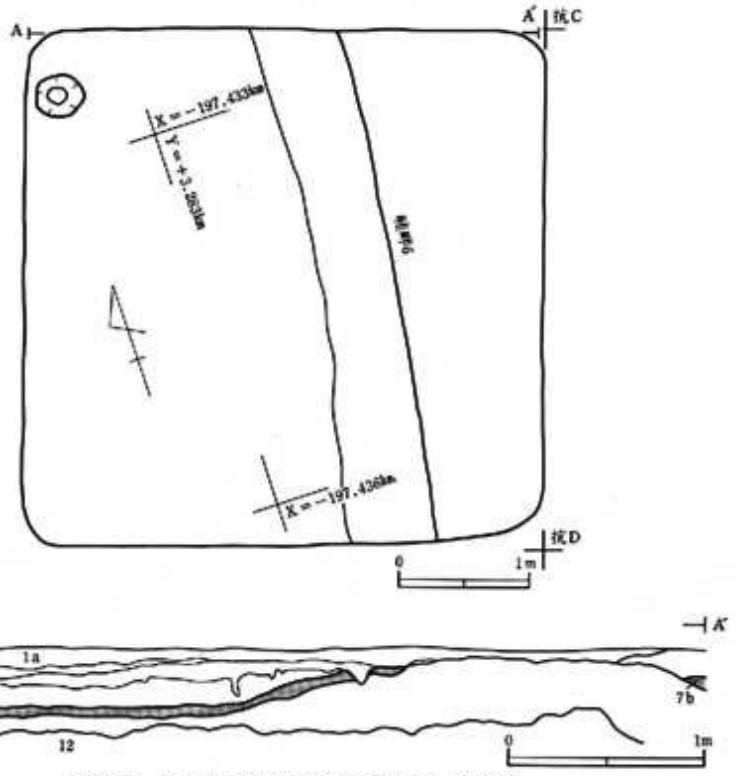


第87図　7b層水田跡平面図（I区）、7a・7b層水田跡断面図（I区）

畦畔4はN－4°－Eの方向を示し、下端幅2.0～2.5mで最も規模が大きい。非常に堅く締まっており、農道として使用された可能性があろう。また、前述したようにこの畦畔は、その後の時期にも属性をほとんど変えることなく、利用されている。畦畔5はI区の南端で一部を検出したにすぎず、特徴を摑めない。南北方向を示す畦畔であろう。畦畔6（II区）は約N－9°－Eを示し、下端幅は2m以上になる。畦畔の高さは傾斜地に立地するため11～25cmと高い。水田区画は6区画以上と考えられるが、その規模は不明である。田面は区画毎にレベル差が大きく、東側へ下がっていく。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片1点、種子1点である。また、畦畔3に沿って炭の集中がみられたが、その中よ

り炭化した米2点、種子3点などが出土している。時期決定資料は出土していないが、畦畔の一部が上層の遺構の時期に再利用されていることから、時期差はあまりないと予想される。



第88図　7b層水田跡平面・断面図（Ⅱ区）

（4）11a層上面

4号溝跡－SD4－

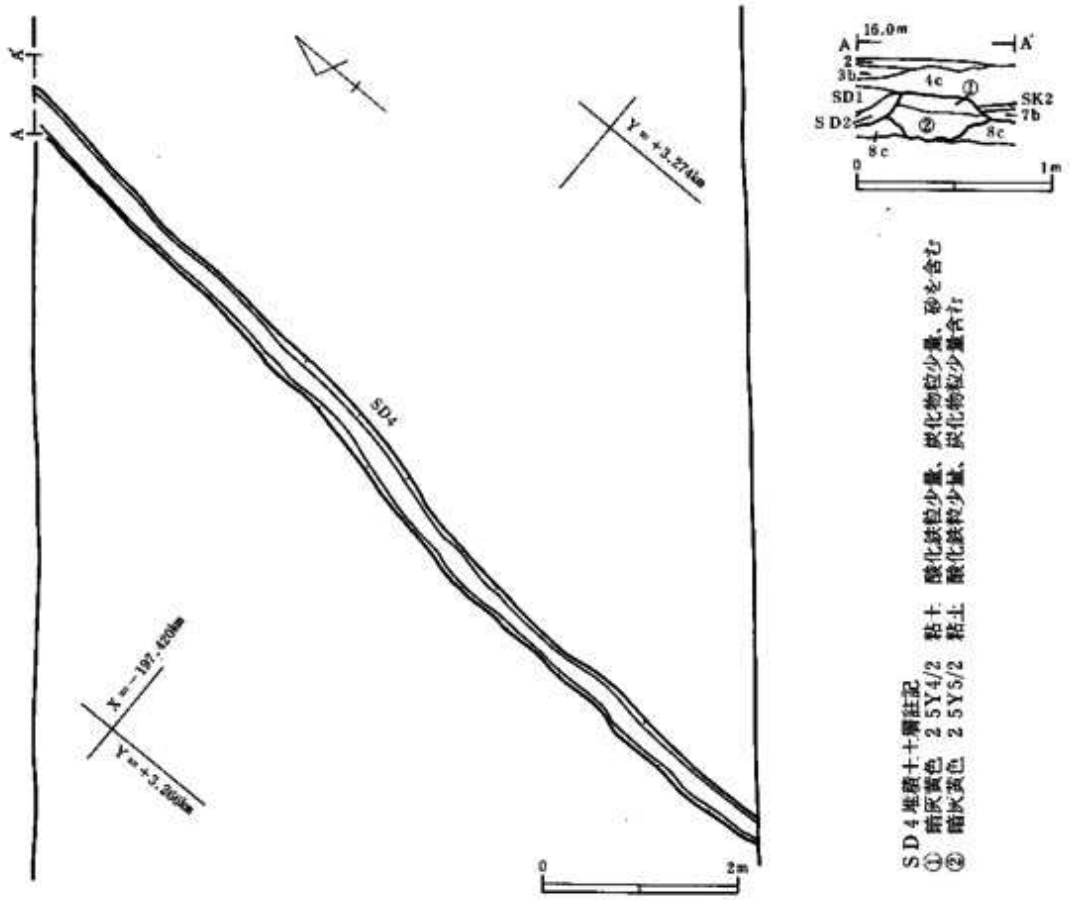
（第89図，写真87）

Ⅰ区中央を南北に伸びる溝である。明確ではないが、8a・8c・9・11a層などで面を成す時期があったと思われ、溝跡は北半では8c層、南半では11a層の各上面で検出した。規模は幅20～33cm、深さ12～22cmで、方向は約N－7°－Eである。断面は「U」字形に近く、埋土は大部分単層であるが、北端部では2層認められる。底面の標高差はほとんどない。出土遺物は皆無であるが、11a層中で在地産中世陶器が出土していることから中世の溝跡と考えられる。

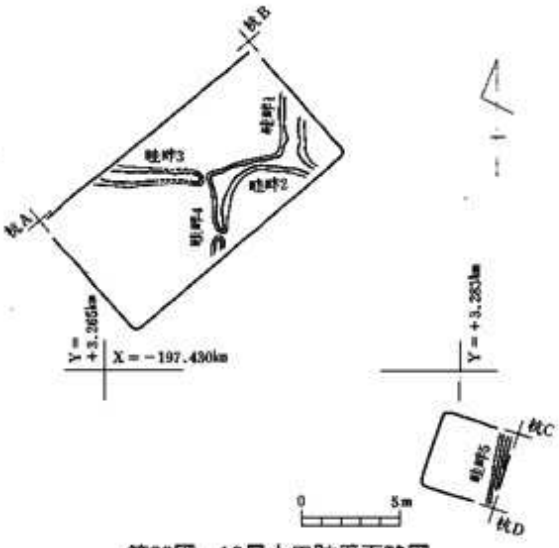
（5）12層上面

12層水田跡（第90～94図，写真88～90・147）

〈遺構状況〉　本水田跡ではⅠ・Ⅱ区合わせて5条の畦畔を検出した。畦畔1はN－3°－Eの方向を示し、下端幅は約1.2m前後である。畦畔2は湾曲して方向を示せないが、およそ東西方向を示し、下端幅は0.54～1.10mである。畦畔3はSD2に切られ分断しているが一連のもので、N－88°－Wの方向を示し、下端幅は0.8～0.9mである。畦畔4はN－3°－Eの方向を示し、下端幅は0.5～1mで、中央に水口が検出された。畦畔5はN－12°－Eの方向を示し、下端幅は0.55～0.6mである。畦畔の高さは田面の比高差が大きいため、同一畦畔であっても差が著しい。畦畔1では西壁で約10cm、東壁で約20cmの高さがある。以下、畦畔2は北壁約14cm、南壁約22cm、畦畔3は北壁約18cm、南壁約24cm、畦畔4は西壁約10cm、東壁約25cm、



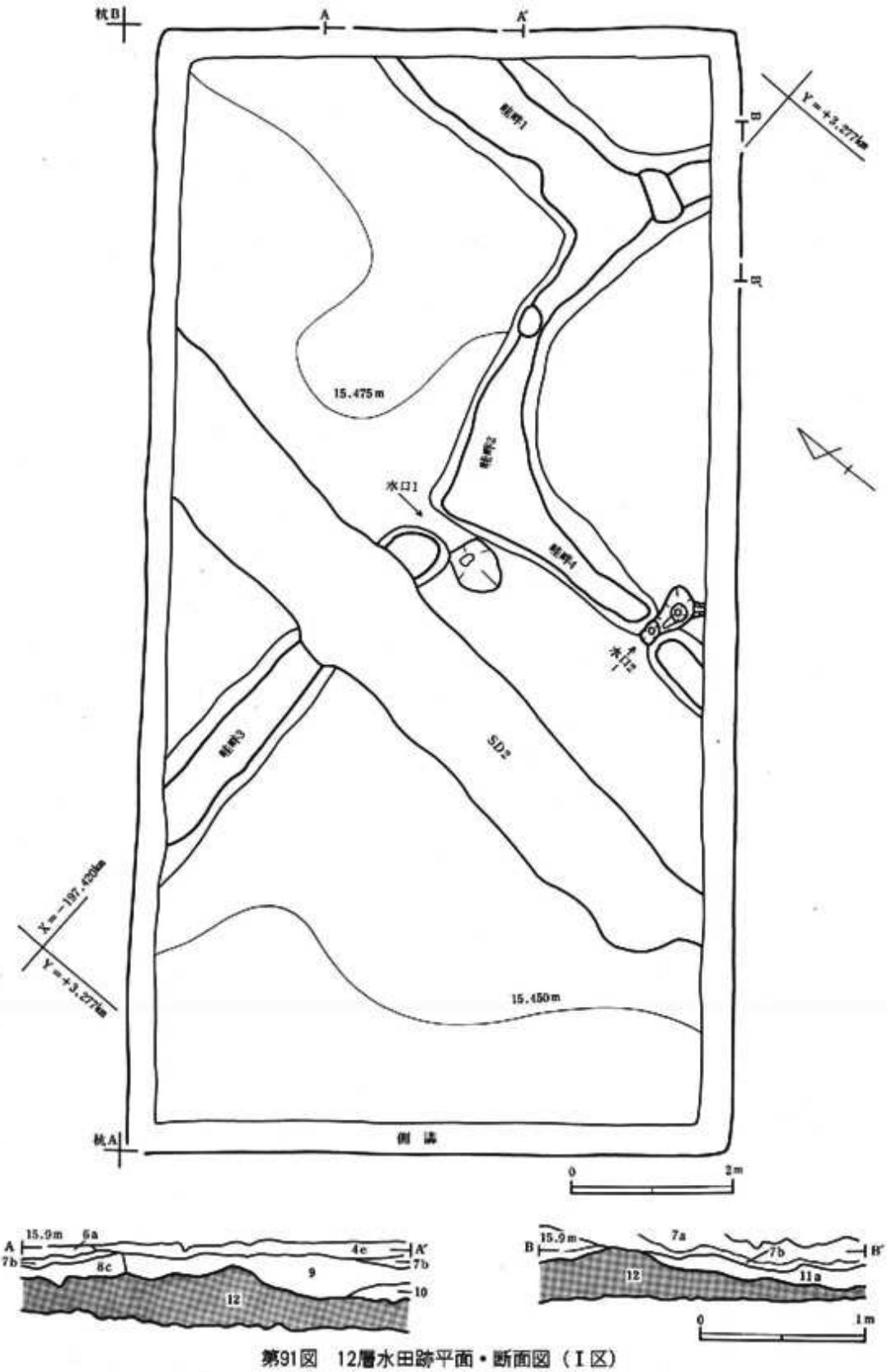
第89図　ＳＤ４平面・断面図



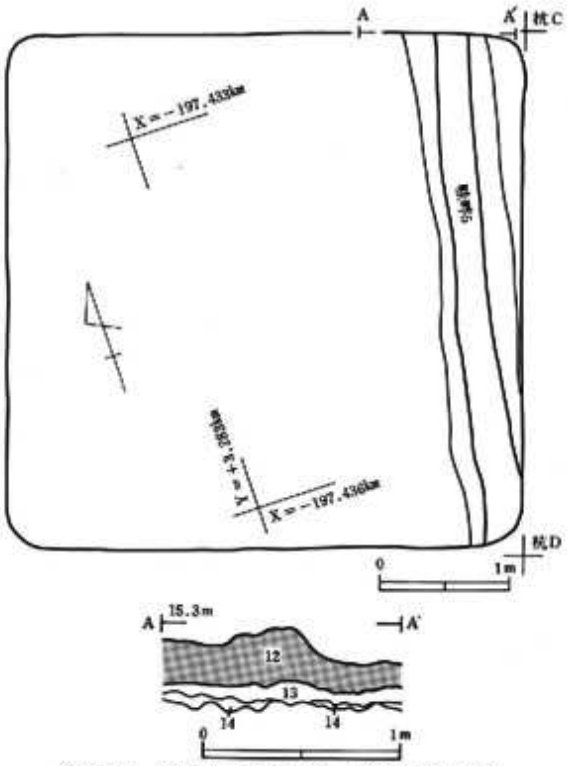
第90図　12層水田跡平面略図

畦畔５は西壁約12cm、東壁約18cmを測る。水口は二ケ所で検出した。水口１は畦畔３と２・４の付根部分、水口２は畦畔４の中央？にそれぞれみられる。流水があったことを示す浅い落ち込みが見られ、落ち込みのある水田区画へそれぞれ水が流れたことがわかる。特に、水口２の落ち込み内にはさらに柱穴状の深い穴がみられ、また、細い溝が南東方向へ伸びる。水田区画は６区画確認でき、区画毎に東へ下っていく。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片３点、赤焼土器坏片１点、須恵器瓶類１点、杭１点、木片１点が出土している。第94図１は須恵器横瓶



第91図　12層水田跡平面・断面図（Ⅰ区）



第92図　12層水田跡平面・断面図（Ⅱ区）

のロ縁部の破片と思われ、古墳時代末期頃のものと考えられる。これは、さらに下層の水田跡と関連するものであろう。本水田跡に関連するものは、図示できなかったロクロ使用の土師器・赤焼土器である。平安時代に属するものである。なお、本水田跡を覆った砂礫層（11ａ層）から在地産中世陶器が出土している。

（6）13層上面

13層水田跡？（第93・94図，写真92・147）

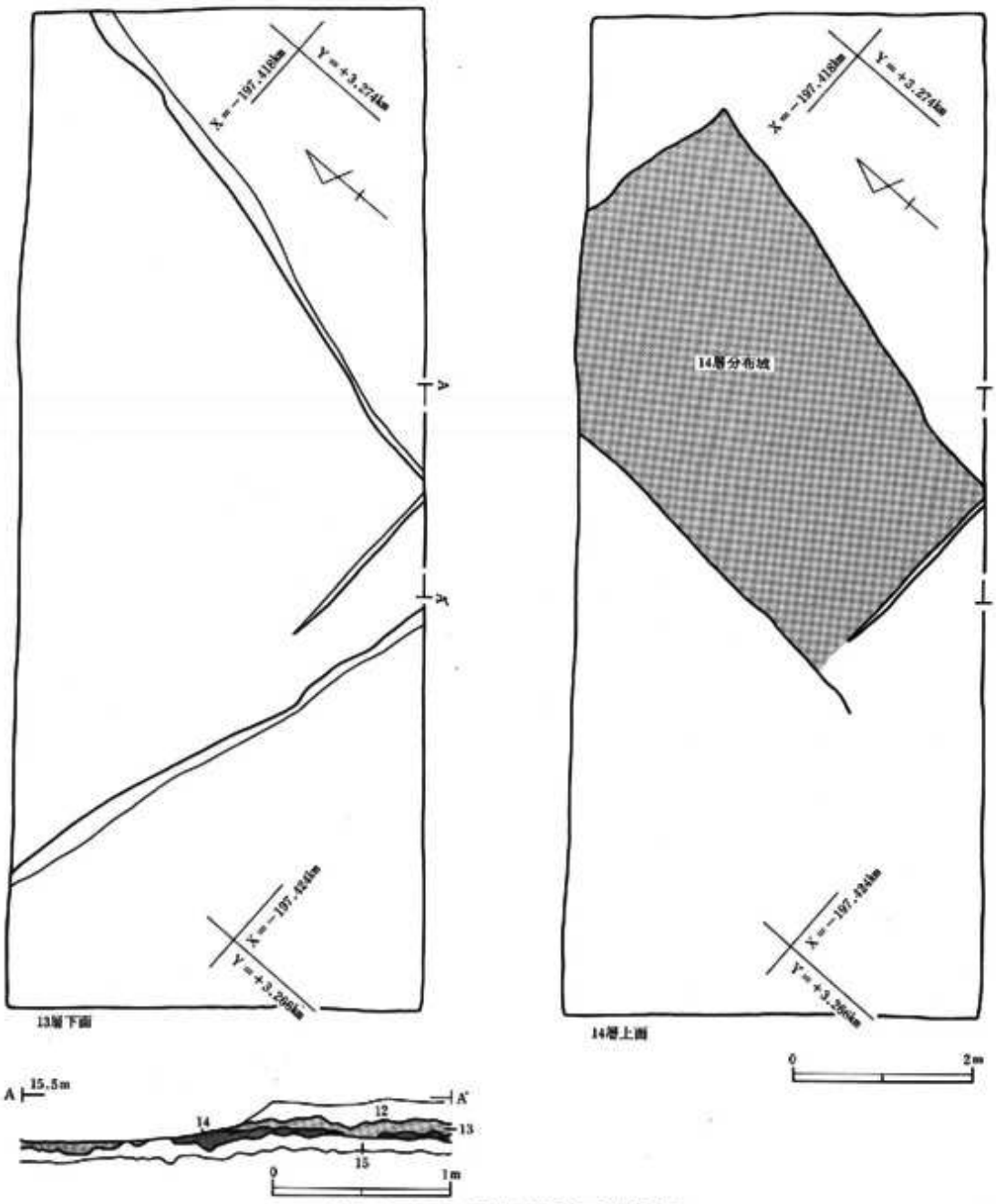
〈遺構状況〉　本層では、層上面で畦畔を検出することができなかった。しかし、下面すなわち14・15層上面で直線的に伸びる２方向の段差が検出されたことから、水田跡の可能性がある（仙台農耕文化勉強会：1990）。段差は、北側のものがN－14°－Eの方向を示し、南側のものがN－74°－Wの方向を示し、いずれも２～４cmの比高差がある。さらに段部分から離れるにしたがって比高差を増していく。また、南側の段差に平行して15層上面の一部に高まりが認められた。調査当初は13層水田跡？に伴う15層の擬似畦畔（斎野：1987）と理解したが、その後、14層がこれを覆う部分が確認できたことから、14層と関連する擬似畦畔と理解される。なお、13層中には火山灰小ブロックが散見された。さらに、下面の起状も認められる。

〈出土遺物〉　遺物は須恵器１点である（第94図２）。ロクロ目が縦位になり、これと平行して自然釉が流れる破片で、フラスコ形長頸瓶と考えられる。７世紀代のものであろう。しかし、時期決定資料にはならない。

（7）14層の状況（第93・94図，写真92・147）

13層を除去した段階で、Ⅰ区中央で14層が長方形に残存していることが判明した。また、Ⅱ区にも分布していることから局部的なものではない。前述したように、14層分布南端の15層の畦畔状の高まりが擬似畦畔と考えられることから、14層は水田跡の耕作土の可能性がある。下面の起状も認められる。14層の分布は、西辺がN－５°－W、北辺がN－78°－Wの方向を示し、南端の擬似畦畔と考えられるものはN－83°－Wの方向を示す。14層中には火山灰は認め

られない。遺物は14層より須恵器坏片が出土している。これは底部の破片で、回転ヘラ切りの痕跡が認められる。8世紀頃のものであろうか。また、15層上面では須恵器坏（第94図3）が出土している。坏身であろう。7世紀代のものと思われる。これらは、14層・15層の時期を推定できる資料であろう。



第93図　13・14層水田跡平面・断面図

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	147－10	12層	須恵器	横瓶？	口縁部破片	――	――	――	外面ロクロナデ
2	147－11	13層	須恵器	長頸瓶	体部破片	――	――	――	外面ロクロナデ、自然釉
3	147－12	15層上面	須恵器	坏	底部破片	――	――	――	内外面ロクロナデ、丸底

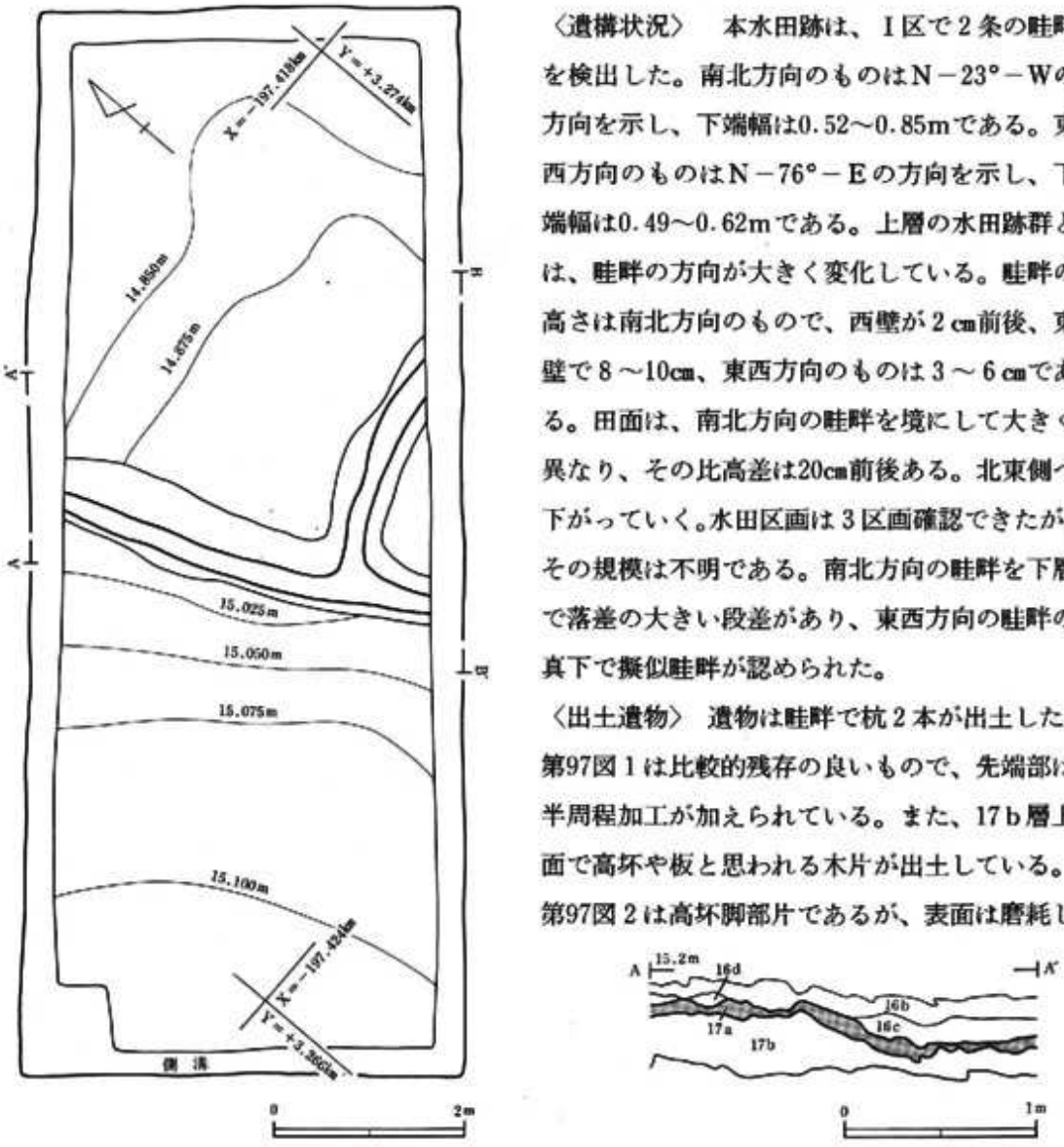
第94図　12～15層出土遺物

（8）17a層上面

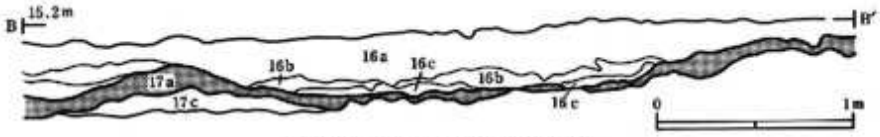
17a層水田跡（第95～97図，写真93・148）

〈遺構状況〉　本水田跡は、Ⅰ区で2条の畦畔を検出した。南北方向のものはN－23°－Wの方向を示し、下端幅は0.52～0.85mである。東西方向のものはN－76°－Eの方向を示し、下端幅は0.49～0.62mである。上層の水田跡群とは、畦畔の方向が大きく変化している。畦畔の高さは南北方向のもので、西壁が2cm前後、東壁で8～10cm、東西方向のものは3～6cmである。田面は、南北方向の畦畔を境にして大きく異なり、その比高差は20cm前後ある。北東側へ下がっていく。水田区画は3区画確認できたが、その規模は不明である。南北方向の畦畔を下層で落差の大きい段差があり、東西方向の畦畔の真下で擬似畦畔が認められた。

〈出土遺物〉　遺物は畦畔で杭2本が出土した。第97図1は比較的残存の良いもので、先端部は半周程加工が加えられている。また、17b層上面で高坏や板と思われる木片が出土している。第97図2は高坏脚部片であるが、表面は磨耗し



第95図　17a層水田跡平面・断面図



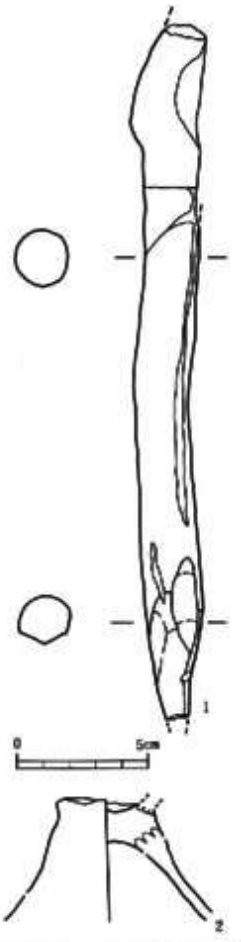
第96図　17a層水田跡断面図

て特徴は不明である。器形から判断して古墳時代中期南小泉式かそれ以前と考えられる。その他に磨耗して明確ではないが、17a層で土師器片2点、縄文土器片1点が出土している。

（9）その他の出土遺物（第98図，写真147・148）

基本層1層では陶器8点・磁器13点・須恵器3点・瓦2点・タイル1点が出土している。陶器には唐津・大堀・堤等の産地のものが出土している。第85図1は唐津象嵌大鉢で17世紀後半から18世紀前半頃のものであろう。大堀や堤の製品には灰釉碗・鉄釉擂鉢等があり、いずれも19世紀代のものであろう。磁器には染付碗・瓶、白磁小付、赤絵碗？等があり、肥前、瀬戸・美濃等がある。およそ、18～20世紀のものである。図示できるものは第85図2の肥前染付矢羽文碗で18世紀のものである。これらはⅠ・Ⅱ区から出土したものだが、本遺跡では比較的多いほうで、江戸時代以降近隣に居住城が存在するためであろう。以下はすべてⅠ区から出土したもので層位別に述べる。2層：瓦・土師器各1点、3a層：土師器・須恵器各1点、4a層：須恵器1点、5層：土師器4点、木片1点、8b層：土師器1点、8c層：土師器1点、9層：土師器坏1点、11a層：在地産陶器甕（中世）、土師器各1点、18層上面：縄文土器1点、22層：縄文土器2点（1点は沈線区画の無文帯をもつ）、石器1点である。

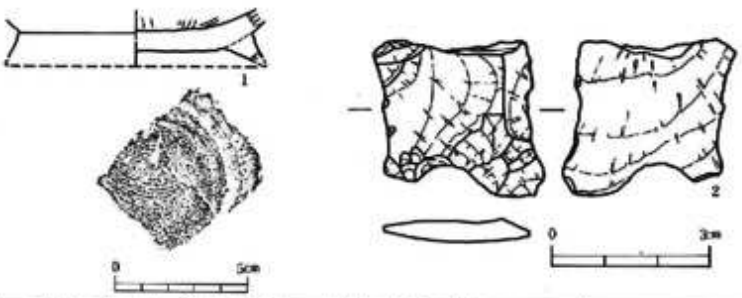
2層以下で図示できたものは、第8b層の第98図1の土師器高台付坏でロクロ調整後内面ヘラ磨き調整をするが、黒色処理を行っていない。底部切り離しは回転糸切りで、断面三角形の高台を貼付している。第98図2は22a層出土のノッチと思われる石器である。22b層より出土した無文帯をもつ土器は、縄文時代中期のものと考えられる。



No.	図版番号	出土遺構	種別	材質	素材	長さ	幅・長径	厚さ	先端加工	表面加工	備考
1	148－6	17a層	鉄	広葉樹	丸木	(26.7cm)	2.0cm	――	3方向	――	先端部・頭部破損

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特記
2	148－1	17b層上面	土師器	高坏	1/5	――	――	――	内外面磨滅、東小泉式期？

第97図　17a層水田跡出土遺物



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	147－8	8b層	土師器	高台付坏	底部破片	――	――	――	内外面ロクロナデ、内面著なミガキ、回転糸切無調整

No.	図版番号	出土遺構・層位	名称	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
2	148－5	22層上部	ノッチ？	3.0cm	2.9cm	0.4cm	4.0g	珪質岩	――

第98図　その他の出土遺物

4．下層の調査（写真94～96）

旧石器時代に相当する層の調査は、1.8×1.3mの調査区を設定し、26～36層まで精査を行った。富沢遺跡では一般に泥炭質粘土層下に縄文時代の灰白色粘土層が堆積しているが、本地点ではそのような特徴は見られない。従って、どの層から旧石器時代に相当するかは決定しがたい。層の特徴は24層以下が堅く締まり、特に28・29層（緑色味が強い）で著しい。30層以下が軟質となる。旧石器時代相当と考えられる植物遺体を含む層は、30a・33～35層である。34層は腐植質粘土層であるが、30a・33層中では腐植質粘土層が複数介在するが、発達が悪く、いずれも0.5cm前後の層厚である。30a層では葉・小枝が、33～35層では大型の枝・幹・毬果が出土している。35層で根株が出土している。石器等の人工物は出土していない。

5．近世遺構について

近世遺構については、4・5層上面検出遺構及び7a層水田跡がある。このうち、5層上面遺構を1期。4層上面遺構を2期として述べる。ただし、7a層水田跡は時期を特定できず、むしろ両時期に存在したと理解したい。さて、1・2期とも南北溝を境にして、居住域と水田・開地（土坑群）に区別できる。遺構の種類・配置・方向が共通し、継続性が認められる。1・2号溝跡は、その特徴から防禦機能は極めて薄く、用水路に副次的に居住域の区画機能を持たせたものと考えられる。しかしこの点は重要であり、用水の支配に一定の影響を及ぼすものであろう。さらに、第30次調査で検出された水路（幅約3m）は中世から近世以後まで継続使用され、江戸時代には絵図との対比から村境の水路と考えられている（太田他：1988、仙台市教育委員会：1989）。この水路は、本調査区の北側を東流して第30次調査地点へ至ると予想され、直接的な関連が出てこよう。次に、居住域及び居住者の性格について述べる。1期の2号

溝跡から唐津系の皿や徳利、美濃窯の大鉢・志野向付，土師質土器皿，刀等が、2号竪穴建物跡では志戸呂輪花皿・土師質土器皿が出土している。このような遺物組成のあり方は、武士の屋敷地を反映したものと思われ居住域は屋敷の一部と理解される。しかし、現状では中国陶磁器が含まれておらず、武士の階層差を反映しているものと考えられる。したがって、検討の余地を残すが、在地領主の被管層の屋敷跡と推定しておきたい。

時期については、1期が美濃の大窯製品と考えられ、県内初の出土例となった志戸呂も同時期と考えてよく、これらは16世紀末期頃、2期が1号溝出土の唐津皿が肥土日をもつことから、16世紀末～17世紀初頭頃と考えられる。また基本層の1・2層の陶磁器が、最も古いものでも17世紀後半以後であることも近世遺構の時期を考える傍証となろう。

6．遺構の所属年代とまとめ

近世の遺構については前述したので、ここではさらに下層の遺構群について述べる。

1．検出遺構には7b層・12層・17a層水田跡がある。水田跡の可能性の高いものに13層・14層がある。水田跡以外では11a層上面検出の4号溝がある。7b層水田跡は畦畔の一部が7a層水田跡（近世1期）に利用されていることから、16世紀前葉～後葉と予想される。12層水田跡は、直上の11a層中に在地産中世陶器が出土し、また層中に表杉ノ入式の土師器や赤焼土器が出土することから、平安時代（10c）～鎌倉時代に収まるものであろう。11a層上で検出した4号溝は、12層水田跡と7b層水田跡の間に収まることから、およそ南北朝時代～室町時代前半であろう。13層は層中に灰白色火山灰が散見されることから平安時代のものである。14層は出土遺物から古墳時代末～奈良時代と考えられる。17a層水田跡も出土遺物から古墳時代中期頃のものと考えられる。12層水田跡及びその上層の遺構は真北を基準としており、強い踏襲性が認められる。水田跡の可能性のある13・14層も同様のことが言えるかもしれない。17a層水田跡は、これらとは異なるようである。なお、15層が水田土壌かどうか今後検討を要する。

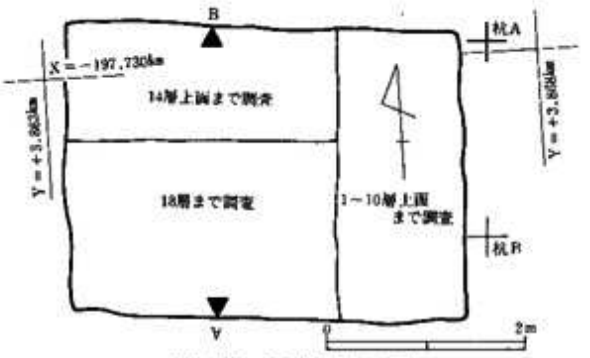
2．17c・22b層で縄文土器、22a層で石器が出土している。22b層出土の縄文土器の1点は中期に属するものと考えられる。また、18層・25層の上面で樹根跡、23a層上面で小規模な自然流路が検出された。

3．旧石器時代に相当すると考えられる層の内、30a層・33層～35層で葉・枝・毬果等が出土している。また、根株は35層上面で検出されている。本調査地点が、現状では樹木を含む層の分布の西限である。

第11節　富沢遺跡第67次調査

1．調査方法

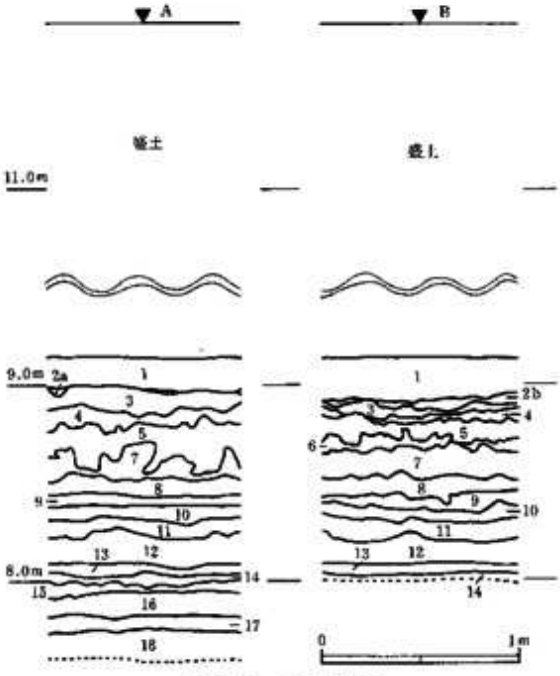
調査区の設定面積は約4.0×3.0m（12㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。10層上面までは、調査区全面の精査を実施し、10層以下は約2.8×3.0m、14層以下はさらに約2.8×1.8mに調査区を縮小した。遺構の測量は杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。（杭A：X＝－197.730034m　Y＝+3.867467km　杭B：X＝－197.731880km　Y＝+3.867373km）。



第99図　調査区設定図

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別18層、細別では19層が確認された。各層の土質は6層までが粘土、7層以下は泥炭あるいは粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土である。なお、2b層は粗砂の砂層となっている。現代のものを除く明確な水田土壌は2a・3・4・5層の各層である。また、6層は下面の起伏状況及び下層ブロックを巻き上げていることより、水田土壌の可能性が高い。遺物出土層は1・3層である。3・4・5層からは灰白色火山灰が検出されている。これらの火山灰は、本来5層中に入っていたものが、後の3・4層の攪乱により3・4層中に巻き上げられたものである。各層の傾きとしては、1～4層までが北東側へ緩やかに下り、7層以



第100図　基本層序

層序	上	色	土	質	厚	厚	酸化鉄	混	入	物	成	因	備	考
1	黒色	10YR2/1	粘土		20cm前後		――	炭化物・細砂			水田耕作(現代)		下面若干起伏	
2 a	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト		1 cm～8 cm		上面に集積	細砂多量			水田耕作		下面著しく起伏・不連続な分布	
2 b	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂		1 cm～7 cm		上面に集積	――			自然堆積		粗砂層・北側に部分的分布	
3	黒褐色	2.5Y3/1	粘土		1 cm～14cm		薄い管状斑紋	灰白色火山灰粒微量・下層ブロック			水田耕作		下面著しく起伏・粘性強	
4	黒色	2.5Y2/1	粘土		1 cm～15cm		薄い管状斑紋	φ1cm前後の灰白色火山灰ブロック少量・下層ブロック			水田耕作		下面著しく起伏・粘性強	
5	黄灰色	2.5Y4/1	粘土		1 cm～30cm		薄い管状斑紋	φ3cm前後の灰白色火山灰ブロック多量・下層ブロック			水田耕作		下面著しく起伏・東側は部分的分布・粘性強	
6	黒色	10YR2/1	粘土		1 cm～10cm		――	植物遺体・下層ブロック			水田耕作？		下面著しく起伏・北西側に部分的分布	
7	黒色 黒褐色	10YR1.7/1 10YR3/1	泥炭		2 cm～15cm		――	粘土分少量			自然堆積		互層・下面起伏	
8	暗赤褐色 黒褐色	5 YR3/2 5 YR2/2	泥炭		10cm前後		――	粘土分少量			自然堆積		互層	
9	暗灰黄色	2.5Y4/2	泥炭質粘土		2 cm～10cm		――	――			自然堆積		――	
10	暗赤褐色 暗灰黄色 黒褐色	5 YR3/2 2.5Y4/2 5 YR2/2	泥炭		6 cm～10cm		――	粘土分少量			自然堆積		互層	
11	灰黄褐色	10YR4/2	泥炭質粘土		6 cm～13cm		――	――			自然堆積		下面若干起伏	
12	黒色 灰黄褐色	10YR1.7/1 10YR5/2	泥炭		15cm前後		――	粘土分少量			自然堆積		互層	
13	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土		6 cm前後		――	――			自然堆積			
14	黒褐色	10YR3/1	泥炭質粘土		3 cm～6 cm		――	――			自然堆積		下面起伏	
15	灰黄褐色	10YR6/2	泥炭質粘土		2 cm～8 cm		――	――			自然堆積		黒褐色の斑点	
16	黒褐色 黒色	10YR3/1 10YR2/1	泥炭質粘土		12cm前後		――	――			自然堆積		互層	
17	黒褐色 黒色	10YR3/1 10YR1.7/1	泥炭質粘土		8 cm前後		――	――			自然堆積		互層	
18	黒褐色 黒色	10YR3/1 10YR2/1	泥炭質粘土		10cm以上		――	――			自然堆積		互層	

下ではほぼ水平となる。

なお、当調査区の基本層序は、隣接調査区の基本層序との対応関係が認められる

3．検出遺構と出土遺物

（1）4層上面

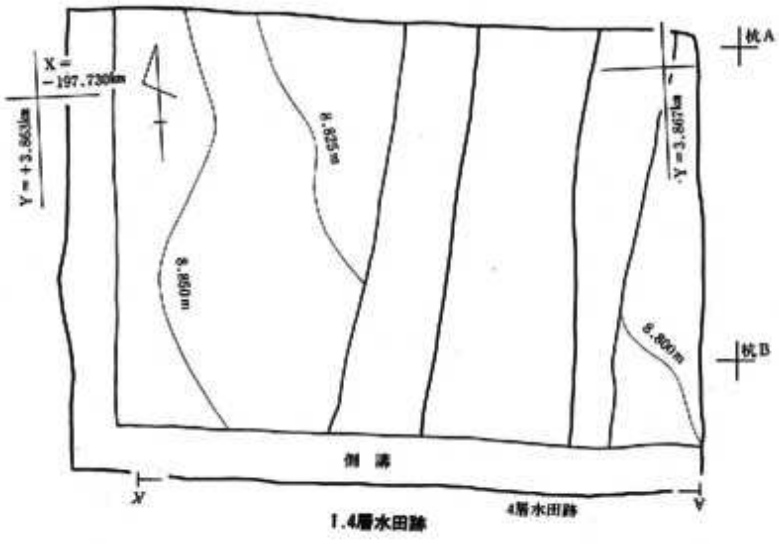
4層水田跡（第101図，写真97・98）

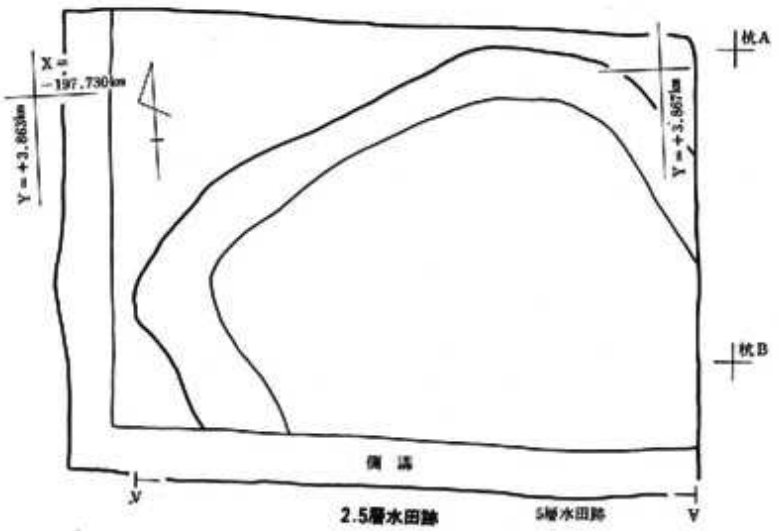
畦畔が1条検出されたのみである。また、出土遺物は皆無であった。畦畔の検出面は3層中である。畦畔はほぼ南北方向（N－9°－E）とり、直線的に伸びる。畦畔は耕作土と同一土壌－4層－を盛り上げ作られている。下端幅は約1.5mで、耕作土上面からの高さは4cm前後である。水口は検出されていない。耕作土の土質は粘性の強い粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは直上層の水田耕作土によって攪乱を受け一定ではないが、平均で約10cm位である。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は8.85m前後で、全面的には北東方向の緩やかな下り傾斜を示すが、畦畔を挟んだ東西の水田面の比較では、東側の方がやや低くなっている。なお、直下の5層水田跡上面の畦畔と考えられる段差が、当期に伴う擬似畦畔Bであった場合、検出された畦畔は位置・方向が異なり、3層水田跡に伴う擬似畦畔Bの可能性もある。

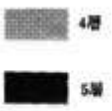
（2）5層上面

5層水田跡（第101図，写真99）

上面で段差が検出されたのみで、出土遺物も皆無であった。段差の比高差は4～8cmで、段差境界ラインは南東側に開いた「コ」字状を呈する。段差下面の北東－南西方向の長さは約2.8mである。段差下面は直上層の4層水田跡の耕作に伴う攪乱によって耕作土が薄く、しかも断片的にしか残存していない。耕作土の下面の起伏は顕著で、段差下面の全面及び段差上面の一部では、7層上部まで耕作が及んでいる。そのためこの部分では、直下層の6層は存在していない。耕作土の土質は粘性の強い粘土で、灰白色火山灰ブロックを多量に含み、下部には下層ブロックを含む。耕作土の厚さは、段差下面のように、直上層の影響で、耕作土の認められない部分もあるが、段差上面のように30cmにも及ぶ部分もある。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。段差下面の標高は8.75m前後であるが、耕作土の削平が著しいため、傾斜・高低差については不明である。







第101図　4・5層水田跡平面・断面図

5層水田跡上面の段差であるが、区画を呈するような形状となることより、段差及びその上面は畦畔の一部、すなわち北東－南西方向（N－57°－E）の畦畔1条とこれにほぼ直角に交わる2条の畦畔の一部と考えられる。しかしながら、畦畔部分以外では耕作土が直上層の4層水田跡の耕作の影響によってほとんど残存しておらず、5層水田跡の畦畔と考えられるものは、4層水田跡に伴う擬似畦畔Bの可能性もある。

（3）その他の出土遺物

1層・3層より図化不能な須恵器、摩滅した土師器、陶器の細片が5点ほど出土した。この内、陶器は全て1層からの出土で、近世及びそれ以降のものである。

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構としては、2a層・3層・4層・5層の4期の水田跡が検出された。また、6層は、その層相より水田土壌の可能性が高い。

2．2a層・3層は耕作土のみの検出であるが、層の対応が可能であった隣接第57・30次調査区で畦畔が検出されることにより水田跡として認定した（表13）。

3．4層水田跡・5層水田跡の畦畔・畦畔と考えられる段差は、それぞれ直上層の3層水田跡、4層水田跡に伴う擬似畦畔Bの可能性もある。

4．検出遺構・各層の所属年代であるが、出土遺物が皆無、あるいは数量的に乏しいことより出土遺物からの時代決定は困難であるが、5層中に灰白色火山灰が混じること、第57・30次調査区との層の対応関係が可能であったことより（表13）、以下のような所属年代が想定される。

- 2a層水田跡－近世以降
- 3層水田跡－近世
- 4層水田跡－中世
- 5層水田跡－平安時代（灰白色火山灰降下後）
- 6層－平安時代（灰白色火山灰降下前）以前

表13　富沢遺跡第67次・57次・30次調査区層位対応表

第67次		第57次		第30次		
層位	検出遺構	層位	検出遺構	層位	検出遺構	所属年代
2a	水田耕作土	3a	水田耕作土	2c	畦畔	近世以降
3	水田耕作土	4	畦畔	3	畦畔	近世
4	畦畔	6	水田耕作土	5	畦畔	中世
5	畦畔（段差）	――	――	6	畦畔	平安（灰白色火山灰降下後）
――	――	――	――	7	畦畔	平安（灰白色火山灰降下以前）
6	水田耕作土？	――	――			

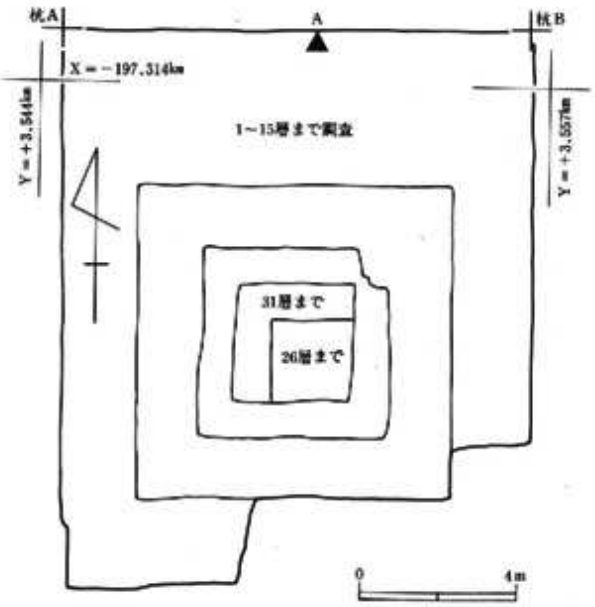
第12節　富沢遺跡第68次調査

1．調査方法

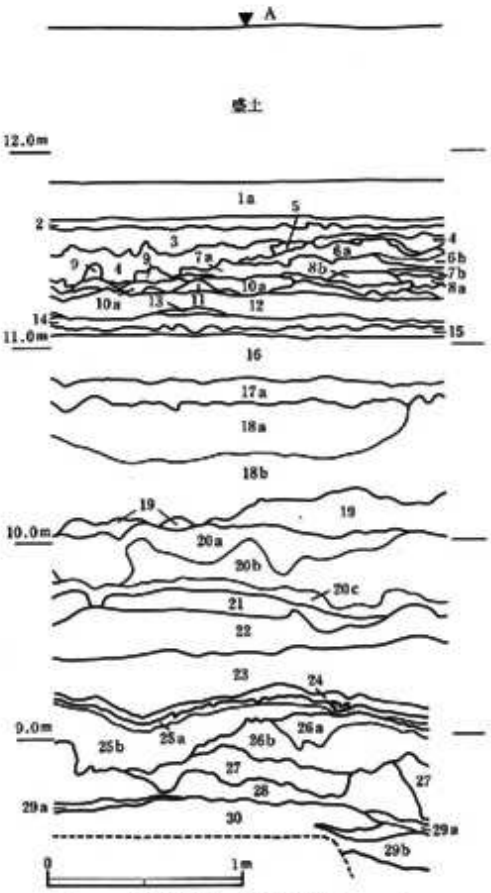
調査区の設定面積は約12×13m（151㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）、そして1層下の撹乱（南部）までを重機で除去し、以下は人力によった。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。15層上面までは調査区全面を精査し、それ以下の層は第102図のように順次縮小して26層上面まで調査し、以下31層まではトレンチによる層の確認に留めた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：−197.312663km、Y＝+3.544498km、杭B：X＝−197.312505km、Y＝+3.556502km）。

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別31層、細別では53層が確認された。層の特徴は、1・2層が砂粒を含む粘土質シルト、3～9層は粘土で、水路などからの氾濫と思われる砂層が介在する。10a～16層は泥炭質粘土・粘土、17・18層は粘土、19層以下は砂・



第102図　調査区設定図



第103図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1a	オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土質シルト	4cm～10cm	———	砂少量・礫少量	水田耕作(現代)	グライ化
1b	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	粘土質シルト	3cm～6cm	有（多量）	砂少量	水田耕作	——
2	灰色	7.5Y4/1	粘土質シルト	4cm～10cm	有（少量）	炭化物粒少量・砂多量・礫	水田耕作？	下面若干起伏
3	暗灰色	N4/1	粘土	3cm～19cm	有（少量）	マンガン粒少量・炭化物粒少量・砂少量・小礫	水田耕作	下面起伏
4	黒色	5Y2/1	粘土	3cm～20cm	———	マンガン粒少量・砂少量・小礫少量	水田耕作	下面起伏
5	黒色	10YR1.7/1	粘土	3cm～12cm	有（少量）	炭化物少量・砂多量・下層粘土ブロック	水田耕作	下面起伏・部分的分布
6a	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	2cm～8cm	有（多量）	マンガン粒少量・砂少量	水田耕作	部分的分布
6b	オリーブ褐色	2.5Y4/4	砂	4cm～10cm	-	小礫少量	自然堆積	グライ化・河川堆積？
7a	オリーブ黒色	5Y2/2	粘土	5cm～12cm	有（少量）	火山灰ブロック・砂少量	水田耕作	下面起伏
7b	灰色	7.5Y4/1	砂	10cm～16cm	———	小礫少量	自然堆積	河川堆積？
8a	黒色	5Y2/1	粘土	3cm～6cm	———	砂多量	自然堆積	部分的分布
8b	黒色	5Y2/1	粘土	4cm～7cm	———	下層粘土ブロック	自然堆積	——
9	黒色	10YR1.7/1	粘土	4cm～8cm	———	植物遺体・黄褐色粘土ブロック	水田耕作	下面起伏・部分的分布
10a	黒褐色	10YR3/2	泥炭質粘土	6cm～14cm	———	下層粘土ブロック	水田耕作？	下面起伏
10b	黒色	10YR2/1	粘土	3cm前後	———	炭化物・植物遺体・下層粘土ブロック少量	自然堆積	部分的分布
11	黒褐色	10YR2/2	泥炭質粘土	4cm～12cm	——	植物遺体	水田耕作？	下面起伏
12	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	6cm～18cm	——	植物遺体多量・下層粘土ブロック	自然堆積	——
13	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	2cm～9cm		植物遺体少量	自然堆積	——
14	オリーブ黒色	7.5Y2/2	粘土	4cm～12cm	——	植物遺体少量	水田耕作	下面若干起伏
15	黒色	5Y2/1	泥炭質粘土	3cm～9cm	———	植物遺体多量・オリーブ褐色粘土層との互層	自然堆積	互層
16	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	22cm前後	———	植物遺体多量	自然堆積	——
17a	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	18cm前後	———	砂・植物遺体	自然堆積	——
17b	灰オリーブ色	7.5Y5/2	粘土	5cm～22cm		砂少量・植物遺体	自然堆積	グライ化
18a	オリーブ灰色	2.5GY5/1	粘土	10cm～30cm	———	砂多量・植物遺体少量	自然堆積	グライ化
18b	オリーブ灰色	2.5GY6/1	粘土	10cm～40cm	———	砂少量・植物遺体少量	自然堆積	グライ化
18c	明緑灰色	7.5GY7/1	粘土	4cm～12cm	———	砂・植物遺体	自然堆積	グライ化
19	緑灰色	7.5GY6/1	砂	10cm～36cm	———	植物遺体少量・粘土ブロック	自然堆積	グライ化
20a	緑灰色	5G6/1	粘土	8cm～42cm		砂・植物遺体少量	自然堆積	グライ化
20b	緑灰色	5G5/1	砂	4cm～38cm	——	植物遺体少量・粘土ブロック	自然堆積	グライ化
20c	緑灰色	10G6/1	粘土質シルト	14cm～31cm	———	細砂	自然堆積	グライ化
20d	緑灰色	5G6/1	砂	4cm～24cm	———		自然堆積	グライ化
20e	緑灰色	7.5GY6/1	粘土質シルト	14cm前後	———	——	自然堆積	グライ化
20f	オリーブ灰色	5GY6/1	粘土質シルト	3cm前後	———	植物遺体	自然堆積	グライ化
21a	緑灰色	7.5GY6/1	砂	3cm～8cm	———	——	自然堆積	グライ化
21b	緑灰色	10GY6/1	粘土質シルト	10cm～40cm	——	粘土	自然堆積	グライ化
21c	緑灰色	10GY6/1	粘土質シルト	4cm～14cm	——	砂	自然堆積	グライ化
21d	オリーブ灰色	5GY5/1	砂	10cm～50cm	———	φ5mm内の小礫少量・粘土	自然堆積	グライ化
21e	緑灰色	5G5/1	砂	8cm～12cm	——	粘土質シルト	自然堆積	グライ化
21f	オリーブ灰色	5GY5/1	粘土質シルト	17cm～29cm		——	自然堆積	グライ化
22	緑灰色	10GY6/1	粘土質シルト	5cm～30cm	——	砂	自然堆積	グライ化
23	緑灰色	7.5GY5/1	砂	16cm～40cm	———	炭化物粒少量	自然堆積	グライ化
24	灰オリーブ色	7.5Y5/2	粘土	6cm～16cm	———	植物遺体（葉・茎・根菓）	自然堆積	グライ化
25a	黒褐色	10YR2/2	腐植質粘土	6cm前後	———	植物遺体多量(樹木・根菓)	自然堆積	-
25b	黒褐色	7.5YR3/1	粘土	3cm～24cm	———	炭化物少量・砂・植物遺体多量（腐植）	自然堆積	開墾による土壌化
26a	緑灰色	7.5Y5/1	砂質シルト	10cm～26cm	——	φ5mm前後の礫	自然堆積	グライ化
26b	緑灰色	7.5GY5/1	粘土質シルト	7cm～23cm		——	自然堆積	グライ化
27	緑灰色	7.5GY5/2	砂質シルト	4cm～18cm	-	——	自然堆積	グライ化
28a	緑灰色	7.5GY5/1	粘土質シルト	14cm～40cm	——	——	自然堆積	グライ化
28b	緑灰色	7.5GY5/1	粘土質シルト	6cm～14cm	———	細砂	自然堆積	グライ化
29a	オリーブ灰色	5GY5/1	粘土	4cm前後	———	——	自然堆積	グライ化
29b	オリーブ灰色	5GY5/1	粘土質シルト	6cm前後	-	——	自然堆積	グライ化
30	緑灰色	7.5GY5/1	シルト	20cm前後	——	——	自然堆積	グライ化
31	緑灰色	10GY5/1	砂	18cm以上	———	——	自然堆積	グライ化

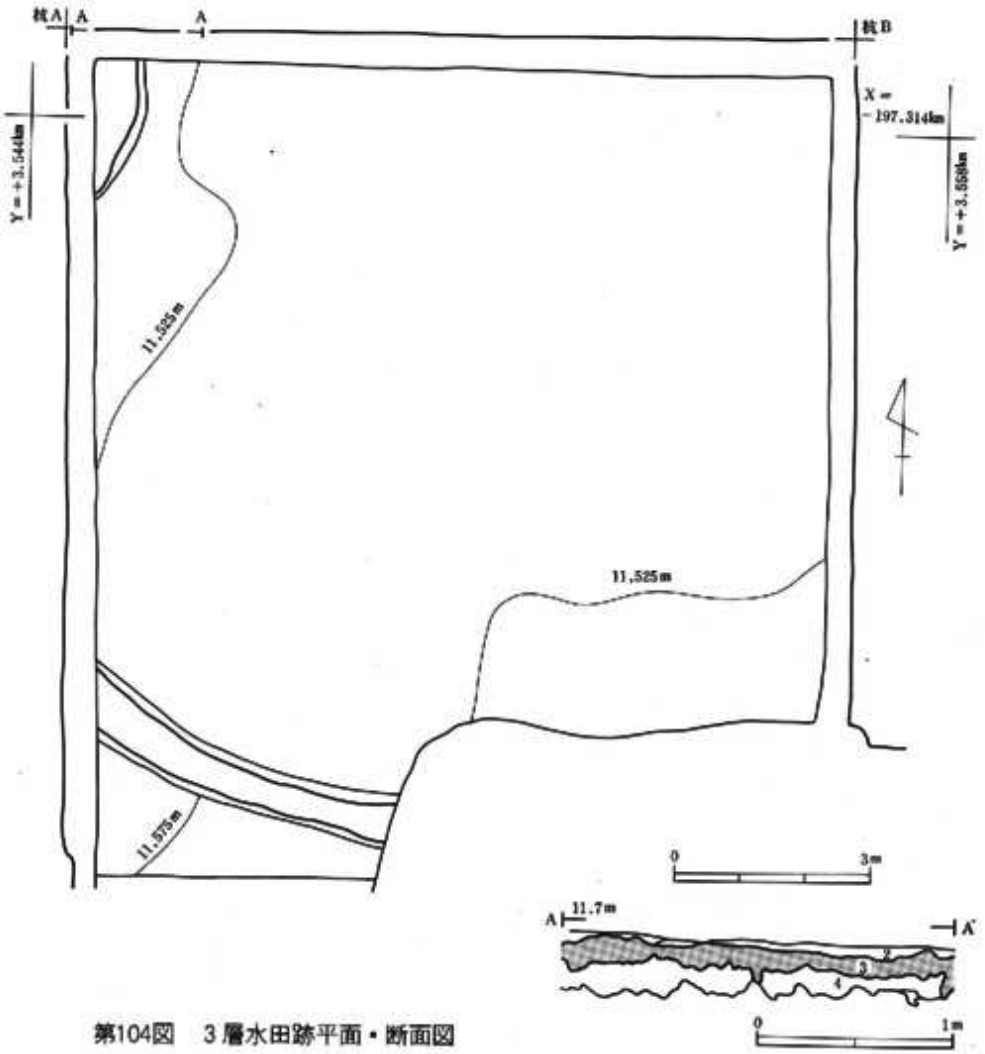
シルト・粘土の互層となっている。7a層上面で灰白色火山灰ブロックが検出された。グライ化は17b層以下で顕著であるが、6・7層もグライ化が認められた。25a層が腐植質粘土である。水田土壌は、現代のものを除くと3～6a・7a・8b・9・10a・14層で、ほぼ水平堆積・下面起伏が認められる。2層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は2～11・13層である。また、12層で昆虫、16層で木片が出土している。

3．検出遺構と出土遺物

（1）3層上面

3層水田跡（第104図，写真100）

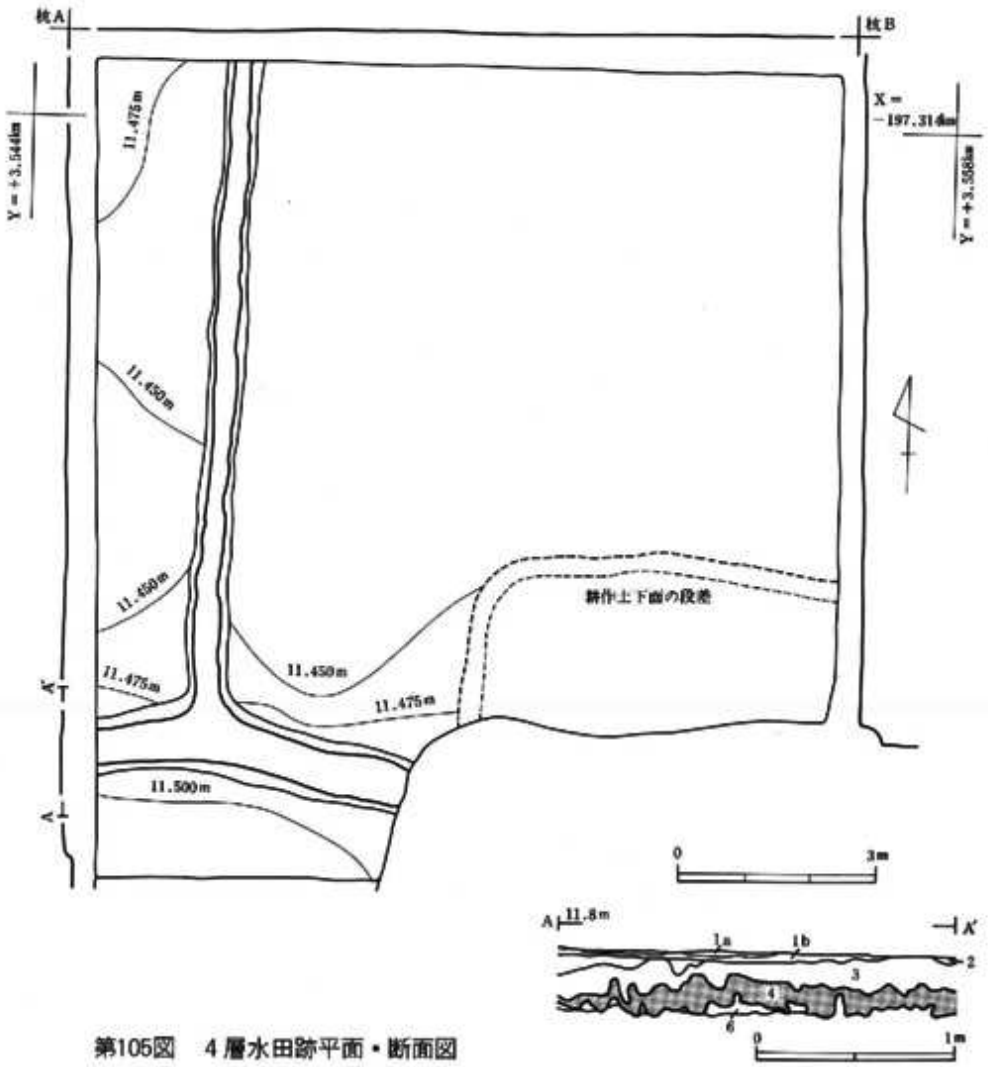
〈遺構状況〉　本水田跡では2条の畦畔が検出された。南北方向の畦畔は、約N－11°－Eの



第104図　3層水田跡平面・断面図

方向を示し、下端幅は壁面観察から約0.9m前後である。また、この畦畔には西へ延びる畦畔が取り付いている。東西方向の畦畔は湾曲しているが、約N－72°－Wを示し、下端幅は0.7～0.9mである。おそらく、南北方向の畦畔に取り付くものと予想される。畦畔の高さは2cm前後であるが、東西方向の畦畔の北壁では最大7cmの比高差が認められる。水田区画は1区画確認でき、区画毎に、東へ下がるものと考えられる。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片11点、赤焼土器片2点、陶器1点、磁器1点、瓦1点、土製品2点、二次加工のある剥片1点、石製品1点、金属製品1点である。図示できるものはないが、羽口片と肥前染付瓶を写真図版に示した。このうち、染付瓶は器形・文様などから17世紀代のものと考えられ、本水田跡の時期推定資料である。また、金属製品は焼夷弾の芯部分と考えられ、落下後埋没したものであろう。

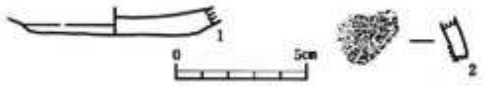


第105図　4層水田跡平面・断面図

（2）4層上面

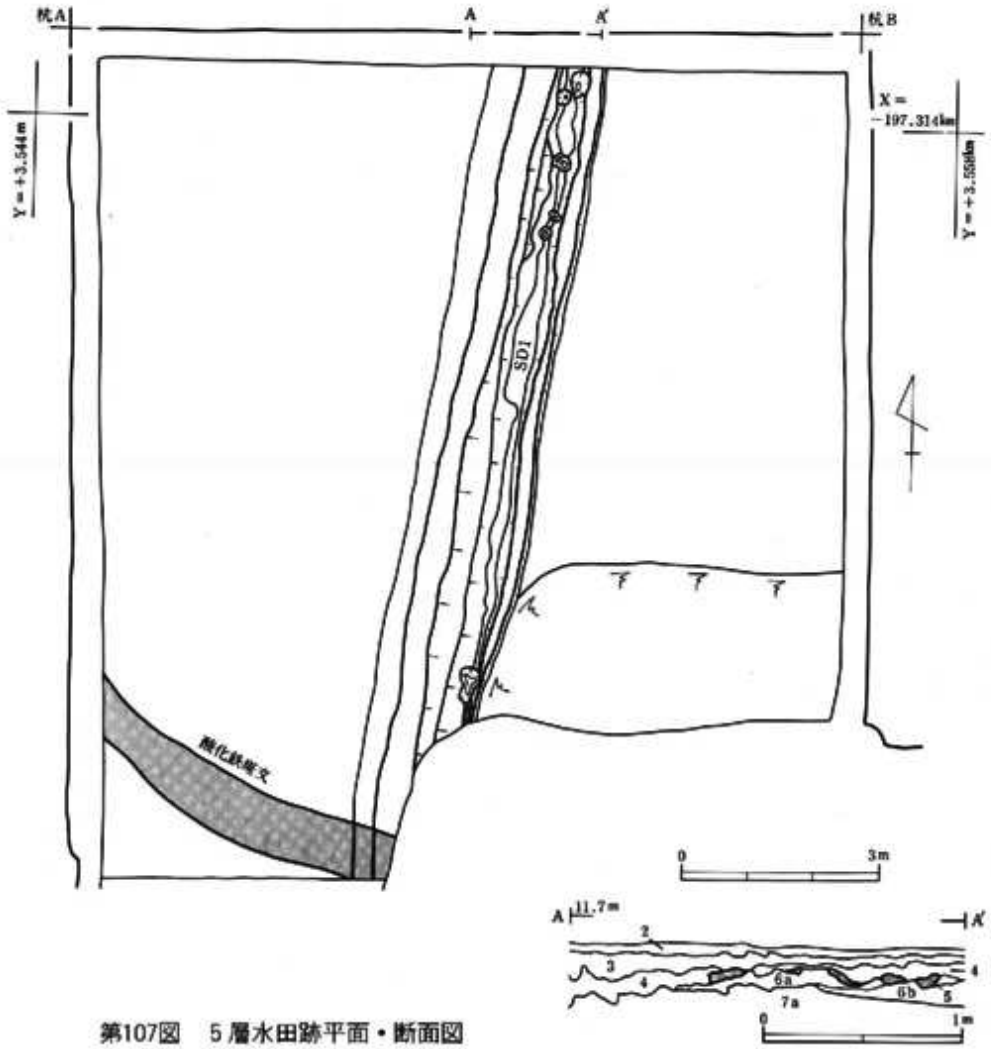
4層水田跡（第105・106図，写真101・149）

〈遺構状況〉　本水田跡では、2条の畦畔が検出された。南北方向の畦畔はN－2°－Eの方向を示し、下端幅は約0.5mである。東西方向の畦畔は湾曲しているが、約N－85°－Wの方向を示し、下端幅は0.8～1mである。畦畔の高さは、南北方向のものが2cm前後、東西方向のものが2～5cmである。水田区画は3区画を確認した。また、調査区南東部では耕作土下面



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	149－4	4層中	土師器	坏	底部破片	――	6.4cm	(1.2cm)	外面磨滅、内面ミガキ、黒色処理
2	149－5	5　層	弥生土器	壺	体部破片	――	――	――	外面沈線3条、内面磨滅、十三塚式期

第106図　4・5層水田跡出土遺物



第107図　5層水田跡平面・断面図

に方形の段差が検出され、その底面は11・12層まで達していた。この落ち込みの性格は不明である。さらに、田面上では、下層水田跡の畦畔の影響による高まりも認められた。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片8点、赤焼土器2点、須恵器片3点、桃？核3点である。図示できる遺物は、第106図1の坏一点である。ロクロ調整で、内面黒色処理したものである。なお、時期決定資料は出土していない。

（3）5層上面

5層水田跡（第106・107図，写真103・149）

〈遺構状況〉　本水田跡では、2条の畦畔と1条の溝跡が検出され、いずれも南北方向のものである。西側の畦畔はN－10°－Eの方向を示し、下端幅は約1.1mである。東側の畦畔はN－9°－Eの方向を示し、下端幅は約0.4mである。畦畔の高さは、西側畦畔が4～7cm、東側畦畔が2～3cmである。水田区画は、4層水田耕作により5層の残りが悪く判然としないが、2区画を確認した。なお、調査区北壁の観察によれば、調査区の北側に東西方向の畦畔の存在が予想される。また、酸化鉄の分布は3層水田跡の畦畔位置とほぼ一致する。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片3点、弥生土器片1点（第106図2）である。水田跡の時期決定資料は出土していない。

1号溝跡－SD1－（第107図）

調査区中央の2条の畦畔の間に位置する。畦畔に平行する南北方向の溝跡で、上端幅は40～50cm、下端幅は一定しない。深さは4～7cmである。断面形は皿状に近く、底面レベルは北側へ下がる。埋土は基本層4層の単層である。遺物は出土していない。

（4）6層上面

6層水田跡（第108図，写真104・105）

〈遺構状況〉　本水田跡では3条の畦畔と2条の溝跡が検出された。調査区中央に位置する南北方向の畦畔はN－10°－Eの方向を示し、下端幅は1m前後である。東側に2条の溝跡が取り付く。さらに東側の南北方向の畦畔は、N－4°－Eの方向を示し、下端幅は0.5～0.6mである。この畦畔は二ヶ所で途切れるが、水口が存在したためかは判断できない。東西方向の畦畔はN－88°－Wの方向を示し、下端幅は南辺側が4層水田耕作によって失われているが、約0.6m前後あったものと予想される。畦畔の高さは、中央部大型の畦畔が4～6cm、他の畦畔は約2cm前後である。水田区画の規模は不明である。

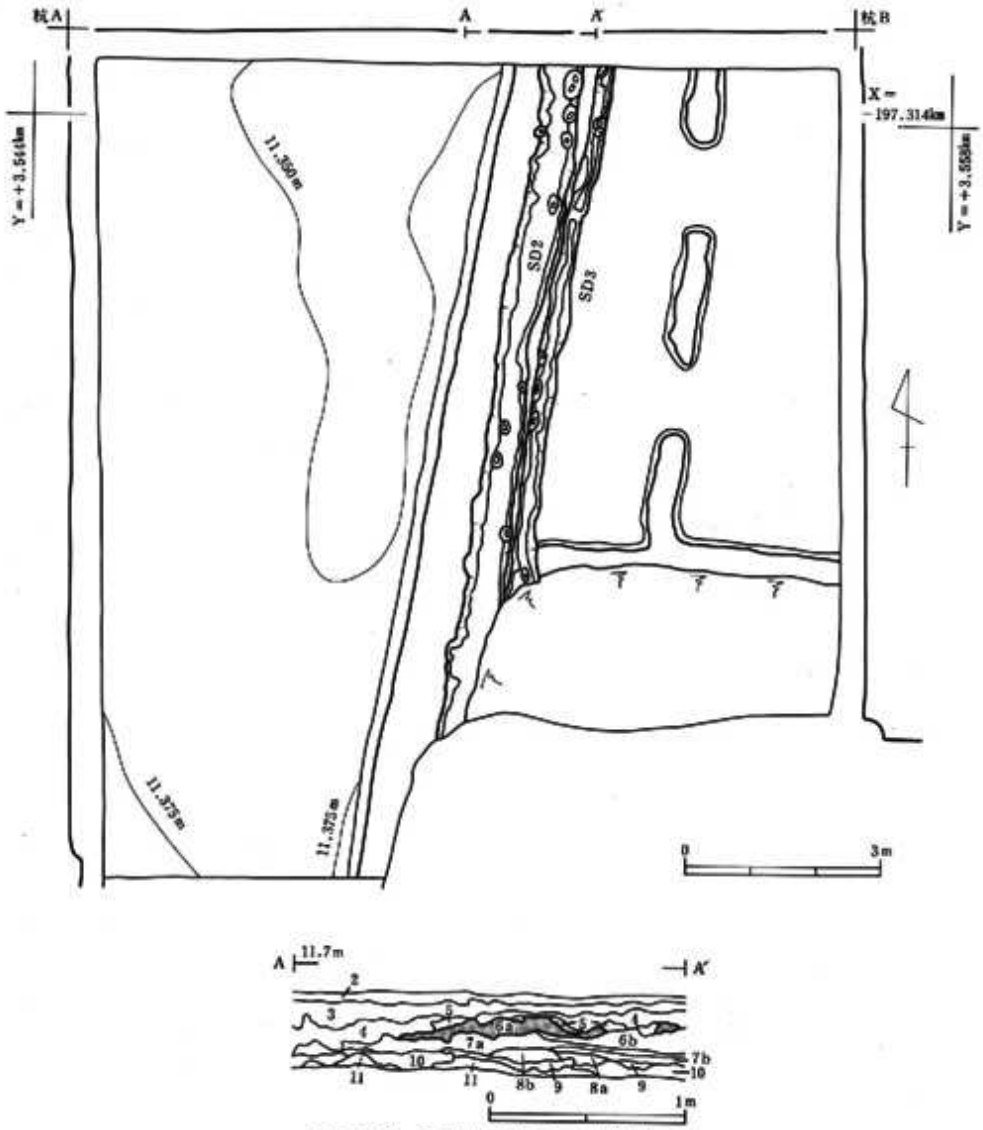
〈出土遺物〉　遺物は土師器片4点、種子1点が出土したが、時期決定資料はない。

2号溝跡－ＳＤ２－（第108図）

調査区中央のやや大型の畦畔の東側に位置する。上端幅約60cm前後、下端幅は一定しないが、30～40cmである。深さは６～８cmである。断面形は「Ｕ」字形に近い形状で、底面レベルは総じて南側が低い。埋土は基本層５層である。遺物は出土していない。

3層溝跡－ＳＤ３－（第108図）

調査区のほぼ中央に位置し、ＳＤ２の東側で並行している。上端幅約20～30cm、下端幅は約10cm前後である。深さは４～12cmである。断面形は「Ｕ」字状を呈し、底面レベルはほぼ一定し、水平である。埋土は基本層５層であるが、砂粒が多く含まれる。遺物は土師器１点と他に川原石１点が出土した。



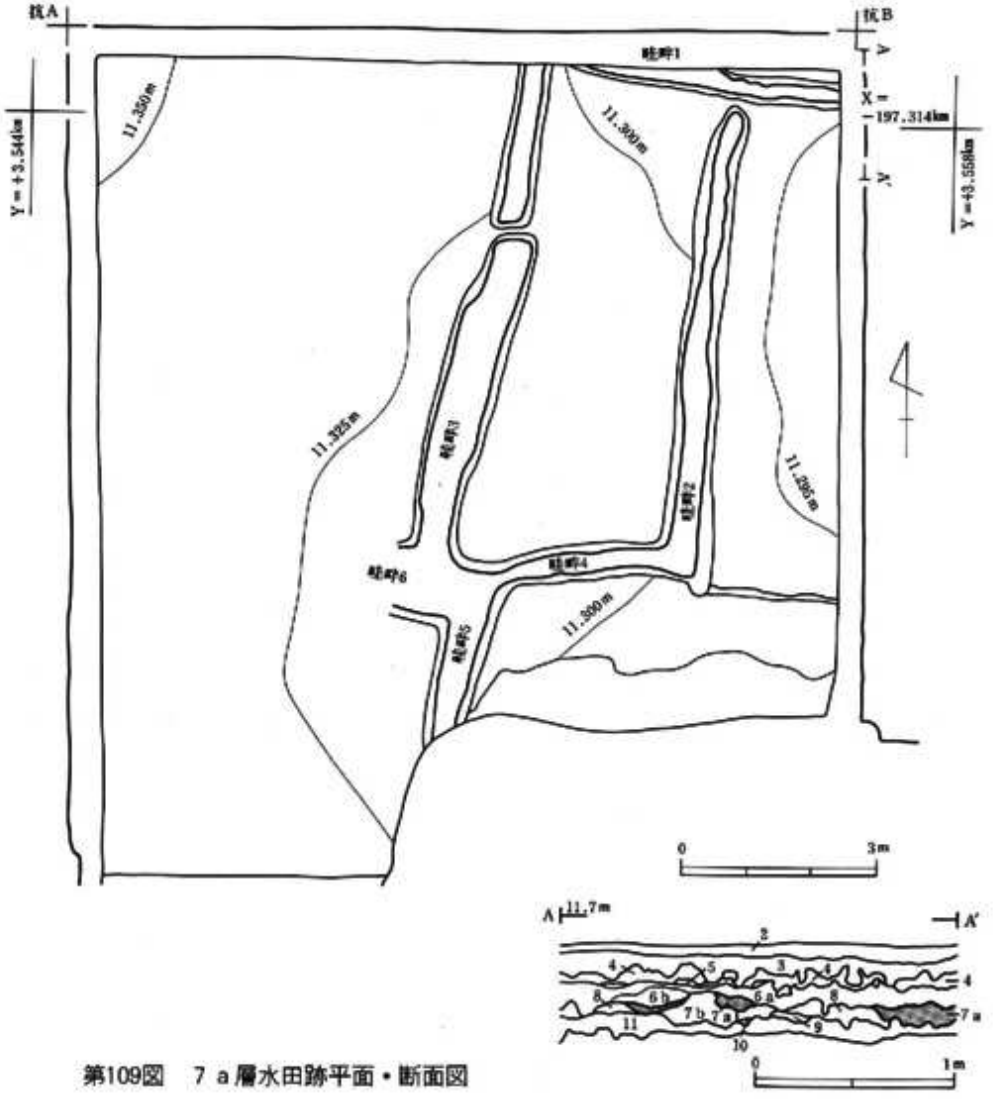
第108図　６層水田跡平面・断面図

（5）7a層上面

7a層水田跡（第109図，写真106）

〈遺構状況〉　本水田跡では6条の畦畔が検出された。畦畔1はN－85°－Wの方向を示し、下端幅は約0.4mを測る。以下、畦畔2はN－6°－E・下端幅0.5～0.8m、畦畔3はN－11°－E・下端幅0.5～0.9m、畦畔4はN－82°－E・下端幅約0.5m、畦畔5はN－12°－E・下端幅0.6～0.7mである。畦畔6については大部分失われており、方向は不明で、下端幅は約1.1mである。畦畔の高さは、いずれも2～3cmである。水田区画は、4層水田耕作により西側は不明であるが、少なくとも六区画以上あるものと判断され、区画毎に東へ下がる。畦畔上で火山灰が検出された。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片4点が出土した。いずれもロクロ使用の甕の破片である。



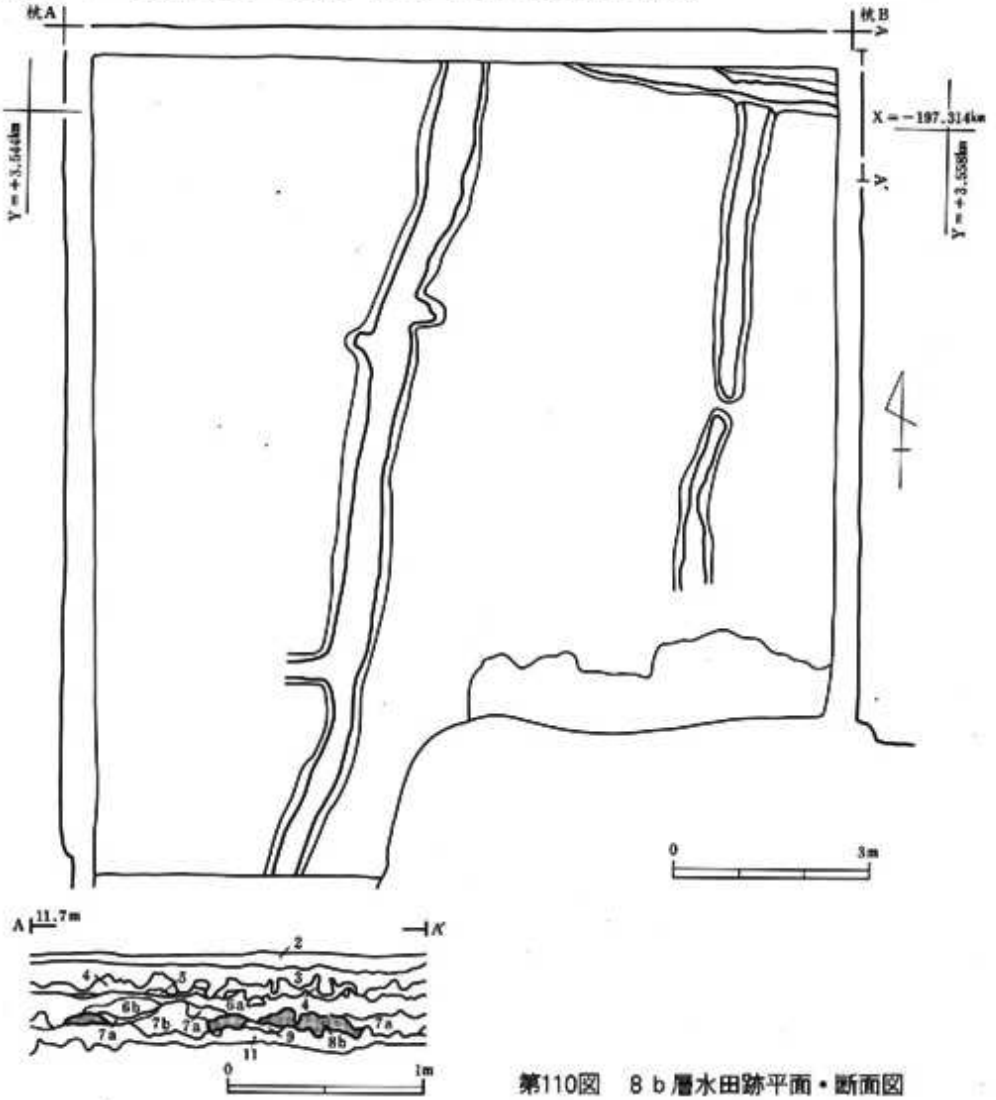
第109図　7a層水田跡平面・断面図

（6）8ｂ層上面

8ｂ層水田跡（第110図，写真107）

〈遺構状況〉　本水田跡では3条の畦畔が検出されたが、耕作土はほとんどない。調査区中央付近の南北方向の畦畔は、N－11°－Eを示し、下端幅0.6～0.9mである。畦畔には約5m間隔に突出部が認められ、水田区画を示すものかもしれない。調整区東寄りの南北方向の畦畔は、N－7°－Eを示し、下端幅0.35～0.6mである。中央部は途切れており、水口の可能性がある。調査区北東部にある東西方向の畦畔は、N－82°－Wの方向を示し、下端幅は0.4～0.5mである。畦畔の高さは約2～3cmである。水田区画は四区画以上と判断される。

〈出土遺物〉　遺物は土師器片3点が出土している。これらは坏や甕の破片であるが、このうち2点はロクロ使用のものである。他に、種子2点が出土した。



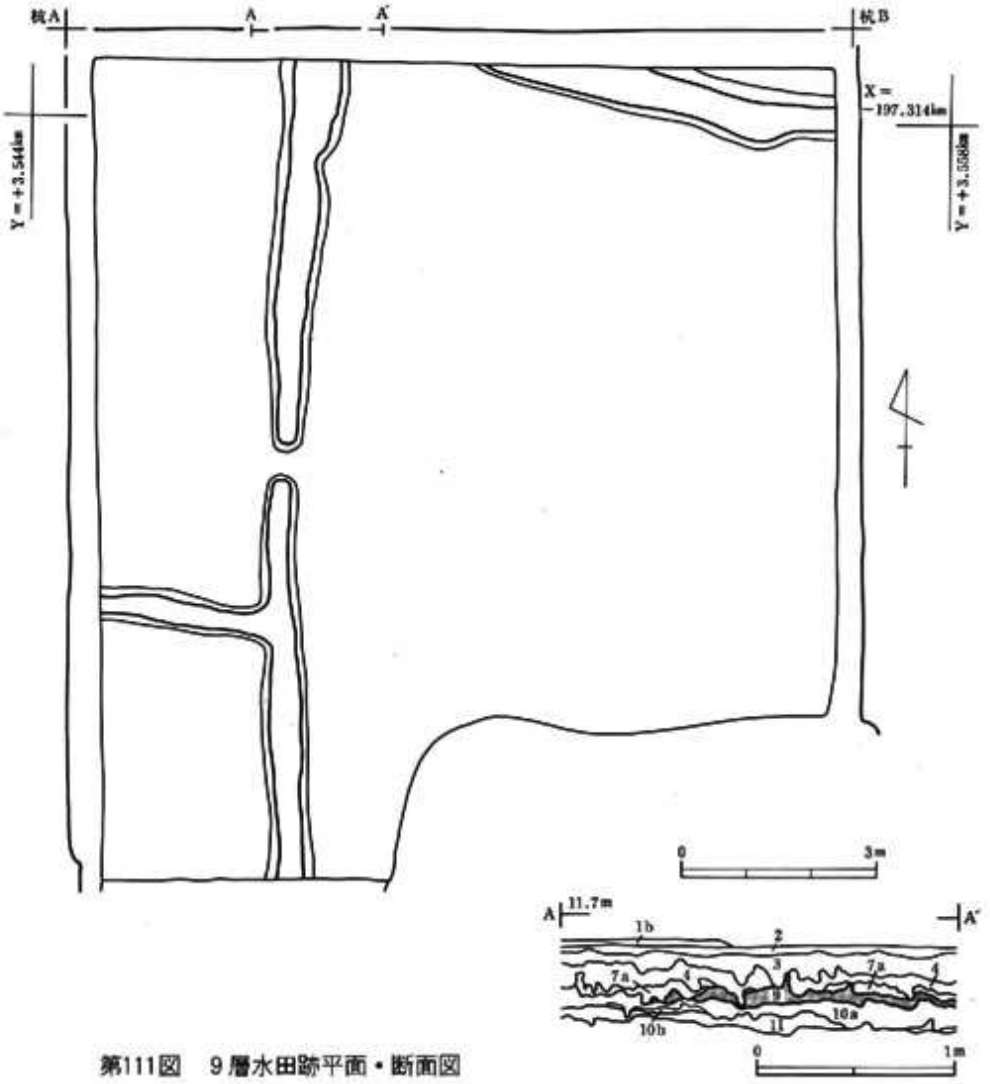
第110図　8ｂ層水田跡平面・断面図

（7）9層上面

9層水田跡（第111図，写真108）

〈遺構状況〉　本水田跡では3条の畦畔が検出されたが、耕作土はほとんど検出されない。ただ、調査区北壁と西壁の一部に耕作土が認められた。従って、擬似畦畔の可能性も残るが、畦畔と理解しておく。調査区西部の南北方向の畦畔はN－1°－Eの方向を示し、下端幅0.5～1.0mである。中央部には水口が検出された。上記の畦畔から西へ延びる東西方向の畦畔は、N－84°－Wの方向を示し、下端幅約0.4～0.6mである。北東部にある東西方向の畦畔は、N－80°－Wの方向を示し、下端幅0.7～0.9mである。畦畔の高さは1～3cmである。水田区画は四区画を検出した。

〈出土遺物〉　遺物は皆無である。



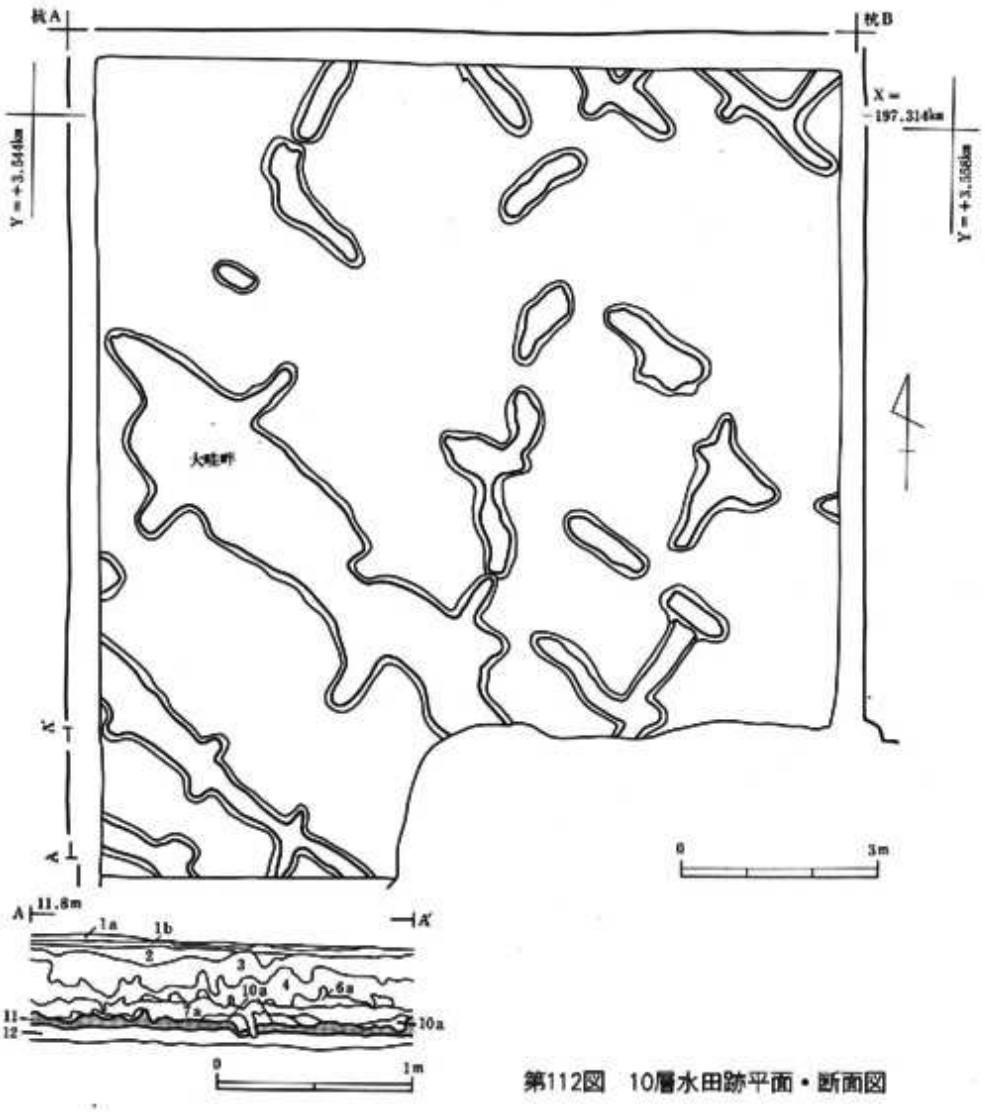
第111図　9層水田跡平面・断面図

（8）10層上面

10層水田跡（第112図，写真109）

〈遺構状況〉　11a層上面で擬似畦畔Bを検出した。調査区南西部で検出した大畦畔は、N－47°－Wの方向を示し、幅は1～1.8mで一定しない。これにほぼ平行する小規模な擬似畦畔もN－50°－W前後を示し、幅0.5m前後のものが多い。また、これらに直交する擬似畦畔はN－40°－E前後、幅は0.4～0.5mのものが多い。区画は判然としないが方形あるいは長方形になるものと推定され、その数は20以上になるものと予想される。

〈出土遺物〉　10層中より種子2点、11a層中より種子1点である。時期決定遺物は出土していない。

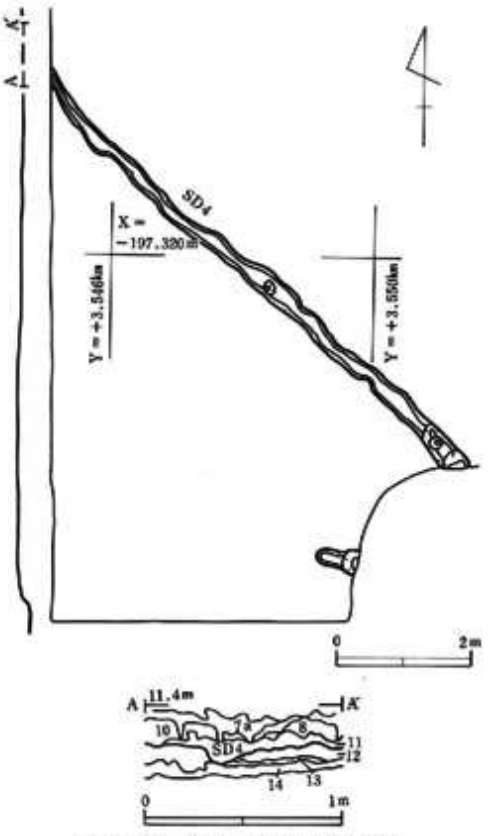


第112図　10層水田跡平面・断面図

（9）12層上面

4号溝跡－ＳＤ4－（第113図）

調査区南西部で検出した。方向はＮ－48°－Ｗの方向を示し、溝幅20～30cm、深さ4～7cmである。埋土は基本層11a層であるが、12層ブロックが混入している。遺物は出土していない。また、上層の10層水田跡との関係も不明である。なお、12層中では昆虫羽1点が出土した。



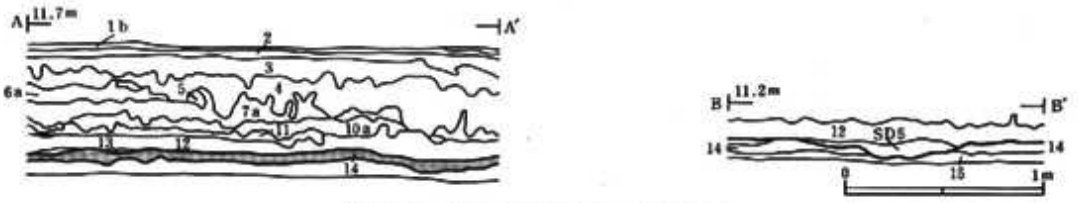
第113図　ＳＤ4平面・断面図

〈遺構状況〉　本水田跡では大畦畔1条、小畦畔12条が検出された。大畦畔はＮ－50°－Ｗ前後の方向を示し、下端幅0.8～1.0mである。小畦畔は、大畦畔におよそ直交あるいは平行し、下端幅は0.5m前後である。区画は明確なものはないが、方形あるいは長方形を基調とするものと思われる。また、調査区南部には幅約2.5mの非耕作域が検出され、さらに南へ伸びていたものと予想される。

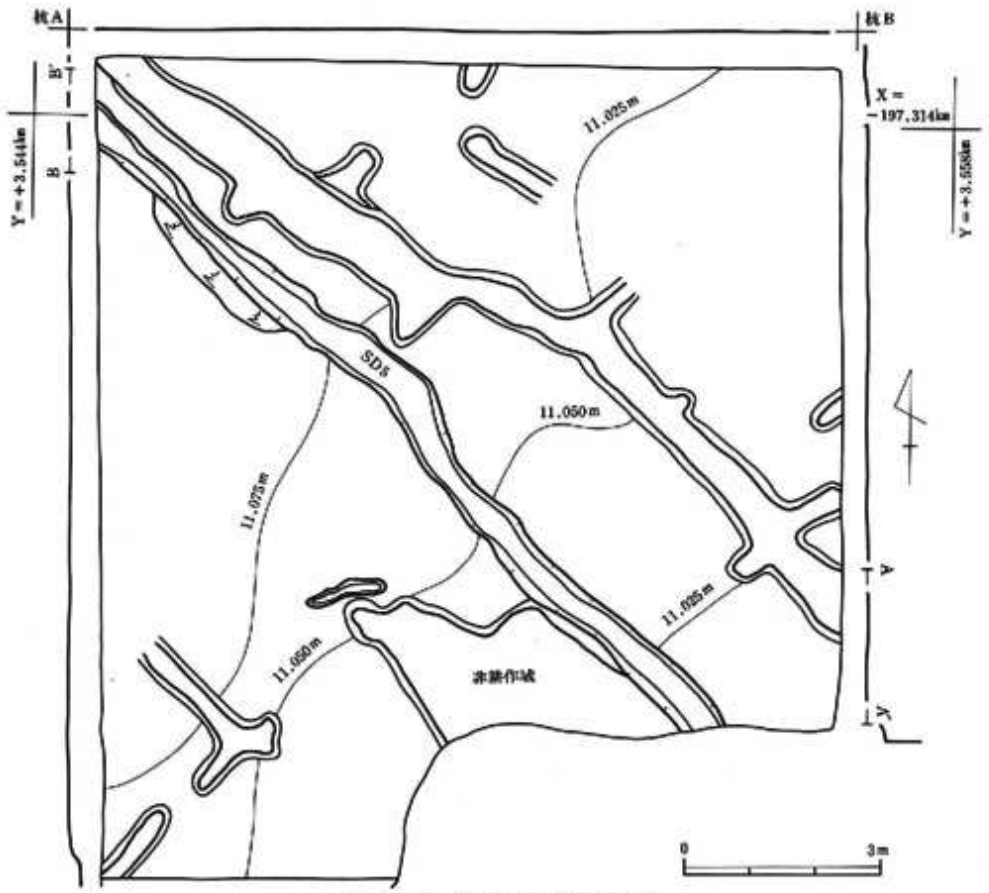
〈出土遺物〉　遺物は皆無である。

5号溝跡－ＳＤ5－（第115図）

14層水田跡の大畦畔におよそ平行して検出された。方向は約Ｎ－45°－Ｗで、溝幅は一定せず0.4～0.7m、深さ4～6cmである。埋土は基本層13層である。溝底レベルは南東側へ下がる。遺物は出土していない。14層水田跡の関係は同時かこれより新しいと考えられる。水田の構造や機能を考慮すれば、後者と考えるべきであろう。



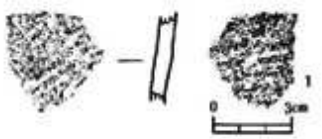
第114図　14層水田跡・ＳＤ5断面図



第115図　14層水田跡平面図

(11) その他の出土遺物（第116図，写真149）

基本層２層より土師器片２点、赤焼土器片２点、陶器片１点、層位不明の土師器片２点、縄文土器（早期・第116図）１点が出土している。



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	149－1	2層中	縄文土器	深鉢？	体部小片	———	———	———	縄文早期・外面縄文？、内面条痕文

第116図　その他の出土遺物

4．下層の調査（写真114～119）

旧石器時代に相当する層の調査は、5×5mの調査区を設定し、18～26層上面まで精査を行い、さらに、調査区を縮小して31層まで調査した（第102図）。調査の結果、旧石器時代相当と考えられる植物遺体（枝・葉・毬果など）は24・25a・25bの各層より出土している。植物遺体は特に25a層で多く、倒木（幹）も認められる。根株は25b層で認められるが、小さなものは24層中にもある。昆虫遺体は調査時には検出できなかった。25a層は腐植質粘土層、25b層はその影響の元に土壌化しつつあるものと考えられ、一部では波頭状の堆積状況を示していた。

5．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構は3～10・14層の各層水田跡である。3層水田跡は、層中より17世紀代と考えられる肥前染付瓶が出土し、江戸時代の水田跡と考えられる。また、7a層水田跡は田面に灰白色火山灰をのせる特徴から平安時代の水田跡である。前述した時代と東側に隣接する第34次調査の成果（佐藤：1988）との対応から、3層水田跡は第34次調査の2層水田跡（江戸時代）と対応するものと考えられる。以下、その対応関係は次のように推定される。

68次	34次		68次	34次	
3層	――	2層（江戸）	8b層	――	不明（奈良～平安？）
4層	――	不明（中世～近世）	9層	――	6a層（古墳～奈良？）
5層	――	3層（中世）	10層	――	7a層（弥生か）
6a層	――	4層（平安）	14層	――	10層（弥生）
7a層	――	5層（平安）			

なお、6層水田跡と層相が類似しているものはさらに、第66次調査の12層水田跡がある。また、4・8層の水田跡は第34次調査に対応するものはない。

2．旧石器時代については、遺構や人工遺物の発見はなかったが、第66次調査の成果と合わせ植物遺体の分布範囲が北西部に拡大していることが確認できた。

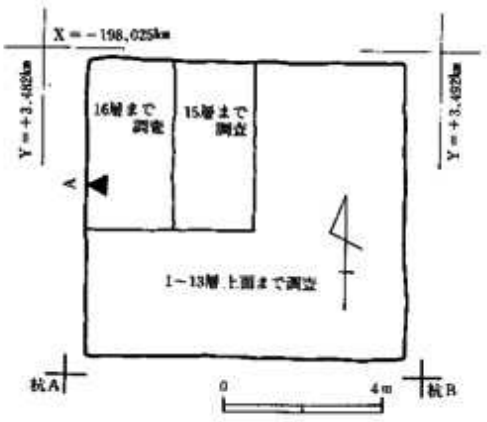
第13節　山口遺跡第13次調査

1．調査方法

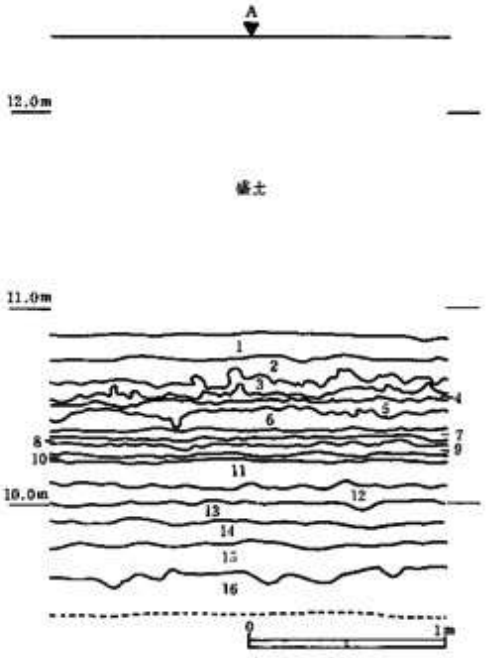
調査区の設定面積は約8.0×7.5m（61㎡）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。13層上面までは、調査区全面の精査を実施し、13層以下は約4.0×4.5m、15層以下はさらに約2.4×4.5mに調査区を縮小した。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－198.033328km　Y＝＋3.491621km　杭B：X＝－198.033293km　Y＝＋3.491621km）。

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に16層が確認された。各層の土質は2層までがシルト、3層以下は粘土であるが、11層は泥炭質粘土である。現代のものを除く明確な水田土壌は2・3・4・5・7層の各層である。遺物出土層は1・2・3・4・5・13層である。3層下面からは、灰白色火山灰が検出されている。各層の傾きとしては、全体的に南東方向への緩やかな下り傾斜を示す。なお、当調査区の基本層序は、北東側の富沢遺跡との層位の対応関係が認められる。



第117図　調査区設定図



第118図　基本層序

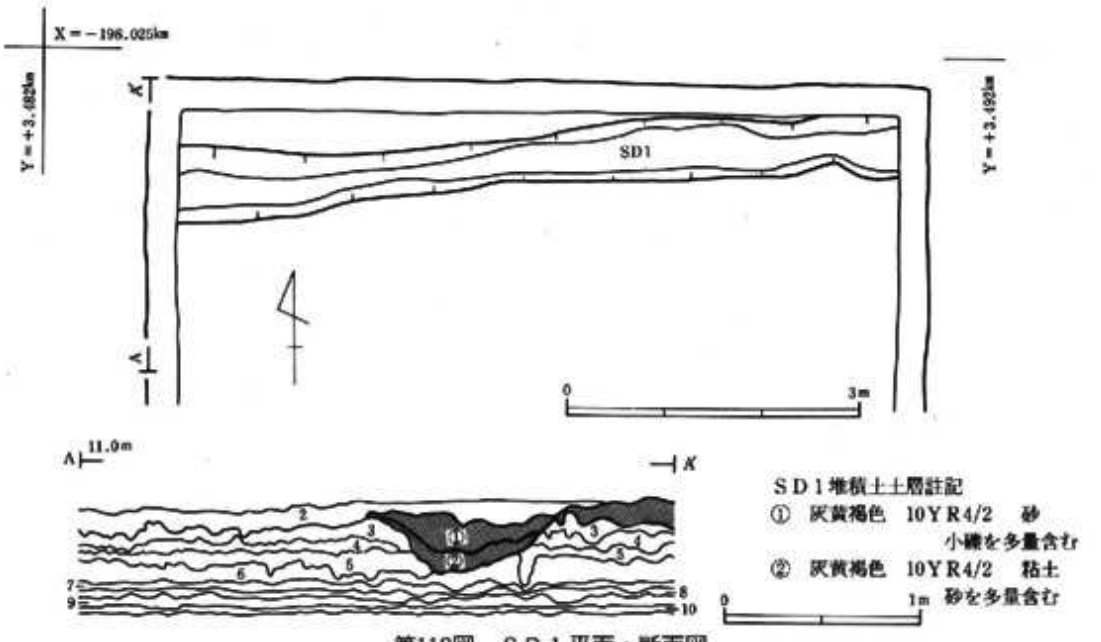
層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	暗灰黄色	2.5Y4/2	シルト	20cm前後	下面に集積	風化軽石岩粒・粗砂・グライ粘土ブロック	水田耕作(現代)	下面起伏
2	黒褐色	2.5Y5/2	シルト	6cm～15cm	上面に集積・管状斑紋	風化軽石岩粒・粗砂・グライ粘土ブロック	水田耕作	下面著しく起伏・SD1南側に部分的分布
3	褐色	10YR4/4	粘土	4cm～12cm	管状斑紋	下面に灰白色火山灰ブロック・下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏・SD1北側は不連続な分布
4	黒褐色	10YR3/1	粘土	2cm～12cm	管状斑紋	下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏
5	黒色	10YR2/1	粘土	4cm～20cm	管状斑紋	下層ブロック	水田耕作	下面著しく起伏
6	黒色 灰黄褐色 褐灰黄	10YR1.7/1 10YR6/2 10YR4/1	粘土	2cm～20cm	管状斑紋 (下面では薄い)	植物遺体少量	自然堆積	互層
7	黒褐色	10YR3/1	粘土	5cm前後	管状斑紋	植物遺体	水田耕作	下面起伏
8	褐灰色	10YR5/1	粘土	3cm～7cm	管状斑紋	植物遺体	自然堆積	白色の斑点・下面起伏
9	黒色	10YR2/1	粘土	5cm前後	管状斑紋	植物遺体	自然堆積	黒色の横筋が入る
10	黒色 灰黄褐色 褐灰色	10YR1.7/1 10YR6/2 10YR4/1	粘土	3cm前後	管状斑紋	植物遺体多量	自然堆積	互層
11	黒色 黒褐色	10YR1.7/1 10YR3/1	泥炭質粘土	10cm～15cm	薄い管状斑紋	——	自然堆積	互層・下面起伏
12	黒褐色	10YR3/1	粘土	10cm前後	管状斑紋	植物遺体多量	自然堆積	互層
13	黒色	10YR2/1	粘土	9cm～15cm	管状斑紋	植物遺体	——	下面起伏
14	灰色	7.5Y5/1	粘土	12cm前後	薄い管状斑紋	植物遺体・黒褐色粘土ブロック斑点状	自然堆積	グライ化
15	暗オリーブ灰色	5GY4/1	粘土	12cm～25cm	——	植物遺体・黒褐色粘土ブロック斑点状	自然堆積	グライ化・下面起伏
16	緑灰色	5G6/1	粘土	25cm以上	——	植物遺体・上面に灰白色粘土ブロック少量・褐色粘土ブロック斑点状・φ1cm前後の緑色粘土ブロック微量	自然堆積	グライ化顕著

3．検出遺構と出土遺物

（1）3層上面

1号溝跡－SD1－（第119図，写真123）

調査区の北端に位置し、W－5°－E方向に直線的に走行する。上端幅は約40～90cmと規画性に欠ける。深さは約3～30cmと東側へ行くほど浅くなる。断面形は「U」字状を呈する。底



第119図　SD1平面・断面図

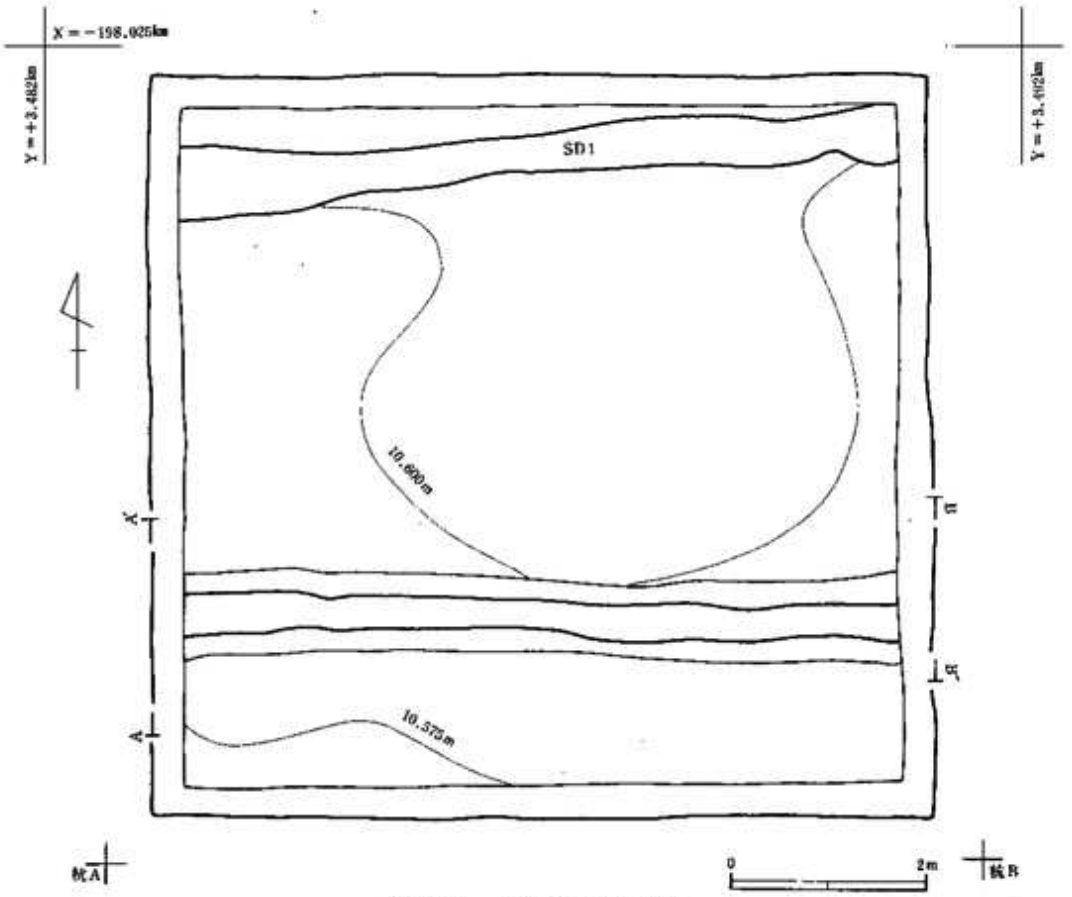
面は凹凸が著しい。堆積土は2層から成り、いずれも自然堆積状況を示す。①層は砂層で、北側の溝外にも厚く溢れ出ており、調査区外へも広がっている。この影響でその部分の3層は、上面がかなり削られ荒れている。上層の2層水田跡は耕作土のみの検出であったが、このＳＤ1の北側の肩部分より南にしか耕作土が認められなかった。これはＳＤ1の北側の厚い砂層の堆積によって水田土壌化が不可能であった結果かも知れない。

出土遺物は堆積土①・②層から土師器片が各1点出土したが、いずれも図化不能な資料であった。

（2）4層上面

4層水田跡（第120・121・123図，写真120・124・125・150）

〈遺構状況〉　畦畔が1条検出されたのみである。畦畔の検出面は3層中である。畦畔は東西方向をとり直線的に延びるが、この位置・方向は、直下層の5層水田跡東西畦畔を踏襲している。畦畔は耕作土と同一土壌－4層－を盛り上げ作られている。下端幅は90cm前後で、耕作土



第120図　4層水田跡平面図

上面からの高さは、上層の水田跡によって削平を受け、4cm前後と残存状況が悪い。水口は検出されていない。耕作土の土質は粘土である。下面の起状は顕著で、下部に下層ブロックを含む。耕作土は、直層上の影響で薄い部分も認められるが、厚さは平均で8cm位である。耕作土下面には鉄分の積層は認められない。水田面の標高は10.65m前後で、畦畔を挟んだ南・北の区画とも南方向の緩やかな下り傾斜を示し、このため南側の区画の方がやや低くなっている。なお、5層上面で検出された畦畔が、当水田跡の擬似畦畔Bであった場合は、当水田跡上面で検出された畦畔は、3層水田跡に伴う擬似畦畔Bである可能性もある。

〈出土遺物〉　畦畔脇の耕作土上部より土師器が1点出土している。破片資料であったが、上層出土のものと接合し、図化不可能な資料となり得た（第123図4）。ロクロ使用の坏で、底部は回転糸切りの後無調整、内面は磨きの後黒色処理が施こされている。

（3）5層上面

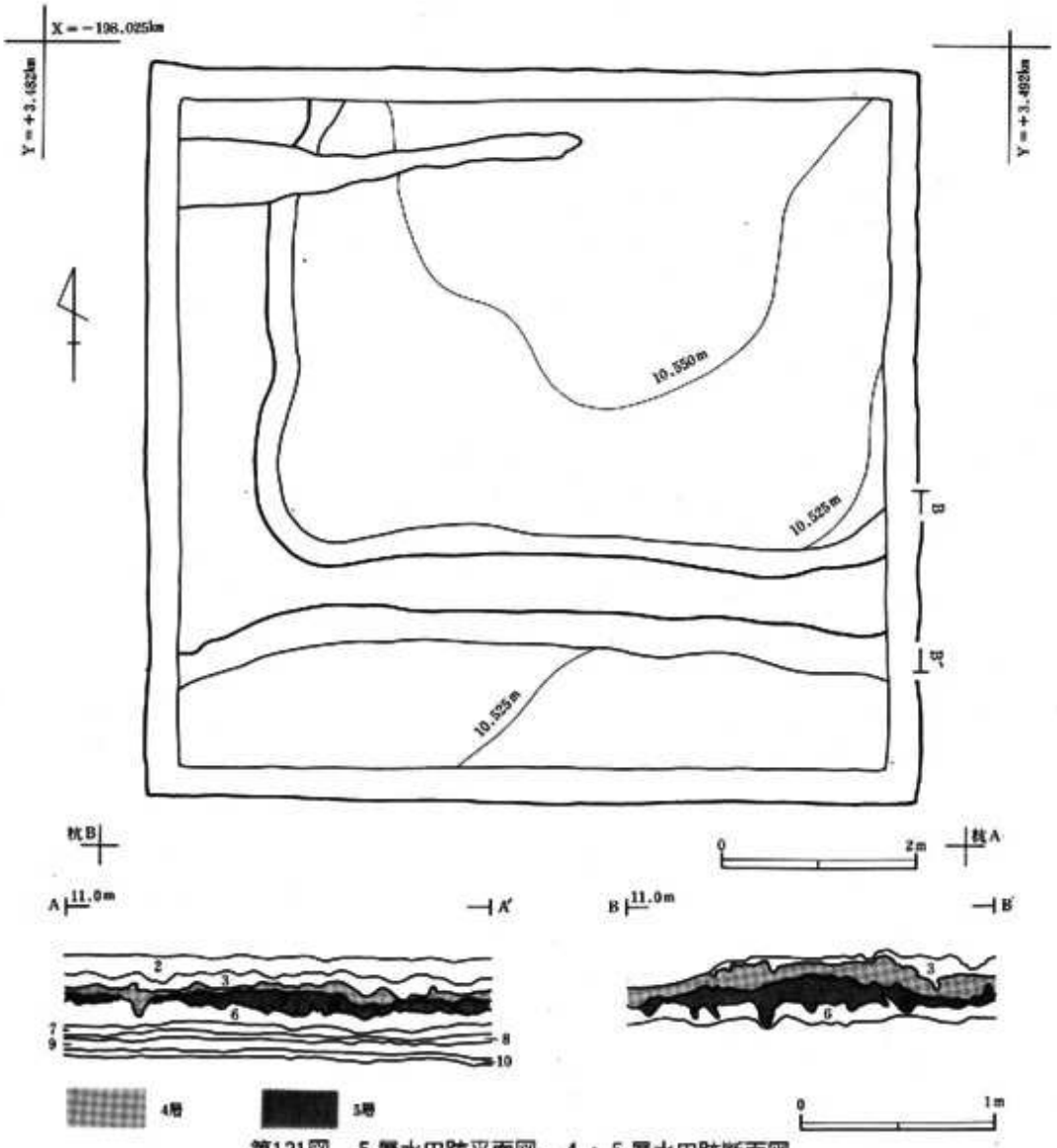
5層水田跡（第121～123図，写真121・122・124～127・150）

〈遺構状況〉　真北方向の直線的に延びる畦畔とこれに直角に交わる直線的な畦畔からなる2区画の水田が検出された。畦畔の検出面は4層中である。それぞれの区画の面積は調査範囲が狭く不明である（北側の区画では30㎡以上）。形状に関しては、北側の区画は方形を呈するものと考えられる。畦畔は耕作土と同一土壌－5層－を盛り上げ作られている。耕作土上面からの高さは、上層の水田跡によって削平を受けており4cm前後と残存状況が悪い。下端幅は東西方向畦畔が1.2m前後、南北方向畦畔は不明であるが、東西方向畦畔以上の規模になるものと考えられる。両畦畔の交点の取り付き方は「＋」状か「T」字状かは不明である。また、両畦畔とも水口は検出されていない。耕作土の土質は粘土である。下面の起状は顕著で、下部に下層ブロックを含む。直上層の影響で、耕作土が薄い部分も認められるが、厚さは平均で10cm位である。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は10.55m前後で、両区画とも南東方向の緩やかな下り傾斜を示し、区画間の比高差では北側の区画がやや高くなっている。

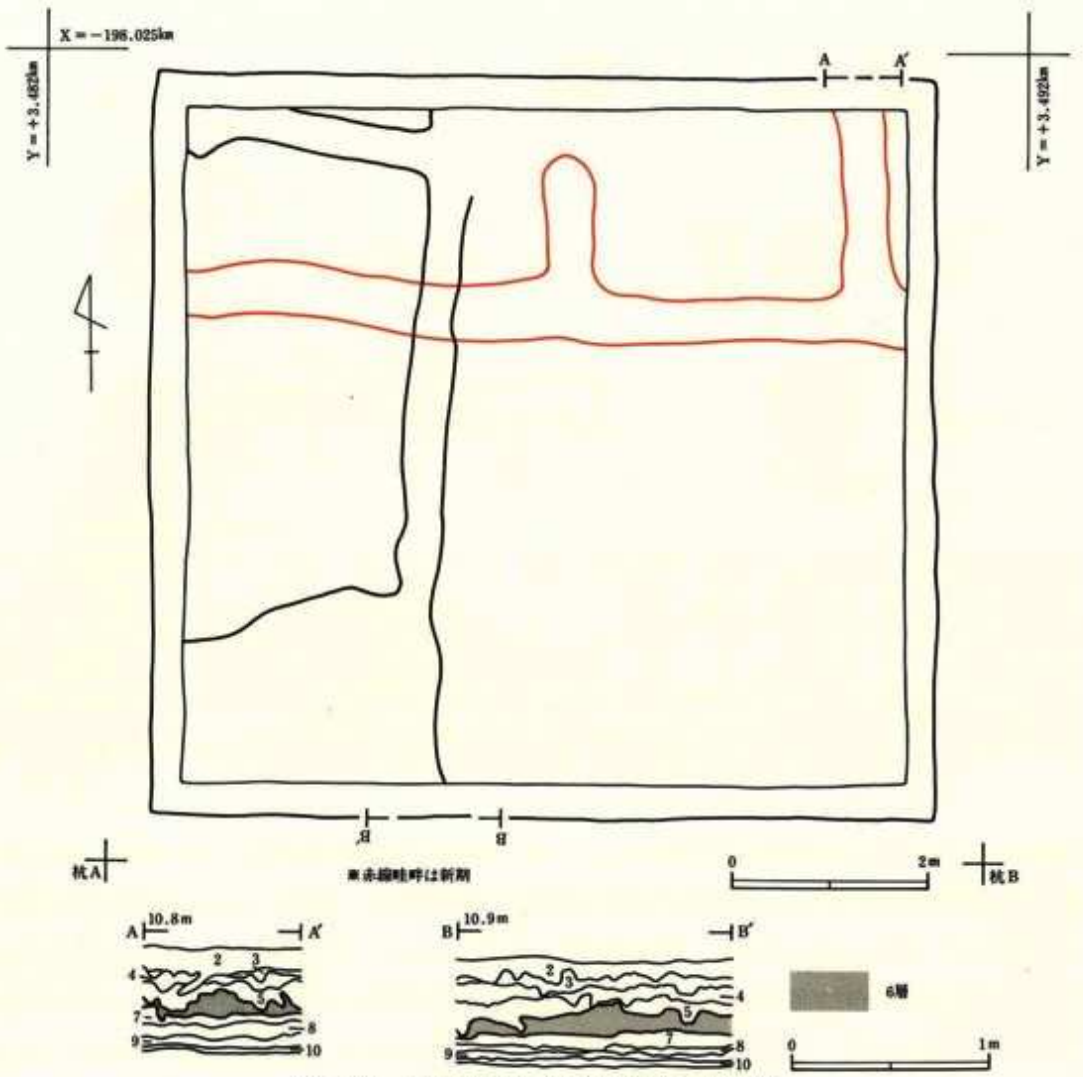
〈擬似畦畔B〉　耕作土の下面で、擬似畦畔Bが検出されている。ただし、耕作土上面で検出された畦畔と位置・規模が異なる。また、これらは検出レベル・色調によって古・新の2期のものに分けられる（第122図）。2期の擬似畦畔Bは、直下層の自然堆積層6層の僅かな盛り上がりとして検出されたが、新期のものは古期のものに比べると検出面が幾分高く、畦畔内の色調がやや黒ずみ、耕作土と6層との中間的な色調を呈し、さらに、畦畔の縁辺には酸化鉄の斑紋が認められた。古期・新期とも区画が明確なものはないが、畦畔方向は上面検出の畦畔とほぼ同一の南北・東西方向をとっており、区画も同様に方形を基調とするものと考えられる。区

画面積はいずれも上面検出のものより狭く、古期では1辺約4.5m（南北方向）、新期では1辺約2.5m（東西方向）のものがみられる。また、畦畔幅は両者とも4～50cm前後で、上面検出のものに比べ狭い。

上面での畦畔の検出、また、これとは位置・規模の異なる2期の擬似畦畔Bの検出によって、当水田跡は経営期間内に3期にわたる畦畔の変遷が認められる。ただし、本来の畦畔は5層下面で検出された2期の擬似畦畔Bであり、上面検出の畦畔は4層水田跡の擬似畦畔Bの可能性も十分あり得る。いずれにしても水田経営期間内に畦畔の付け替えが行われたことかが推察される。



第121図　5層水田跡平面図、4・5層水田跡断面図

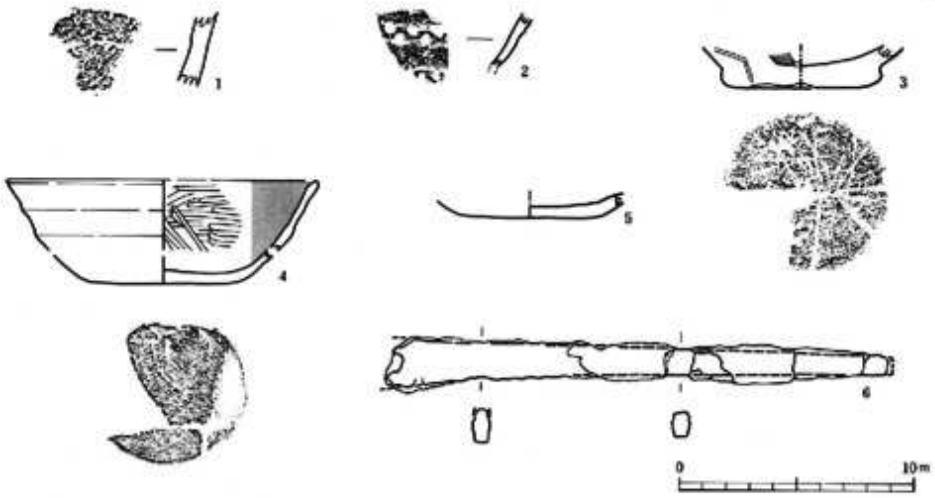


第122図　5層水田跡擬似畦畔B平面・断面図

〈出土遺物〉　東西畦畔付近の耕作土中より土師器の破片資料が3点出土した。この内2点は、上層出土のものに同一個体のものが認められた。いずれも製作に際してロクロは使用されていない。1点のみが観察・図化できた。第123図3は甕の体部下端から底部にかけての資料である。内外面とも摩滅しているが、体部外面にはミガキが施されているのが僅かにみられ、底部には木葉痕が認められる。古墳時代後期頃に属する可能性がある。

（4）その他の出土遺物（第123図，写真150）

1・2・3・13層の各層より縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器・陶器・磁器・鉄製品・杭が20点弱出土しているが、いずれも破片資料である。1層からは近世以降の陶器・磁器



No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1	150－7	13層	縄文土器	不明	体部小片	———	———	———	外面撚糸文R、内面ナデ
2	150－1	1層	弥生土器	壺or甕	口縁部小片	———	———	———	交互刺突文、内外面磨滅、天王山式期
3	150－5	5層上	土師器	皿？	底部破片	———	6.4cm	———	外面ナデ・ミガキ、内面磨滅、底部木葉痕
4	150－4・6	4層上	土師器	坏	1/2	13.1cm	6.4cm	(4.5cm)	外面ロクロナデ、内面ミガキ、黒色処理、底部回転糸切無調整
5	150－2	1層	土師質土器	皿	底部破片	———	6.2cm	(1.2cm)	内外面磨滅、ロクロ使用？

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	長さ	幅	厚さ	備考
6	150－3	3層	農具	鉄製品	(21.3cm)	2.0cm	0.7cm	地ならし用の農具の歯？

第123図　その他の出土遺物

の他に・弥生土器・土師器・杭が出土している。弥生土器（第123図２）は口縁部資料で、外面に交互刺突文がみられ、後期天王山式期に属するものである。２層からは土師質土器のⅢ（第123図５）が１点のみ出土した。中世頃のものと考えられる。３層からは土師器・鉄製品が出土した。土師器は全て下層から出土したものと接合・同一関係をしめす。鉄製品は１点（第123図６）のみであったが、これは地ならし用の農具の歯の部分である可能性がある。13層からは縄文土器の体部資料が１点（第123図１）出土した。撚糸文の地文のみのもので、胎土に植物繊維は含まない。

４．遺構の所属年代とまとめ

１．検出遺構としては、２層・３層・４層・５層・７層の５期の水田跡が検出された。この内、２層・３層・７層の各水田跡は耕作土のみの検出であるが、層位の対応関係が可能であった隣接の富沢遺跡第８次調査区で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した（表14）。

２．３層上面で検出されたＳＤ１は形状・規模からすると水路の可能性がある。３層は畦畔は検出されなかったが、水田跡であることより、当水田跡に伴ったことも考えられる。しかし

ながら、隣接調査区との層位の対応関係では、本来、2層水田跡と3層水田跡の間にはもう1枚水田跡が存在しており（第5章）、また、ＳＤ1が東側へ行くに従い極端に浅くなっていることを考慮すれば、上層からの堀り込みの疑いがより強い。

3．4層・5層の両水田跡では、真北方向あるいはこれに対して90°振れる畦畔が検出された。ただし、5層水田跡の下面で、位置の異なる擬似畦畔Ｂが検出されたことにより、4層・5層上面で検出された畦畔は、それぞれ直上層の3層・4層水田跡にともなう擬似畦畔Ｂの可能性もある。

4．5層水田跡では、畦畔の位置・区画の異なる擬似畦畔Ｂの存在、また、擬似畦畔Ｂにも新旧が認められたことより、水田経営期間内に畦畔の付け替えがあったことが確認された。

5．検出遺構の所属年代は、数量的に乏しいが、4層・5層水田跡からの出土遺物、また、3層水田跡下面から灰白色火山灰ブロックが検出されたこと、さらに、富沢遺跡第8次調査区及び他の調査区との層位の対応関係が可能であったことより（表14）、以下のような所属年代が想定される。

- 2層－近世
- 3層水田跡－平安時代（灰白色火山灰降下以降）
- 4層水田跡－平安時代（灰白色火山灰降下以前）
- 5層水田跡－古墳時代
- 12層水田跡－弥生時代（桝形囲式期）

表14　山口遺跡第13次・富沢遺跡第8次調査区層位対応表

山口第13次		富沢第8次			備　考
層位	検出遺構	層位	検出遺構	所属年代	
2	水田耕作土	3	畦畔	近世	——
3	水田耕作土	5A	畦畔	平安（灰白色火山灰降下以降）	——
4	畦畔	5B	水田耕作土	平安（灰白色火山灰降下以前）	——
5	畦畔	7B	水田耕作土	古墳	——
6		7C～8A		古墳以前	富沢第55次で時期決定資料
7	水田耕作土	8B	畦畔	弥生（桝形囲式期）	——
8		9		弥生（寺下囲式期）	——

第14節　山口遺跡第14次調査

1．調査方法

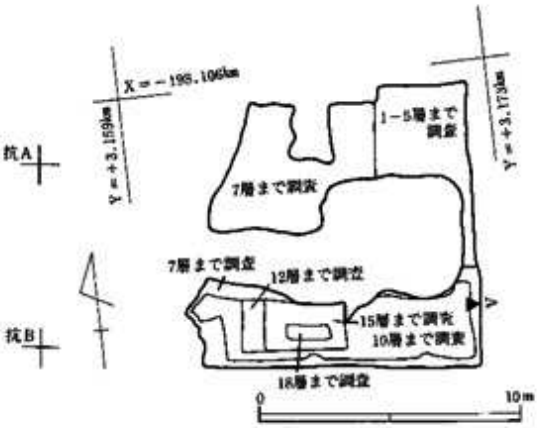
調査区の設定面積は約17×10m（約170㎡）である。調査は、調査区のほぼ中央部が現地表下4m以上におよぶ最近の攪乱をうけていたため、両側にのこされた部分を対象として行った。調査面積は55㎡程である。

盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区周辺には土層観察及び排水用の側溝を設けた。8層上面までは調査区全面の調査を実施し、8層以下は南側（1・2区）の調査区を対象として、10層以下は4×2mの試掘区を設けて掘り下げた（12層以下3×2m、15層以下1.7×0.6m）。

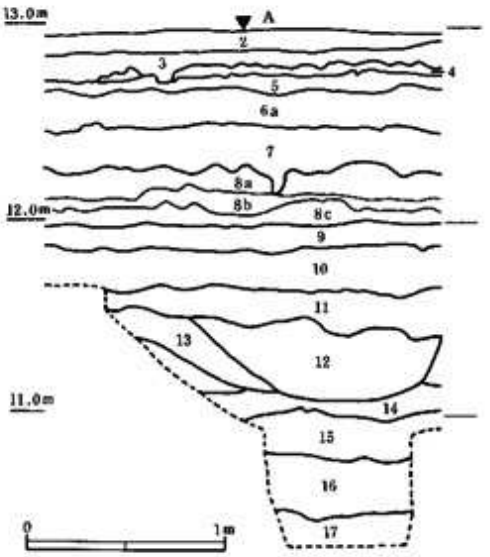
遺構の測量は杭1～4を基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭2：X＝－198.108137km　Y＝＋3.155767km　杭3：X＝－198.115117km　Y＝＋3.154983km）。

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別18層、細別で22層が確認された。各層の土質は1～6層が粘土質シルトを主とし、7層が粘土層、8層が砂層となり、以下9・10・14～16層が粘土層、11～13・17層が砂層で、18層が礫層となる。グライ化は11層以下から漸次進み、15～17層で顕著である。現代のものを除いた水田土壌は基本層5・7層で、その他2・3・9層も水田土壌の可能性がある。なお、3・4層からは灰白色火山灰が検出されている。各層の傾きは、1～4層まではほぼ水平であるが、5層以下は北東側へ緩やかに下がっている。



第124図　調査区設定図



第125図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	酸化鉄	混入物	成因	備考
1	暗灰色	N3/	粘土質シルト	15cm前後	――	――	水田耕作(現代)	――
2	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	8cm~14cm	有	――	水田耕作?	――
3	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	12cm~18cm	有	マンガン粒・灰白色火山灰・炭化物少量	水田耕作?	下面起伏
4	にぶい黄褐色	10YR6/3	粘土質シルト	1cm~5cm	有	灰白色火山灰	自然堆積	部分的分布
5	オリーブ黒色	5Y2/2	粘土質シルト	5cm~15cm	――	マンガン粒	水田耕作	下面起伏
6a	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	3cm~30cm	有	マンガン粒	自然堆積	不連続な分布
6b	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	4cm~6cm	有	マンガン粒	自然堆積	部分的な分布
7	黒褐色	10YR3/1	粘土	13cm~32cm	有	下層の砂	水田耕作	下面起伏
8a	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂	3cm~25cm	有	――	自然堆積	――
8a'	黄灰色	2.5Y6/1	砂	1cm~26cm	有	――	自然堆積	――
8b	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂	3cm~15cm	有	砂・礫	自然堆積	不連続な分布
8b'			砂礫	10cm~20cm	――	――	自然堆積	部分的分布
8c	黄灰色	2.5Y5/1	砂	7cm~10cm	――	――	自然堆積	――
9	黒色	10YR2/1	粘土	12cm~14cm	――	――	水田耕作?	下面やや起伏
10	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	28cm~35cm	――	――	自然堆積	――
11	灰オリーブ色	5Y4/2	砂	7cm~26cm	――	――	自然堆積	――
12	褐灰色	10YR4/1	砂礫	24cm~40cm	――	――	自然堆積	自然流路内堆積土
13	灰オリーブ色	7.5Y4/2	砂	14cm~25cm	――	――	自然堆積	――
14	褐灰色	10YR4/1	粘土	14cm~20cm	――	炭化物・砂・植物遺体少量	自然堆積	――
15	暗緑灰色	7.5GY4/1	粘土	28cm前後	――	植物遺体少量	自然堆積	――
16	暗緑灰色	10GY4/1	粘土	20cm~25cm	――	植物遺体少量	自然堆積	――
17	暗緑灰色	10GY3/1	砂	17cm~37cm	――	――	自然堆積	――
18			礫	――	――	――	自然堆積	――

3．検出遺構と出土遺物

（1）2層上面

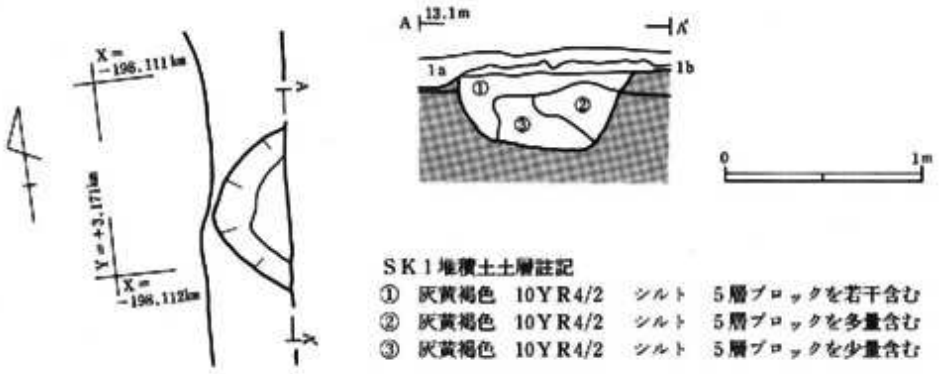
土坑2基を検出した。

1号土坑－SK1－（第126図，写真129）

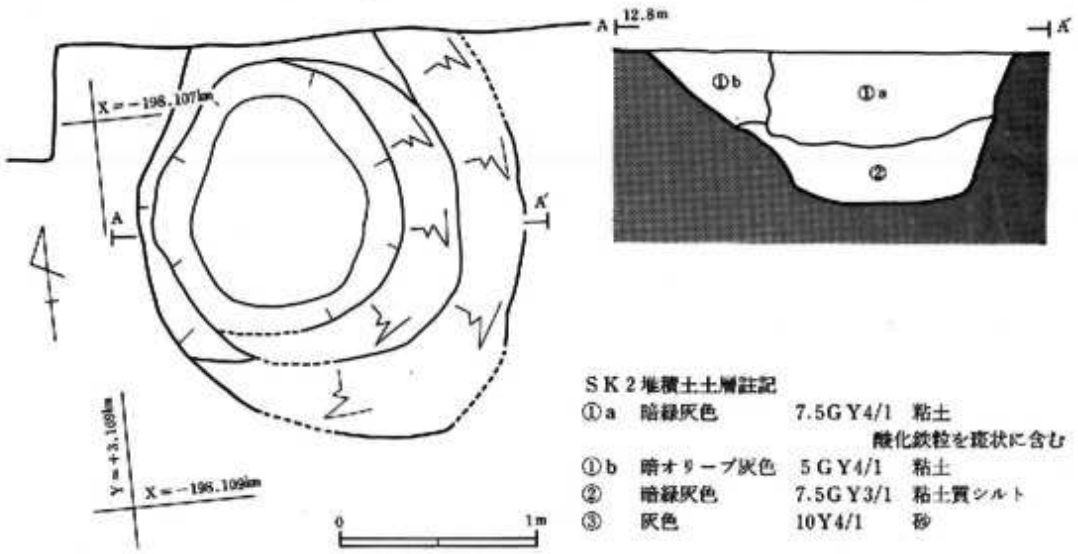
調査区東壁にかかって全体の1/2程が検出された。平面形は方形を呈し、南北長は約80cm以上になると思われる。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は単層で、遺物の出土はなかった。

2号土坑－SK2－（第127図，写真130）

北東側の調査区に検出された。平面形は長円形を呈し、南北長は2m以上、東西長は2mである。断面形はU字形を呈する。堆積土は2層に大別され、ややグライ化していた。遺物の出土はなかった。



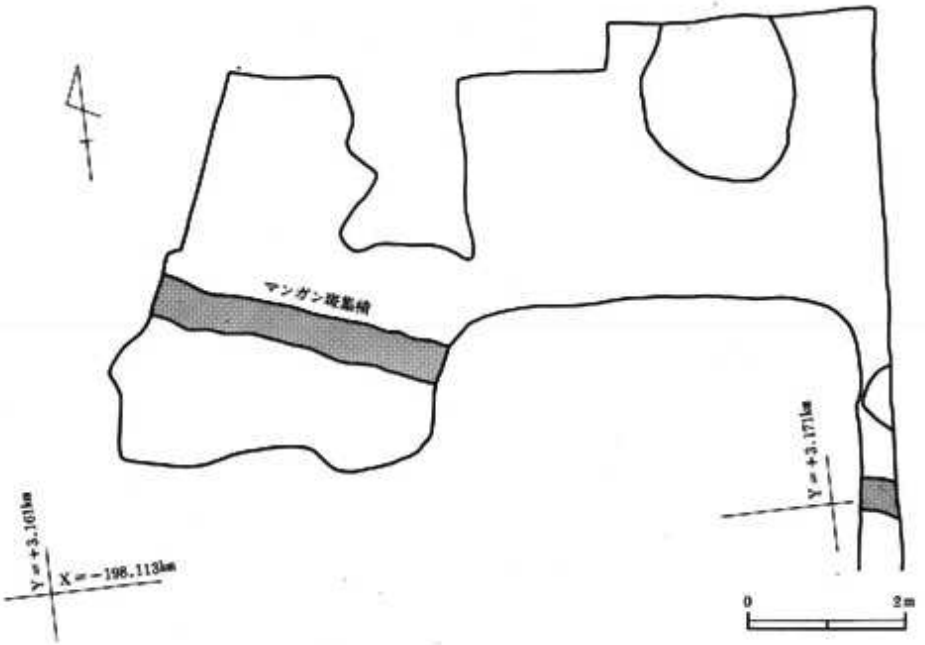
第126図　SK1平面・断面図



SK2堆積土土層註記

①a	暗緑灰色	7.5GY4/1	粘土 酸化鉄粒を斑状に含む
①b	暗オリーブ灰色	5GY4/1	粘土
②	暗緑灰色	7.5GY3/1	粘土質シルト
③	灰色	10Y4/1	砂

第127図　ＳＫ２平面・断面図



第128図　３層上面平面図

（２）３層上面

マンガン斑の集積（第128～130図，写真128・131・151）

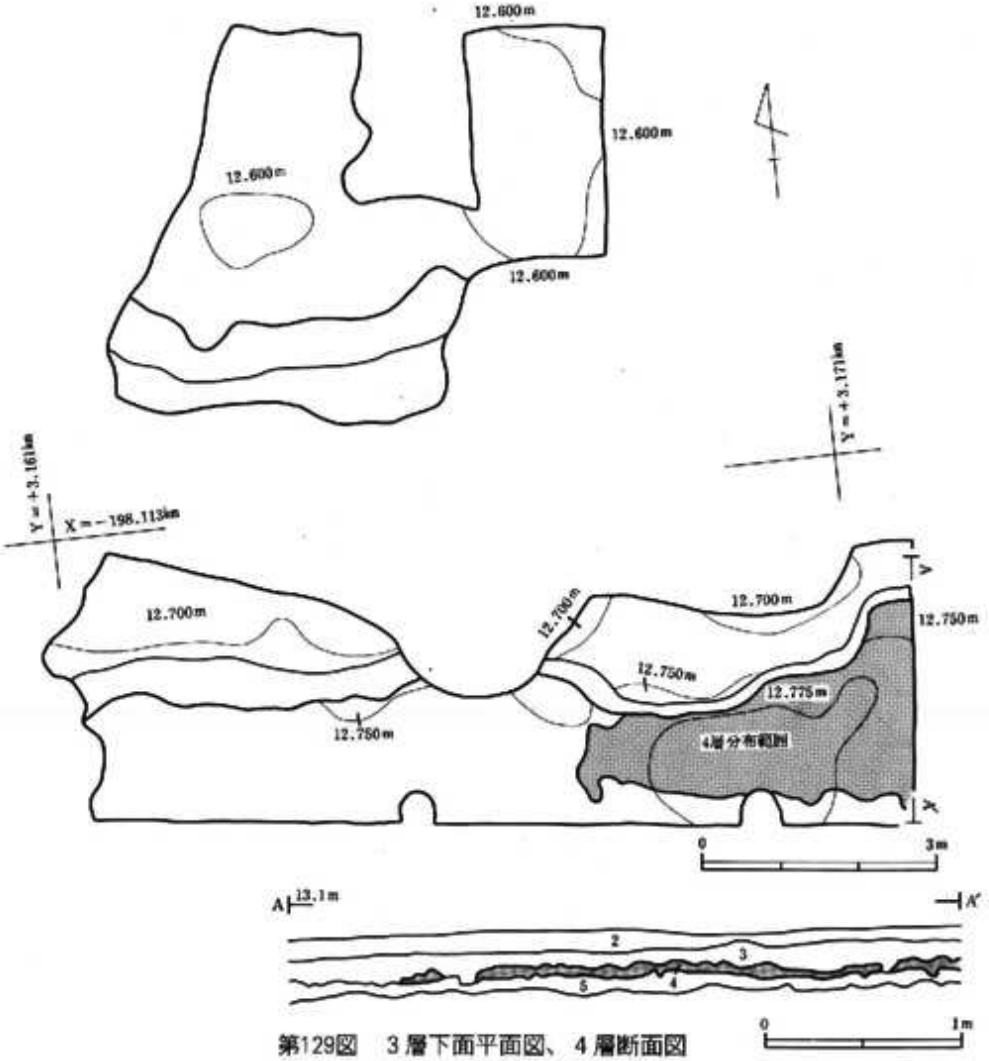
〈遺構状況〉　北側の調査区（３・４区）で東西に走るマンガン斑の帯を検出した。幅50cm程のもので、方向はＮ－80°－Ｗである。

このマンガンの集積が、どの層の段階によるものかについては不明である。

また３層上面で畦畔は検出されなかったが、４層が畦畔状の高まりとして確認された。４層

は自然堆積層で残存する範囲もかぎられており、水田耕作土とは考えられない。3層の土層の特徴や下面の凹凸が顕著であることからみて、この4層の高まりは、3層の水田耕作に伴い形成された擬似畦畔B（1987；斎野他）と考えられる。本来は、この畦畔としてとらえられた4層の直上の3層上面に畦畔が存在したものと考えられる。

〈出土遺物〉　須恵器片1点が出土した。平行叩きが施されており、胎土は緻密であるが若干の砂粒を含んでいる。



第129図　3層下面平面図、4層断面図

No.	図版番号	出土遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	特　徴
1	151－2	3　層	須恵器	甕	体部破片	外面－平行叩き、内面－ナデ？

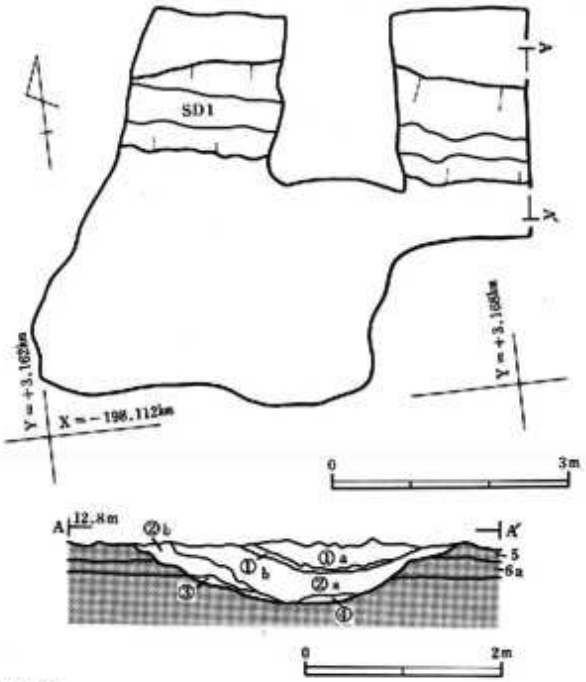
第130図　3層出土遺物

（3）5層上面

1号溝－SD1－

（第132図，写真132・152・153）

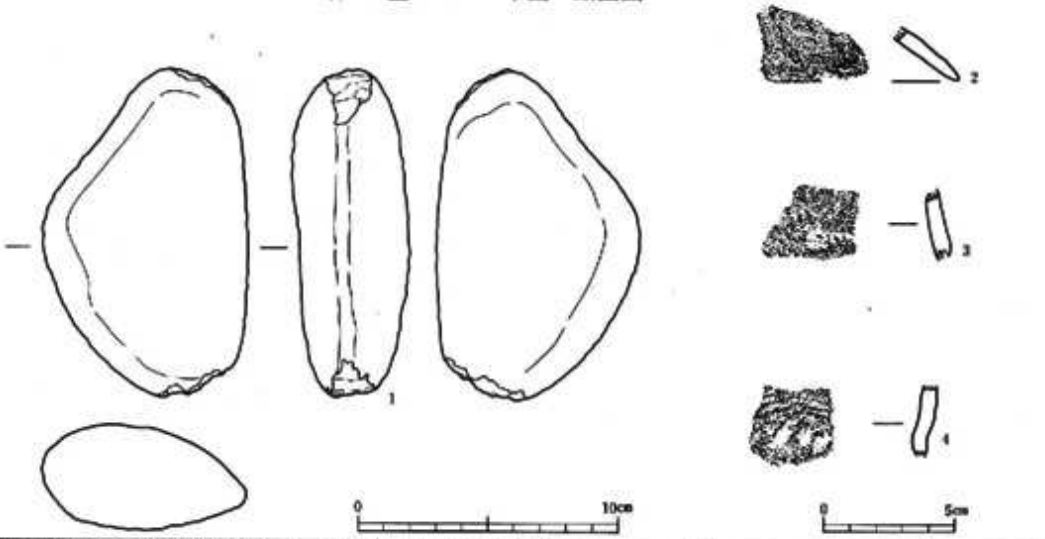
〈遺構状況〉　北側の調査区（3・4区）で東西に走る溝を検出した。方向はN－90°－Eである。平面形は直線的で、上端幅0.9～1.2m、下端幅0.2～0.4mを計る。断面形は舟底形を呈する。底面のレベルはわずかに東へ向って傾斜している。堆積土は6層からなり、確認時には酸化鉄の帯状の集積として検出されている。底面には砂が堆積しており、堆積状況からみて、2時期に分かれる可能性もある。



SD1堆積土土層註記

①a	オリーブ黒色	5Y2/2	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
①b	灰オリーブ色	5Y5/2	砂質シルト	酸化鉄粒を含む
②a	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
②b	オリーブ黒色	5Y2/2	粘土質シルト	マンガン粒を含む
③	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	
④	灰オリーブ色	5Y5/2	砂	

第131図　SD1平面・断面図



No.	図版番号	出土遺構・層位	名称	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
1	153－5	5層上	敲石	12.6cm	7.85cm	4.0cm	434.5g	石英安山岩	2ヶ所使用痕

No.	図版番号	出土遺構・層位	種別	器種	遺存度	特徴
2	152－1	SD1　堆土	弥生土器	蓋？	口縁～体	外面－横位の粗いミガキ、内面－横位ナデ、第 図No.3と同一か？
3	152－2	5層	弥生土器？	不明	体	内外面ともマメツ
4	152－3	5層中	弥生土器	広口壺？	口縁	口縁部肥厚、外面－横位斜位LR縄文、横位連続押圧文（下端）、内面－横位ナデ

第132図　SD1・5層出土遺物

〈出土遺物〉　堆積土中から弥生土器片1点が出土している。蓋と思われるが、外面に縦位のミガキ調整が施されている。

段差

〈遺構状況〉　5層上面において3層の土が混入する部分が認められ、これを段差としてとらえた。3層の水田耕作時における耕作深度のちがいによる段差と考えると、4層と同様3層での水田耕作に伴う擬似畦畔となる可能性がある。

5層の土は、北側に隣接する6次調査区の6層に対応し、6次調査時には直交する2本の畦畔と、それによって区画された水田面4区画が検出されている。この水田跡は古墳時代後期（栗囲式期）のものとされている（平間：1989）。

今回の調査では5層において畦畔等は確認されていないが、下面の凹凸が顕著であることなどからみて水田耕作土と考えられる。

〈出土遺物〉　5層中からは、弥生土器片2点、礫石器1点が出土している。弥生土器片はいずれも器形は不明で、第132図4は横位ＬＲ縄文が施文されたのちに横位押圧文が施されており、天王山式期と比定される。礫石器は石英安山岩製で、両端部に敲打痕がみられる。

（4）7層上面

7層水田跡（第133～135図，写真133・134・152・153）

〈遺構状況〉　2本の畦畔1・2と、それによって区画された水田面を検出した。畦畔1の方向はW－14°－Eで、畦畔2につながるものと思われる。2本の畦畔は、耕作土と同じ7層土を盛り上げて作られており、下端幅は2.0～2.5m、耕作土上面からの高さは、畦畔1の西側で約5cm、東側で約10cmである。耕作土の厚さは約15～25cmである。

下面の凹凸が顕著で、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は12.60～12.45mの間で、全体的には北東方向へ下っている。畦畔1の西側が最も高く、次に畦畔2の北東側となり、畦畔1の東側が最も低い。

〈出土遺物〉　7層耕作土中からは総数274点の弥生土器片が出土している。土器片のほとんどは調査区南側（1・2区）に集中しており、とくに畦畔1の東側にまとまって出土している。

出土した弥生土器片は、その特徴から4類に分けることができた（第134図）。

1類…肥厚させた口縁部に連続刺突が施されるもの（1，2）

1は甕の口縁部で、肥厚させた口縁の下端に横位の沈線文と連続刺突文が施され、横位の縄文が施文されている。2は壺の口縁部で、粗いミガキが施されている。

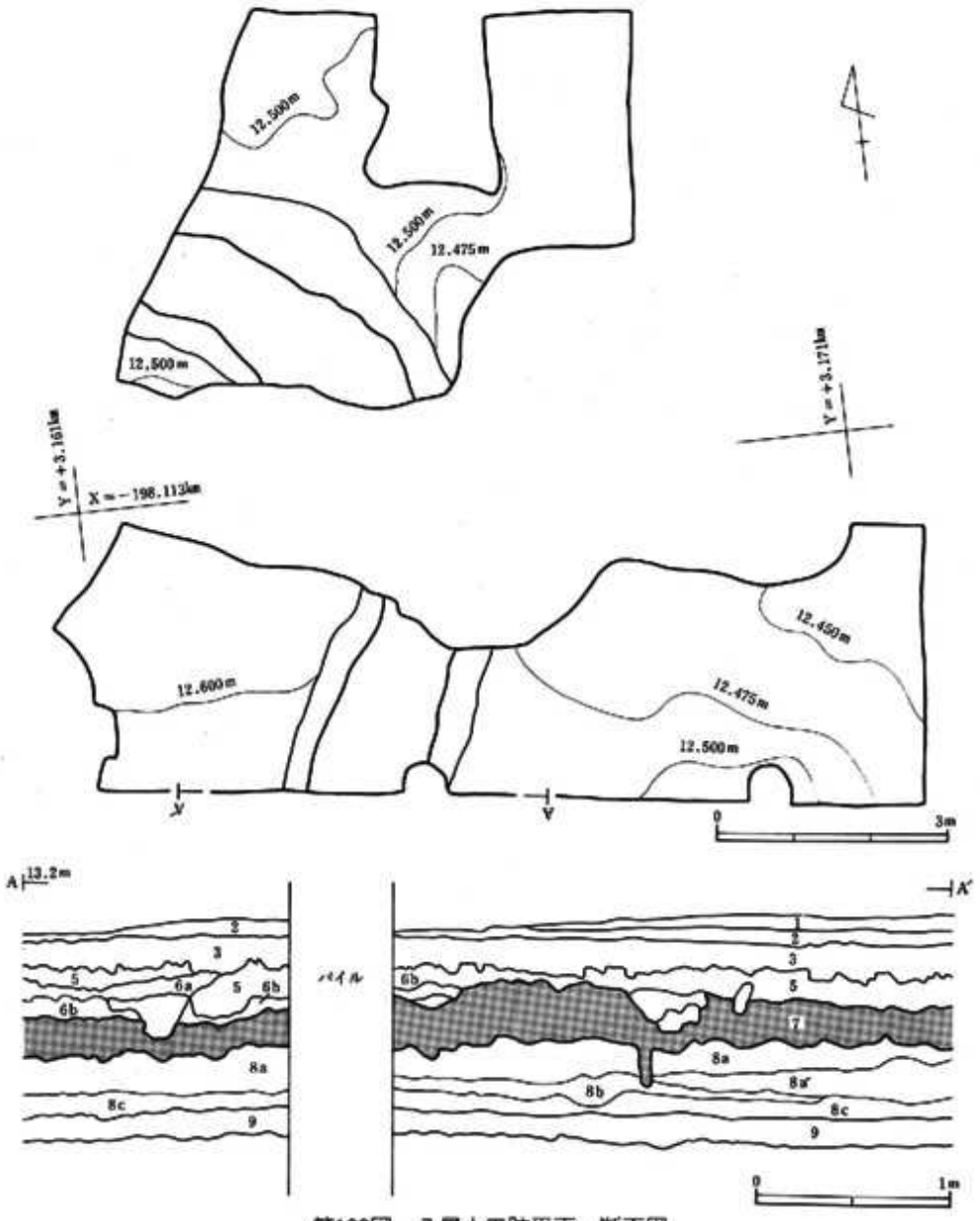
2類としたものは、沈線文を主体とするものでａ・ｂ類に分けられた。

2ａ類…沈線によって横位鋸歯文が施されるもの（4－1，4－2，5）

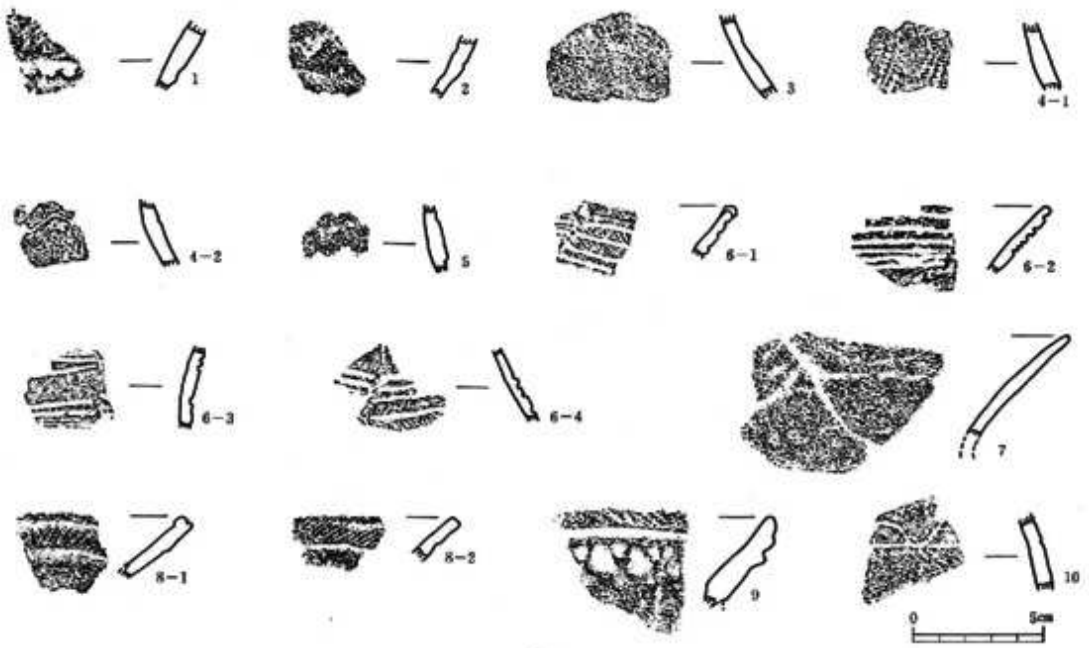
4－1，4－2は接合はしなかったが、広口壺又は甕の同一個体と考えられるものである。頸部には、沈線による横位の鋸歯文（2段）が施され、体部にはRL縄文が施文されている。5も広口壺又は甕の頸部で、沈線による横位の鋸歯文（2段）が施されており、4と同一個体となる可能性もある。

2b類…3本1本の沈線によって施文されるもの（6－1～6－4）

これも接合はしなかったが、小型広口壺の口頸部の同一個体とかんがえられるものである。

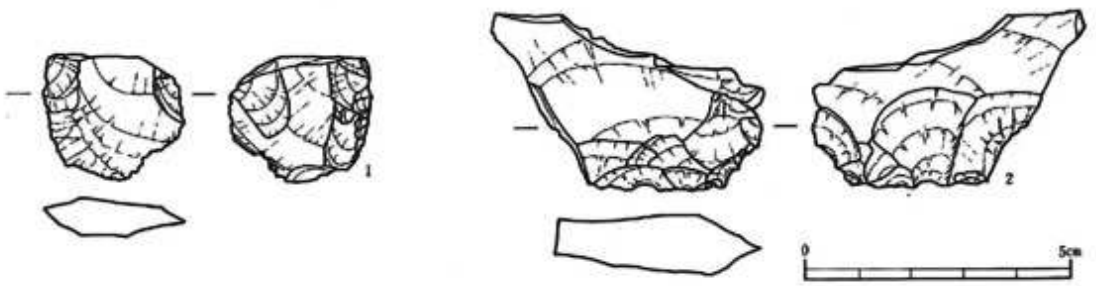


第133図　7層水田跡平面・断面図



No.	図版番号	出土遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	特　　徴	備　考
1	152－5	7層	弥生土器	甕？	口縁部	口縁部肥厚 外面－横位縄文、横位沈線文、横位連続刺突文（以上下端） 内外面ともヨコナデ	
2	152－6	7層上	弥生土器	壺？	口縁部	口縁部肥厚、外面－粗いミガキ 内面－横位の粗いナデ	
3	152－7	7層中	弥生土器	壺？	体部上半	外面－横位の粗いミガキ 内面－横位のナデ	
4－1 4－2	152－8 152－9	7層中	弥生土器	広口壺又は壺	頸部～体部上半	外面・頸部：横位縦束文2段（沈線文）→粗いミガキ 体部：ＲＬ縄文 内面－横位のナデ	同一個体
5	152－10	7層中	弥生土器	広口壺又は甕	頸部	外面－横位縦束文2段（沈線文）→粗いミガキ 内面－横位のナデ	
6－1 ～ 6－4	152－ 11～14	7層	弥生土器	小型広口壺	口頸部	波状口縁（頂部山形突起） 外面－口唇部：横位ＲＬ縄文　肩部：縦位　短線（沈線文） 口縁～頸部：横位縦曲文2段、横位直線文（以上3本1組の沈線文）→横位ＲＬ縄文（口縁部）→粗いミガキ 内面－粗いナデ	同一個体
7	152－15	7層中	弥生土器	甕？	口縁部	波状口縁 外面－横位連弧文2段または3段（ＲＬ縄文原体圧痕文） 内面－横位のナデ、内外面ともヨコナデ	
8－1 8－2	152－16 152－17	7層	弥生土器	壺？又は甕	口頸部	口縁部肥厚 外面－口唇部：横位沈線文　口縁部：横位ＬＲ縄文 頸部：粗いミガキ 内面－横位のナデ	同一個体？
9	152－18	7層上	弥生土器	甕	口頸部	口縁部肥厚 外面－口縁部：横位ＲＬ縄文→横位沈線文、横位連続刺突文＋横位連続押圧文（下端）　頸部：横位のナデ 内面－横位のナデ	
10	152－19	7層上	弥生土器	広口壺又は壺	体部上半	外面－横位ＲＬ縄文→横位直線文→横位連弧文（以上沈線文） 内面－横位のナデ	

第134図　7層水田跡出土遺物(1)



No.	図版番号	出土遺構・層位	名　称	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　質	備　考
1	153－3	7層上	二次加工ある剥片	2.4cm	2.7cm	0.8cm	5.5g	珪質頁岩	――
2	153－4	7層上	二次加工ある剥片	4.3cm	3.0cm	1.1cm	14.5g	頁岩	大型品？

第135図　7層水田跡出土遺物(2)

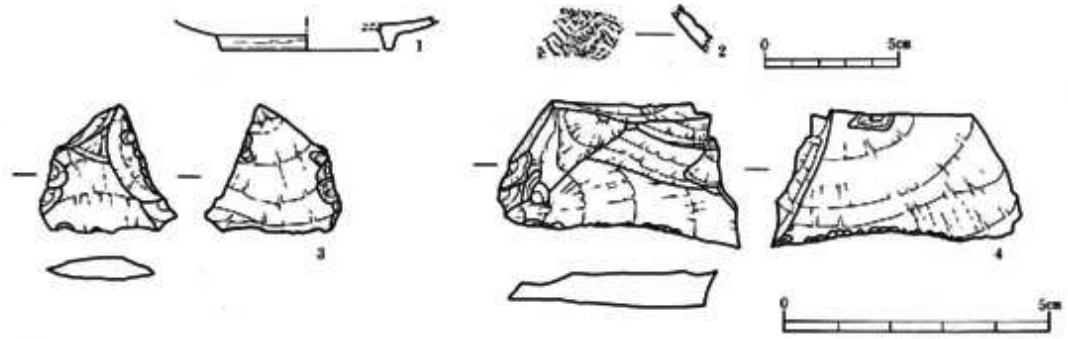
6－1は、波状口縁の頂部に山形突起がつき、頂部に沈線による縦位短線が刻まれている。口唇部にはRL縄文が施文されている。6－2～6－4は口縁～頸部で、3本1組の沈線によって横位鋸歯文（2段）と横位直線文が施され、RL縄文が施文されている。

3類…肥厚させた口縁部に横位沈線文が施されるもの（8－1，8－2，9）

8－1，8－2は蓋又は壺の同一個体と考えられるもので、口唇部には横位沈線文がめぐっている。口縁部にはLR縄文が施文されている。9は甕の口頸部で、口縁部にはRL縄文が施文され，横位沈線文によって画された下端に、横位連続刺突文と連続押圧文が施されている。

4類…横位連弧文が施されるもの（7，10）

7は甕の口縁部で、波状口縁を呈する。RL縄文原体圧痕によって、2段又は3段の横位の連弧文が施されている。10は広口壺又は甕の体部上半で、RL縄文が施されたのちに沈線によって横位の直線文．連弧文が施されている。



No.	図版番号	出土遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	特	徴
1	151－1	1　層	陶器	皿	底部破片	大堀相馬，白高釉，外面高台下部～高台内露胎　底径6.5cm，器高（1.3cm），19c	
2	152－4	6 a	弥生土器	壺	頸	外面－横位鋸歯文5段（沈線文），内外面ともヘラミガキ	

No.	図版番号	出土遺構・層位	名　称	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　質	備　考
3	153－1	3　層	二次加工ある剥片	2.45cm	2.55cm	0.55cm	2.5g	凝灰岩質爆沢岩か？	――
4	153－2	6層上	スクレイパー？	2.75cm	4.6 m	0.8 cm	9.5g	珪質頁岩	――

第136図　その他の出土遺物

出土遺物の所属年代については、いずれも天王山式期に比定されると思われる。

そのほか7層中からは剥片石器2点が出土している。いずれも二次加工のある剥片で、石材は頁岩を用いている。このうち2は大型品の欠損品の可能性もある。

（5）その他の出土遺物（第136図，写真151～153）

基本層1・4・6中から弥生土器片・陶器片・剥片石器が出土している。

陶器片は皿の底部で、1層中から出土しており大堀相馬焼（19世紀）である。白濁釉がかけられ高台内に露胎がある。弥生土器片は6a層から出土しており、壺の肩部で沈線により横位鋸歯文がつけられている。

剥片石器は4・6層中から出土している。石材はいずれも頁岩をもちいており、微細な剥離痕がみられる。(4)はスクレイパーの可能性もある。

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構としては、5・7層水田跡がある。

また、水田跡の可能性のある層としては、基本層2・3・9層があげられる。これらの所属年代としては、北側に隣接する6次調査区との層の対応（14次5層＝6次6層水田跡）及び、出土遺物等から以下のとおりである。

7層水田跡－弥生時代後期（天王山式期）

5層－古墳時代後期（栗囲式期）

3層－平安～中世　2層－中世～近世

2．水田跡以外の遺構としては、2層－土坑2基、3層－マンガン斑帯状集積、5層－溝1条がある。これらの所属年代としては、土坑2基－近世、溝－古墳時代以降のものと思われる。

今回の調査では、北側に隣接する6次調査区では確認されていない弥生時代後期（天王山式期）の水田跡が確認された。同時期の水田跡としては、東方300m離れた2次調査区の7b層が水田跡の可能性を指摘されている。また、西方200mの富沢遺跡第24次調査区の7c層及び10層で確認された水田跡がある。これらとの関係を明らかにすることが今後の課題といえる。

第3章　プラント・オパール分析

古環境研究所

1．はじめに

この調査は、プラントオパール分析を用いて、富沢遺跡（第59・60・61・62・63・64・65次調査）および山口遺跡（第13・14次調査）における稲作跡の検証および探査を試みたものである。

2．試料

試料は遺跡調査の担当者によって容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。試料数は計85点である。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1) 試料土の絶乾（105℃・24時間），仮比重測定
(2) 試料土約1ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量
(3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
(4) 超音波による分散（300W・42 KHz・10分間）
(5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥
(6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成
(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの稲籾生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は1.03である（杉山・藤原，1987）。

富沢遺跡第59次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	cm	cm		個/g	t/10a	個/g	個/g	個/g	個/g
4	20	10	0.96	0	0.00	1,600	12,900	1,600	0
5	42	9	0.48	7,300	3.15	4,000	25,300	2,400	0
6	51	14	0.55	4,500	3.46	3,600	40,700	900	0
7	65	13	0.60	5,300	4.15	3,500	45,800	800	0
9	78	2	0.59	5,800	0.70	5,000	37,500	800	0
10	80	12	0.54	4,400	2.84	2,600	24,100	0	0
11	92	18	0.33	4,200	2.41	8,400	13,400	0	0
12	110	6	0.53	5,200	1.67	10,400	33,100	1,700	0
13	116	10	0.66	0	0.00	7,900	24,500	700	0
14	126	10	0.74	0	0.00	15,100	64,100	1,600	0

富沢遺跡第60次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	cm	cm		個/g	t/10a	個/g	個/g	個/g	個/g
5	0	7	0.71	3,400	1.73	1,700	10,300	0	0
6a	7	6	0.58	3,500	1.24	0	34,500	2,600	0
6b	13	4	0.50	1,800	0.37	3,700	25,200	1,800	0
8b	17	3	0.37	0	0.00	0	8,200	0	0
8c	20	5	0.33	0	0.00	3,200	7,200	0	0
9	25	7	0.17	0	0.00	800	6,800	4,200	0
11	32	4	0.23	0	0.00	6,300	6,300	1,500	0
12	36	4	0.38	3,200	0.49	800	7,200	0	0
13a	40	2	0.31	800	0.04	3,300	5,800	0	0
13b	42	3	0.25	800	0.06	16,000	5,300	0	0

富沢遺跡第61次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	cm	cm		個/g	t/10a	個/g	個/g	個/g	個/g
6a	0	6	0.58	8,000	2.84	4,000	36,000	3,200	0
8a	6	13	0.48	900	0.54	1,900	44,200	2,900	0
9	19	6	0.17	800	0.06	9,800	0	2,400	3,200
10	25	2	0.28	600	0.02	600	5,000	1,900	0
11	27	6	0.28	1,700	0.25	10,500	20,100	1,700	1,700
12	33	3	0.34	1,000	0.09	9,100	2,900	0	1,000
13a	36	8	0.25	3,000	0.58	16,300	4,000	0	0
14	44	10	0.17	0	0.00	11,700	8,700	0	0

富沢遺跡第62次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	cm	cm		個/g	t/10a	個/g	個/g	個/g	個/g
6b	0	9	0.41	600	0.19	0	18,300	600	0
7	9	9	0.46	6,700	2.78	1,900	7,700	3,800	900
8a	18	12	0.56	11,400	7.91	16,300	37,500	1,600	2,400
9	30	6	0.72	0	0.00	900	22,800	900	0
10	36	2	0.58	8,800	1.03	5,900	37,500	2,900	0
11	38	5	0.71	700	0.21	4,400	43,700	2,200	0
13	43	14	0.65	0	0.00	2,400	34,600	1,600	800

表15　プラント・オパール分析結果(1)

第63次A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7c	0	7	0.88	0	0.00	0	22,000	700	0
8a	7	6	0.93	1,700	0.93	1,700	15,700	0	800
8b	13	6	0.95	3,400	1.98	800	28,300	2,500	0
9	19	9	1.02	5,800	5.47	0	24,400	1,600	0
10a	28	7	0.90	0	0.00	0	27,400	800	0

第63次B地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7c	0	4	0.89	0	0.00	0	23,900	900	0
8a−1	4	7	1.15	800	0.65	0	16,700	0	0
8b	11	5	1.11	700	0.36	1,500	11,500	700	0
9	16	4	1.23	2,700	1.36	900	14,600	0	0
10a	20	11	0.95	0	0.00	0	18,700	800	0

第64次1−1地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2	0	5	1.03	13,100	6.90	0	38,500	1,000	0
3	5	9	0.95	10,600	9.27	900	14,500	1,900	0
6a	14	9	0.84	3,100	2.32	1,500	9,400	700	0
7	23	5	0.84	900	0.36	1,800	13,000	1,800	0
8	28	16	0.84	0	0.00	1,000	17,000	0	0

第64次1−2地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
4	5	9	0.84	5,200	3.99	1,700	9,500	800	0

第64次2地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
5	0	10	0.79	2,600	2.06	1,700	15,000	1,700	0
13	80	18	0.72	0	0.00	2,600	33,200	0	0
14	98	10	0.82	0	0.00	1,900	23,300	0	0
15	108	19	0.85	0	0.00	2,800	14,100	900	900

第65次

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
3	0	10	1.04	12,200	12.98	6,100	47,900	2,000	0
4	20	5	0.89	13,500	6.13	4,100	61,400	1,000	0
5	25	5	0.88	5,800	2.58	2,900	34,800	900	0
6	30	6	0.88	11,300	6.06	3,700	37,700	0	0
7	36	13	0.89	8,100	9.64	3,600	39,600	900	0
8a	49	7	0.88	9,500	5.98	20,000	36,200	1,900	0
8b	56	16	0.79	900	1.15	30,500	128,200	1,900	0
9	72	12	0.82	800	0.74	800	39,800	1,700	0
10	84	10	0.75	700	0.52	2,800	16,400	0	0
11	94	4	0.59	0	0.00	5,500	7,900	700	0

表16　プラント・オパール分析結果(2)

仙台市、山口遺跡

第13次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(栃総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
2	5	7	0.99	10,400	7.43	0	69,000	0	0
3	12	8	0.95	9,700	7.58	1,900	45,700	900	0
4	20	9	0.95	8,900	7.79	900	136,000	900	0
5	29	3	0.89	15,500	7.06	8,700	115,700	0	0
6	34	8	0.60	800	0.33	1,700	17,700	0	0
7	42	6	0.69	2,800	1.17	900	5,700	900	0
8	48	5	0.60	800	0.21	5,800	18,500	0	0
9	53	5	0.61	0	0.00	6,000	10,000	0	0
10	58	2	0.60	0	0.00	11,000	10,100	0	0
11	60	15	0.55	0	0.00	8,400	8,400	0	0

第14次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(栃総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
3	11	7	1.12	8,900	7.14	0	39,600	900	900
4	18	7	1.04	6,100	4.54	0	56,600	0	0
5	25	5	0.99	6,500	3.30	1,800	81,400	900	0
6a	30	16	0.95	2,500	3.79	0	64,400	800	0
7	46	24	0.98	2,800	6.67	900	29,800	1,800	0
8a	70	10	1.08	0	0.00	0	23,600	0	0
8b	80	12	1.07	0	0.00	0	24,800	0	0
8c	92	7	0.92	0	0.00	0	20,800	600	0
9	99	14	0.89	0	0.00	12,200	35,700	2,800	0
10	113	12	0.98	0	0.00	800	43,500	2,600	0

表17　プラント・オパール分析結果(3)

4．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表15～17および第137・138図に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、定量は、イネ，ヨシ属，タケ亜科，ウシクサ族（ススキなどが含まれる），キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

5．考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、富沢遺跡などの場合は、これまでの調査の結果、プラント・オパール密度が3,000個／g程度の場合でも水田遺構が検出されていることから、判断の基準となる数値を約3,000個／gとした。この判断基準にもとづいて、各調査区ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) 富沢遺跡第59次調査

4～14層について分析した結果、5～12層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、5，6，7，9，10，11，12層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(2) 富沢遺跡第60次調査

5～13b層について分析した結果、5～6b層および12～13b層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、5，6a，12層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(3) 富沢遺跡第61次調査

6a～14層のついて分析した結果、6a～13a層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、6a層と13a層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(4) 富沢遺跡第62次調査

6b～13層について分析した結果、6b～8a層および10～11層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、7，8a，10層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(5) 富沢遺跡第63次調査

A，B地点ともに7c～10a層について分析を行った。その結果、A地点では8a～9層、B地点では8a－1～9層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、A地点の8b層と9層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(6) 富沢遺跡第64次調査

2～15層について分析した結果、2～7層の各層でプラント・オパールが検出された。このうち、2，3，4，6a層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(7) 富沢遺跡第65次調査

3～11層について分析した結果、3～10層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、3，4，5，6，7，8a層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(8) 山口遺跡第13次調査

2～11層について分析した結果、2～8層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、2，3，4，5，7層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

(9) 山口遺跡第14次調査

3～10層について分析した結果、3～7層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、3，4，5，7層では稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

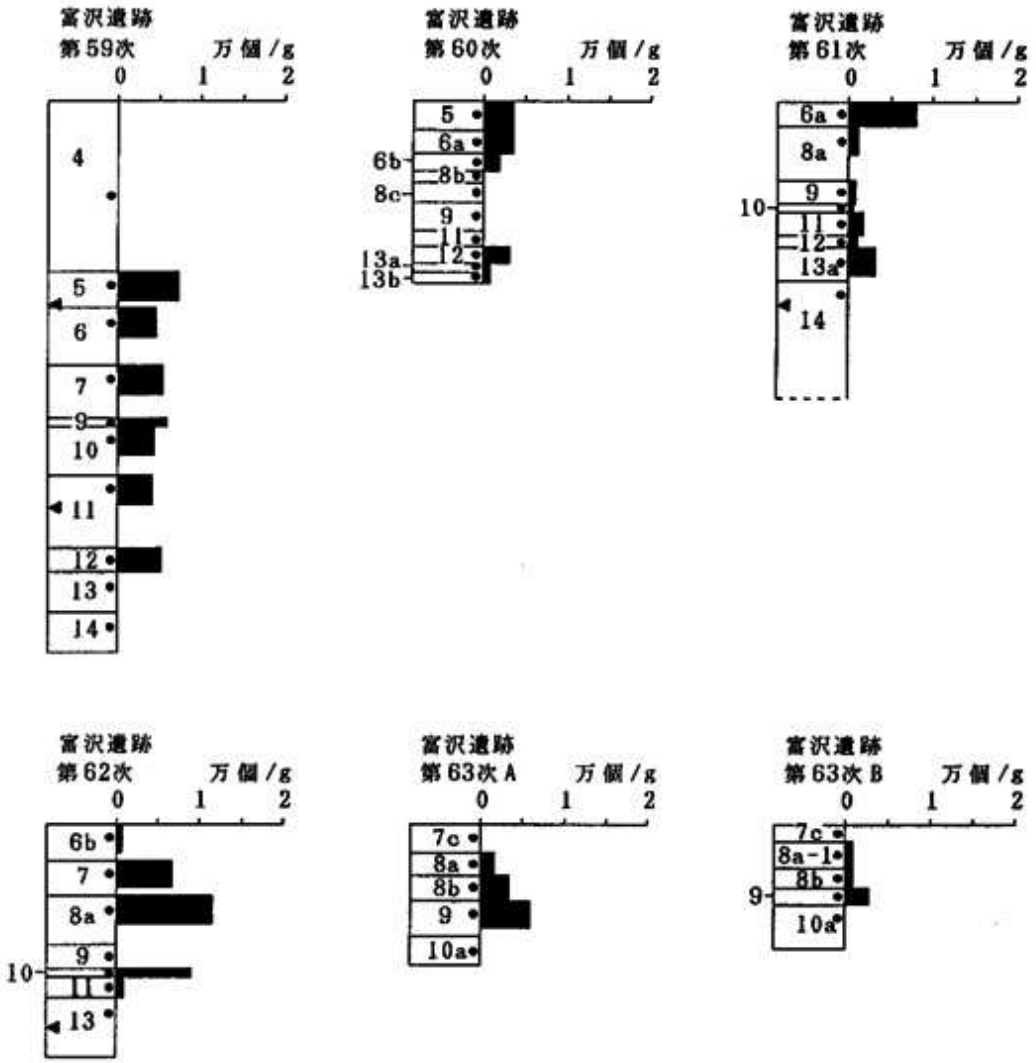
【参考文献】

杉山真二・藤原宏志．1987．川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，第10集，281－298．

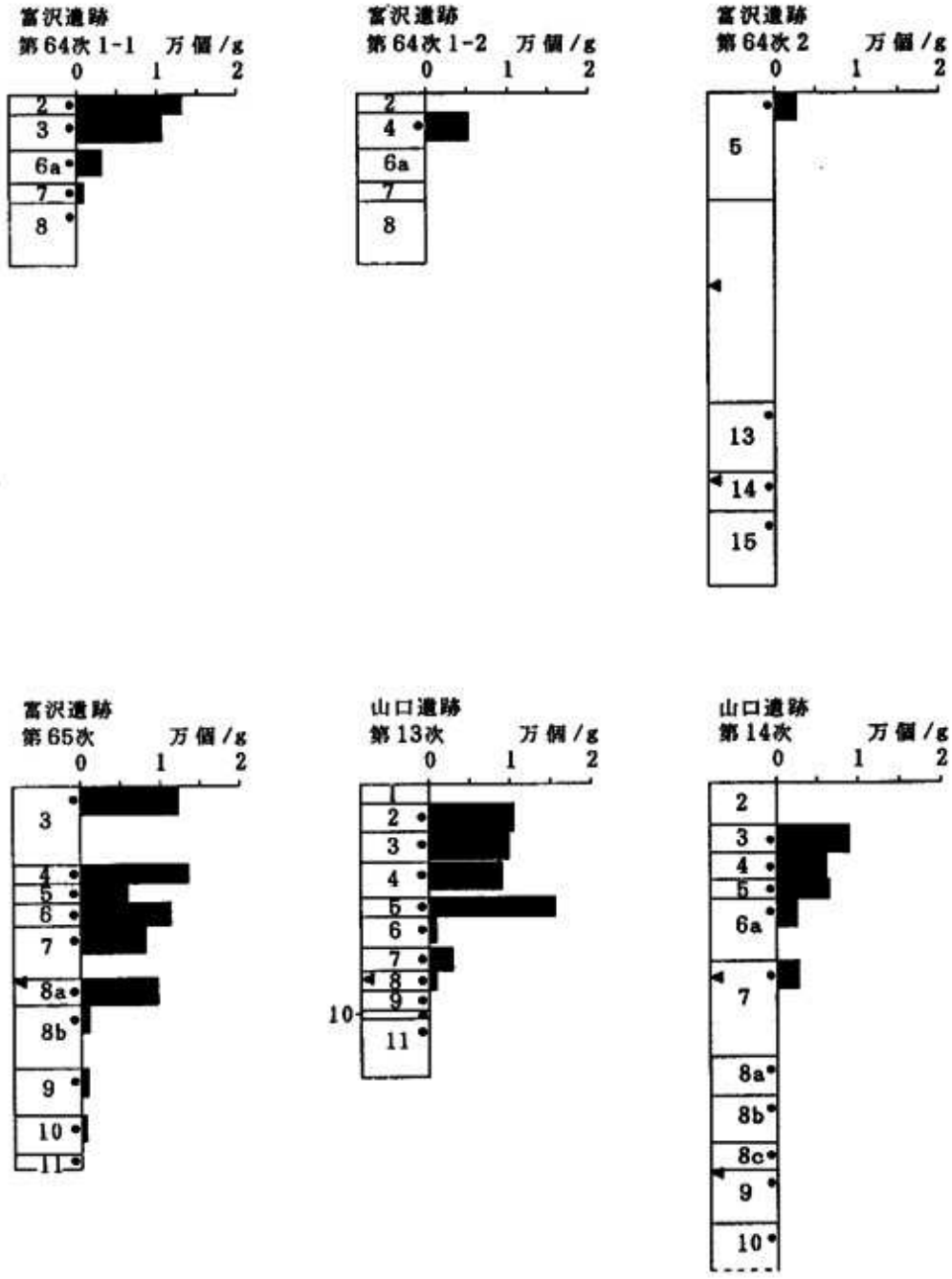
藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：15－29．

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativaL.）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12：29－41．

藤原宏志・杉山真二．1984．プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17：73－85．



第137図　イネのプラント・オパールの検出状況(1)



第138図　イネのプラント・オパールの検出状況(2)

第4章　富沢地区基本層序案・層位対応関係案

第1節　基本層序案・層位対応関係案作成経緯と地区設定

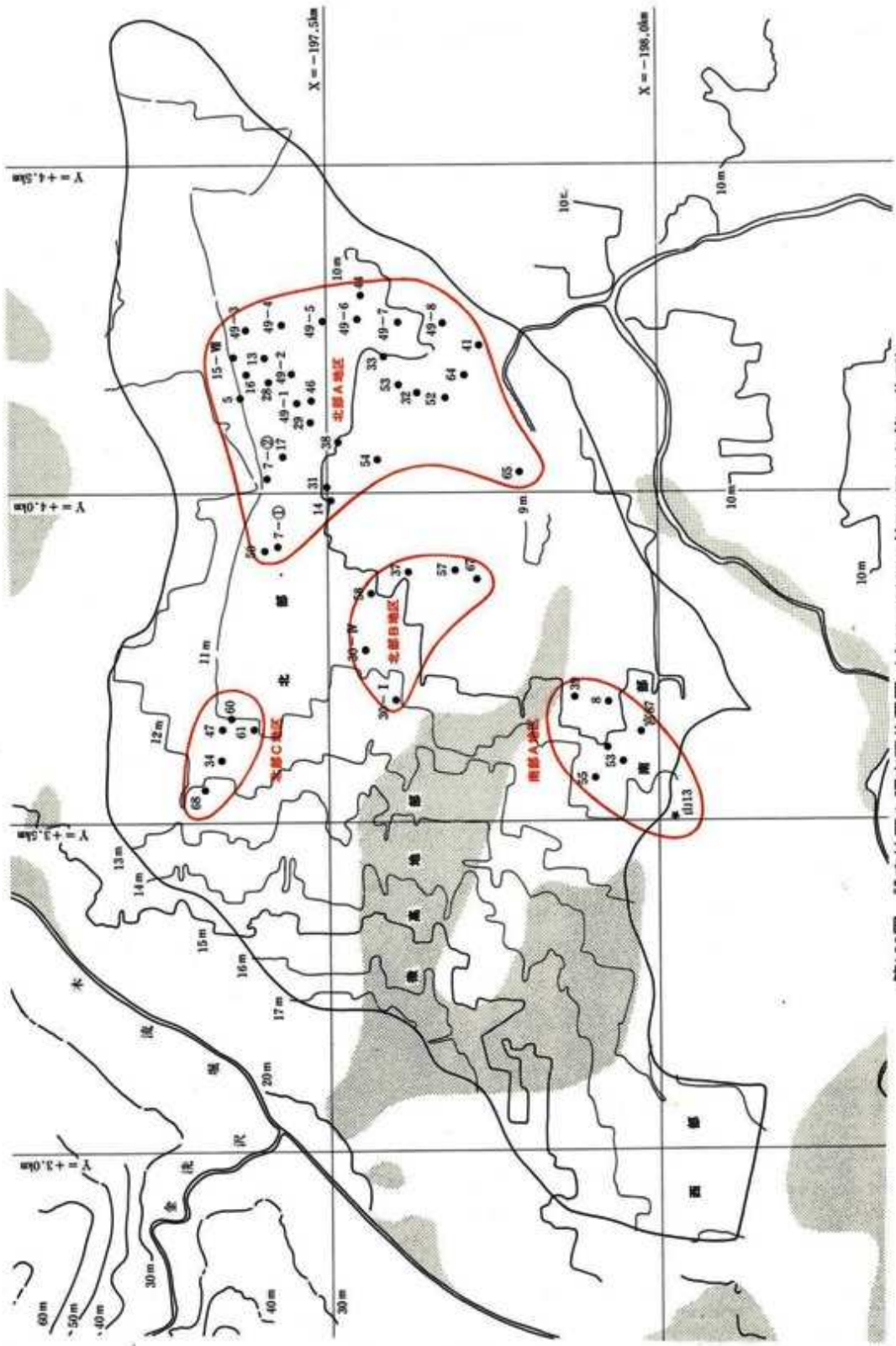
富沢遺跡は、1982年の第1次調査以来、現在まで68次の調査が行われている。また、隣接の山口遺跡でも14次にわたる調査が実施されている。これらの調査を通じて、隣接調査区どうしの基本層序の対応は、個々で行われているものの、比較的広い範囲における対応関係は、富沢遺跡北部における第15次調査区を中心とする対応関係（斎野：1987）、第49次調査区の対応関係（佐藤：1990）が上げられるのみである。個々の調査区において遺構が検出されたとしても、周辺調査区との広範な層位の対応関係が示されていない限り、同一時期の遺構の広がりや詳細な年代観は置き去りにされ、個々の調査区における成果の羅列にしかならない。このような状況に落ち込まないためにも、早急に広い範囲を取り込む基本層序の確立とその対応関係が必要と考え、今回、現在までの調査成果に基づき、4地区における基本層序案・対応関係案の作成を試みてみた。ただし、あくまでもこれは、1991年3月段階の基本層序案・対応関係案であり、当然、今後の新しい知見・調査成果によっては変更を余儀なくされるものと考える。また、各層の所属年代に関しても対象遺構が水田跡ということもあり時期決定遺物が希薄であり、基本層序案・対応関係案と同様に、今後の調査によって変更・強化されていくものと考える。

今回の基本層序案・対応関係案は、全ての調査区を網羅したものではない。取り合えず現段階で層位の対応関係が認められると考えられる4地区に限定した。これら4地区の名称に関しては、地形的変換点を加味した富沢遺跡の地域区分－微高地部・北部・南部・西部－（太田：1991）に基づき、富沢遺跡北部A地区、富沢遺跡北部B地区、富沢遺跡北部C地区、富沢遺跡南部A地区とした（第139図）。今後、対応関係の認められる地区が増すことも予測されるし、さらに、隣接地区間での層位の対応関係が成立すれば、より広域的な基本層序・対応関係が確立されるものと考える。

第2節　富沢遺跡各地区基本層序案・層位対応関係案（1991年）

1．富沢遺跡北部A地区（第140図，表18・19）

この基本層序案に包括される調査区は、第5次・第7次・第13次・第14次・第15次Ⅶ区・第16次・第17次・第28次・第29次・第31次・第32次・第33次・第38次・第41次・第44次・第46次・第49次・第50次・第52次・第53次・第54次・第64次・第65次の23調査区である。最長距離は



第139図　設定地区と調査区位置図（太田：1991の第240図を加筆・修正）

第15次Ⅶ区と第65次間の約470mである。基本層序案及び各調査区の層位の対応関係案は表18・19，第140図のとおりである。これらは、第28調査区と第49次調査区（第1～8地点）の層位対応を基軸とし、これに隣接調査区を加え、層位の対応関係を広げて行ったものである。

既に当地域は1987年に第15次調査成果により、第5・7・11・12・13・17次調査区と第15次調査区Ⅳ～Ⅶ区との基本層序対応関係（案）が示されている（斎野：1987）。しかしながら、第15次調査区Ⅵ区以東の層序には、今回の基本層序8b層・9（a•b）層の対応層が明確に認められるものの、これらの上層・下層では、今回の基本層序に比べ層相の変化及び複雑化が著しい。従って、今回の層位の対応関係では、混乱を避けるために、敢えて第15次調査Ⅵ区以東の調査区との対応関係を実施しなかった。

当地区の基本層序案・対応関係案作成に伴う変更・留意点は以下に記した。

1．4a層は$4a_1$と$4a_2$層に分層される調査区が4カ所認められた（第32・33・41・52次）。いずれも南側に位置する調査区である。似かよった色調・土性を呈するものであるが、$4a_2$層の方がやや暗い色調である。他の調査区では分層は認められず単一層であったが、これらが$4a_1$・$4a_2$層のいずれに対応するかは現段階では不明である。

2．7層は自然堆積層であるが、下層に8a層の介在がない限り、8b層（自然堆積）との分離は現状では非常に困難である。なお、7層以下の当地区の土性は、北半では泥炭分を多量に含む粘土か泥炭が主であるのに対し、第32次調査区以南では粘性の強い粘土となり、7層以下の土性に大きな変化が認められる。

3．8b層は黒色とにぶい黄褐色の互層からなる自然堆積層である。この層は全ての調査区で認められ広く分布する。この層は第28・49次調査区では、3層に分層し7・8a•8b層と名称したものである。しかしながら、中間の8b層の介在がなければ、7層と8b層との分離が困難であることと各層離面で人為的遺構全くが認められないことから、今回これらを3層に分離せず単一層－8b層－に統一した。なお、現在、当層は、本地区で検出されている弥生時代の水田跡のうち、最も新しい段階の9a層水田跡（十三塚式期）の直上層にあたり、弥生時代の水田跡をわける重要な鍵層となっている。

4．9a•10b•10d•11・$12a_2$層の各層は弥生時代の水田層である。これら各水田跡の水田土壌の母材となる層は、それぞれ9b•10c•10e•12a•$12a_3$層の各自然堆積層である。これらの耕作域は、10b層が第13次調査区を中心とする限られた範囲、$12a_2$層が第28次調査区のみといった狭い範囲でしか検出されていないのに対して、9a•10d•11層の各層は広域に広がっていることが認められている。ただし、各水田跡の水田域に関しては、それぞれの母材となる層の広がりとその水田土壌の有無によって判断されたものであり、今後の検討課題といえる。

なお、これら弥生時代の水田土壌が、1地点で全て揃うことは希で、多くは、何層かの水

表18　富沢遺跡北部A地区基本層序及び層位対応表　その1

基本層序	水田跡の認定	所属年代	特徴	第5次		第7次		第13次		第14次		第15次VII区		第16次		第17次		第28次		第29次		第31次		第32次	
				層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構
1		現代		1		1		1		1a		1		1		1		1		1a		1		1	
2	△	近代以降	礫砂含	2		2		2		1b		−	−	2		−	−	2		1b		1		2a	
3a	○	近世		3	畦	3	畦	3	耕	2	畦	4a	耕	3	耕	3	耕	3	耕	4a	耕	2	耕	2a	耕
3b	△			−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2b	
3c			互層	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
3d	△			−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2c•d?	
4a	○	平安(灰白色火山灰降下以降)	灰白色火山灰ブロック含	−	−	−	−	4	畦	−	−	4b	耕	4	畦	−	−	4	耕	4b	耕	3	耕		
a_1	○			−	−	−	−			−	−					−	−							3a	耕
a_2	○			−	−	−	−			−	−					−	−							3b	耕
4b	○	平安(灰白色火山灰降下前)	上面に灰白色火山灰	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3c?	耕
4c	△			−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
5	○	古墳以降, 平安以前		−	−	−	−	5	耕	3	畦	5a	耕	5	耕	−	−	5	耕	−	−	4	耕	4a	畦
6	△			−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
7			互層	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4?		6		4b		−	−	−	−
8a	△			−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6		4b		−	−	−	−
8b			互層	4		4		6a〜c		4a•b		8		6a〜c		4		7〜8b		8a〜c		5a〜6		4b	
9a	○	弥生(十三塚式期)	粘土分主	5	擬	5	擬	7	耕	4c	耕	9a	耕	7	耕	5a	耕	9a	畦	9a	畦	−	−	−	−
a_1	○																					−	−	−	−
a_2	○																					−	−	−	−
9b			互層•粘土分多量含	−	−	−	−	−	−	4c		−	−	−	−	5b		9b		9b		7		4c	
10a			互層•植物遺体多量含	6〜7a		6〜7a		8〜10		5•6		10a		8〜10		6•7a		10a		10a		8•9		5	
10b	○	弥生	粘土分主	7a	耕	−	−	−	−	−	−	10b	畦	−	−	−	−	10b	畦	−	−	−	−	−	−
10c			互層	7b		7b?		10		6		10c		11		7b?		10c		10b〜c		9		5	
10d	○	弥生	粘土分主	7b	耕	7b?	耕	11	畦	7a	耕	10c	耕	−	−	7b?	耕	10d	畦	10d	畦	10a	畦	6	耕
10e			互層•粘土分多量含	7b		7b		11		7a		−	−	11		7b		10e		10e		10b		−	−
11	○	弥生(例形期式期)	粘土分主	7c	畦	7c	畦	12a	畦	7b	畦?	11a	畦	12a		7c1	畦	11a	畦	−	−	11		7b	
12a			互層	7e		7e		12b		−	−	13		12b		7c2				16		−	−	7a	
a_1			互層							−	−							11b				−	−		
a_2	○	弥生	粘土分主	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	11c	畦	−	−	−	−	−	−
a_3			互層							−	−							11d〜12				−	−		
12b			粘土分多量含	7f		7f		13		−	−	13		13		7c2		12		16		−	−	8	
13	○?		植物遺体多量含	8		8		14		7c		13		14		7d	畦	13		17		12a		9	
14			植物遺体多量含	9		9				8				15		8		14		18		12b		9	

＊　○…水田跡　△…水田跡の可能性　▭…時期決定資料出土層

畦…畦畔検出　擬…擬似畦畔B検出　境…耕作域と非耕作域の境界ライン検出　耕…水田耕作土のみ検出

表19　富沢遺跡北部A地区基本層序及び層位対応表　その2

基本層序	水田跡の認定	第33次		第38次		第41次		第44次		第46次		第49次		第50次		第52次		第53次		第54次		第64次		第65次		主たる色調	主たる土質
		層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構		
1		2		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1a~c		1		オリーブ黒	シルト~粘土
2	△	3		2		1		2		2		2		—	—	2		2		2		2		2		灰黄褐	砂質シルト
3a	○	4•5a	畦?	3	耕	1	耕	3	耕	3	耕	3a	耕	2	耕	3	耕	3a	耕	3	耕	3	耕	3	耕	黒	粘土
3b	△	—	—	—	—	—	—	4		—	—	3b		—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—		
3c		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3b		—	—	—	—	3b		—	—	—	—	—	—	にぶい黄褐•黒	
3d	△	—	—	—	—	2?		—	—	—	—	3c		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黒褐	
4a	○			—	—			5	耕	4	耕	4a	耕	3	耕			4	畦	4	耕	—	—	4	耕	灰	
a_1	○	5b	耕			3?	耕									4a~c	耕					—	—				
a_2	○	6•7	耕	—	—	4?	耕									5?	耕					—	—				
4b	○	8•9	畦	—	—	5?	耕	6	耕	—	—	4b	耕	—	—	6a?	畦	—	—	—	—	4?	畦?	5	耕		
4c	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4c		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	灰~褐	
5	○	10	畦	—	—	—	—	7	耕	—	—	5a	耕	—	—	6b	境	5	畦	—	—	5	耕	6	畦	黒褐	
6	∧	—	—	—	—	—	—	8a		—	—	5b		—	—	—	—	—	—	—	—	6a		7		灰黄	
7		11		6a		—	—	8b		6a		6a		—	—	—	—	6		—	—	6b•c		8a		にぶい黄褐•黒	泥炭~
8a	△	12a		6b		—	—	9		6b		6b		—	—	6b		6		—	—	7		8a		灰黄褐	泥炭質粘土
8b		12b~14		7~8b		6•7		10		7~8b		7~8b		4		6c		6		5		8		8b		にぶい黄褐•黒	
9a	○			—	—	—	—	—	—	9a	境			5	耕	—	—	—	—	6	耕	—	—	—	—	暗灰黄	
a_1	○	15a	畦	—	—	—	—	—	—			8c	耕			—	—	—	—			—	—	—	—		
a_2	○	15b	畦	—	—	—	—	—	—			9a	耕			—	—	—	—			—	—	—	—		
9b		—	—	9b		8		11		9b		9b		5		7		7		—	—	8		8b		暗灰黄•黒	
10a		16		10a		8		12		10a		10a		6a		8		8		7•8		8		8b		暗赤褐•黒褐	
10b	○	17	畦	—	—	—	—	—	—	—	—	10b	耕	—	—	—	—	—	—	—	—			—	—	灰	
10c		18		10c		8		12		10c		10c		—	—	8		9		9		8		8b		にぶい黄褐•黒	
10d	○	18	耕	10d	畦	—	—	—	—	10d	畦	10d	耕	—	—	—	—	10	畦	10	畦	—	—	9	畦	暗灰黄~灰	
10e		18		10e		8		13		10e		10e		—	—	9		—	—	11		9		—	—	灰白•黒	
11	○	19	畦	—	—	—	—	—	—	11a	畦	11	耕	6a?	耕	—	—	11	畦	12	耕	—	—	10	耕	黒褐	
12a		20				8		14		12a		12a		—	—	10		12		13		10		—	—	黒にぶい褐•暗褐	
a_1				11b										—	—									—	—	黒にぶい褐•暗褐	
a_2	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黒褐	
a_3				12										—	—									—	—	黒にぶい褐•暗褐	
12b		20		12		8		15		12b		12b		—	—	11		13		13		10		—	—	にぶい黄褐	
13	○?	21•22		13		9		15		13		13		6b		12		14		13		11		11		黒色	
14		23		14		—	—			14		14		7		12		15		14		11		—	—	暗赤褐	

＊　○…水田跡　△…水田跡の可能性　□…時期決定資料出土層

畦…畦畔検出　擬…擬似畦畔B検出　境…耕作域と非耕作域の境界ライン検出　耕…水田耕作土のみ検出

田土壌が欠落する場合が通常である。その原因としては、耕作域の違いや上層の水田跡の耕作深度が深く、下層の水田跡の水田土壌を全て巻き込み、上層の水田跡の水田土壌としているといったことに起因する。その際の周辺調査区との水田土壌の対応関係を知る術として、母材となる層は大変有効な鍵層となる。さらに、前述の8b層や13・14層といったこれら弥生時代の水田土壌の直上や直下に位置したり、10a層のように9a層と10b層の間に入る、広域に安定し分布する自然堆積層も同様に有効な鍵層となる。今回、弥生時代の水田層の対応関係にあたっては、これら鍵層の活用に負うところが多い。

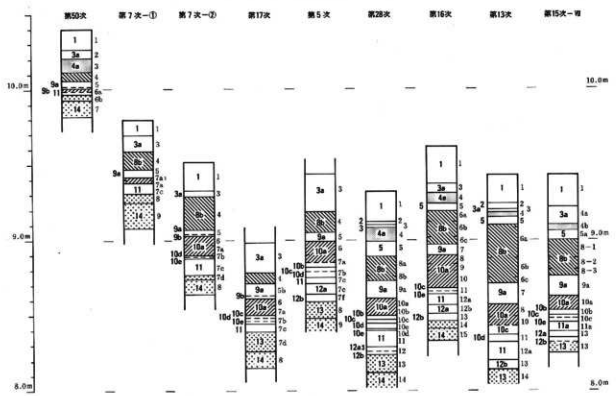
5．9a層は$9a_1$層と$9a_2$層に分層される調査区が2カ所認められた（第33次・第49次№5地点）。いずれも東側中央部付近の調査区である。似かよった色調・土性を呈するものであるが、$9a_2$層の方がやや暗い色調である。第33次調査区では、いずれの上面からも水田区画が検出されている。現在、分層はこの両調査区でしか確認されない。その原因としては、他調査区では$9a_1$層の耕作により$9a_2$層がなくなっており、両調査区では$9a_1$層の耕作深度が浅かったために$9a_2$層の水田土壌が残った。または、$9a_1$層の耕作域と$9a_2$層の耕作域が異なり、たまたま両地点で耕作域が重なっていたなどが考えられる。なお、いずれかが単独層でしか存在しなかった場合、$9a_1$・$9a_2$層のいずれかを識別することは、現段階では困難である。

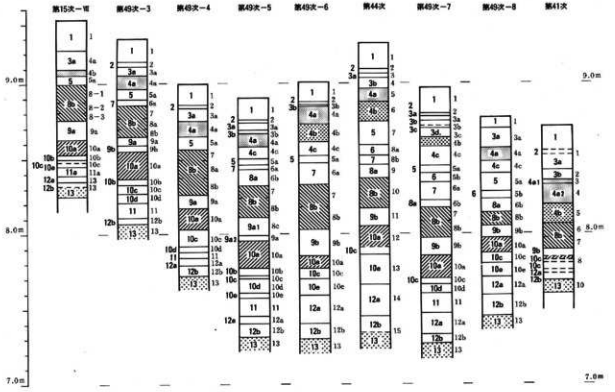
6．10c層と10e層はそれぞれ水田跡の母材の層であるが、第17次②調査区より西側になると両層は薄くなり、西方約120m離れた第17次①調査区及びその北側の第50次調査区では、両層とも分布が認められなくなり、それに伴い、下層の標高もかなり上がってきている。このことは、両層の分布が、下層の地形により制約を受けていることを示唆している。

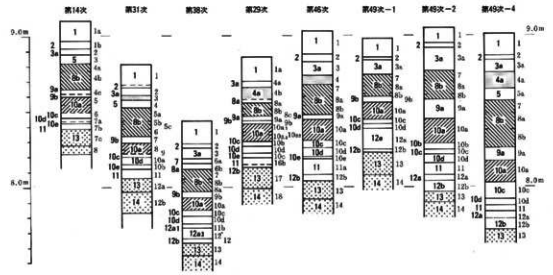
7．10層以下の各弥生時代の水田跡では、11層の水田跡を除き時期決定資料は皆無である。ただし、その11層出土資料も第7次調査区で、桝形囲式期とも考えられる粗製土器の一括資料1点と僅かな破片資料（同一個体）が出土したのみである。このように11層の水田跡は、現段階では明確な時期決定資料とその量的な保証という点に問題点を含むが、一応、現段階では、その所属年代を桝形囲式期としておきたい。

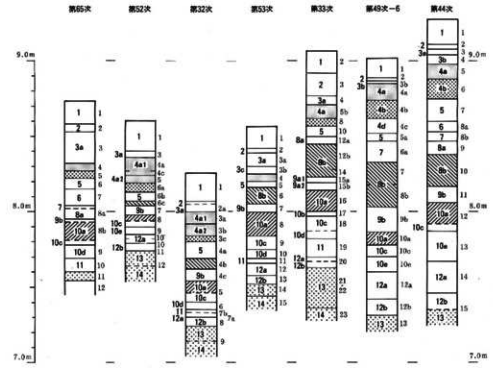
8．12a層は、第28次調査区で$12a_1$・$12a_2$・$12a_3$層に分層された。ただし、当調査区では、$12a_2$層が水田土壌で、$12a_1$層と$12a_3$層が明確に分離できたが、$12a_1$・$12a_3$層は非常に類似した層で、現段階では、$12a_2$層の介在がない限り両層の分離は困難である。従って、$12a_2$層が認められなかった他の調査区では、$12a_1$・$12a_3$層を一括し12a層として取り扱った。

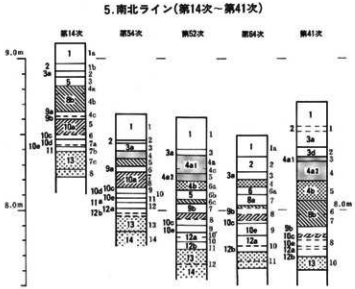
9．13層では、第17次B換気口調査区で、畦畔が検出されている。さらにこの調査区より西側の第7次調査区では、13層の下面が乱れる地点も認められる。このことより、13層を水田跡として取りあつかってきた（吉岡：1988）。しかしながら、この両地点を除く、全ての調査











第140図　富沢遺跡北部A地土層柱状図（太字層位…基本層序層位，細字層位…調査区層位）

区では、13層は自然堆積層として認識できる層である。この両地点に関しても13層は周辺調査区と同様に自然堆積層で、検出畦畔は11層の水田跡段階の擬似畦畔Bであり、下面の乱れは自然のものである可能性もある。13層を水田跡として認定するに当っては、13層段階の水田土壌とその母材となる層の関係が、明確に認識されなければならない。従って、その識別が示されていない現状では、13層を即座に水田跡として認定することはできない。13層に水田跡が存在するかどうかについては、今後の検討課題としておきたい。

2．富沢遺跡北部B地区（第141図，表20）

この基本層序案に包括される調査区は、第30次・第37次・第57次・第58次・第67次の5調査区である。最長距離は第30次と第67次の間の約230mである。基本層序案及び各調査区の層位の対応関係案は表20，第141図のとおりである。ただし、第30次調査区8層以下の各層は、他の調査区との対応関係が現在のところ困難であり、このため今回の対応関係からは除外した。

当地区の基本層序案・対応関係案作成に伴う変更・留意点は以下に記した。

1．2・4・6・8層の各層は砂層で、水路・小河川を中心とするごく狭い分布域を示すもので、これら水路等に伴う局地的な氾濫堆積土である。これら砂層は全て純粋な砂ではなく、層中に粘土の帯を幾重にも含むものである。そのため直上層の水田では、これらの一部ある

表20　富沢遺跡北部B地区基本層序及び層位対応表

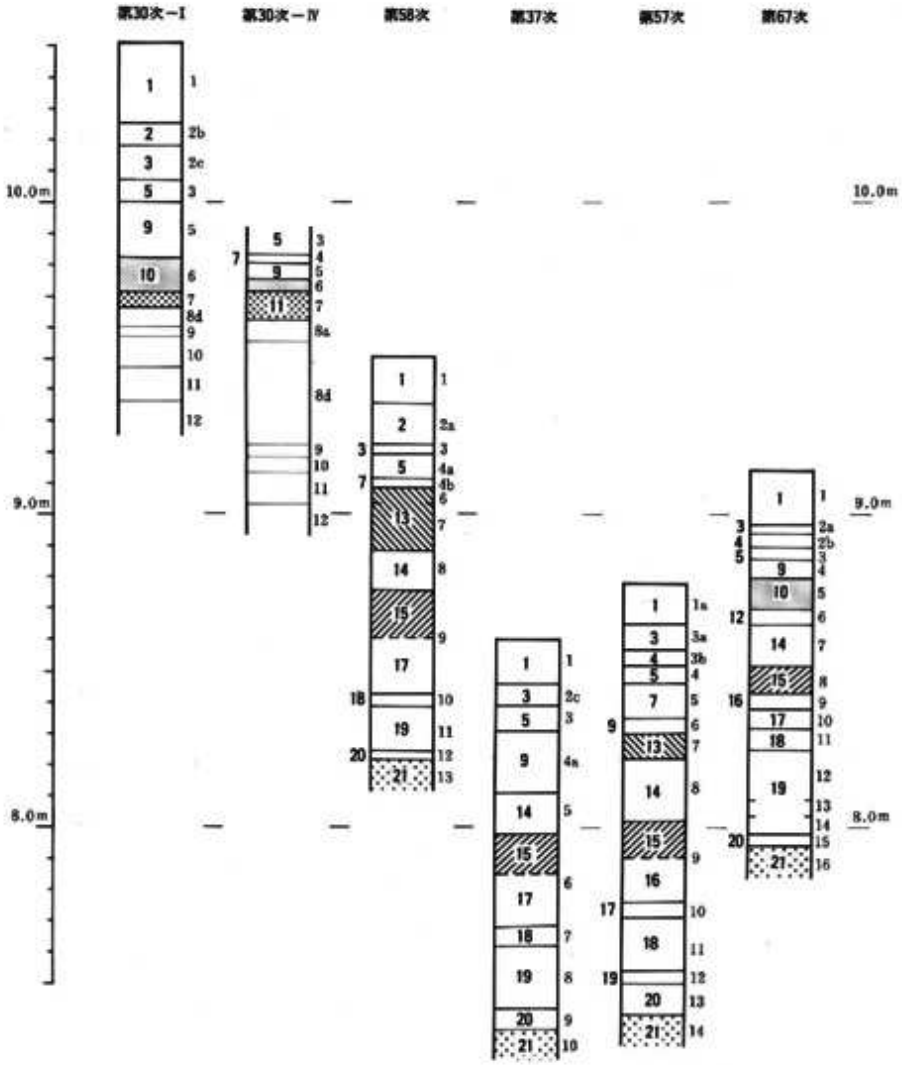
基本層序	水田跡の認定	所属年代	特徴	第30次		第58次		第37次		第57次		第67次		主たる色調	主たる土質
				層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構		
1		現代		1		1		1		1•2		1		暗灰黄～灰黄	砂質シルト
2			砂層	2a•b		2•砂		2a•b		—	—	—	—		
3	○	近世以降	砂粒•斑状岩粒多量含	3c	畦	3	畦	2c	畦	3a	畦	2a	畦		
4			砂層	砂		—	—	—	—	3b		2b			
5	○	近世	砂粒•斑状岩粒多量含	3	畦	4a	畦	3	畦	4	畦	3	畦	黒褐	粘土
6			砂層	砂		—	—	—	—	—	—	—	—		
7	○		砂粒•斑状岩粒少量含	4	畦	4b	畦	—	—	5	畦	—	—	黒	
8			砂層	砂		—	—	—	—	—	—	—	—		
9	○	中世	灰白色火山灰粒含	5	畦	5	畦	4a	畦	6	畦	4	畦		
10	○	平安(灰白色火山灰降下以降)	灰白色火山灰ブロック含	6	畦	—	—	—	—	—	—	5	畦	黄灰	
11	○	平安(灰白色火山灰降下前)	上面に灰白色火山灰含	7	畦	—	—	—	—	—	—	—	—		
12	△					—	—	—	—	—	—	6		黒	
13			互層			6•7		4b		7		—	—	黒•灰黄褐•黒褐	泥炭～泥炭質粘土
14			互層•植物遺体多量含			8		5		8		7		黒•黒褐	
15			互層•植物遺体多量含			9		6		9		8		暗赤褐•黒	
16			粘土分多量含			—	—	—	—	9		9		灰黄褐	
17			互層•植物遺体多量含			9		6		10		10		暗赤褐•黒	
18			粘土分多量含			10		7		11		11		灰黄褐	
19			互層•植物遺体多量含			11		8		12		12～14		黒•灰黄褐•黒褐	
20			粘土分多量含			12		9		13		15		灰黄褐	
21			互層			13		10		14		16		黒褐•黒	

＊　○…水田跡　△…水田跡の可能性　□…時期決定資料出土層
畦…畦畔検出　擬…擬似畦畔B検出　耕…水田耕作土のみ検出

いは全てを攪拌し耕作土としている。

2．2層の対応層の内、第37次調査区2b層は、報告書段階で水田耕作土の可能性ありとした層であるが（中富：1989）、検討の結果、砂層氾濫時における下層上面を巻き込んだものとして理解し、砂層の一部として変更を加えた。

3．第30次調査区では調査区層位12層以下で、古墳時代・弥生時代の水田跡が検出されている。しかしながら、東側及び南東側に位置する第58・37・57次調査区では、古墳時代・弥生時代のものはもとより平安時代の水田跡も検出されていない。南東側で最も離れた第67次調査区になって平安時代の水田が検出されるが、ここにおいても弥生時代にまで遡れるような水田跡は検出されていない。現在までの調査で、第30次調査区の東方で弥生時代まで遡れる水田



第141図　富沢遺跡北部B地区土層柱状図
（太字層位…基本層序層位，細字層位…調査区層位）

跡が検出される最も近い調査区は、約230mの距離を隔た第14次調査区である。このように第30次調査区と第14次調査区の間の地域（以下、中間地域）とその東西周辺地域との最下層の水田跡の所属年代には差異が認められる。これは上層の水田跡の耕作による下層水田跡の削平・消滅によることもあるだろうが、中間地域の水田跡堆積状況を見る限り、水田化が新しい時代になってから行われた結果とも考えられる。すなわち、第30次調査区と第14次調査区との間の中間地域では、平安時代以前では水田化するには不適な地形条件が存在していたとする可能性も指摘できる。

3．富沢遺跡北部C地区（第142図，表21）

この基本層序案に包括される調査区は、第34次・第47次・第60次・第61次・第68次の5調査区である。最長距離は第61次と第68次の間の約120mである。基本層序及び各調査区の層位の対応関係案は表21，第141図のとおりである。

当地区の基本層序案・対応関係案作成に伴う変更・留意点は以下に記した。

1．7・9層の両層は砂層で、第68次調査区等に認められるが、調査区内でごく部分的な分布しか示さないことより、小河川等に伴う局地的な氾濫堆積土の可能性もある。

2．14層の水田跡は第34・61次・68次の各調査区で検出されている。第34次調査区層位では7a層にあたるもので、この層では畦畔は検出されず、直下層の7b層で畦畔が検出されている（佐藤：1988）。第61次調査区との検討の結果、第34次で検出された7b層の畦畔は、実は直上層（7a層）の擬似畦畔Bで、7b層は耕作土でなく自然堆積層であったことが判明した。因って、第34次調査区7b層水田跡を7a層水田跡に変更した。

3．14層は水田土壌であるが、この母材となる層は15層である。従って、14層が欠け直接15層となる地区は非耕作域と考えられる。

4．18・19層の両層はイネのプラント・オパール分析結果からすると水田跡が検出される可能性があり、今後、慎重に対処していく必要がある。

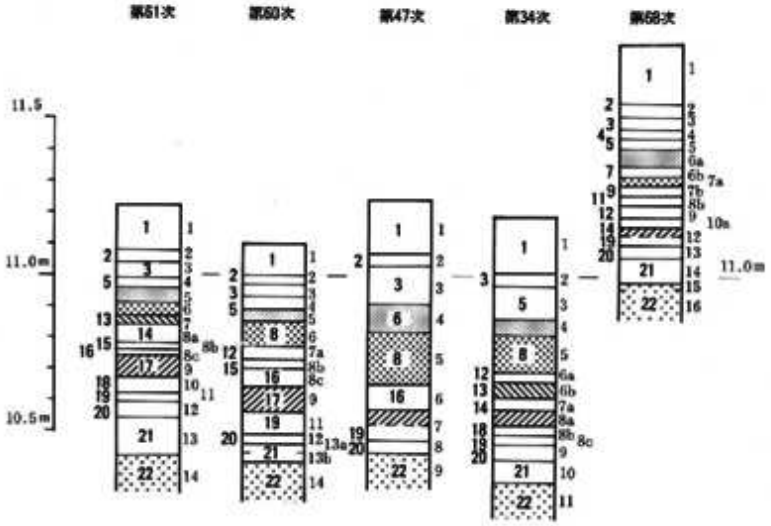
5．20層は第60次調査区のプラント・オパール分析結果では、水田土壌の可能性が高いとされた層である。ただし、この層では現在までのところ明確な水田跡は検出されておらず、下面の起伏も顕著ではない。しかしながら、第34次調査結果を再度検討したところ20層が水田跡である可能性が出てきた。この調査区では20層が認められなかった部分があるが、この部分は20層段階の耕作によって21層の全てまたは上半が撹拌され、20層の耕作土となっていた公算が高い。そのために同一面で20層と21層の畦畔（大畦畔）を検出している可能性がある。このような状況は調査区西側で推察でき、そのためか該当部分の21層とした土層の色調は20

表21　富沢遺跡北部C地区基本層序及び層位対応表

基本層序	水田跡の認定	所属年代	特徴	第34次		第47次		第60次		第61次		第68次		主たる色調	主たる土質
				層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構		
1		現代		1		1		1		1		1		オリーブ黒	粘土
2	△	近世以降	粗砂含	－	－	2		2		2		2		灰黄褐	
3	○	近世		2	鍬	3	鍬	3	鍬	3	鍬	3	畦	黒褐	
4	○			－	－	－	－	－	－	－	－	4	畦		
5	○	中世	粘性強	3	畦	－	－	4	畦	4	鍬	5	鍬	黒	
6	○	平安(灰白色火山灰降下以降)	下部に灰白色火山灰含	4	畦	4	畦	5	鍬	5	畦	6a	畦	暗灰	
7			砂層	砂	－	－	－	－	－	－	－	6b		暗褐	
8	○	平安(灰白色火山灰降下前)	上面に灰白色火山灰含	5	畦	5•5'	鍬	6	畦	6	畦	7a	畦		
9			砂層	－	－	－	－	－	－	－	－	7b			
10			風化小礫含	－	－	－	－	－	－	－	－	8a			
11	○			－	－	－	－	－	－	－	－	8b	畦		
12	○			6a	畦	－	－	7a	畦	－	－	9	鍬		
13				6b		－	－	7b		7		－	－	黒	泥炭～
14	○			7a	鍬	－	－	－	－	8a	鍬	10a•b	鍬	暗灰黄褐	泥炭質粘土
15			粘土分多量含	7b		－	－	8b		8b		11a		黄褐	
16			植物遺体多量含	7c		6		8c		8c		11b		赤褐	
17			植物遺体多量含	8a		7		9		9		12		黒	
18		弥生	粘土分多量含	8b		－	－	－	－	10		－	－	褐灰	
19				8c		7		11		11		12		黒	
20	△	弥生	粘土分多量含	9		8		12		12		13		褐灰	
21	○	弥生		10	畦	－	－	13a•b	鍬	13	鍬	14	畦	黒褐	
22			植物遺体多量含・上部泥層	11		9		14		14		15•16		暗褐	

＊　○…水田跡　△…水田跡の可能性　□…時期決定資料出土層

畦…畦畔検出　鍬…鍬跡畦B検出　綿…水田耕作土のみ検出



第142図　富沢遺跡北部C地区土層柱状図
（太字層位…基本層序層位，細字層位…調査区層位）

層の色合いにちかい。なお、21層の畦畔部分で20層も同様に盛り上がること、また、22層上面に21層段階の擬似畦畔Bが残存していることを考え合わせると、20層・21層の畦畔（大畦畔）は、同一部分に取り付いたことも推測できる。以上のように20層は水田跡で、しかも21層の大畦畔の位置・方向をそっくり踏襲した可能性もある。今後周辺部で調査が進めば、20層水田跡の明確な存在が確認されることと考えるが、現段階では可能性を指摘するに停どめたい。

4．富沢遺跡南部A地区（第143図，表22）

この基本層序案に包括される調査区は、富沢遺跡第1次・第8次・第39次・第55次・第59次・宮城県1987年度調査区及び山口遺跡第13次を加えた7調査区である。最長距離は富沢遺跡第39次と山口遺跡第13次の間の約240mである。基本層序案及び各調査区の層位の対応関係案は表22・第143図のとおりである。なお、富沢遺跡第8次調査区層位の6・7A層を削除したのは、複数層にまたがる酸化鉄層であったり、部分的な自然撹拌層であると考えられるからである。また、山口遺跡第13次調査区層位にSD1の堆積土を加えたのは、この層が調査区内で氾濫堆積土状となり広範囲に広がることからである。

当地区の基本層序案・対応関係案作成に伴う変更・留意点は以下に記した。

1．2層の水田跡の所属年代は、富沢遺跡第8次調査区では中世陶器片の出土（1点）より中世とした（工藤：1984）。しかし、その後の富沢遺跡宮城県1987年度調査区・第39次調査区では、近世に属する陶器片・磁器片が出土してことより、所属年代を近世に変更した。

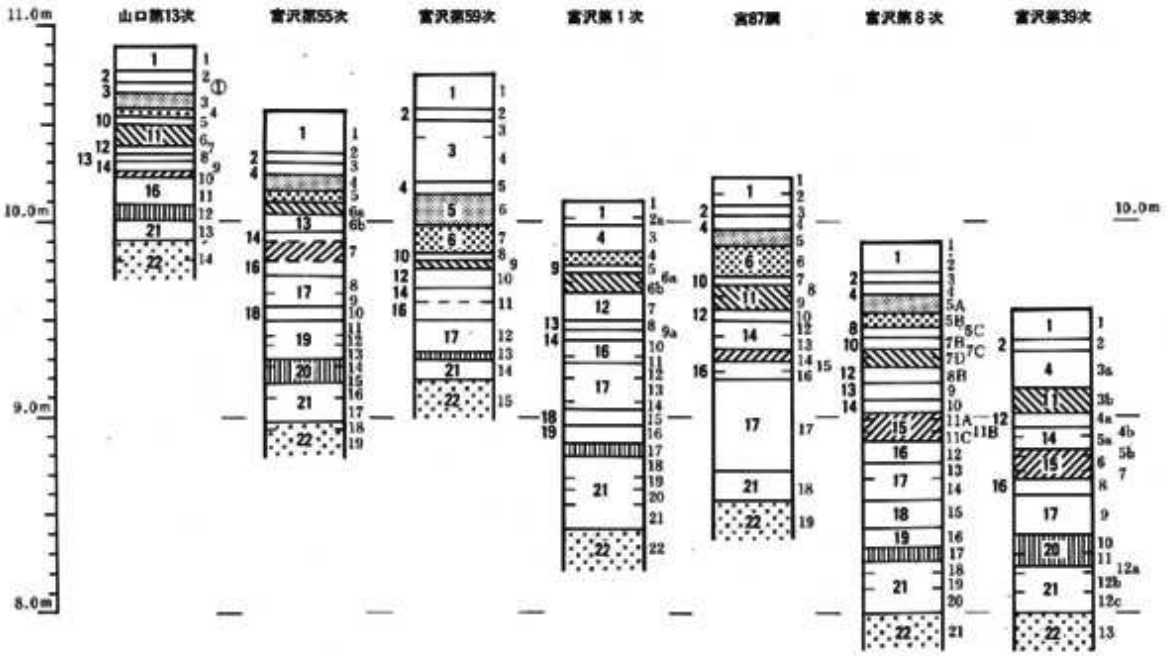
2．3・9層の両層は砂層で、限られた調査区でしか認められず、しかも、多くは調査区内でごく部分的な分布しか示さないことより、小河川等に伴う局地的な氾濫堆積土の可能性もある。

3．10層は水田土壌である。これによって以前、富沢遺跡第8次調査区の上面より検出された5号溝跡は水路であることが明らかとなった。この水田跡の所属年代であるが、第8次調査区ではこの層の所属年代を5号溝跡堆積土出土の木製鋤より弥生時代後期から5世紀中頃とした（工藤：1984）。しかしながら、その後の富沢遺跡第55次調査区で直下層の11層で古墳時代の土師器片が出土したことにより弥生時代にはさかのぼらず、古墳時代に限定することが可能となった。上限については、従来どおり中期頃とすることも可能である。しかし、山口遺跡第13次調査区で当層より古墳時代後半に属するとも考えられる土師器片が出土していることより、時期を限定せず時間幅をもたせた方がより無難と考える。従って、10層水田跡の所属年代を古墳時代とする修正を加えておきたい。

表22　富沢遺跡南部A地区基本層序及び層位対応表

基本層序	水田跡の認定	所属年代	特徴	山口第13次		富沢第55次		富沢第59次		富沢第1次		富沢第8次		富沢第39次		宮87調	主たる色調	主たる土質
				層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位		
1		現代		1		1		1		1・2a		1・2		1		1・2	オリーブ黒	シルト質粘土
2	○	近世	粗砂含	2	耕	2	耕	2	耕	2b	耕	3	畦	2	耕	3	灰黄褐	～砂質シルト
3			砂層	①・②		－	－	3・4		－	－	－	－	－	－	－		
4	○			－	－	3	耕	5	畦	3	耕	4	耕	3a	畦	4	黒	粘土
5	○	平安(灰白色火山灰降下以降)	下部に灰白色火山灰含	3	耕	4	耕	6	畦	－	－	5A	畦	－	－	5	灰黄褐	
6	○	平安(灰白色火山灰降下前)	上面に灰白色火山灰含	4	畦	5	耕	7	畦	4	耕	5B	耕	－	－	6	黒褐	
7				－	－	－	－	－	－	－	－	P		－	－	－		
8				－	－	－	－	－	－	－	－	5C		－	－	－	にぶい黄褐	粘土質シルト
9			砂層	－	－	－	－	－	－	5				－	－	－		
10	○	古墳		5	畦・擬	－	－	8	擬	－	－	7B	耕	－	－	7	鮎褐	粘土
11		古墳以前	互層	6		6a		9		6a・b		7C～8A		3b		8・9	黒・褐灰・褐黄	泥炭質粘土
12	○	弥生(斜形圏式期)		7	耕	－	－	10	耕	7	耕	8B	畦	4a	畦	10・11	黒褐	～粘土
13		弥生(寺下圏式期)		8		6b		－	－	8		9		－	－	－		
14		弥生(寺下圏式期)以前	植物遺体多量含	9		7		11		9a		10		4b～5a		12・13	黒	
15			互層(灰黄褐色が主)	10		7		－	－	9b		11A～C		5b～7		14	灰黄褐・黒	
16			植物遺体多量含	11		7		11		10・11		12		8		15・16	黒	
17				－	－	8・9		12		12～14		13・14		9		17		
18			グライ層	－	－	10		－	－	15		15		－	－	－	褐灰	
19		縄文後期以前		－	－	11～13		－	－	16		16		－	－	－	黒～黒褐	
20			グライ層・砂層含	12		14・15		13		17		17		10～11		－	褐灰	
21			下部に黒褐色粘土ブロック含	13		16・17		14		18～21		18～20		12a～c		18	黒～黒褐	
22			グライ層・上部に黒褐色粘土ブロック含	14以下		18以下		15以下		22以下		21以下		13以下		19以下	灰～緑灰	シルト質粘土～砂

＊　富沢第1次…泉崎東工区試掘No.3
宮87調…宮城県教育委員会文化財保護課による1987年度調査区（宮城県教育委員会：1988）
山口第13次①・②層はSD1堆積土
○…水田跡　△…水田跡の可能性　▭…時期決定資料出土層　畦…畦畔検出　擬…擬似畦畔B検出　耕…水田耕作土のみ検出



第143図　富沢遺跡南部A地区土層柱状図
（太字層位…基本層序層位，細字層位…調査区層位）

4．12層は水田土壌である。その母材となる層は、13層と考えられる。この13層は、富沢第8次調査で水田跡として取り扱ったが、その後の周辺調査区等との検討により、当層は水田跡ではなく自然堆積層の可能性が強いことが指摘されている（斎野：1987、佐藤：1990）。

5．14層の上面は、水の影響を受けやすい時期であったためか多くの調査区で自然流路が検出されている。流水の集まりやすい谷地形の谷心線上付近に位置する富沢遺跡第55・1・8次調査区では、同一と考えられる小河川が検出されている。なお、12層水田跡では、この小河川の埋没過程で生じた窪を利用し、これを改修して水路として機能させたことが確認されている（佐藤：1990）。

6．13層下部・17層の両層はイネのプラント・オパール分析結果からすると水田跡が検出される可能性もあり、今後、慎重に対処していく必要がある。

7．当地域の水田跡は、弥生時代から近世までの各時期のものが確認されている。この内、弥生時代のものは、12層の中期桝形囲式期のものしか検出されていないが、北部地区の状況から察すれば、今後、上層の11層中で新しい時期のものが検出される可能性がある。また、下層からは寺下囲式期の石包丁等の農耕具が出土しており、古い段階の水田跡の存在も今後十分に期待できる。

土層柱状図作成地点

富沢遺跡北部A地区

・第5次‥東出入口南トレンチ南壁中央　・第7次－①‥XⅦa区南壁　・第7次－②‥XⅠb区南壁
・第13次‥東壁北端　・第14次‥東壁南端　・第15次－Ⅶ‥A区東壁中央　・第16次‥南壁中央
・第17次‥②③番出入口東壁南側　・第28次‥Ⅱ区南壁E－40ライン　・第29次‥西壁中央
・第31次‥南壁東側　・第32次‥南壁東側　・第33次‥北壁東側　・第38次‥北東コーナー
・第41次‥西壁中央　・第44次‥北壁中央　・第46次‥南壁東端　・第49次－1‥東壁
・第49次－2‥東壁　・第49次－3‥西壁北側　・第49次－4‥東壁　・第49次－5‥西壁北側
・第49次－6‥東壁　・第49次－7‥東壁中央　・第49次－8‥東壁　・第50次‥西壁中央
・第52次‥西壁北側　・第53次‥南壁西端　・第54次‥南壁西端　・第64次‥北壁中央
・第65次‥北壁東端

富沢遺跡北部B地区

・第30次－Ⅰ‥北西コーナー　・第30次－Ⅳ‥北東コーナー　・第37次‥南壁東側　・第38次‥南壁中央
・第57次‥Ⅰ区東壁とⅢ区西壁を合成　・第67次‥南壁中央

富沢遺跡北部C地区

・第34次‥北壁4ライン　・第47次‥西壁中央　・第60次‥北壁東側　・第61次‥北壁東側
・第68次‥北壁東側

富沢遺跡南部A地区

・第1次‥泉崎東工区試掘№3東壁　・第8次‥東区北壁西側（C－8 Grid）と西端を合成
・第39次‥西壁南側　・第55次‥北壁東側　・第59次‥東壁中央　・宮87調‥北壁西側の2地点を合成
・山口第13次‥西壁中央

表23　富沢遺跡第57～61次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第57次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	銭	木製品	種子	昆虫	その他
I区																				
1層							1						1							
5層水田跡			1																	
6層水田跡			4		1															
12層													1							
18層													1							
II区																				
1a・1b層					1				3	5					1					
3層			1						1											
4層水田跡			2	2						1								2		
6層水田跡																		1		
III区																				
1a層					1				4	6	1									
1b層						1			3	1										
1d層			1													1				
2層									2		3			1		1				
4層水田跡			1		1				2				2		2			1		
5層水田跡			2												1		1			
11層																		1		
撹乱											1									
計			12	2	4	1	1		15	13	8		5	1	4	2	1	5		

富沢遺跡第58次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	銭	木製品	種子	昆虫	その他
1層									4		1									
4a層水田跡					1															
4b層水田跡					1									1						
SK02										1				2		1				
計					2				4	1	1			2		1				

富沢遺跡第59次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	銭	木製品	種子	昆虫	その他
4層			7	1	2															
6層水田跡			1																	1(伊賀)
8層水田跡																				
12層																		1		
計			8	1	2													1		1

富沢遺跡第60次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	銭	木製品	種子	昆虫	その他
1層									1	2	1							2		2
2層									2											
3層水田跡			11	2	1				4				1					3		
4層水田跡					1															
5層水田跡			8	9	3									1						
6層水田跡			2	7	1													1		
計			21	18	6				7	2	1		1	1				6		2

富沢遺跡第61次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	銭	木製品	種子	昆虫	その他
3層水田跡			2																	
6層水田跡																1				
8a層水田跡																	1			
10層													1							
計			2										1			1	1			

表24　富沢遺跡第62～65・68次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第62次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	紙	木製品	種子	昆虫	その他
5層																	2			
7層水田跡		5																		
8a層水田跡		1																		
計		6															2			

富沢遺跡第63次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	紙	木製品	種子	昆虫	その他
1層			17	10	2				7	2					3					
4層				2	1															
5層水田跡				6	1				1						1					
7層			14												1	1				
8a層水田跡			1														1			
8b層水田跡																				
11層		37														1				
13層	147																			
SD1				1									1							
SD3				2																
SD4			4	2																
SD5				1																
計	147	37	36	24	4				8	2			1		5	2	4			

富沢遺跡第64次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	紙	木製品	種子	昆虫	その他
1層														1						
4層水田跡																1				
7a層			1																	
SD01			3		1	2	1		16	7	5	1	1	1		16	5			
SD02							1		1											
表採									1											
計			4		1	2	2		18	7	5	1	1	2		17	5			

富沢遺跡第65次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	紙	木製品	種子	昆虫	その他
2層			1			1			3	2										
3層			28		2	2			1	1								2		
4層			5		1															
5層			8	3	2															
9層水田跡SD-1		1						1									1			
計		1	42	3	5	3		1	4	3							1	2		

富沢遺跡第68次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	紙	木製品	種子	昆虫	その他
2層	1		2	2					1											
3層水田跡			11	2					1	1	1	2	1	1	1					
4層水田跡			8	2	3													3		
5層水田跡		1	3																	
6層水田跡			4															1		
7層水田跡			4																	
8層水田跡			3															2		
9層水田跡																				
10層水田跡																		2		
11層																		1		
12層																			1	
13層																1				
SD03			1																	
不明			2																	
計	1	1	38	6	3				2	1	1	2	1	1	1	1		9	1	

表25　富沢遺跡第66～67次・山口遺跡第13～14次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第66次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	木製品	種子	昆虫	その他
I区																				
1層					1				9	12	2									2
2層			1								1									
3a層			1		1															
4a層					1															
5層			3	1																2
7a層水田跡			1		3														1	
7b層水田跡			1																	
8a層					1															
8b層			1					1												
8c層			1	1																
9層			1																	
11a層			1						1											
12層水田跡			3	1	1											1				
13層					1															
14層					1															
15層					1															
17a層	1		2													2				
17b層			2																	
18層	1																			
22層	2												1							
5層上の炭層			1															2		7
SD01									1											
SD02			3	2	3	2		1	4				3	1	2			20	8	5
SB02(SX01)			1		1	2			2				1			1		1	1	
SX02				1														5		
SX04																		147		1
C－1No.7植穴																		2		12
旧SK																				
1層			1		2				2	2		1								1
計	4		24	6	17	4		2	18	14	3	1	5	1	2	4		177	10	30

富沢遺跡第67次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	木製品	種子	昆虫	その他
1層									3											
3層水田跡			1		1															
計			1		1				3											

山口遺跡第13次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	木製品	種子	昆虫	その他
1層		1				1			2	6						3				
2層水田跡			1																	
4層水田跡			1																	
5層水田跡			3																	
12層	1																			
SD1			1																	
計	1	1	6			1			2	6						3				

山口遺跡第14次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	木製品	種子	昆虫	その他
1層		2	1					1	3	3										
2層			8	1					1	1			1							
3層		2	17	2	5								3							
5層		5	3					3					4							
6a層		18	1																	
6層		2											2							
7層水田跡		274	1										9							
SK2			2														1			
SD1		2						2												
撹乱		2																		
試掘		3																		
計		310	33	3	5			6	4	4			19				1			

引用・参考文献

荒井　格　1984「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集　仙台市教育委員会

太田昭夫他　1991『富沢遺跡第30次発掘調査報告書－第1分冊縄文時代～近世－』仙台市文化財調査報告書第149集　仙台市教育委員会

金森安孝　1984「富沢水田遺跡」『年報5』仙台市文化財調査報告書第66集　仙台市教育委員会

金森安孝　1984「富沢水田遺跡・下ノ内浦地区」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』仙台市文化財報告書第65集　仙台市教育委員会

金森安孝他　1987『富沢遺跡－東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第104集　仙台市教育委員会

工藤哲司他　1984『富沢水田遺跡－病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書－』仙台市文化財報告書第67集　仙台市教育委員会

工藤哲司・太田昭夫　1988『富沢遺跡－24次調査　富沢中学校地区発掘調査報告書－』仙台市文化財報告書第113集　仙台市教育委員会

経済企画庁　1967『地形・表層地質・土じょう　仙台』

阪口　豊　1980「泥炭地の地学」東京大学出版会

斎野裕彦・荒井　格　1983「鳥居原遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財報告書第56集　仙台市教育委員会

斎野裕彦　1984「富沢水田遺跡・鳥居原地区」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』仙台市文化財報告書第65集　仙台市教育委員会

斎野裕彦　1985「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ』仙台市文化財報告書第82集　仙台市教育委員会

斎野裕彦他　1987『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書－』仙台市文化財報告書第98集　仙台市教育委員会

佐藤　降　1983「泉崎浦遺跡」『年報4』仙台市文化財報告書第57集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1987『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第114集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1989「富沢遺跡第46次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1989「富沢遺跡第38次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1989「富沢遺跡第41次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1989「富沢遺跡第46次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1990「富沢遺跡第49次調査」『富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財調査報告書第142集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1990「富沢遺跡第50次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1990「富沢遺跡第53次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1990「富沢遺跡第55次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1990「富沢遺跡南東部検出遺構の検討」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

佐藤　洋他　1981『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集　仙台市教育委員会

佐藤　洋　1988『富沢遺跡－34次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第118集　仙台市教育委員会

渋谷孝雄　1980「泉崎浦遺跡試掘調査報告」『年報1』仙台市文化財調査報告書第23集　仙台市教育委員会

主浜光朗　1988『富沢遺跡－第33次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第117集　仙台市教育委員会

主浜光朗　1988『泉崎浦発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第119集　仙台市教育委員会

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城調査研究所

庄子貞雄・山田一郎　1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城研究所

仙台市教育委員会　1989「富沢を探る－富沢遺跡第30次調査のあらまし－」

仙台市農耕文化勉強会　1990「水田跡の基本的理解－仙台市における水田跡の検出と認定」『第3回東日本の水田跡を考える会－資料集－』東日本の水田跡を考える会

高橋勝也　1983「中谷地遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集　仙台市教育委員会

田中則和他　1984『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第61集　仙台市教育委員会

田中則和　1985「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第75集　仙台市教育委員会

田中則和　1985「山口遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第75集　仙台市教育委員会

豊島正幸　1987「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集　仙台市教育委員会

中富　洋　1989「富沢遺跡第37次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

中富　洋　1989「富沢遺跡第39次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

中富　洋　1989「富沢遺跡第47次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

中富　洋　1990「富沢遺跡第52次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

中富　洋　1990「富沢遺跡第54次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

平間亮輔　1988「平安時代の条里型土地割について」『日本における稲作農耕の起源と展開－日本考古学協会設立40周年記念シンポジューム・資料集』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会

平間亮輔　1989「富沢遺跡とその周辺における条里型土地割について」『条里制研究』第5号　条里制研究会

平間亮輔　1989　「富沢遺跡第44次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集　仙台市教育委員会

藤原宏志・佐々木章・俣野敏子　1989　「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』第21号　日本文化財科学会

松本清一　1987　「富沢遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅵ』仙台市文化財調査報告書第97集　仙台市教育委員会

真山悟他　1988　『富沢遺跡－泉崎前地区一』宮城県文化財報告書第129集　宮城県教育委員会

宮崎　明　1988　「1．富沢遺跡(1)第31次調査・(2)第32次調査」『年報9』仙台市文化財調査報告書第122集　仙台市教育委員会

吉岡恭平　1982　「山口遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第40集　仙台市教育委員会

吉岡恭平　1983　「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集　仙台市教育委員会

吉岡恭平　1983　「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集　仙台市教育委員会

吉岡恭平　1986　「富沢水田遺跡鳥居原地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第89集　仙台市教育委員会

吉岡恭平　1989　『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第126集　仙台市教育委員会

渡辺　誠　1986　「富沢水田遺跡」『年報7』仙台市文化財調査報告書第94集　仙台市教育委員会

渡辺　誠　1986　「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第87集　仙台市教育委員会

渡部弘美　1987　「3．富沢遺跡発掘調査3．第29次調査」『年報8』仙台市文化財調査報告書第107集　仙台市教育委員会

調査参加者

青山　博樹	青山　諒子	浅野ヤシ子	浅見　禮子	阿部　高子	阿部みのる
阿部八重子	阿部　洋子	阿部よね子	井口　彰文	石垣　絹子	板橋喜恵子
板橋　静江	板橋スエノ	板橋　孝子	伊藤　貞子	伊藤　征子	伊藤　律子
入間川きみ	植野　幸子	植野美登子	遠藤タイ子	遠藤　照子	太田　兼也
大友　節子	大友フミ子	大沼みさほ	大庭チエ子	小田島智恵子	鬼沢　悦子
小野つや子	加島みえ子	柏倉セツ子	菊地つね子	菊地　道代	小池　房子
鴻巣つや子	小林　齋美	斉藤とき子	斎藤由美子	齋藤　玲子	佐久間長子
佐々木志津	佐竹さく子	佐藤　祥子	佐藤ちよし	佐藤とみ子	佐藤　紀子
佐藤　みよ	佐藤よし江	庄子　一浩	庄司けき子	庄子　孝子	須賀　栄子
菅井キノエ	菅井　君子	菅井きみ子	菅井　清子	菅井ちよの	菅井美枝子
菅田みき子	菅田わくり	菅谷　裕子	鈴木　いし	鈴木かつ子	鈴木よしえ
関　八重子	高橋　美香	高橋ヨシ子	高橋　良子	高山　紀子	高山あつ子
武田　知之	武田　芳子	竹森　光子	千田あや子	千田タイ子	永野　泰治
蓮沼　英子	蓮沼　秀子	早川　裕子	原田由美子	針生　昭三	星　愛子
星　レイ子	洞口　秋子	牧　かね子	三浦　市子	三浦　芳子	宮嶋　都
村井二郎松	村上　令子	八嶋　伸明	山田千代子	山田やす子	吉田八重子
渡辺イチ子	渡辺　幸子	渡辺　久子	渡邊　洋子		

写真図版

写真1
富沢遺跡第57次調査
4層水田跡　Ⅱ区
（西から）

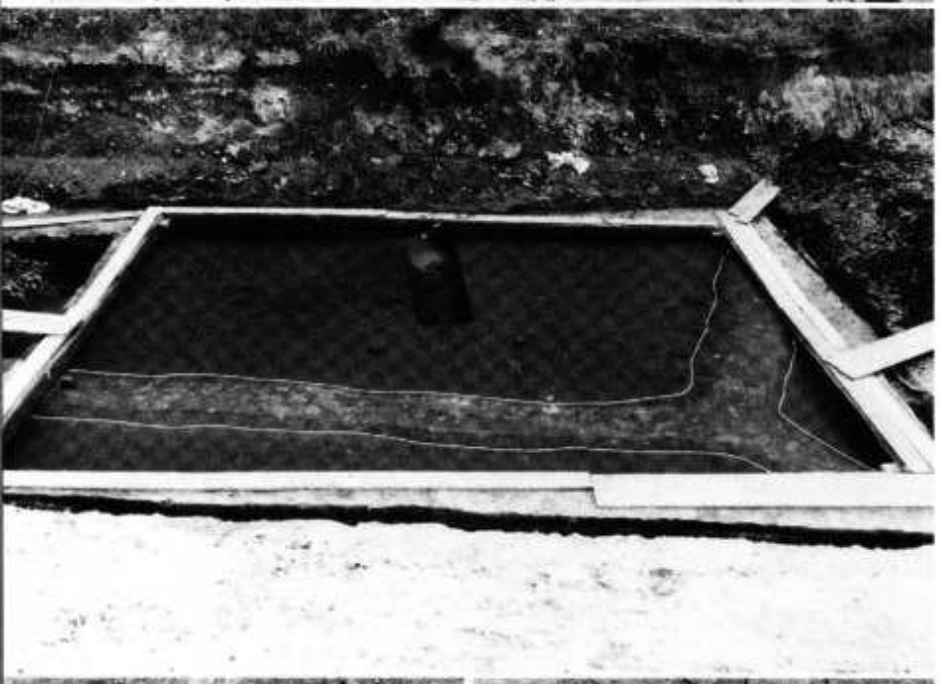


写真2
富沢遺跡第57次調査
5層水田跡　Ⅲ区
（北から）

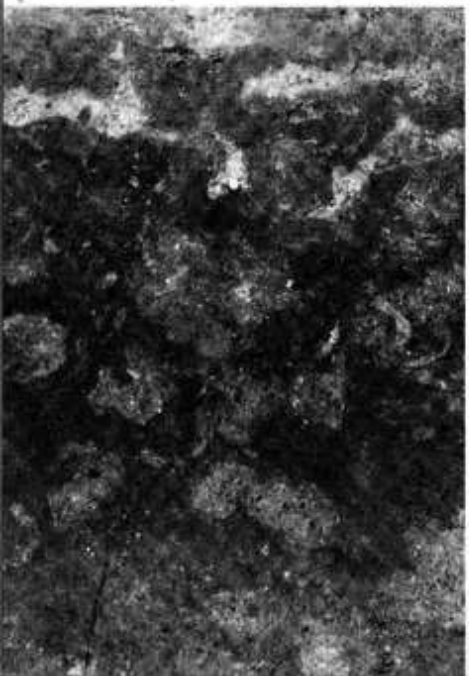


写真3（左）
富沢遺跡第57次調査
5層上面検出足跡
（馬？）

写真4（右）
富沢遺跡第57次調査
5層上面検出足跡
（牛？）

写真5
富沢遺跡第57次調査
6層水田跡　Ⅱ区
（西から）

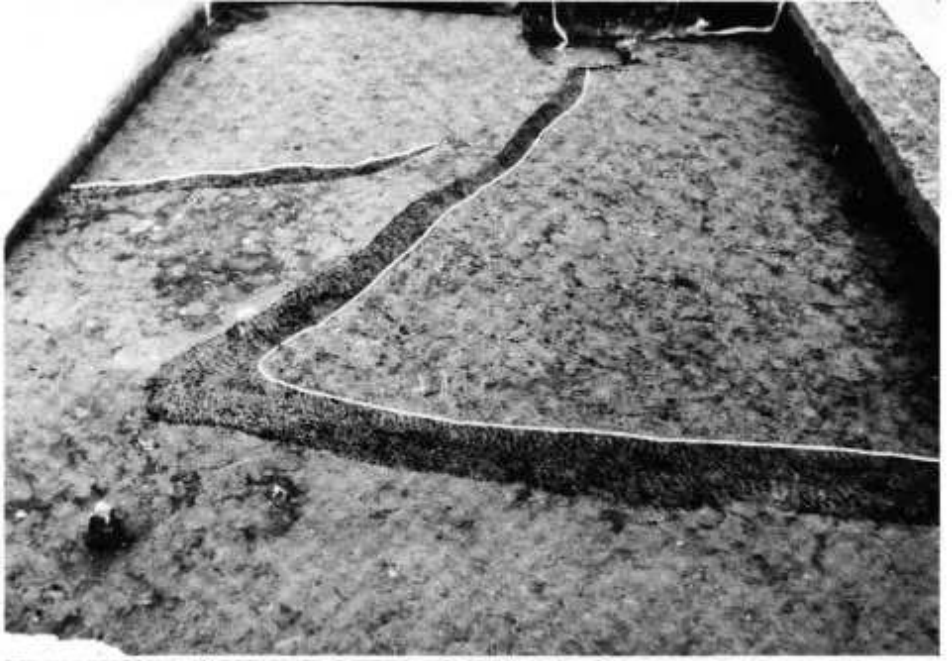


写真6
富沢遺跡第57次調査
6層水田跡確認状況
Ⅲ区　（西から）

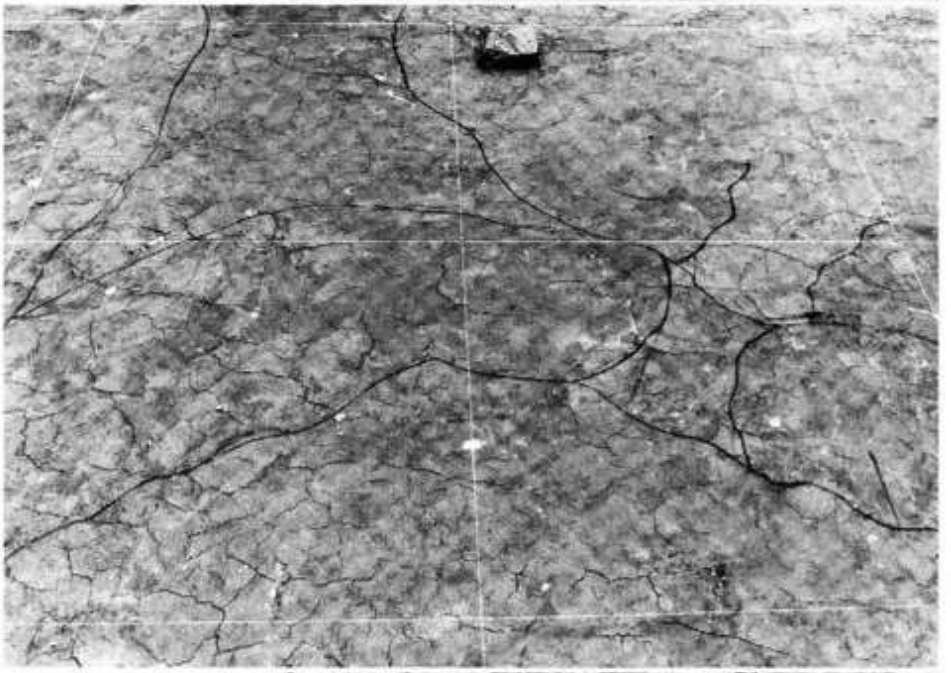


写真7
富沢遺跡第57次調査
深掘り区全景　Ⅲ区
（西から）

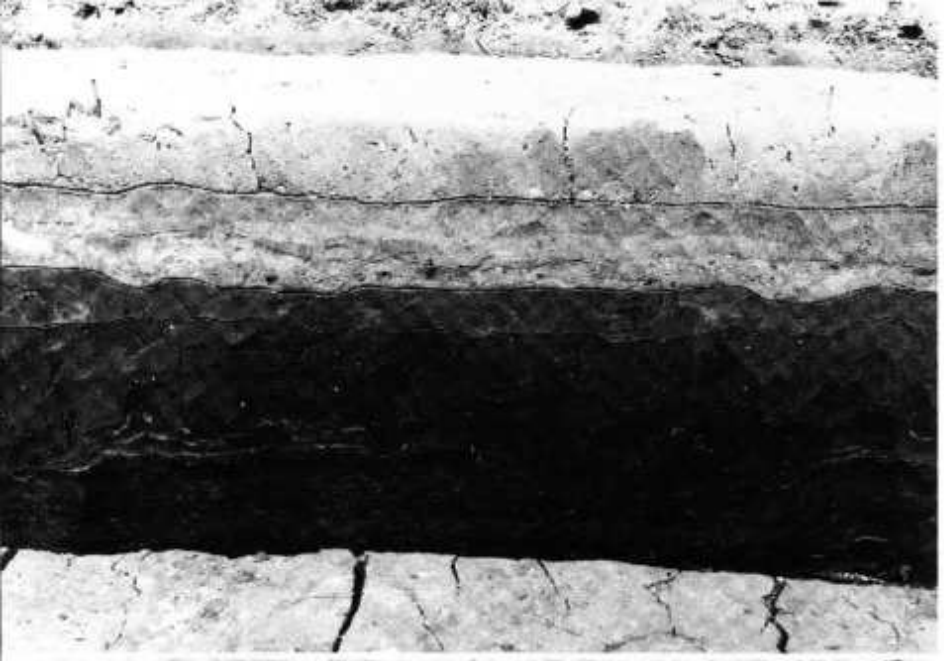


写真８
富沢遺跡第57次調査
断面（北壁）

写真９
富沢遺跡第58次調査
１号土坑（北から）

写真10
富沢遺跡第58次調査
２号土坑（東から）

写真11
富沢遺跡第58次調査
4ａ層水田跡
（北から）

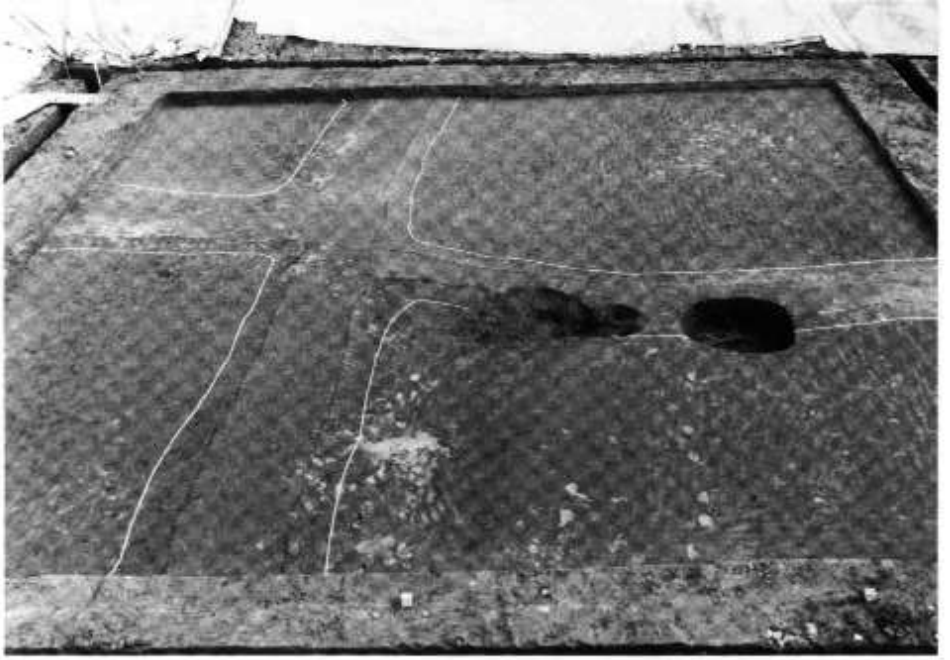


写真12
富沢遺跡第58次調査
4ｂ層水田跡
（北から）

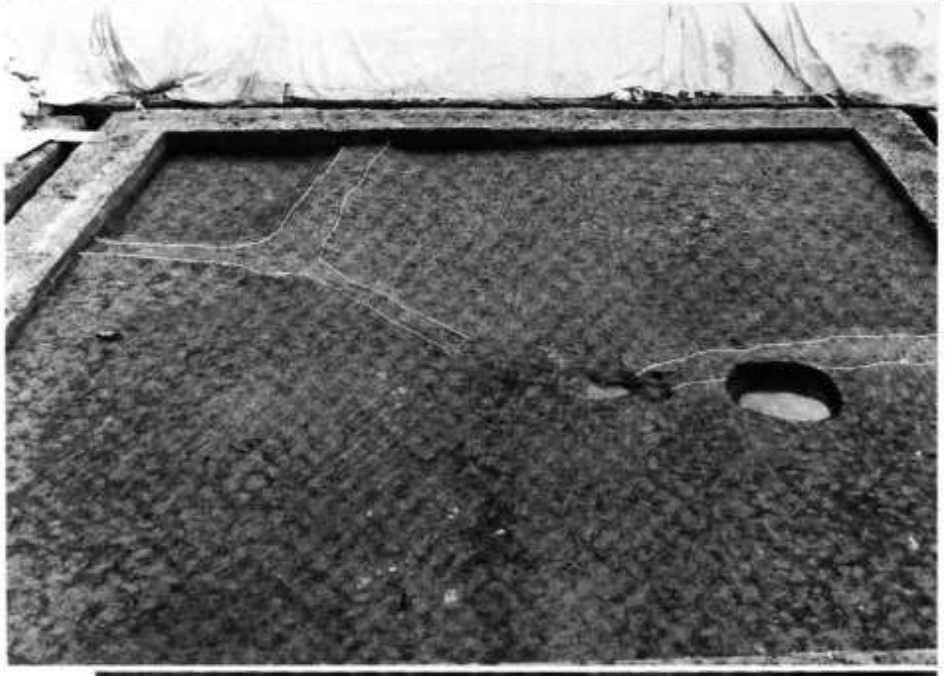


写真13
富沢遺跡第58次調査
23・24層上面樹木
出土状況（北から）

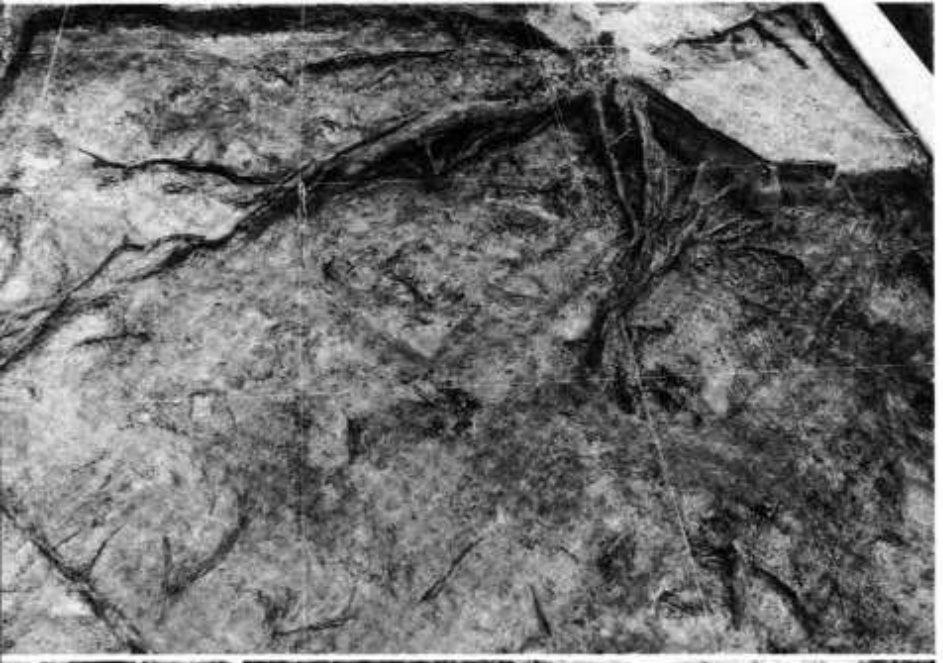


写真14
富沢遺跡第58次調査
25層上面樹木出土状況　　（西から）

写真15
富沢遺跡第58次調査
39層中樹木出土状況
（西から）

写真16
富沢遺跡第59次調査
5層水田跡（東から）

写真17
富沢遺跡第59次調査
6層水田跡(東から)

写真18
富沢遺跡第59次調査
7層水田跡(東から)

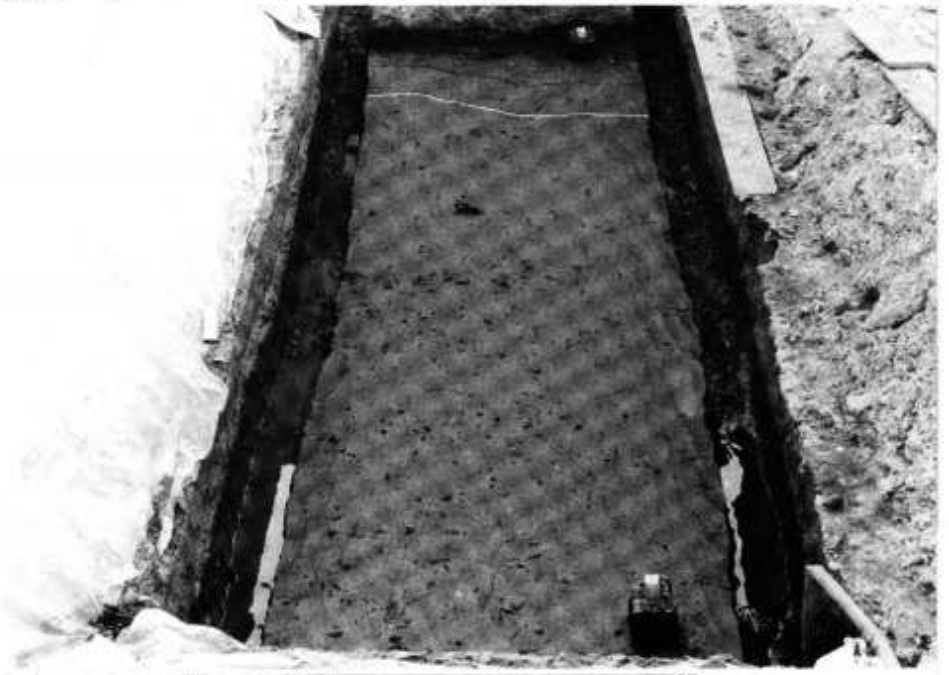


写真19
富沢遺跡第59次調査
8層水田跡確認状況
(西から)

写真20
富沢遺跡第59次調査
2号溝跡断面
（西から）

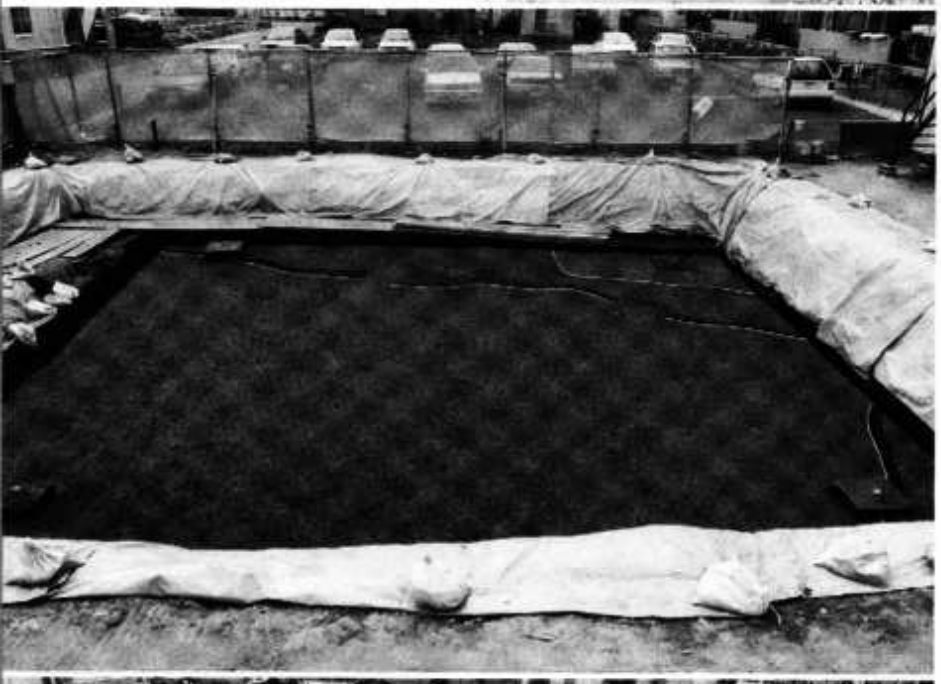


写真21
富沢遺跡第60次調査
4層水田跡（東から）

写真22
富沢遺跡第60次調査
6層水田跡（東から）

写真23
富沢遺跡第60次調査
6層水田跡
畦畔2断面（南壁）

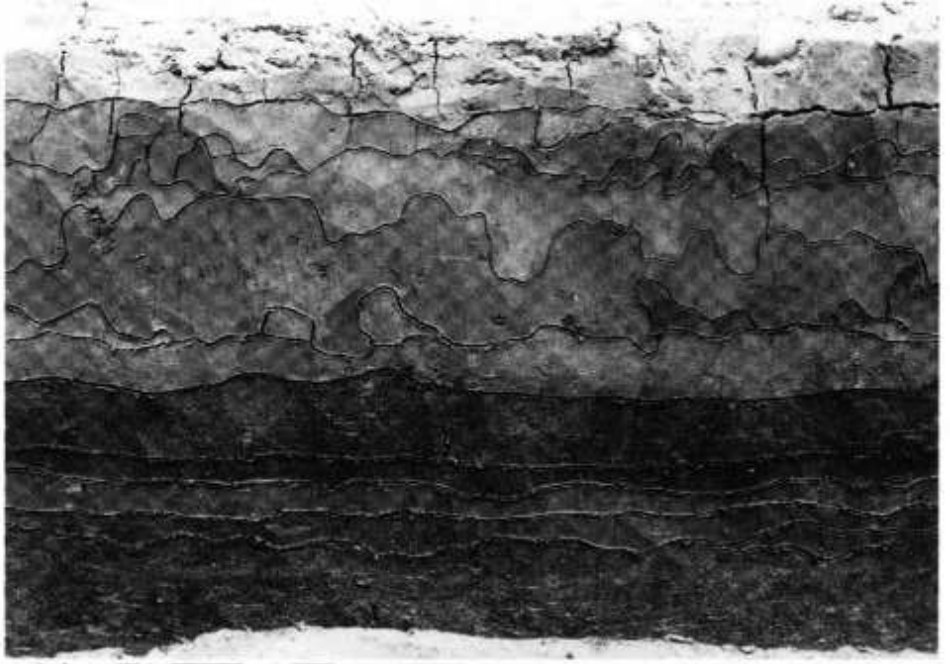


写真24
富沢遺跡第60次調査
7層水田跡確認状況
（東から）

写真25
富沢遺跡第60次調査
7層水田跡（東から）

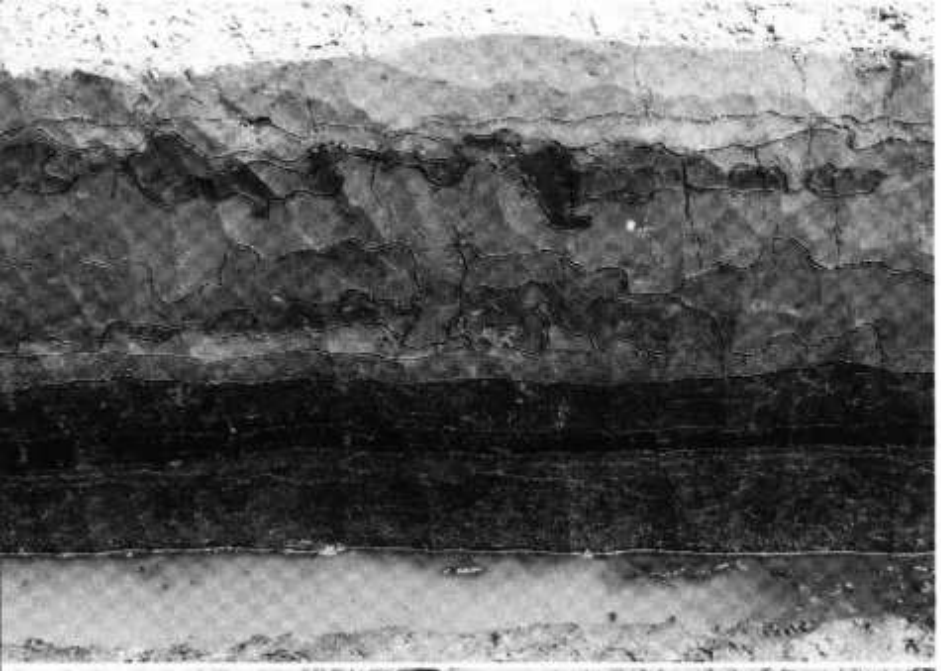


写真26
富沢遺跡第60次調査
7層水田跡
畦畔3断面（東壁）

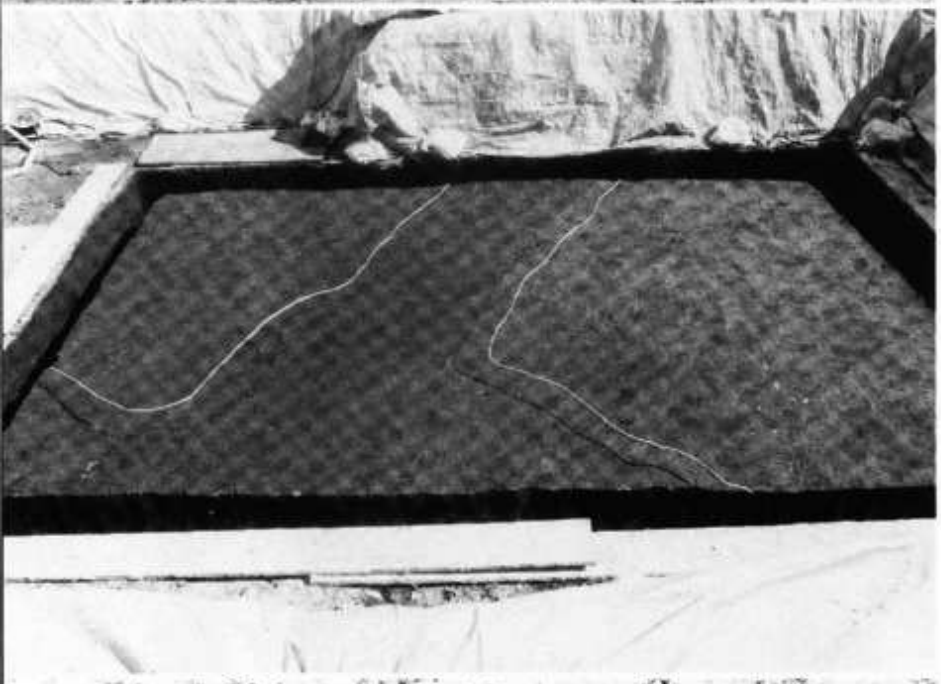


写真27
富沢遺跡第61次調査
5層水田跡（北から）

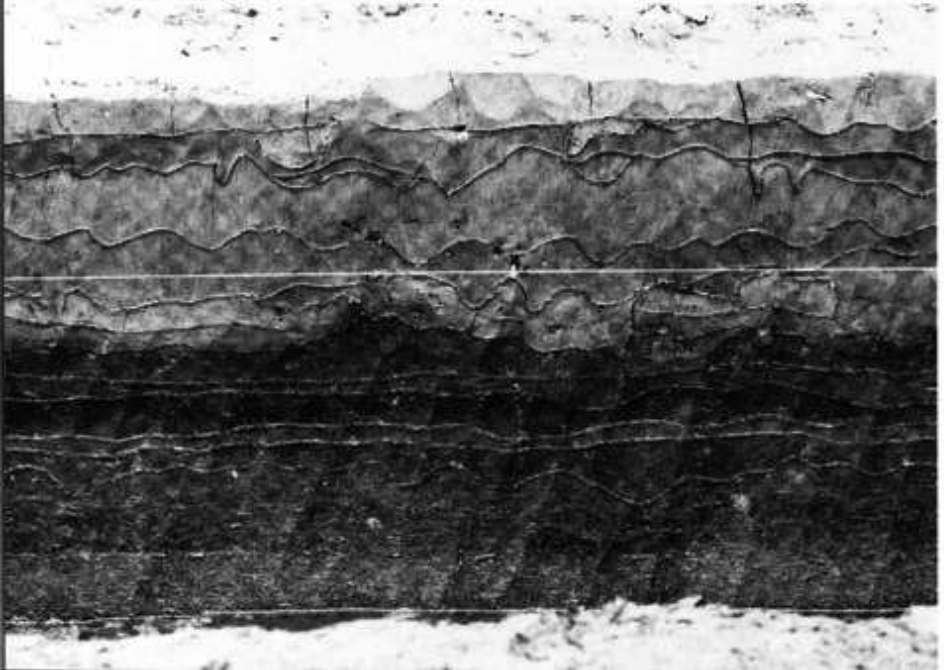


写真28
富沢遺跡第61次調査
5層水田跡
畦畔断面（南壁）

写真29
富沢遺跡第61次調査
6層水田跡（北から）

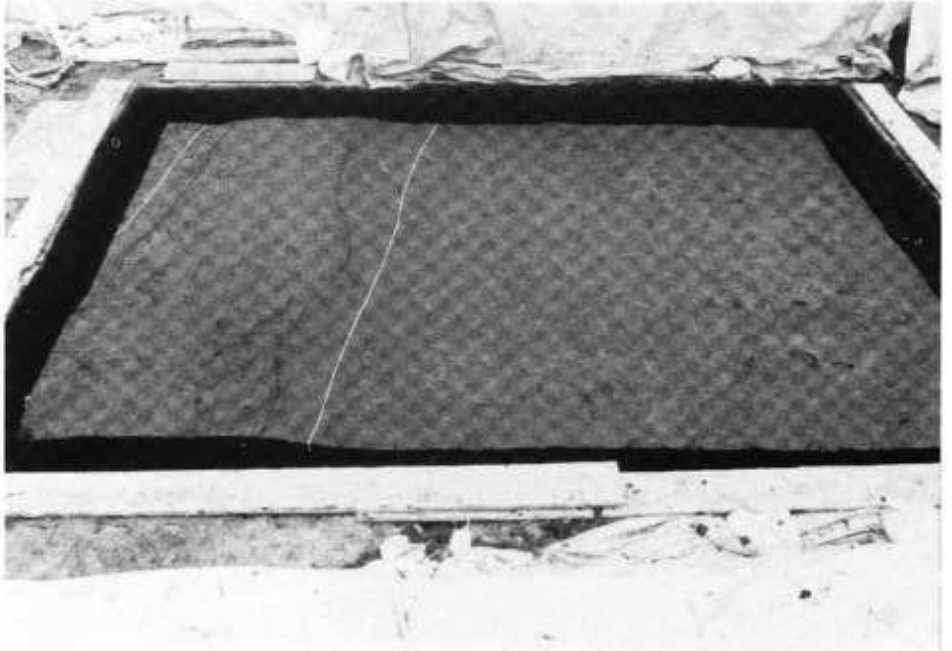


写真30
富沢遺跡第61次調査
8ａ層水田跡
（擬似畦畔Ｂ）①
（北から）

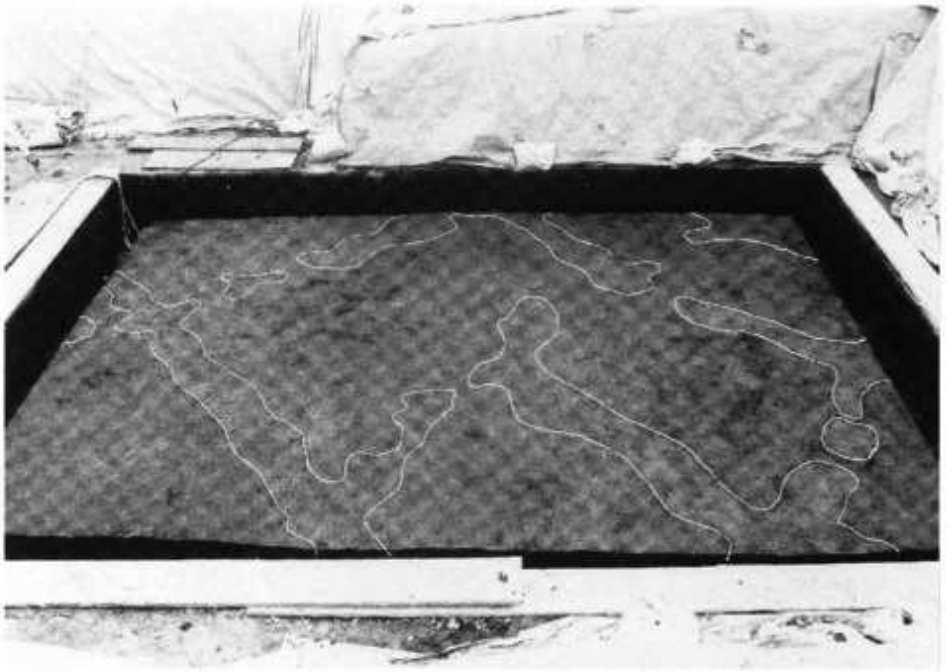


写真31
富沢遺跡第61次調査
8ａ層水田跡
（擬似畦畔Ｂ）②
（西から）

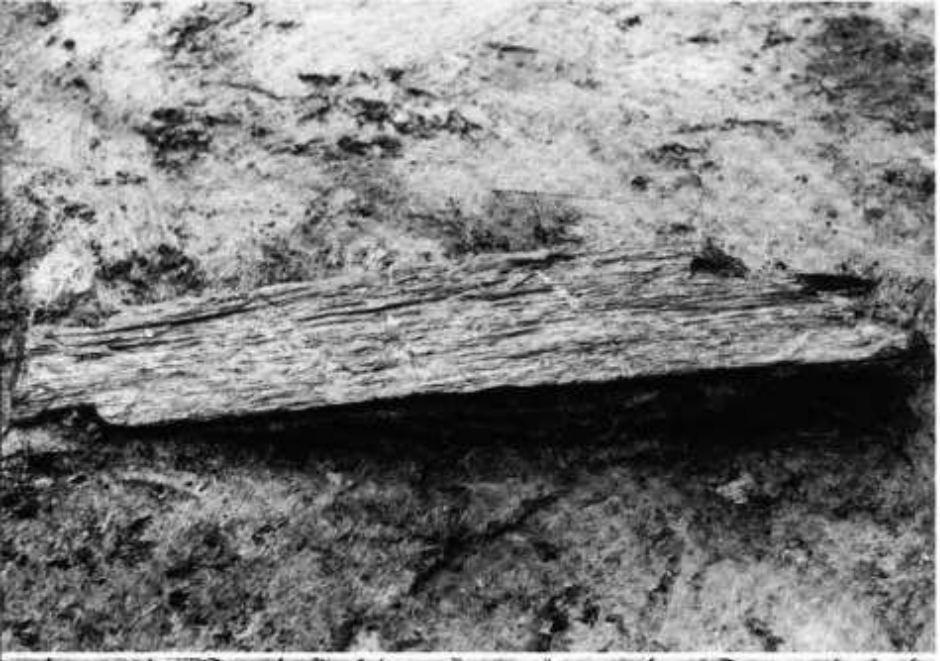


写真32
富沢遺跡第61次調査
8a層水田跡
大足状木製品
出土状況(北西から)

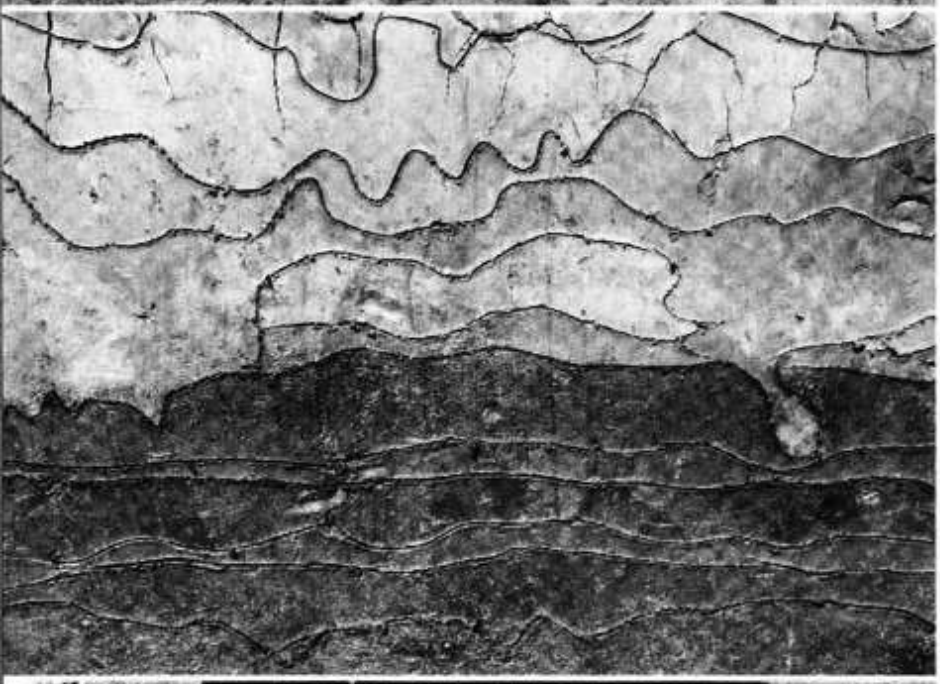


写真33
富沢遺跡第61次調査
8a層水田跡
擬似畦畔B断面
(西壁)

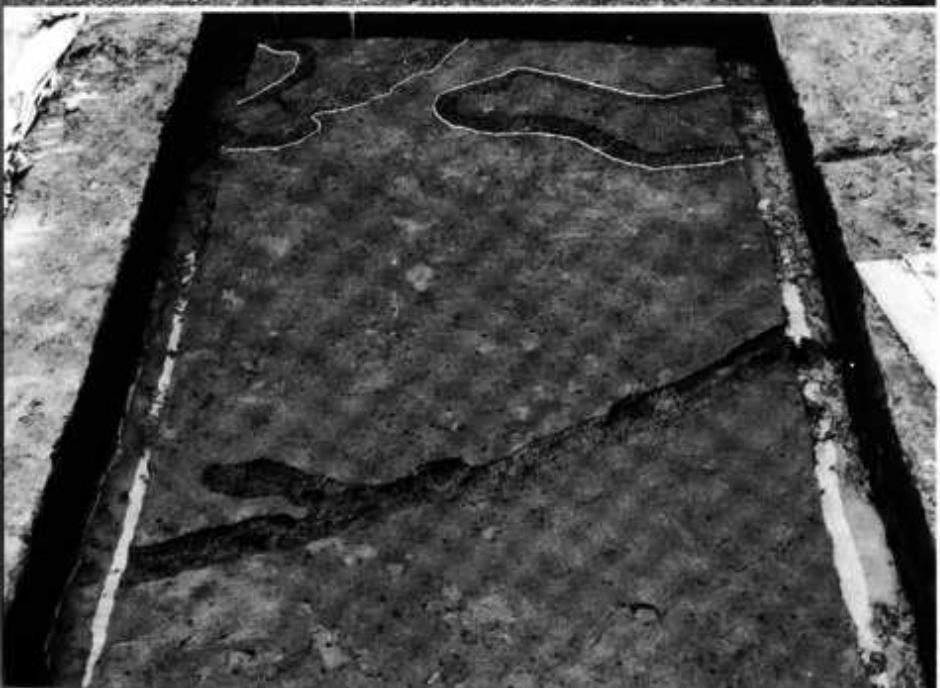


写真34
富沢遺跡第62次調査
7層水田跡・1号溝
跡　　(北から)

写真35
富沢遺跡第62次調査
8ａ層水田跡
（北から）

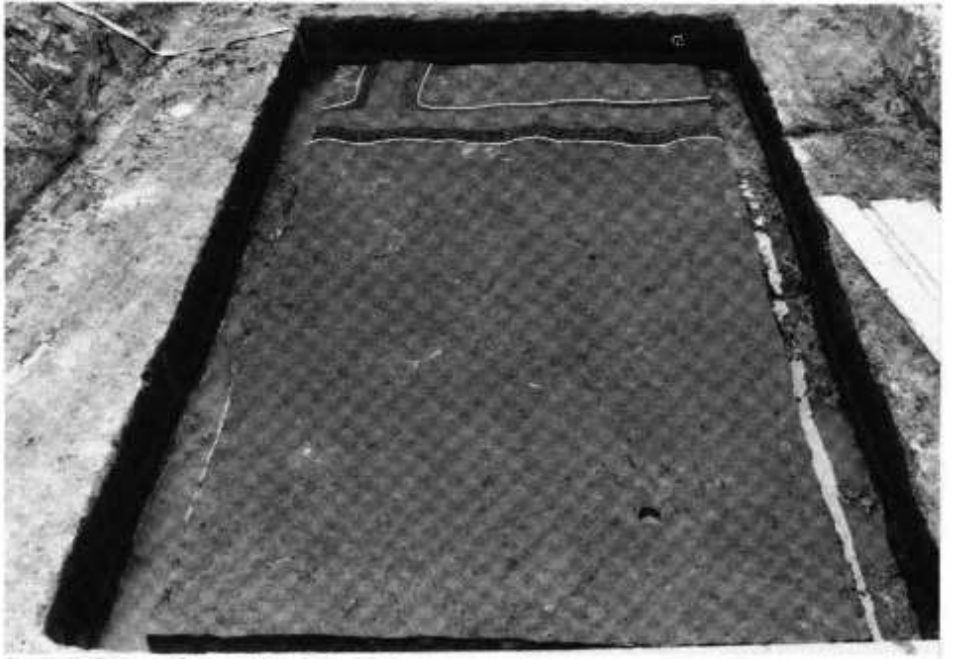


写真36
富沢遺跡第62次調査
8ａ層水田跡
畦畔２断面（南壁）

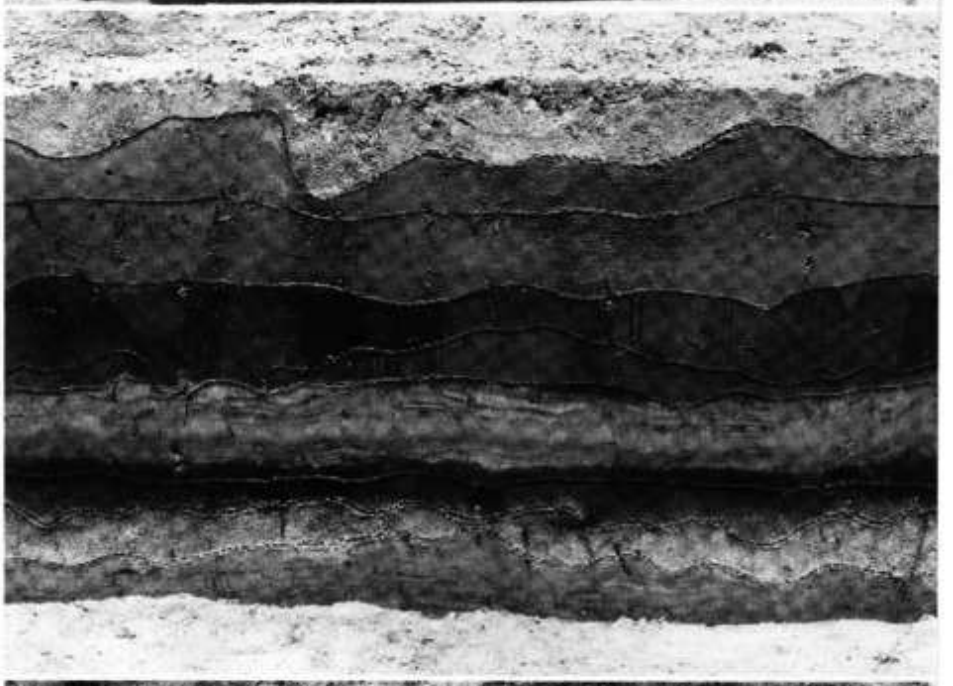
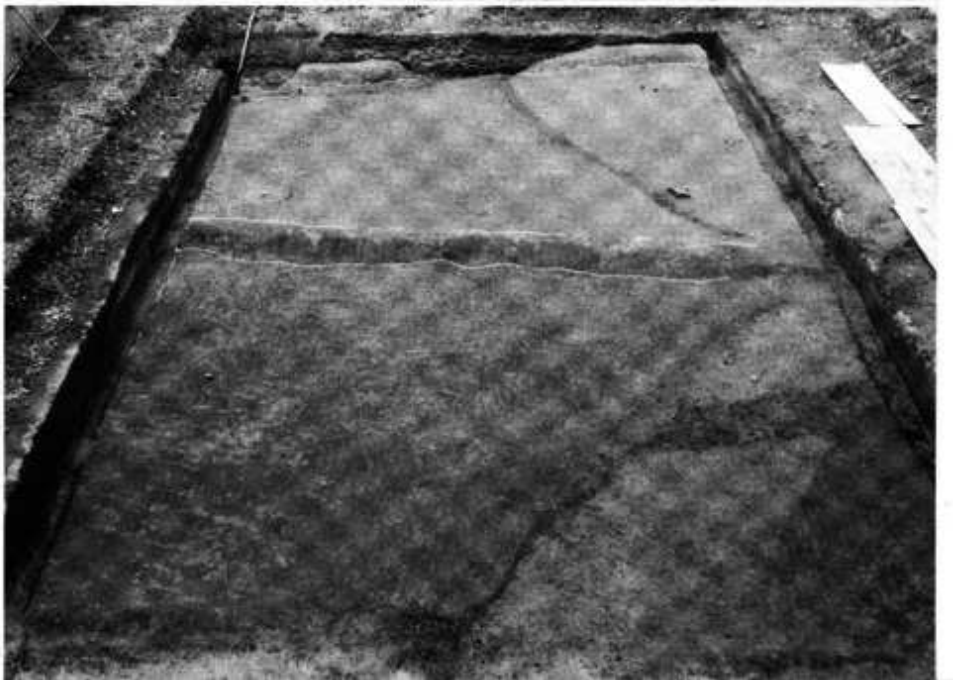


写真37
富沢遺跡第63次調査
５層水田跡（東から）



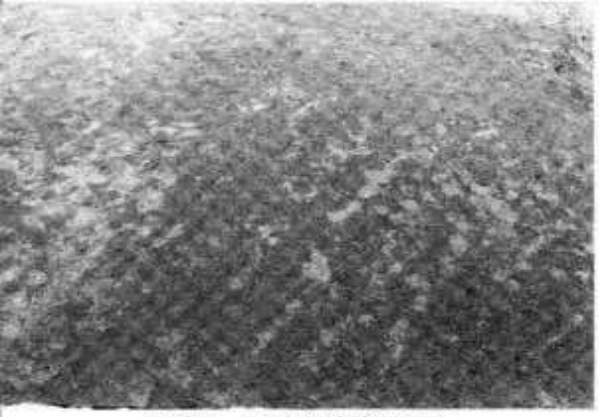


写真38　富沢遺跡第63次調査
5層水田跡耕作土上面（南から）

写真39　富沢遺跡第63次調査
5層水田跡畦畔2断面（南壁）

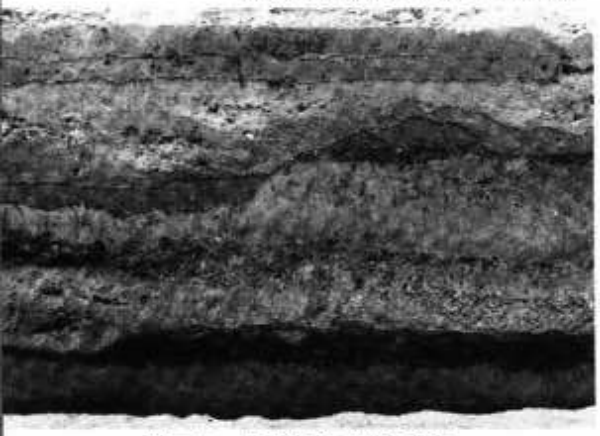


写真40　富沢遺跡第63次調査
5層水田跡畦畔3断面（南壁）

写真41　富沢遺跡第63次調査
1号溝跡（北から）

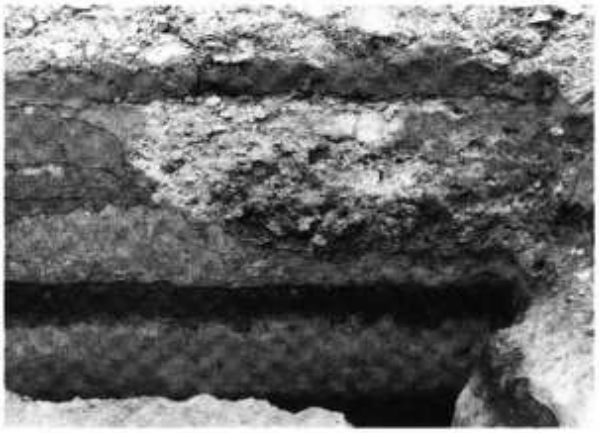


写真42　富沢遺跡第63次調査
1号溝跡断面（南壁）

写真43　富沢遺跡第63次調査
3号溝跡（北から）

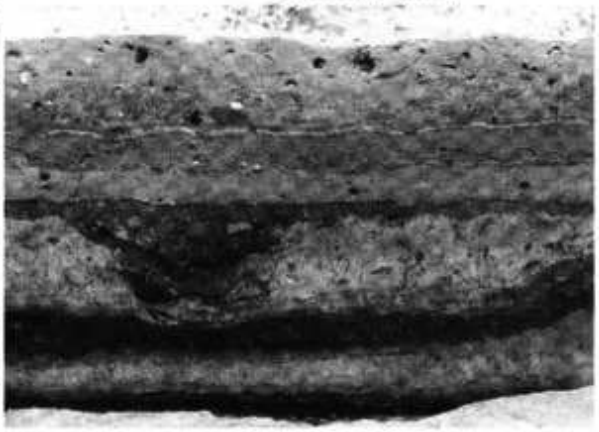


写真44　富沢遺跡第63次調査
3号溝跡断面（北壁）

写真45
富沢遺跡第63次調査
8層水田跡①
（東から）

写真46
富沢遺跡第63次調査
8層水田跡②
（東から）

写真47
富沢遺跡第63次調査
8層水田跡③
（東から）

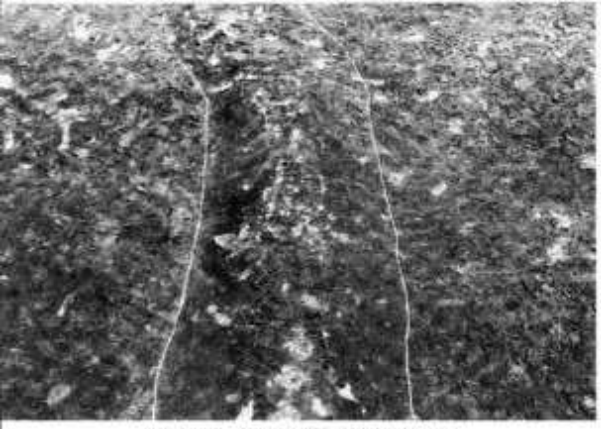


写真48　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡畦畔4（南から）

写真49　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡大足出土状況

写真50　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡畦畔1断面（西壁）

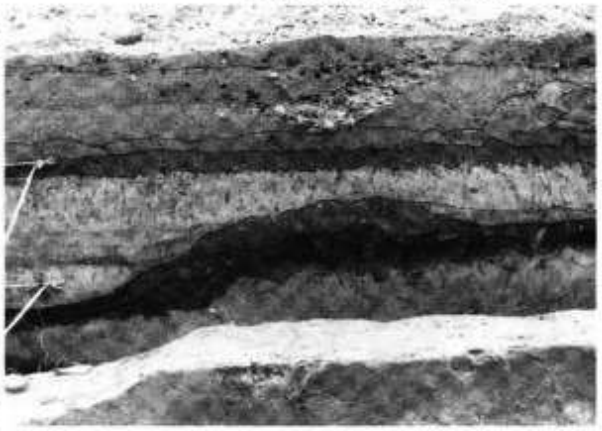


写真51　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡畦畔2断面（南壁）

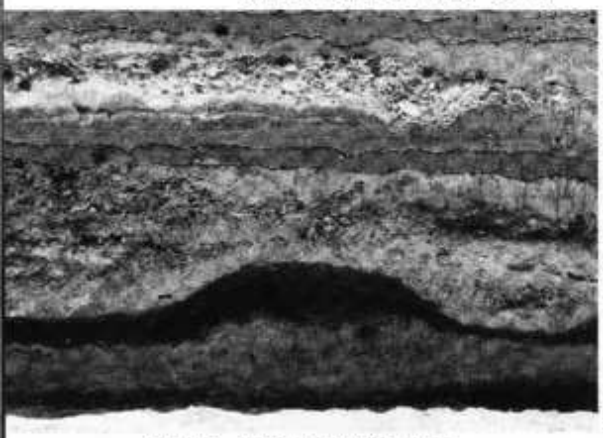


写真52　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡畦畔4断面（南壁）

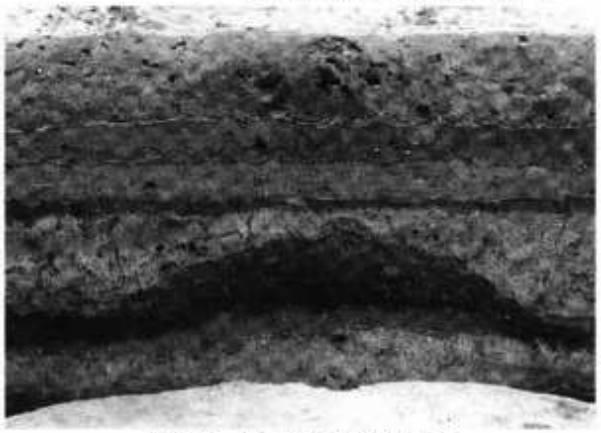


写真53　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡畦畔5断面（北壁）

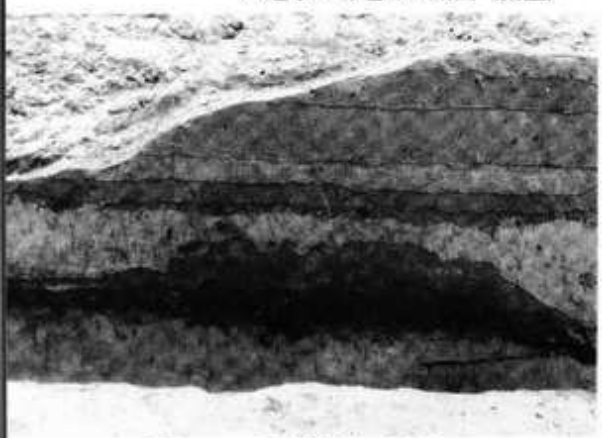


写真54　富沢遺跡第63次調査
8層水田跡畦畔9断面（南壁）

写真55　富沢遺跡第63次調査
8a－1層断面（南から）

写真56
富沢遺跡第63次調査
13層上面
縄文土器出土状況
（北から）

写真57　富沢遺跡第63次調査
21層上面樹木出土状況（西から）

写真58　富沢遺跡第63次調査
23層上面樹木出土状況（北から）

写真59　富沢遺跡第63次調査
25ａ層上面樹木出土状況（北から）

写真60　富沢遺跡第63次調査
25ｂ層上面樹木出土状況（北から）

写真61　富沢遺跡第63次調査
深掘り区断面①（北壁）

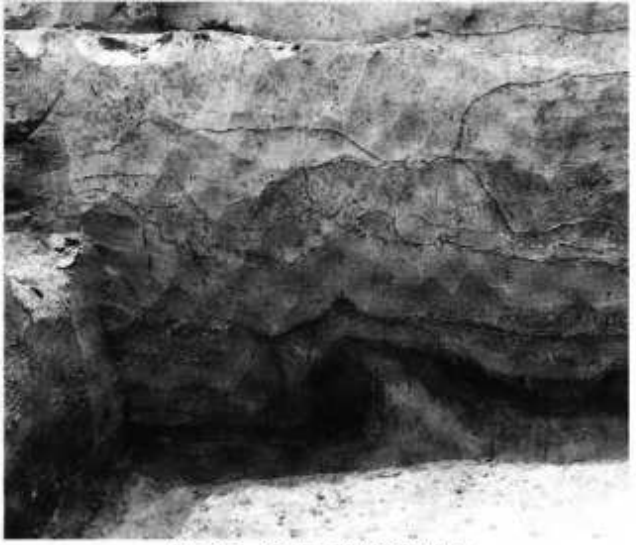


写真62　富沢遺跡第63次調査
深掘り区断面②（南壁）

写真63　富沢遺跡第63次調査
深掘り区断面③（西壁）

写真64　富沢遺跡第63次調査
深掘り区断面④（西壁）

写真65
富沢遺跡第64次調査
1・2号溝跡
（北から）

写真66
富沢遺跡第64次調査
3号溝跡（北から）

写真67
富沢遺跡第64次調査
3号溝跡断面（北壁）

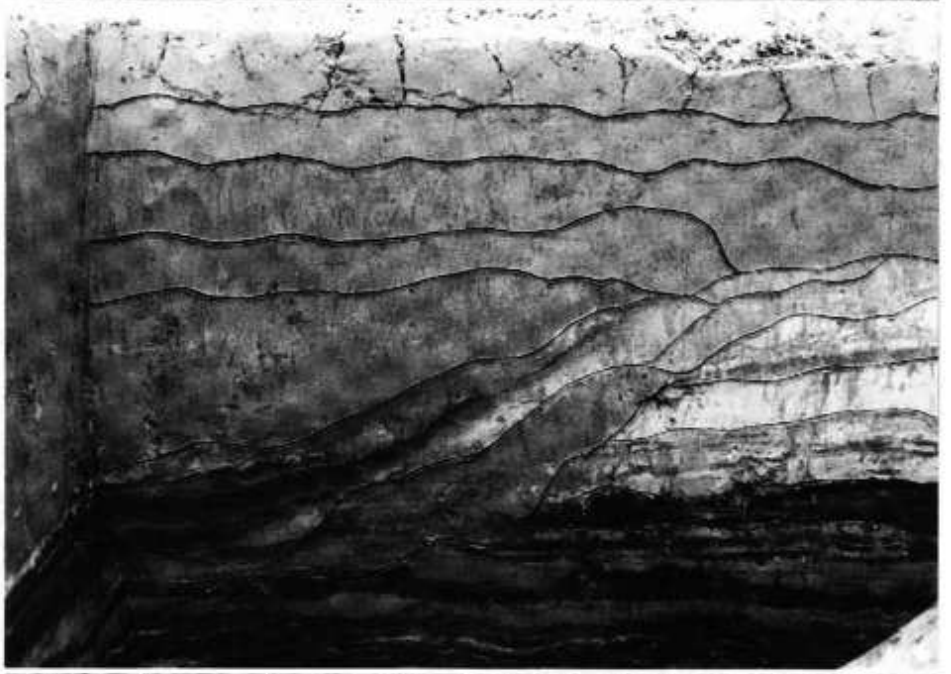


写真68（左）
富沢遺跡第65次調査
6層水田跡（南から）

写真69（右）
富沢遺跡第65次調査
7層上面帯状酸化鉄
斑紋確認状況
（南から）

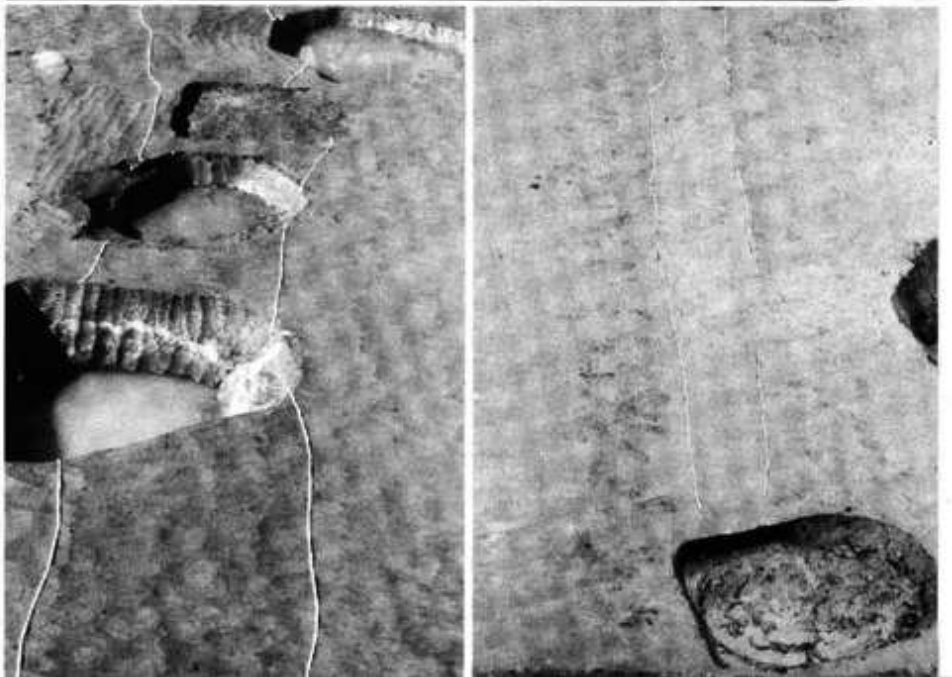


写真70
富沢遺跡第65次調査
9層水田跡確認状況
（北から）

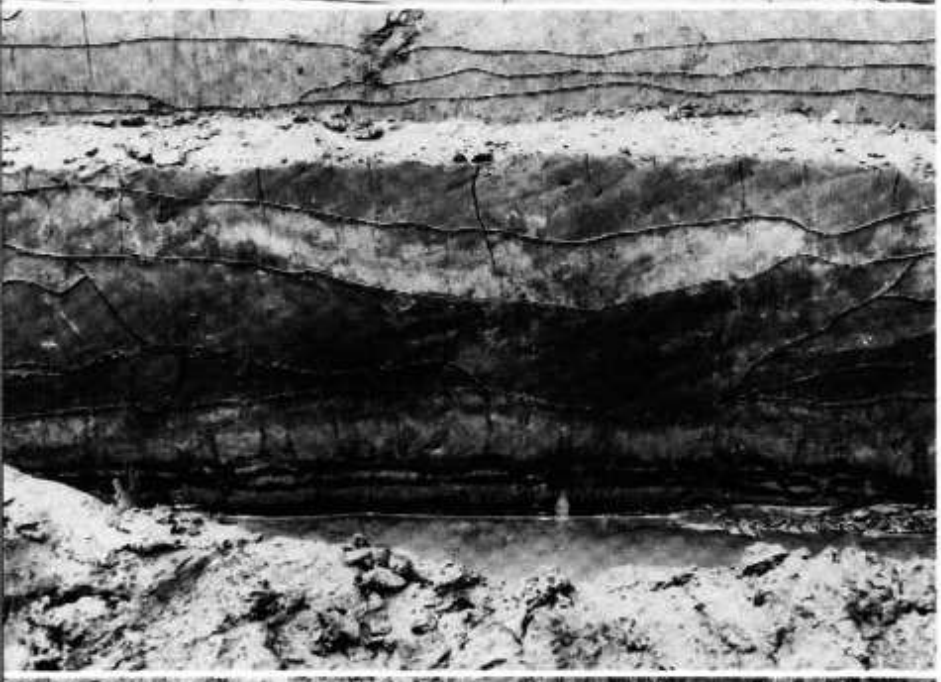


写真71
富沢遺跡第65次調査
1号溝跡断面
（西壁）

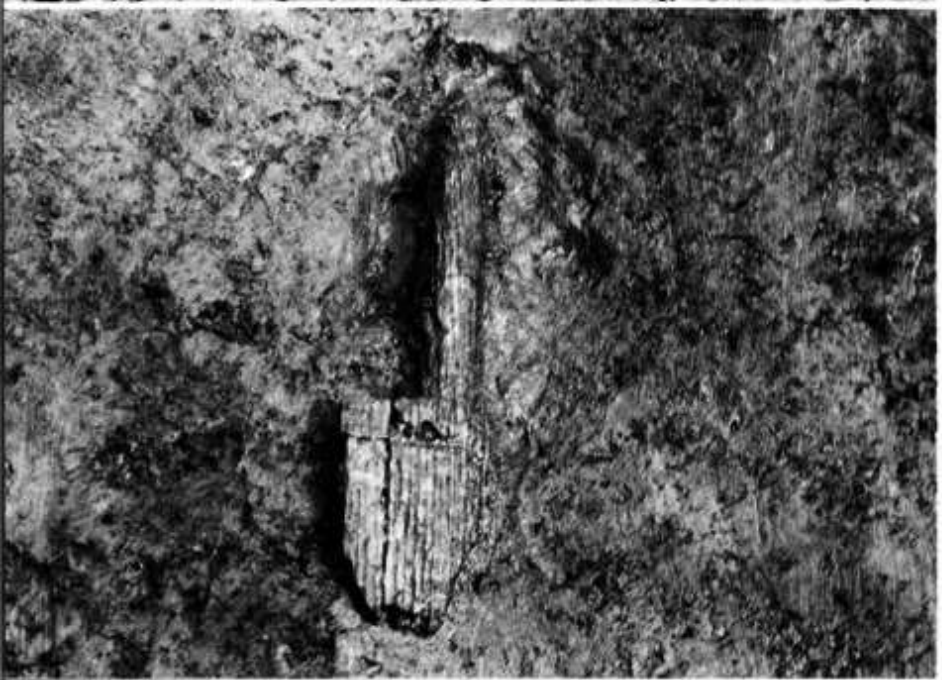
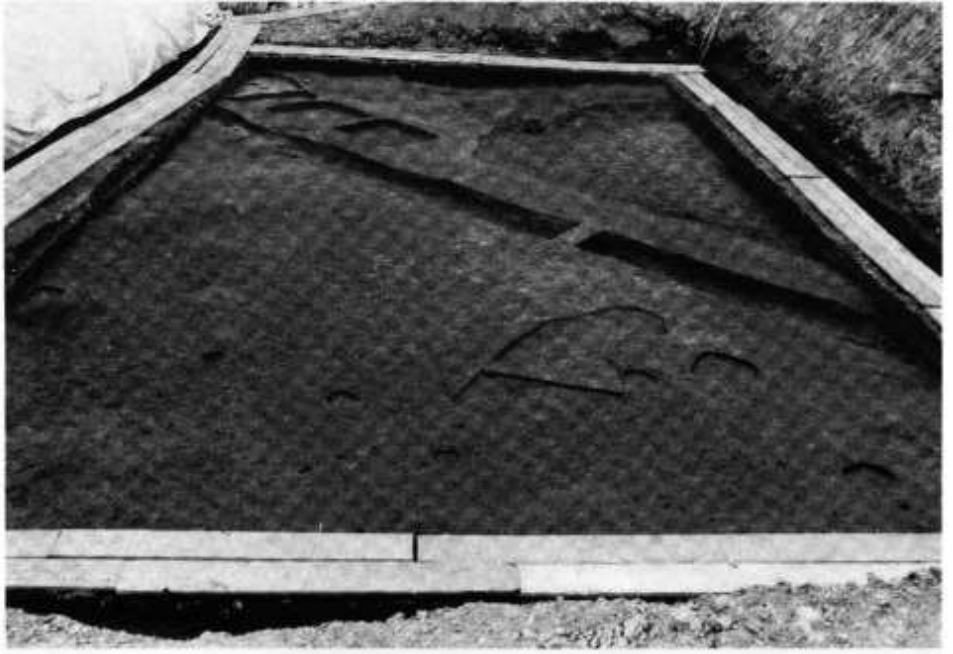


写真72
富沢遺跡第65次調査
1号溝跡着柄鋤
或は鍬出土状況

写真73
富沢遺跡第66次調査
近世第1面全景
（南西から）



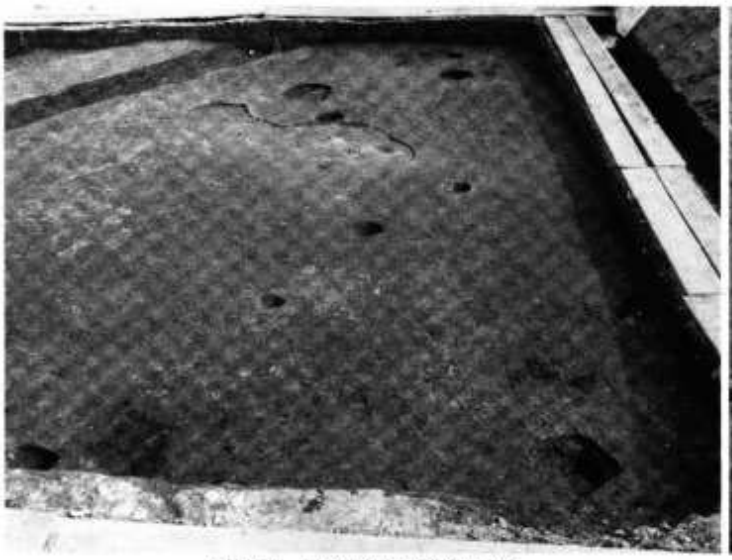


写真74　富沢遺跡第66次調査
1号掘立柱建物跡（北西から）

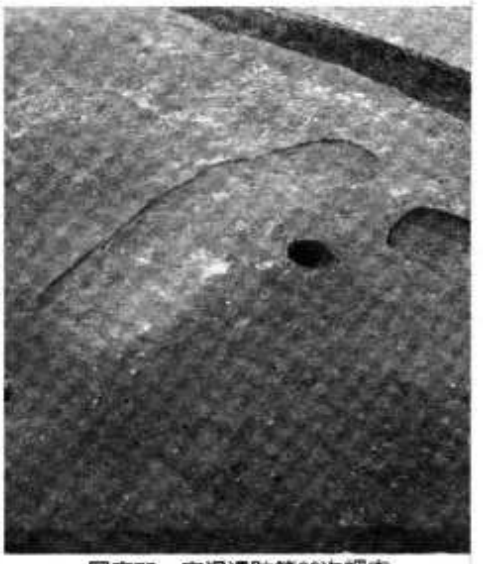


写真75　富沢遺跡第66次調査
5号土坑（南東から）

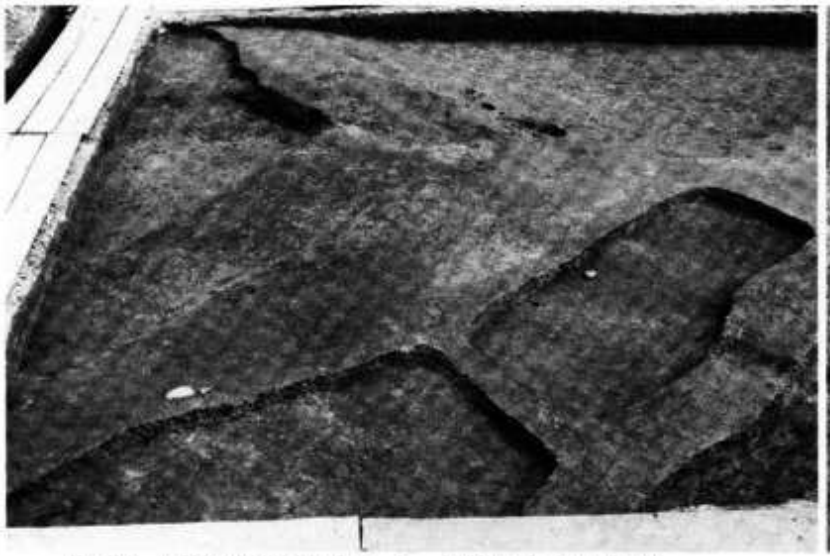


写真76　富沢遺跡第66次調査　1・2号土坑（北西から）

写真77　富沢遺跡第66次調査
4号土坑（北西から）

写真78　富沢遺跡第66次調査
1号溝跡（南から）

写真79　富沢遺跡第66次調査
1号溝跡底面陶器出土状況

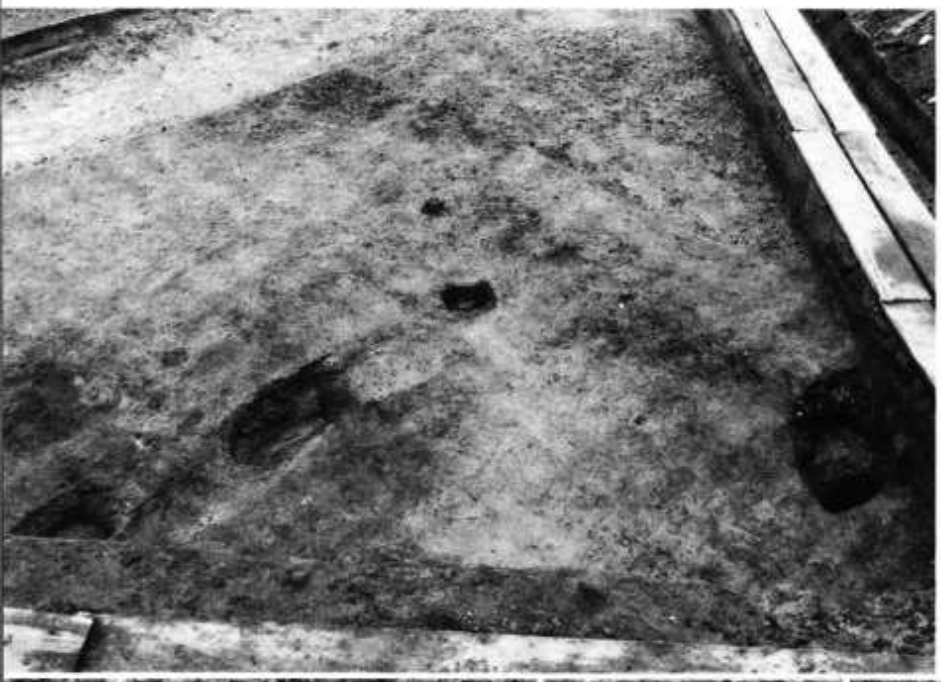


写真80
富沢遺跡第66次調査
2号竪穴建物跡
（北西から）

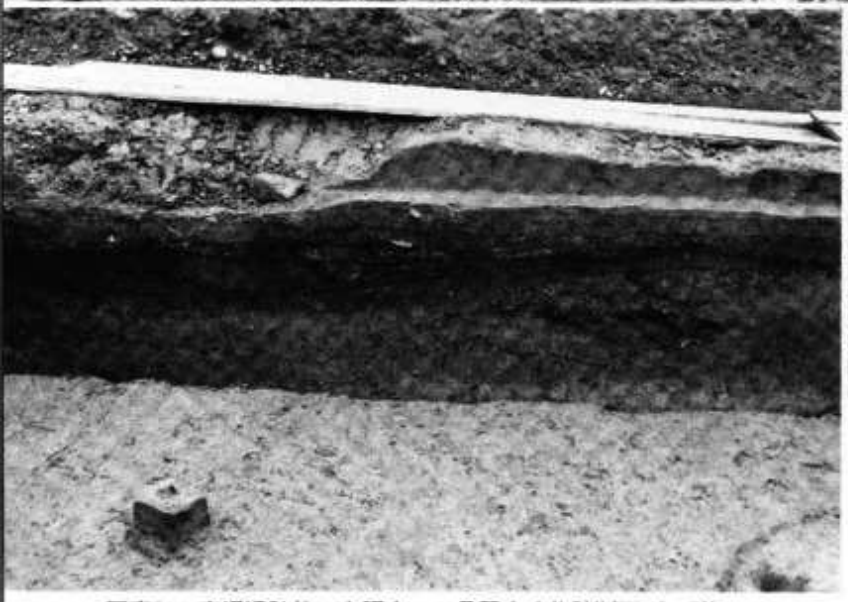
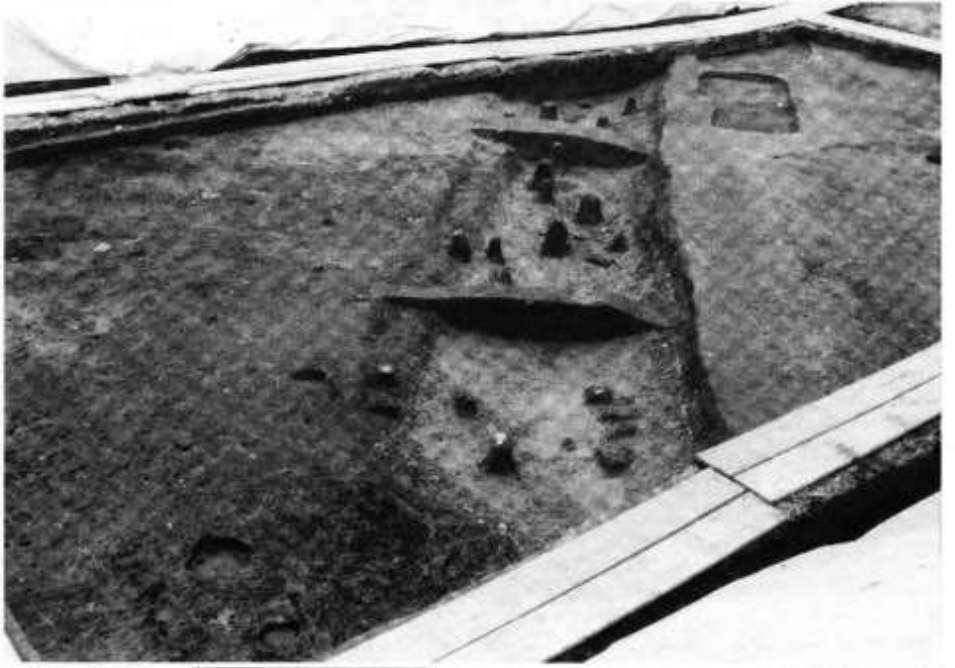


写真81　富沢遺跡第66次調査　2号竪穴建物跡断面（西壁）

写真82
富沢遺跡第66次調査
2号竪穴建物跡堆積土
陶器出土状況

写真83
富沢遺跡第66次調査
2号溝跡
遺物出土状況
（南から）



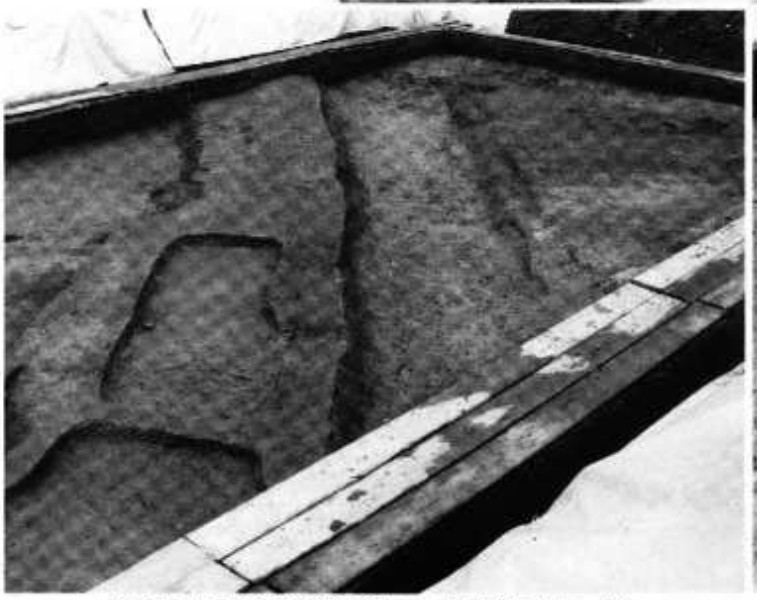


写真84　富沢遺跡第66次調査　2号溝跡（北から）

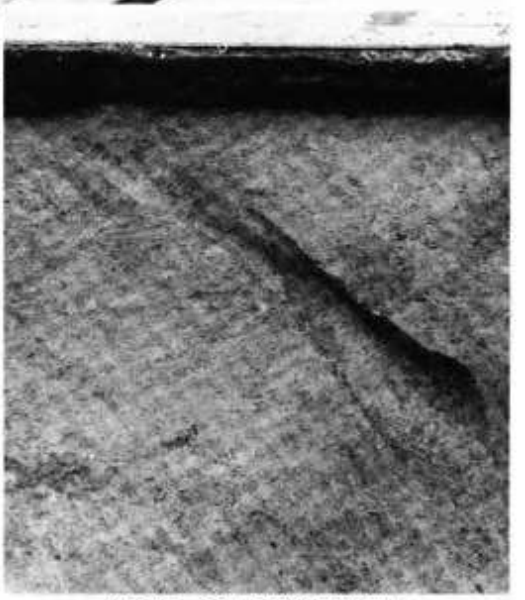


写真85　富沢遺跡第66次調査
3号溝跡（南西から）

写真86
富沢遺跡第66次調査
7b層水田跡　Ⅱ区
（北東から）

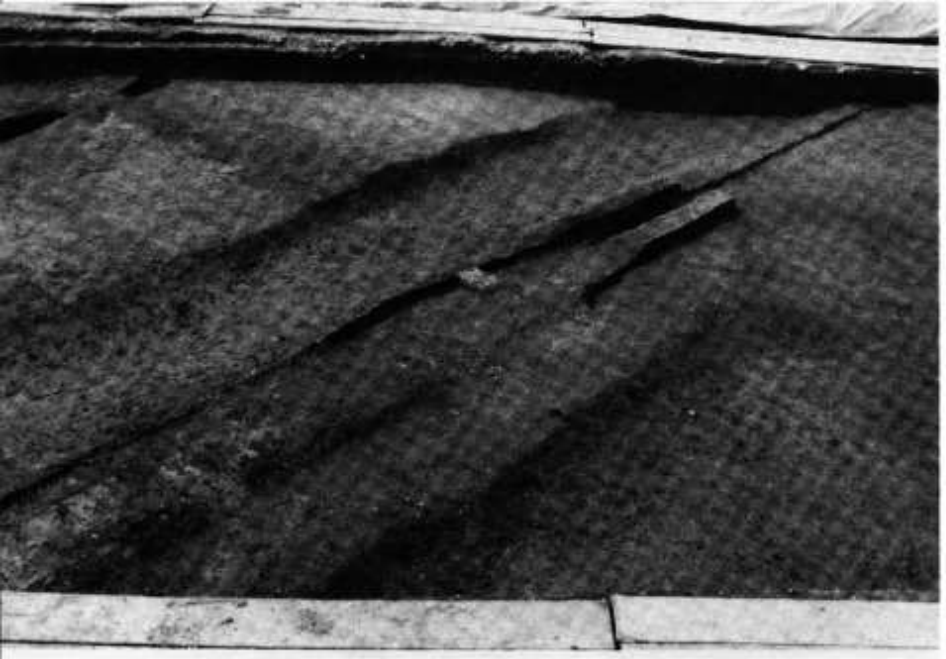


写真87
富沢遺跡第66次調査
4号溝跡(南東から)

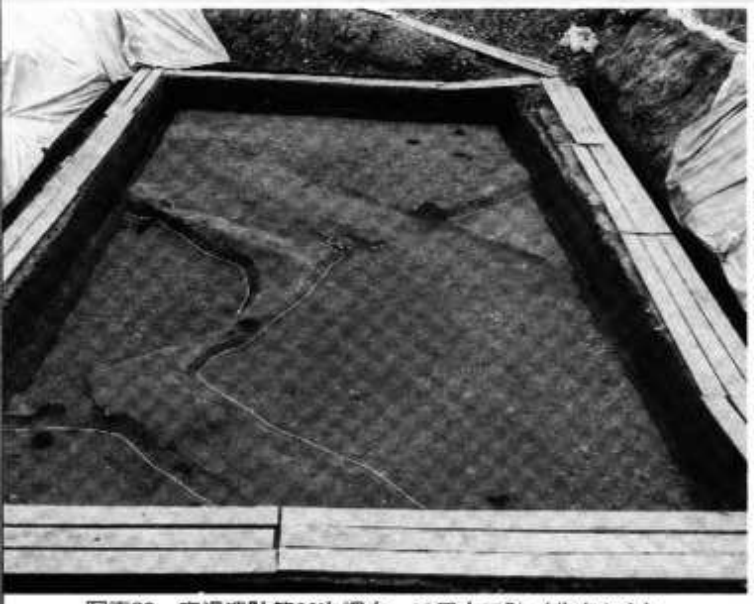


写真88　富沢遺跡第66次調査　12層水田跡（北東から）

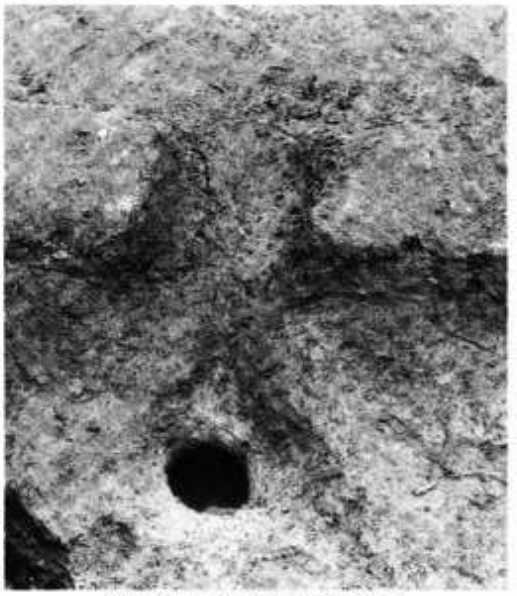


写真89　富沢遺跡第66次調査
12層水田跡水口（東から）

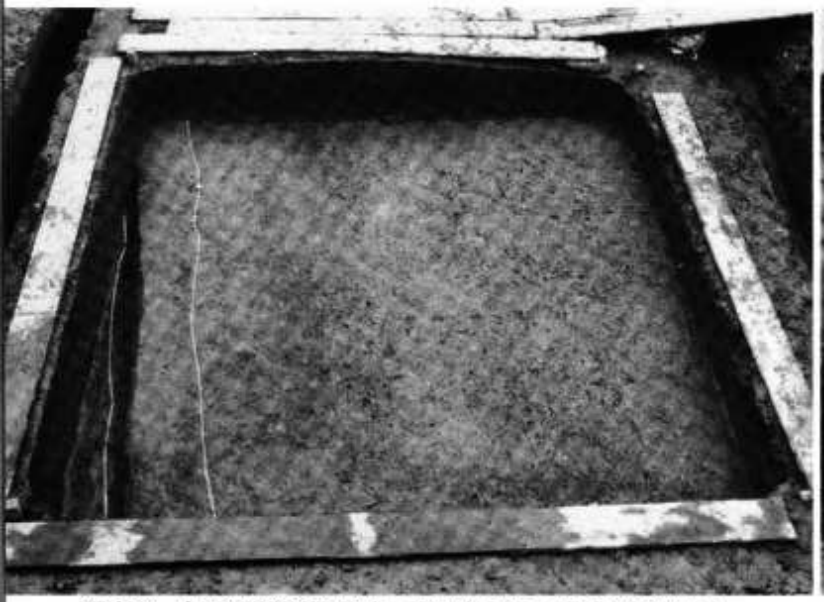


写真90　富沢遺跡第66次調査　12層水田跡　Ⅱ区（北東から）

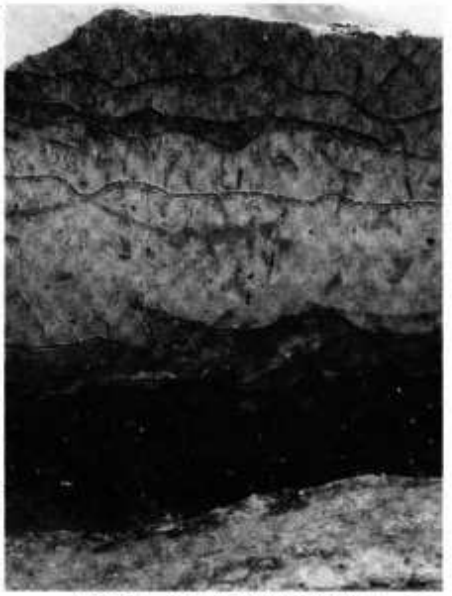


写真91　富沢遺跡第66次調査
断面（東壁）

写真92
富沢遺跡第66次調査
13・14層水田跡
（北東から）

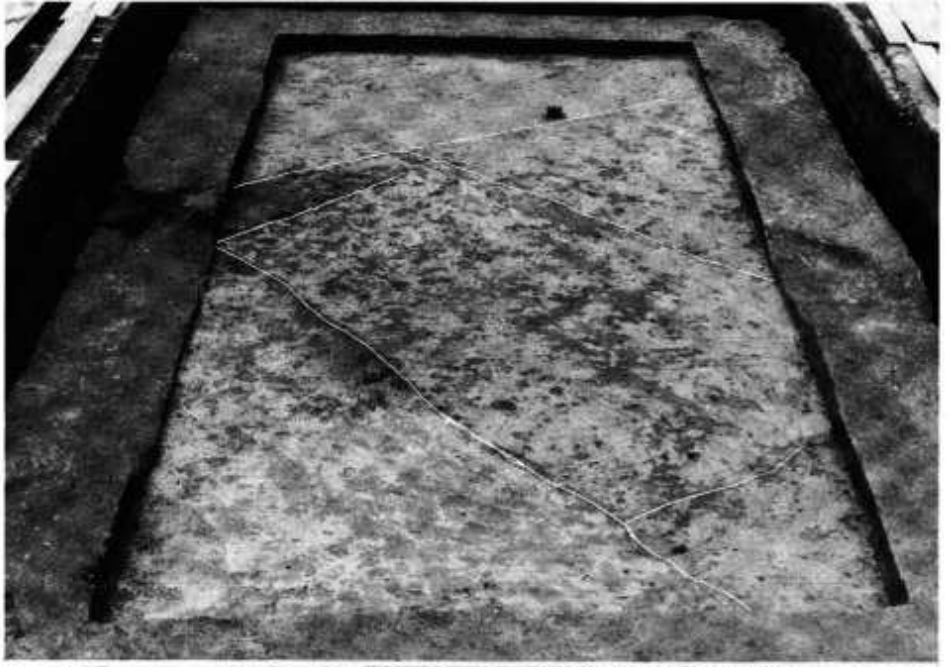


写真93
富沢遺跡第66次調査
17ａ層水田跡
（北東から）

写真94
富沢遺跡第66
次調査
深掘り区断面
（南壁）

写真95　富沢遺跡第66次調査
33層中樹木出土状況（南東から）

写真96　富沢遺跡第66次調査
36層上面樹木出土状況（北東から）

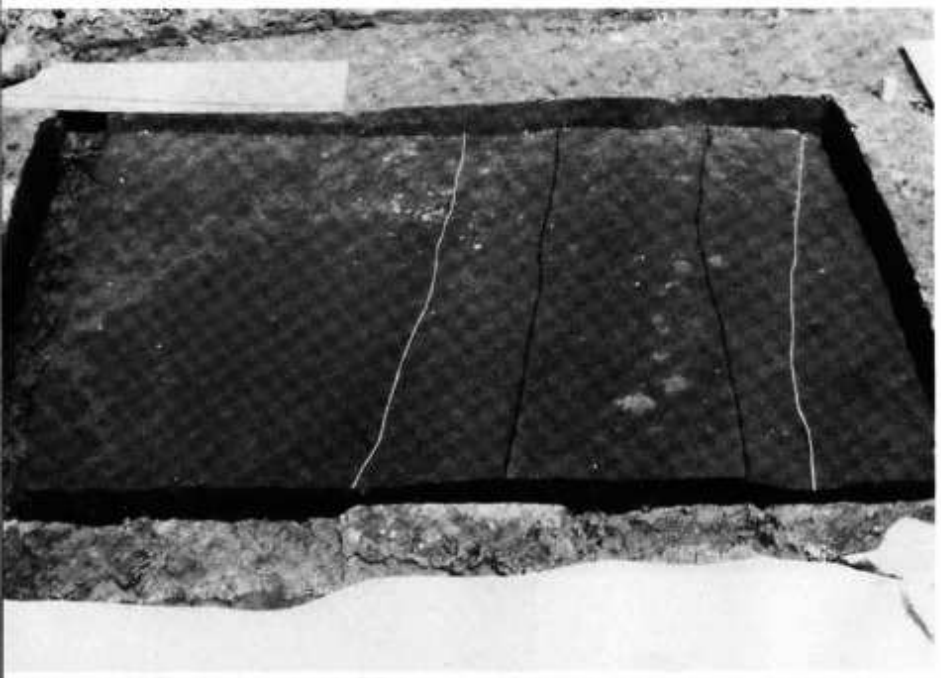


写真97
富沢遺跡第67次調査
4層水田跡
（南から）

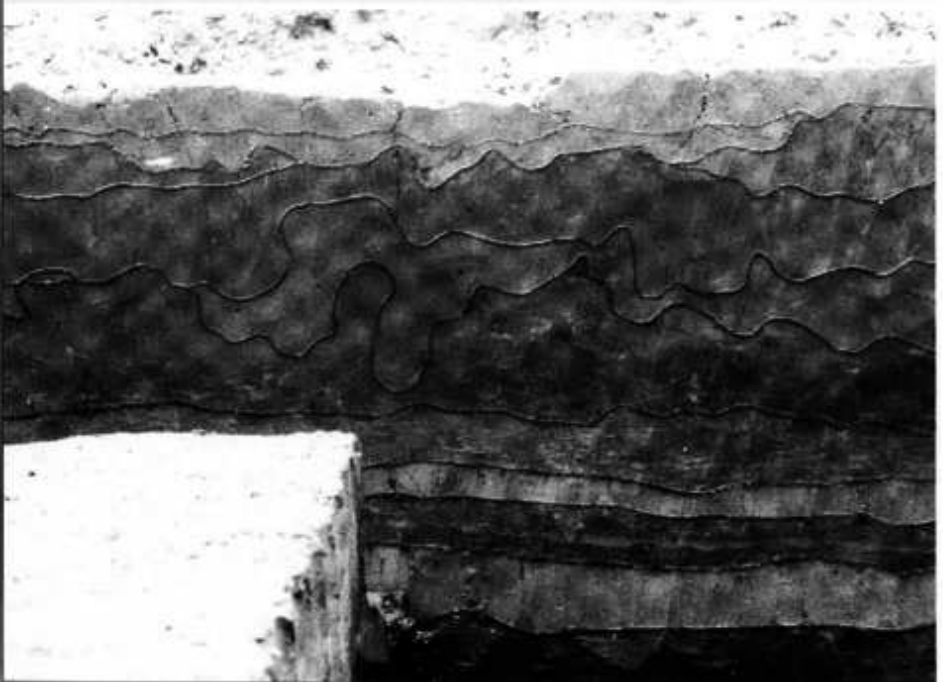


写真98
富沢遺跡第67次調査
4層水田跡
畦畔断面（南壁）

写真99
富沢遺跡第67次調査
5層水田跡(南から)

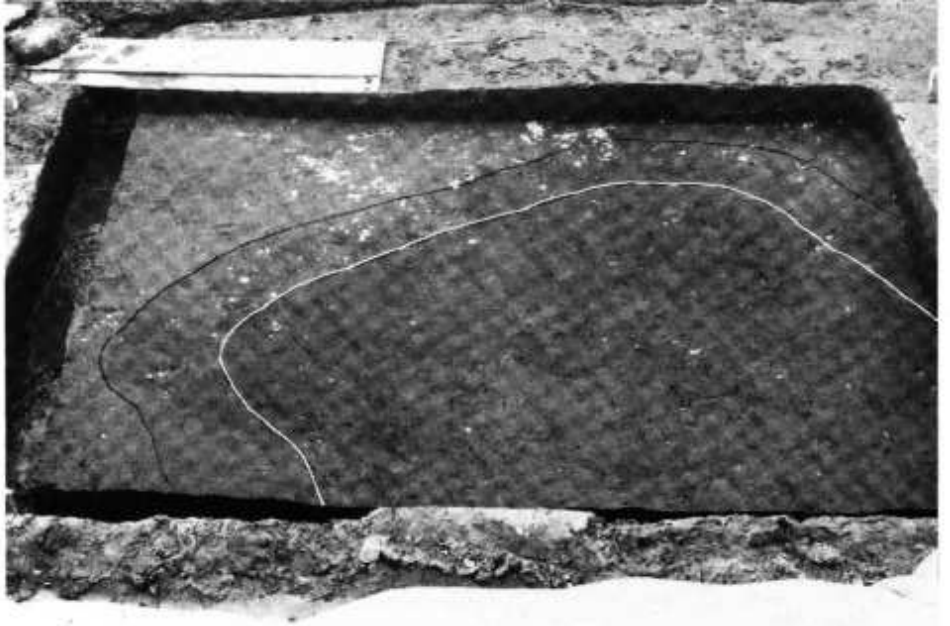


写真100
富沢遺跡第68次調査
3層水田跡(西から)

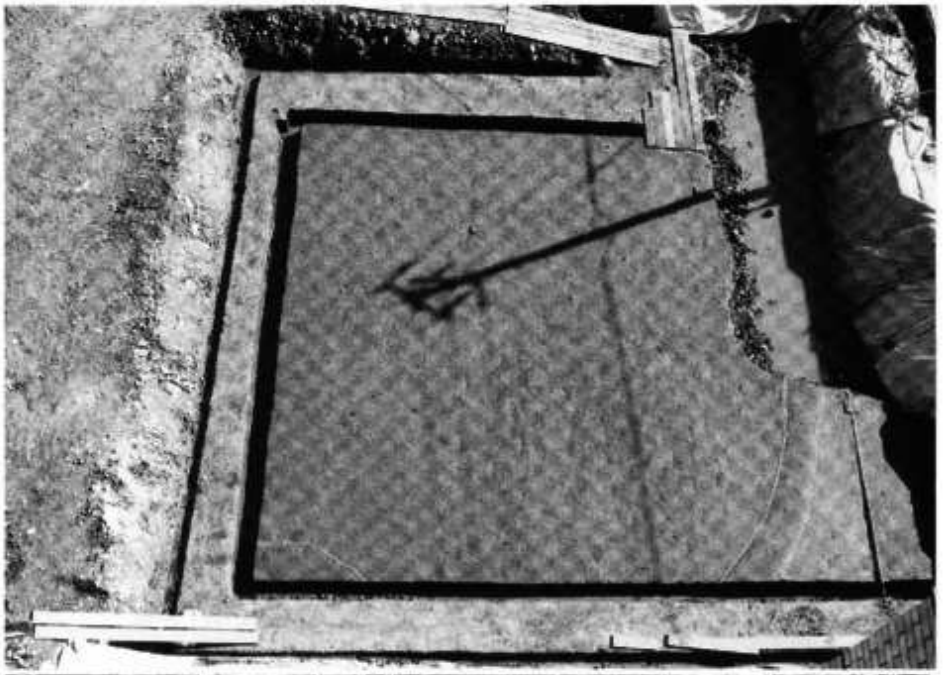


写真101
富沢遺跡第68次調査
4層水田跡(西から)

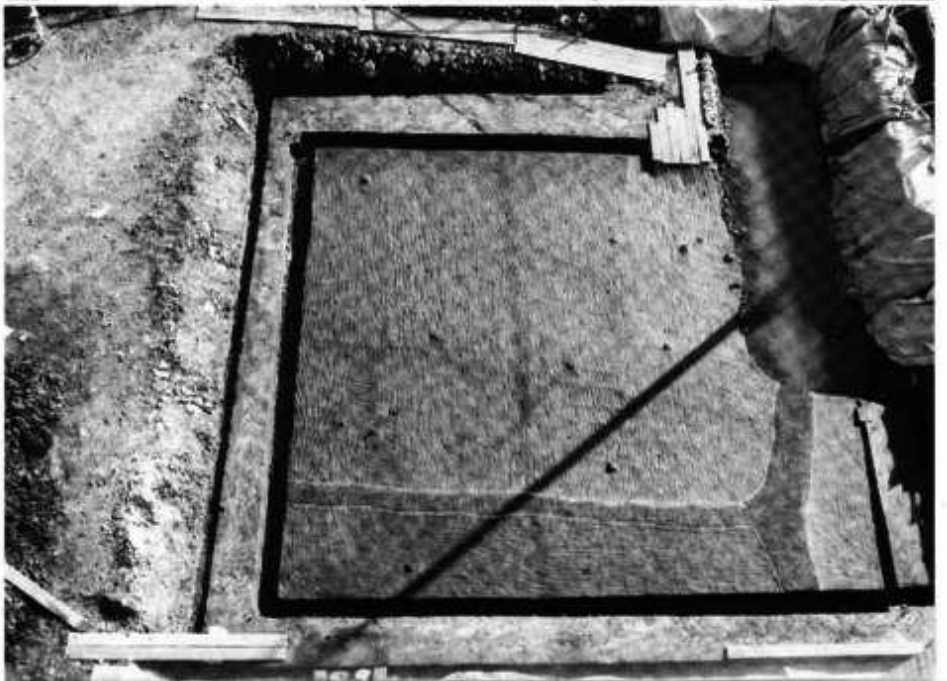


写真102
富沢遺跡第68次調査
4層中焼夷弾出土状況　（西から）

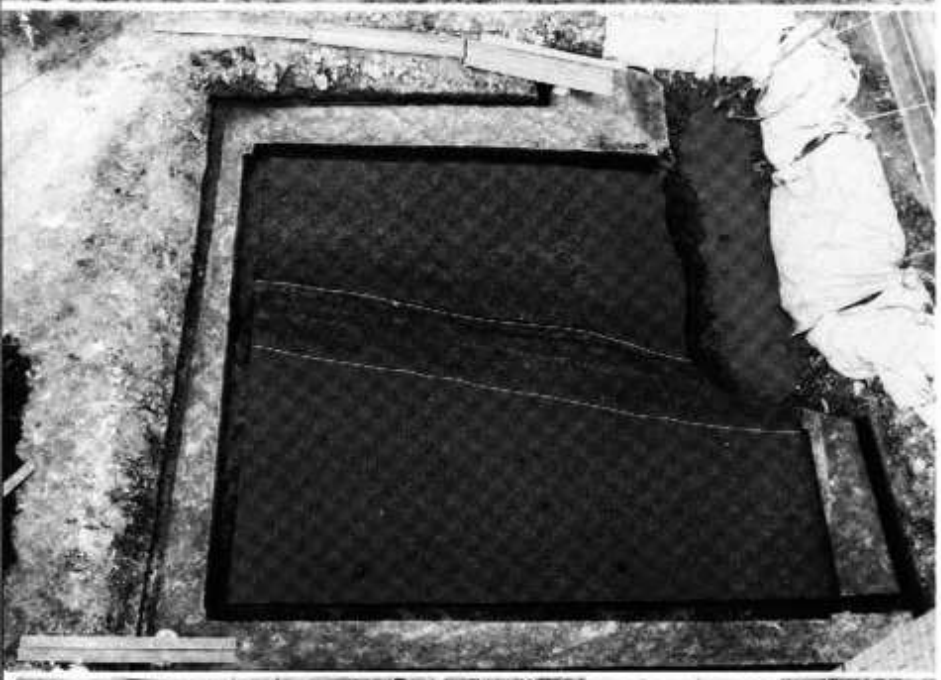


写真103
富沢遺跡第68次調査
5層水田跡
（西から）

写真104
富沢遺跡第68次調査
6層水田跡
（西から）

写真105
富沢遺跡第68次調査
2・3号溝跡
（北から）

写真106
富沢遺跡第68次調査
7a層水田跡
（西から）

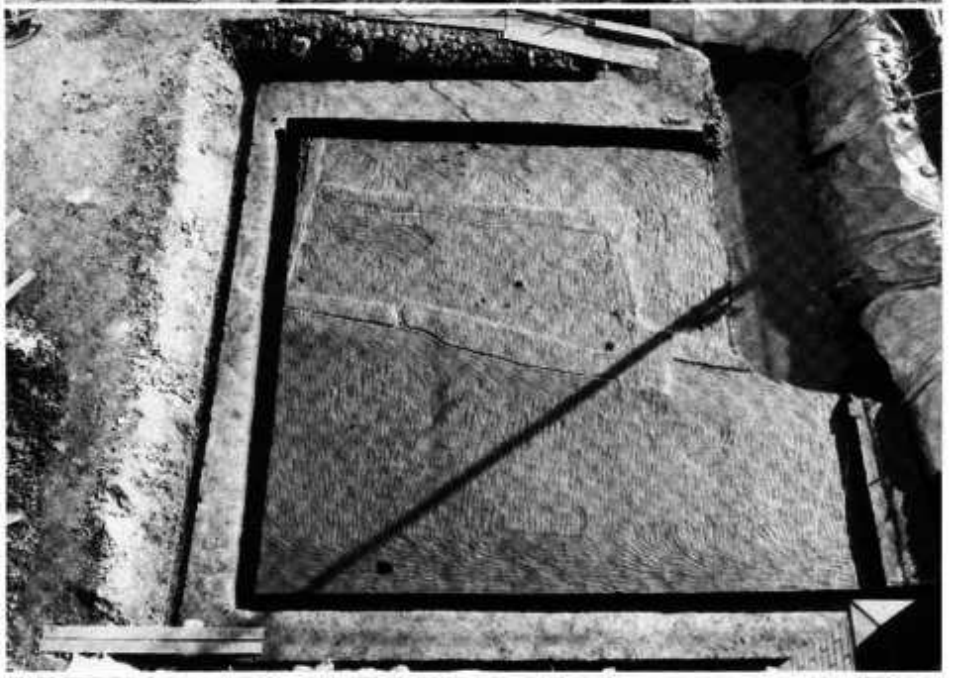


写真107
富沢遺跡第68次調査
8b層水田跡
（西から）

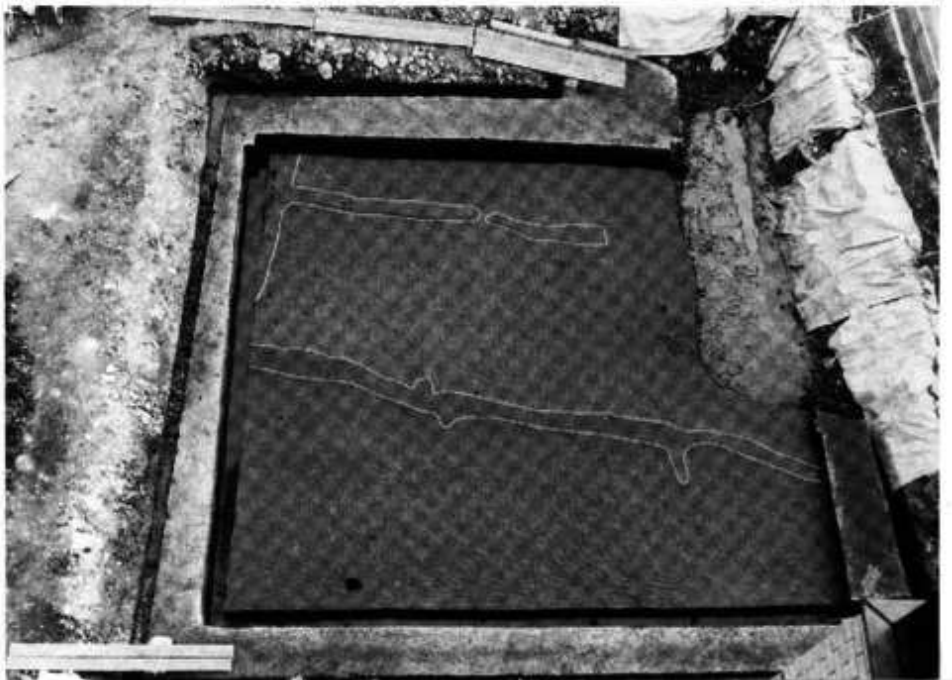


写真108
富沢遺跡第68次調査
9層水田跡
（西から）

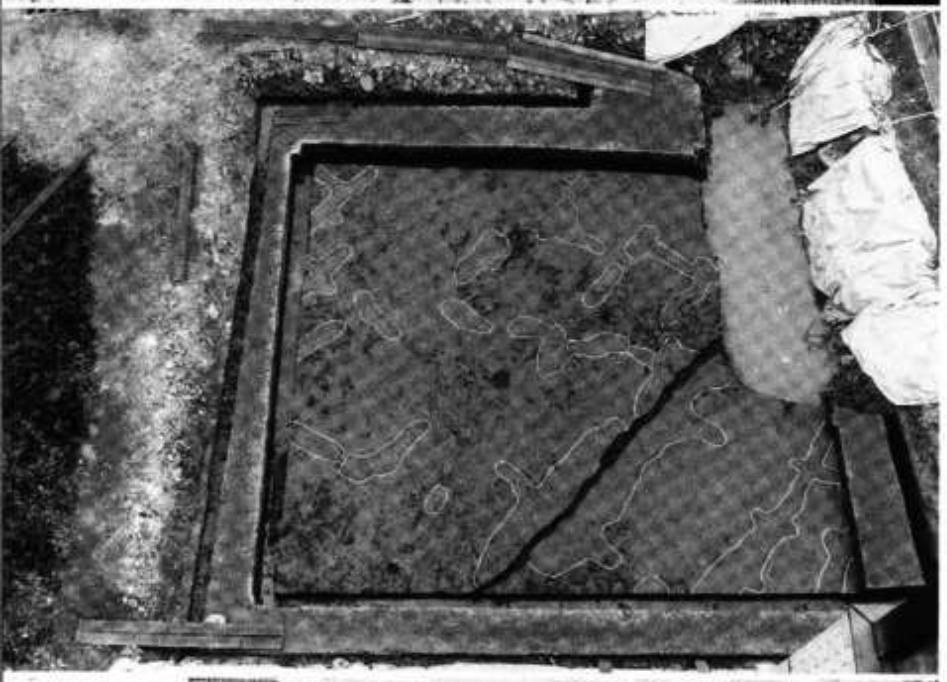


写真109
富沢遺跡第68次調査
10a層水田跡
（擬似畦畔B）
（西から）

写真110
富沢遺跡第68次調査
14層水田跡
確認作業風景
（西から）

写真111
富沢遺跡第68次調査
14層水田跡①
（西から）

写真112
富沢遺跡第68次調査
14層水田跡②
（北西から）

写真113
富沢遺跡第68次調査
5号溝跡（南から）

写真114
富沢遺跡第68次調査
深掘り区全景
（西から）

写真115
富沢遺跡第68次調査
25ｂ層上面
樹木出土状況
（西から）

写真116
富沢遺跡第68次調査
26層上面
樹木出土状況
（西から）

写真117
富沢遺跡第68次調査
断面（北壁）

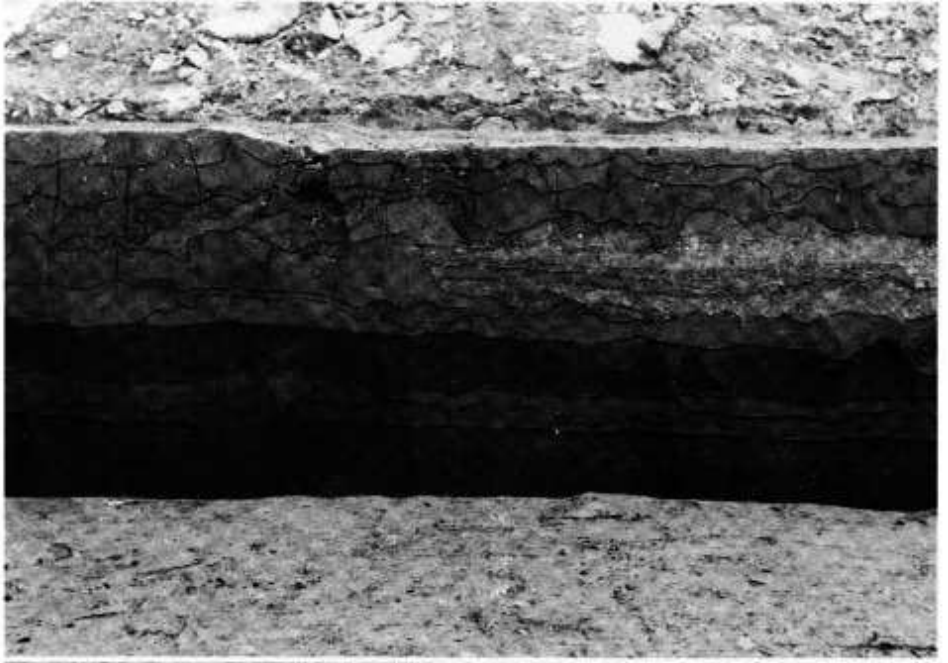


写真118
富沢遺跡第68次調査
深掘り区断面①
（南壁）

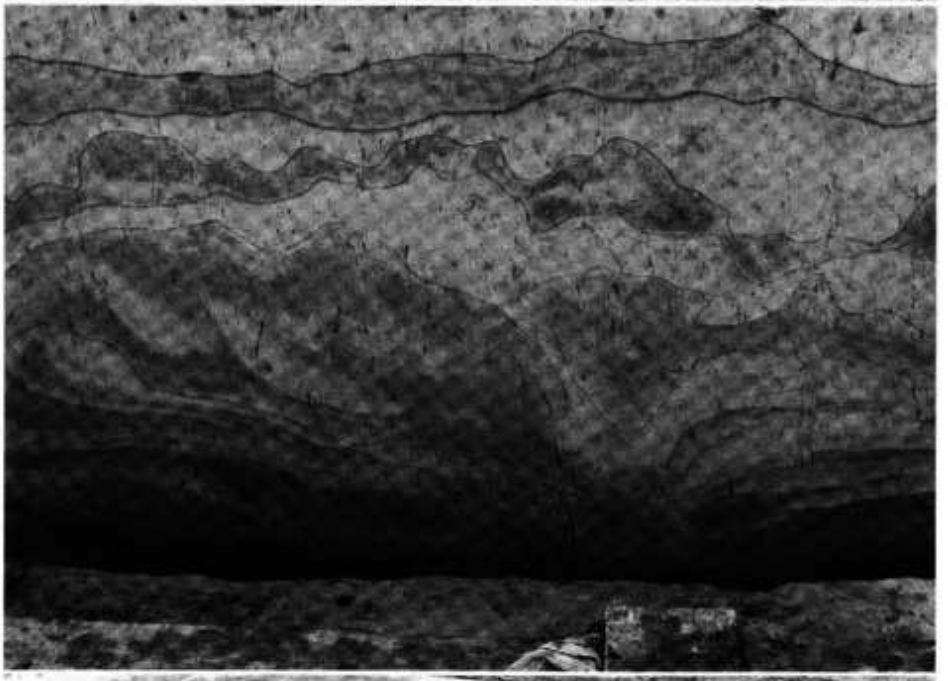


写真119
富沢遺跡第68次調査
深掘り区断面②
（西壁）

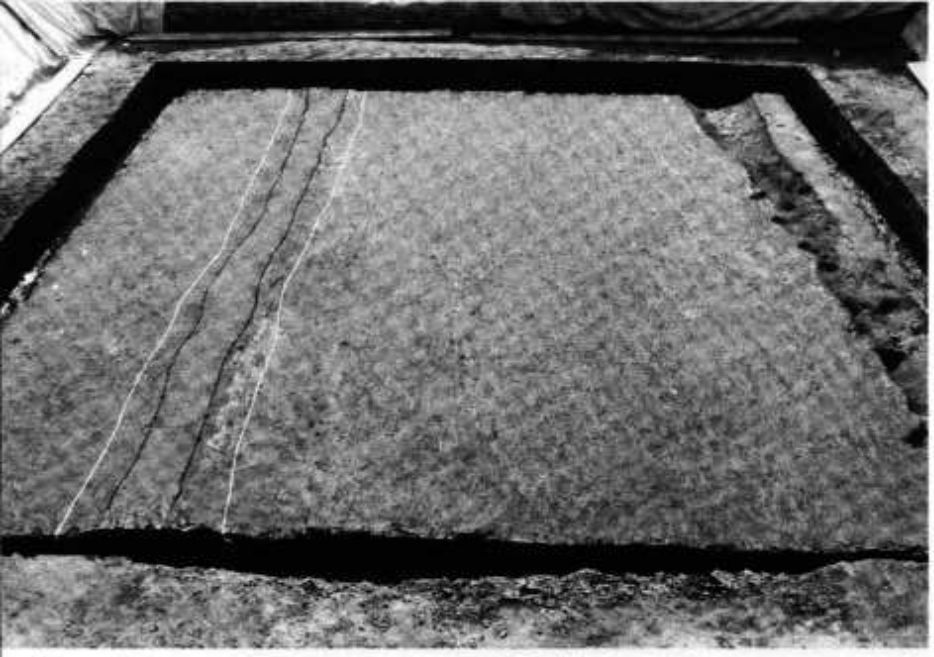


写真120
山口遺跡第13次調査
4層水田跡
（東から）

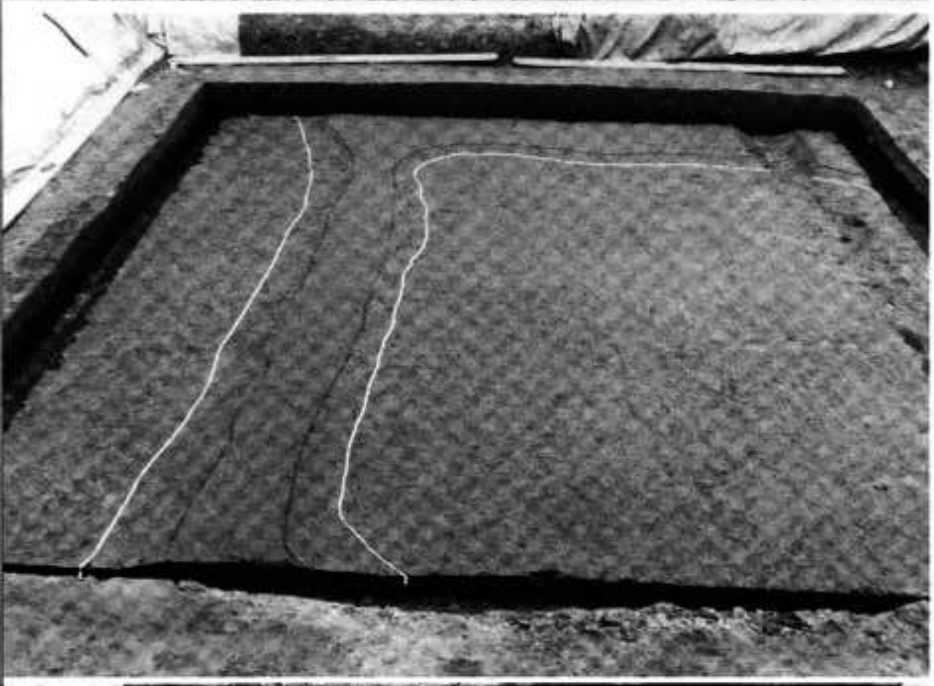


写真121
山口遺跡第13次調査
5層水田跡
（東から）

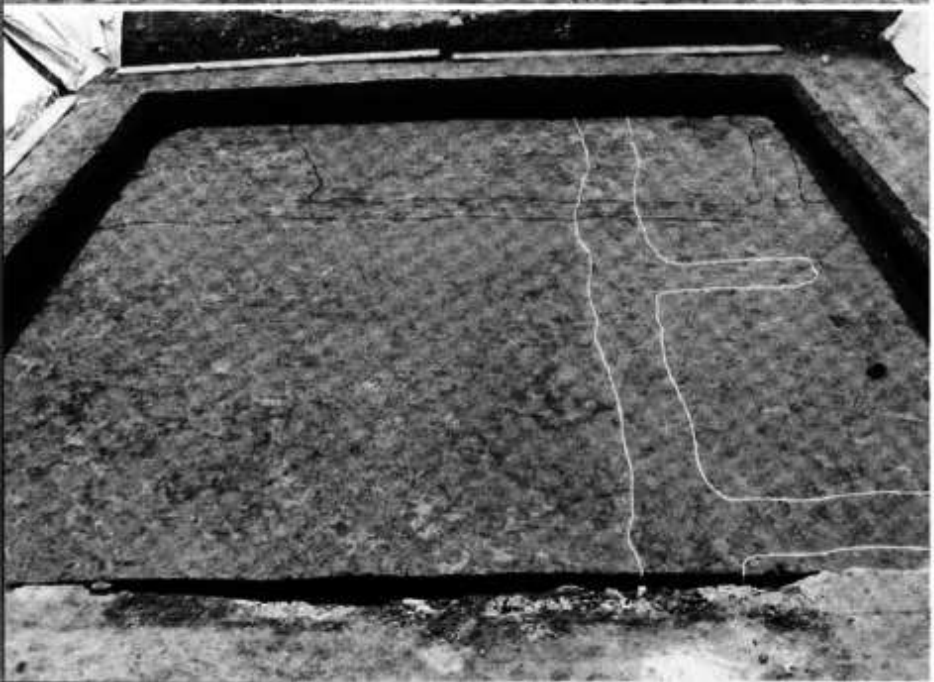


写真122
山口遺跡第13次調査
5層水田跡
（擬似畦畔B・
白線は新期）
（東から）

写真123
山口遺跡第13次調査
1号溝跡断面(西壁)

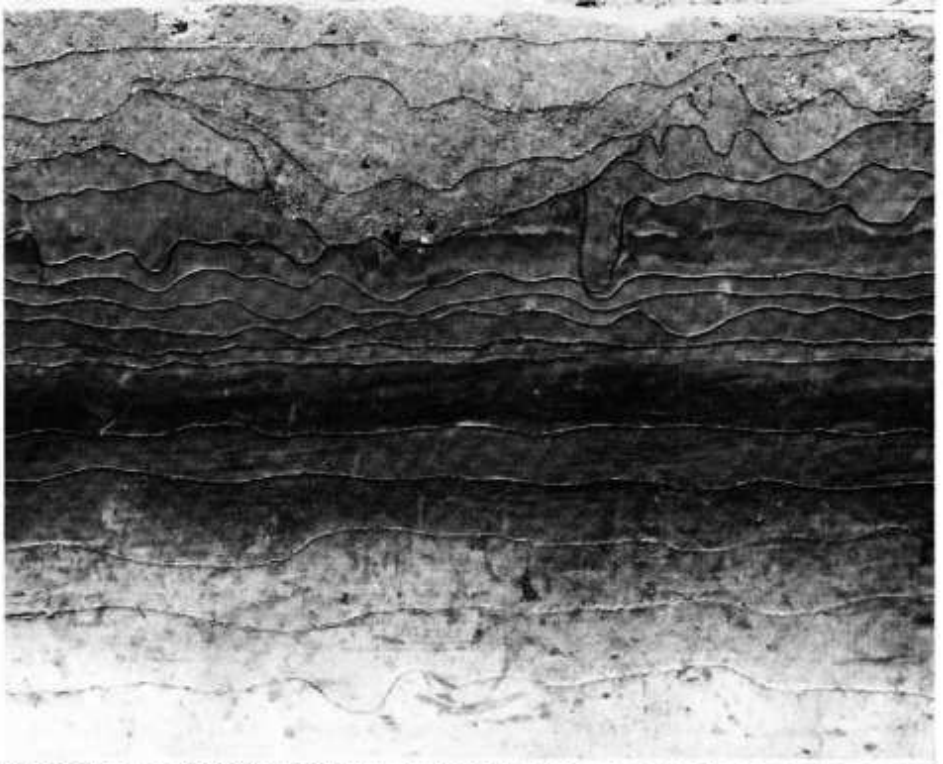


写真124
山口遺跡第13次調査
4・5層水田跡
畦畔断面①(東壁)

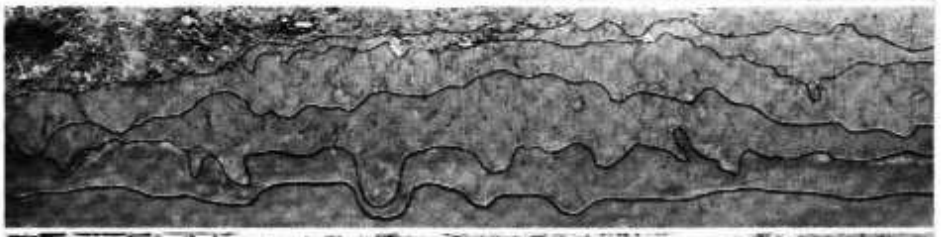


写真125
山口遺跡第13次調査
4・5層水田跡
畦畔断面②(西壁)

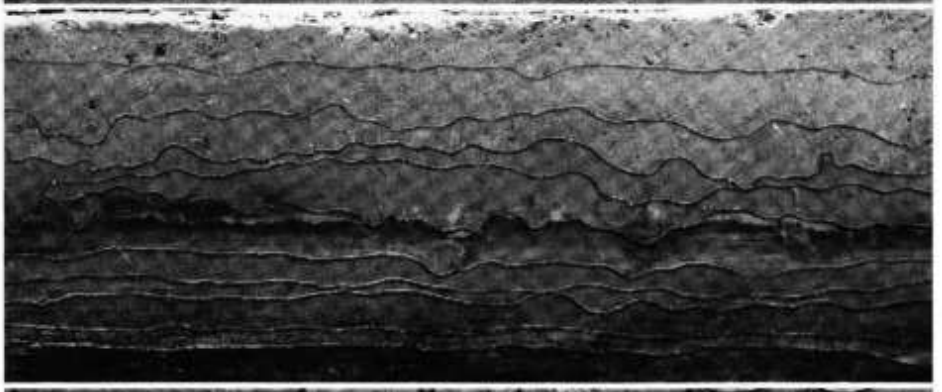
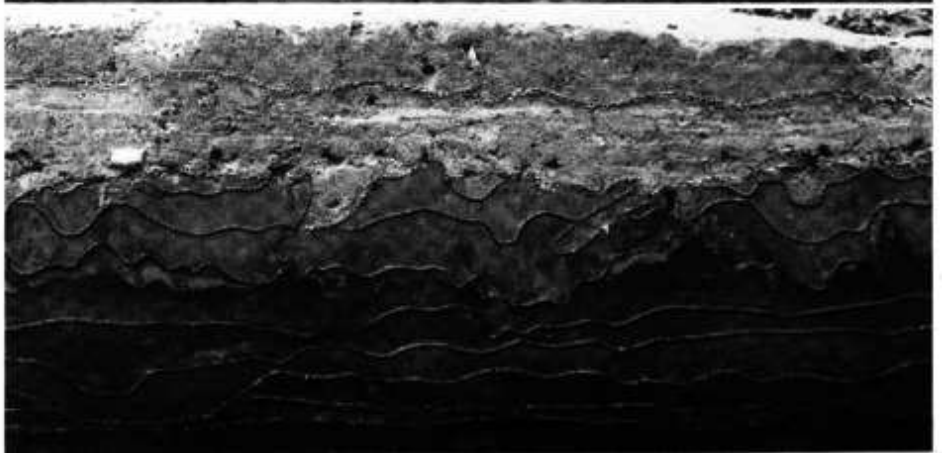


写真126
山口遺跡第13次調査
5層水田跡新期擬似
畦畔B断面(東壁)

写真127
山口遺跡第13次調査
5層水田跡新期擬似
畦畔B断面(北壁)



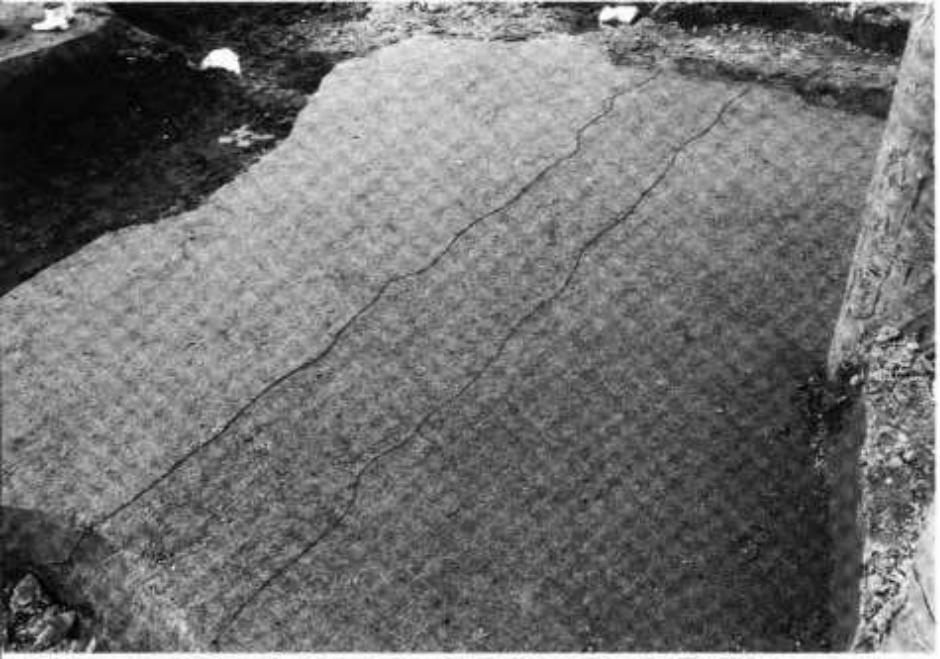


写真128
山口遺跡第14次調査
3層上面
帯状マンガン斑紋
確認状況
（東から）

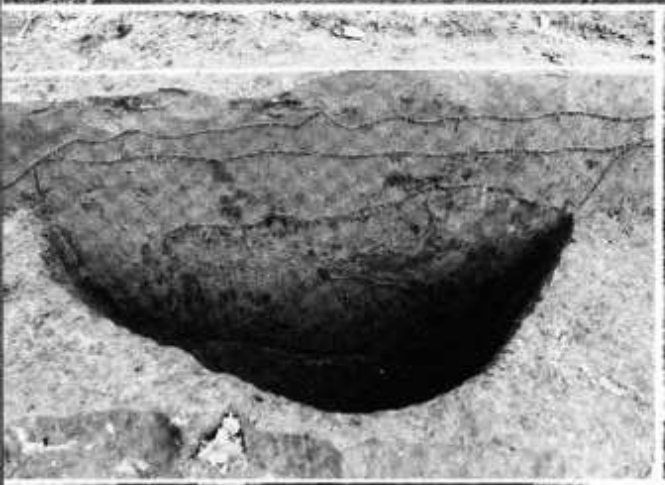


写真129(左上)　山口遺跡第14次調査　1号土坑（東壁）

写真130(右上)　山口遺跡第14次調査　2号土坑（西から）

写真131(左)　山口遺跡第14次調査　3層水田跡
（擬似畦畔B）（東から）

写真132
山口遺跡第14次調査
1号溝跡（北から）

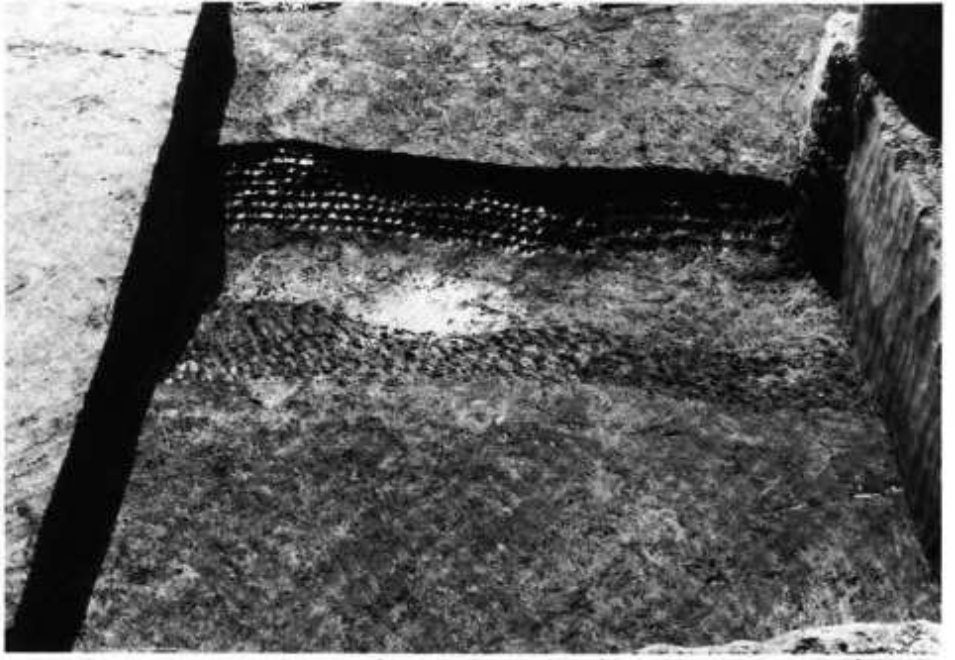
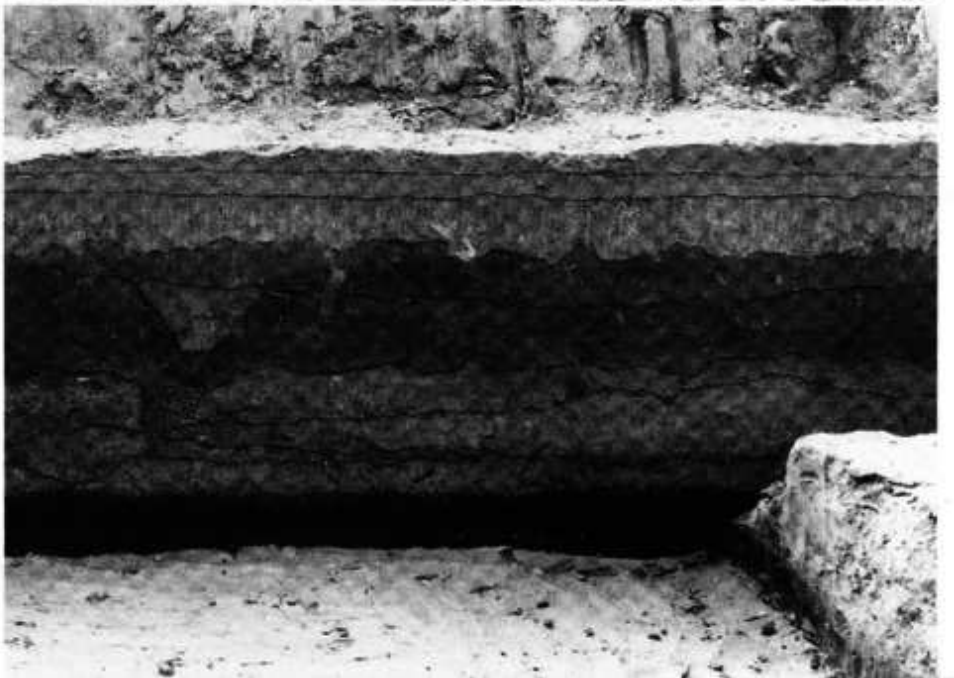


写真133
山口遺跡第14次調査
7層水田跡
（北東から）

写真134
山口遺跡第14次調査
7層水田跡畦畔断面
（南壁）



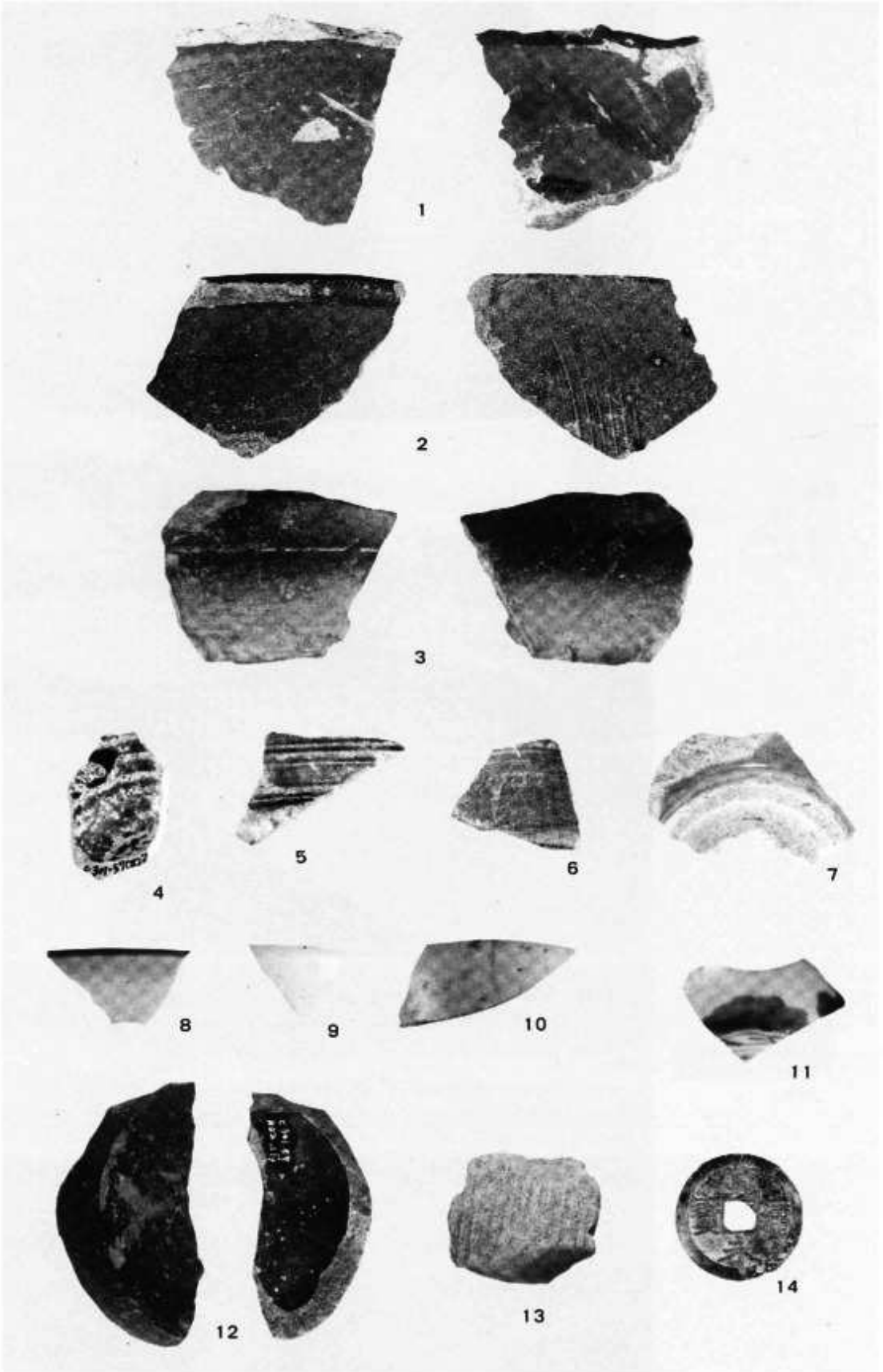


写真135　富沢遺跡第57次調査出土遺物(1)

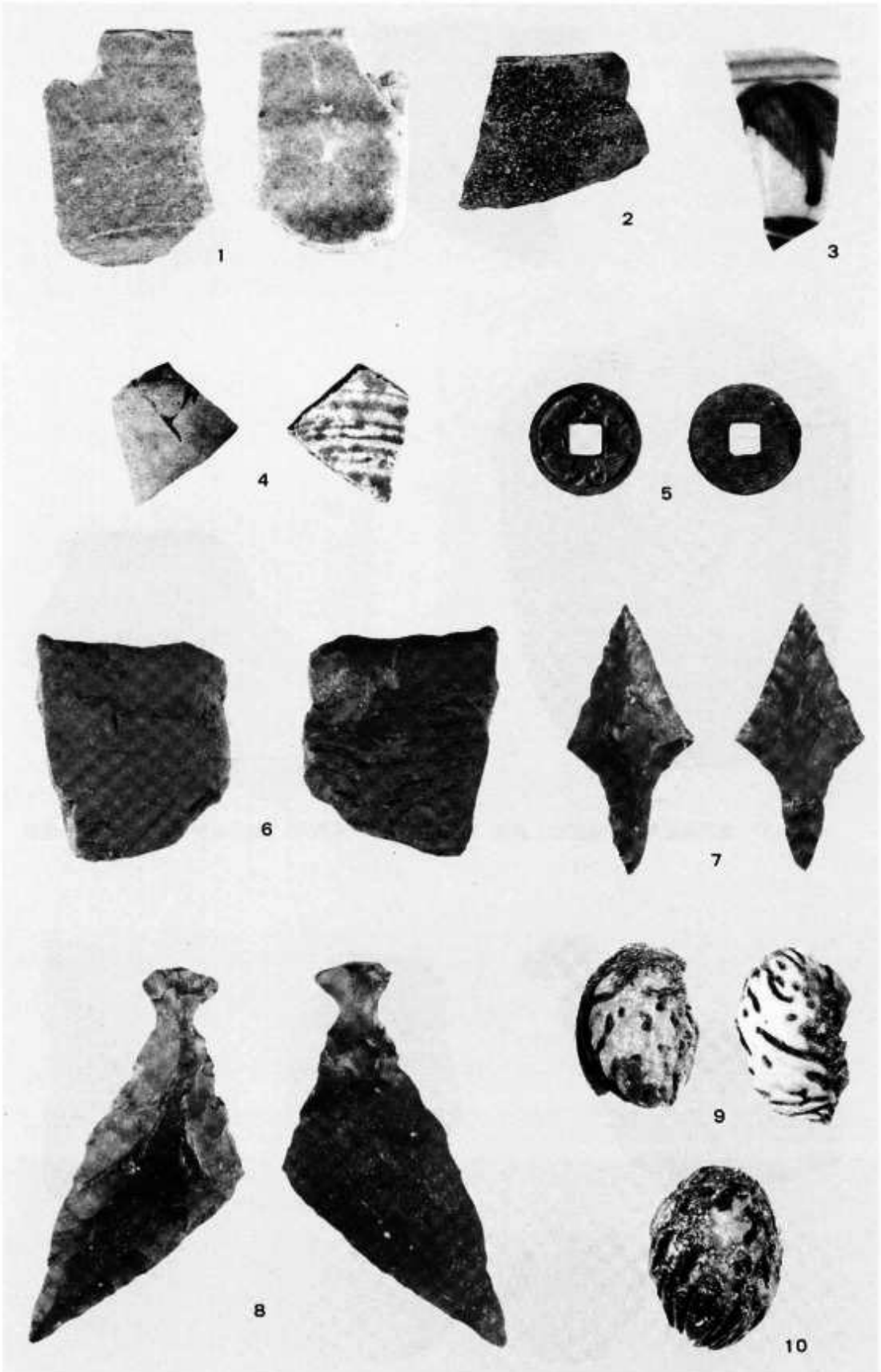


写真136　富沢遺跡第57次調査出土遺物(2)

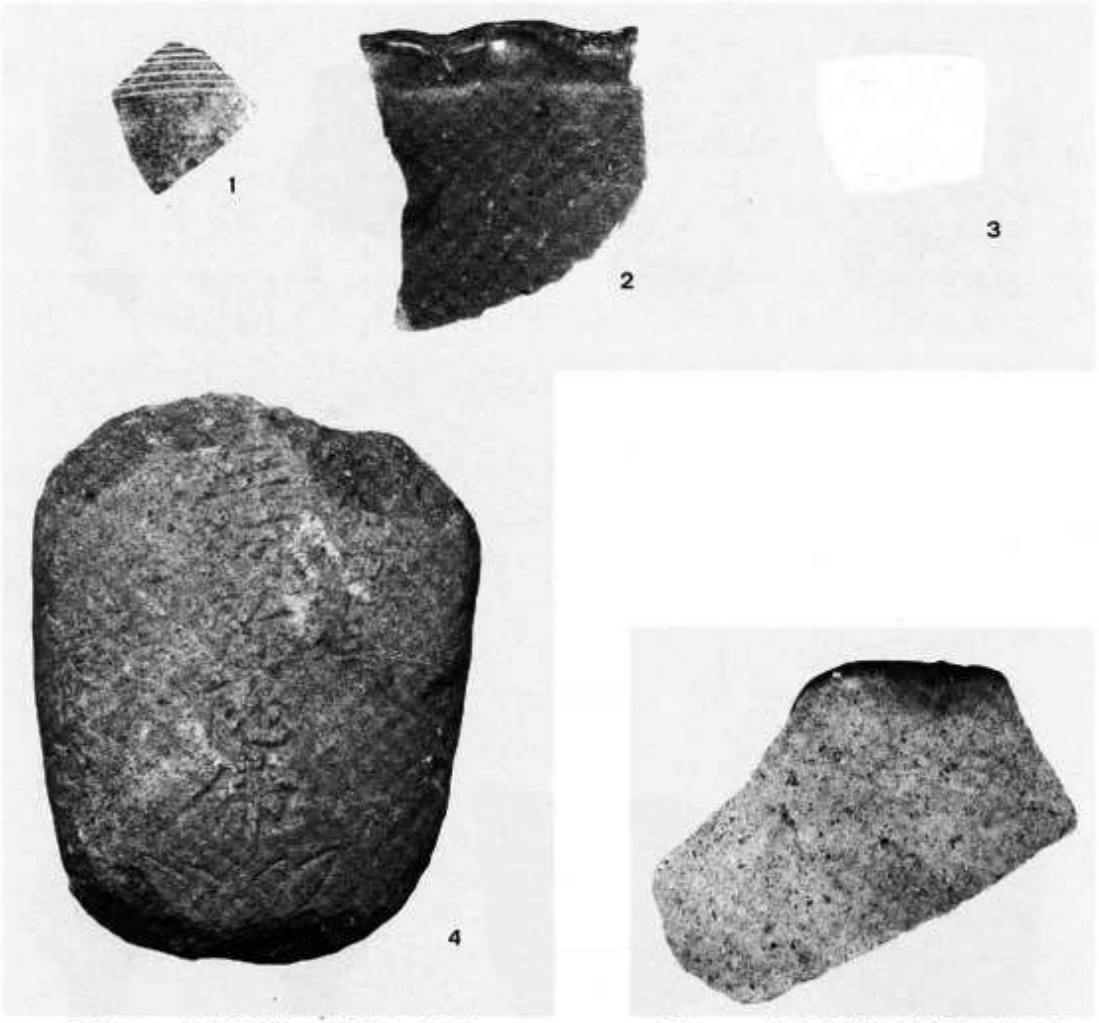


写真137　富沢遺跡第58次調査出土遺物

写真138　富沢遺跡第59次調査出土遺物

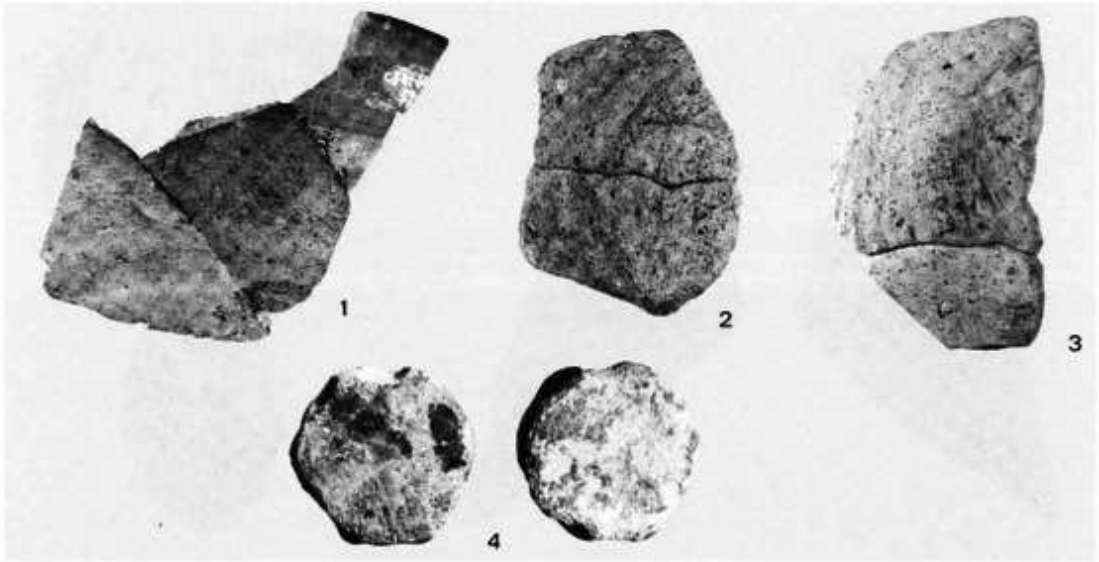


写真139　富沢遺跡第60次調査出土遺物

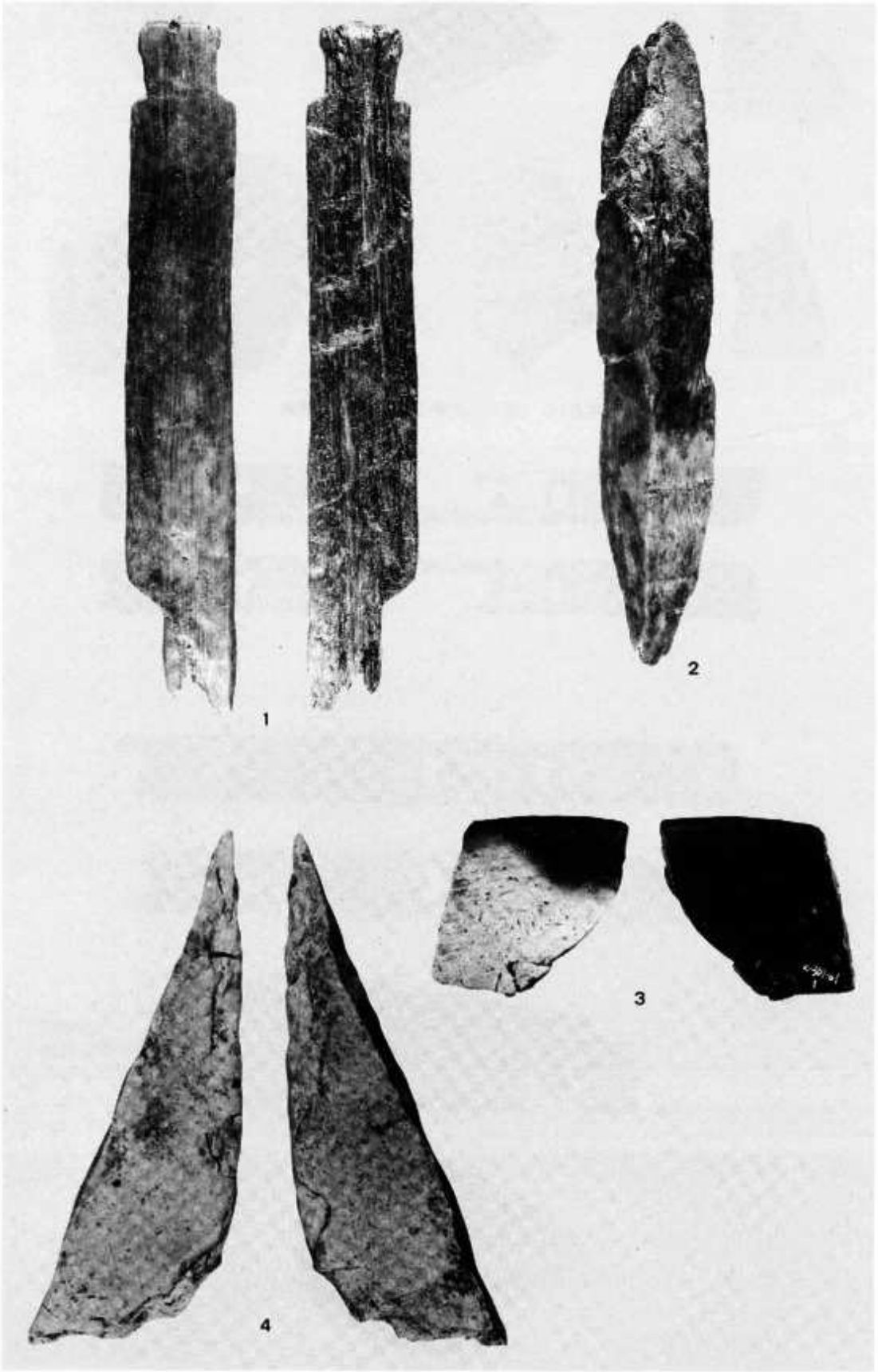


写真140　富沢遺跡第61次調査出土遺物

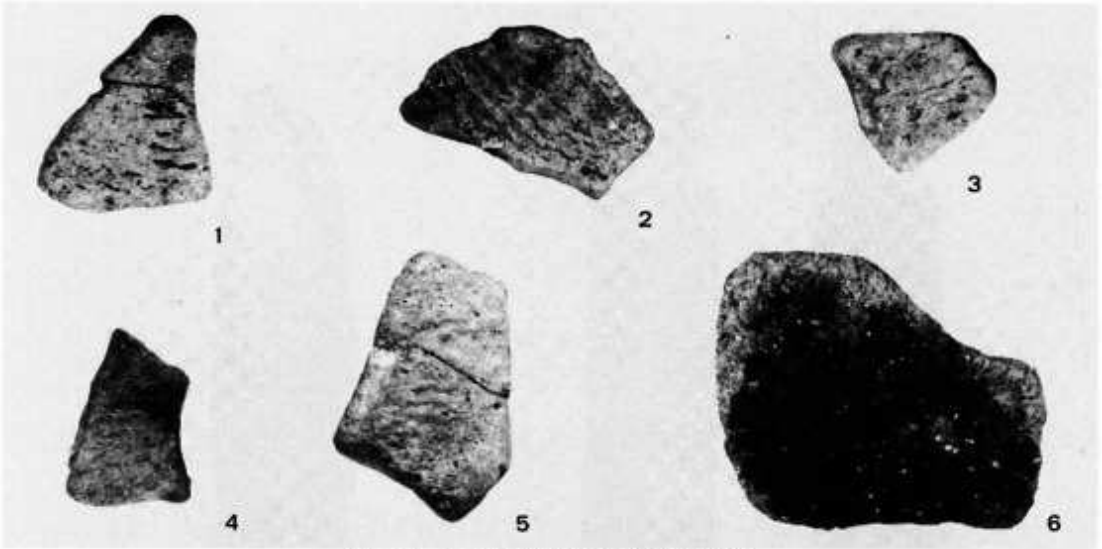


写真141　富沢遺跡第62次調査出土遺物

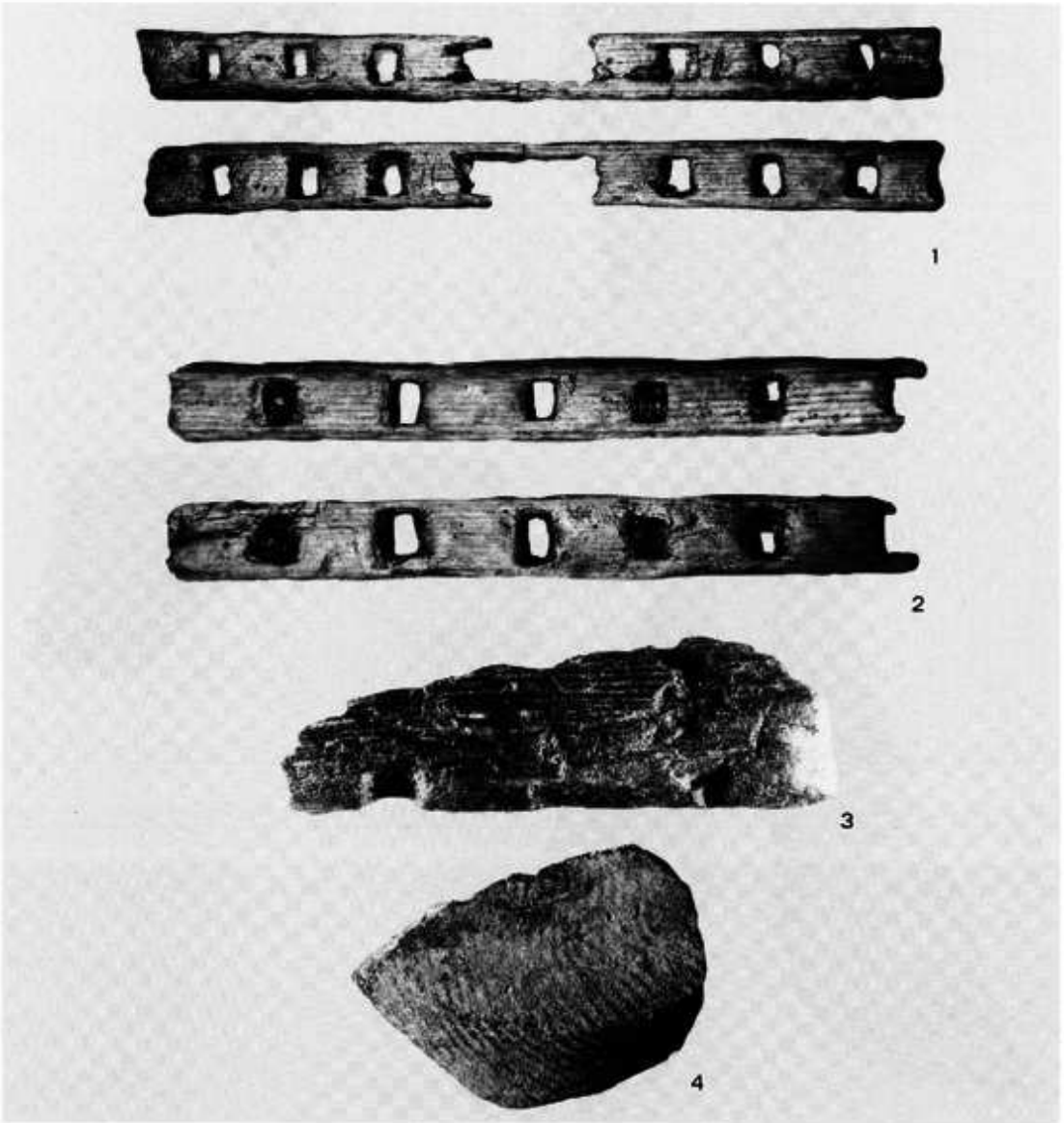


写真142　富沢遺跡第63次調査出土遺物(1)

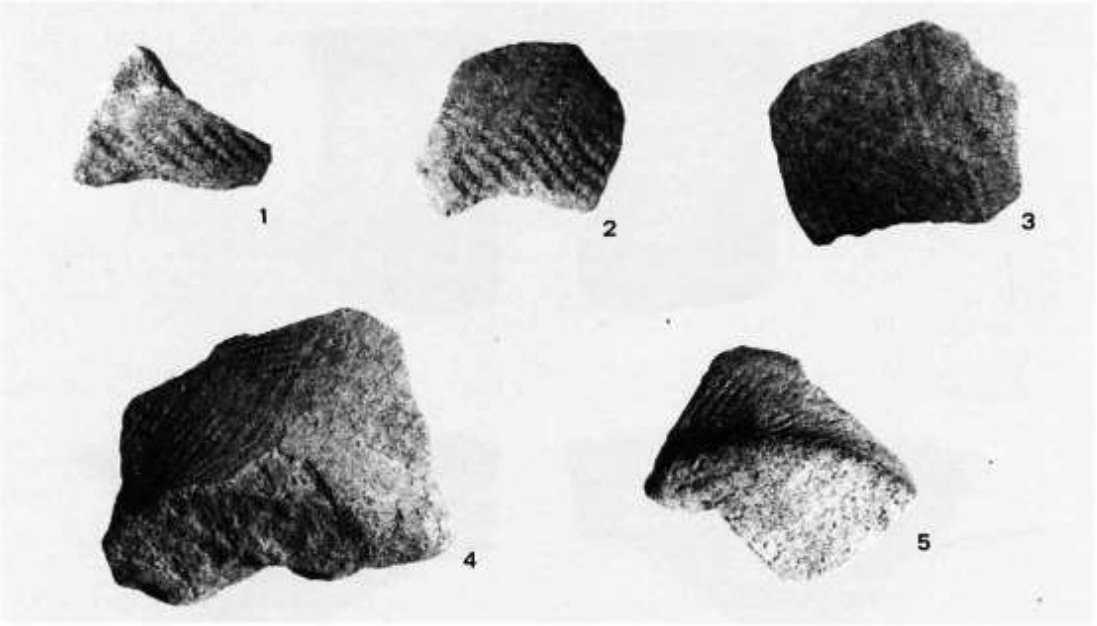


写真143　富沢遺跡第63次調査出土遺物(2)

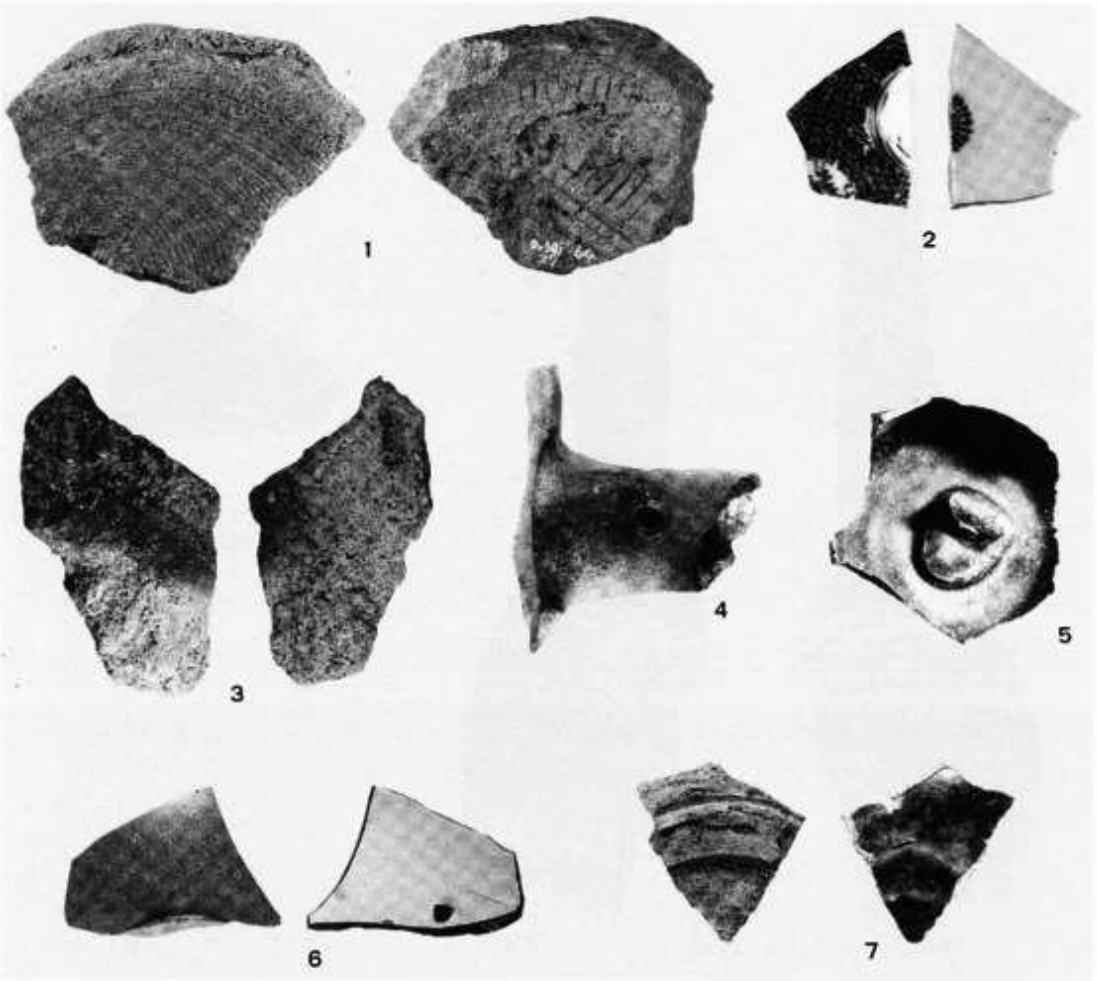


写真144　富沢遺跡第64次調査出土遺物

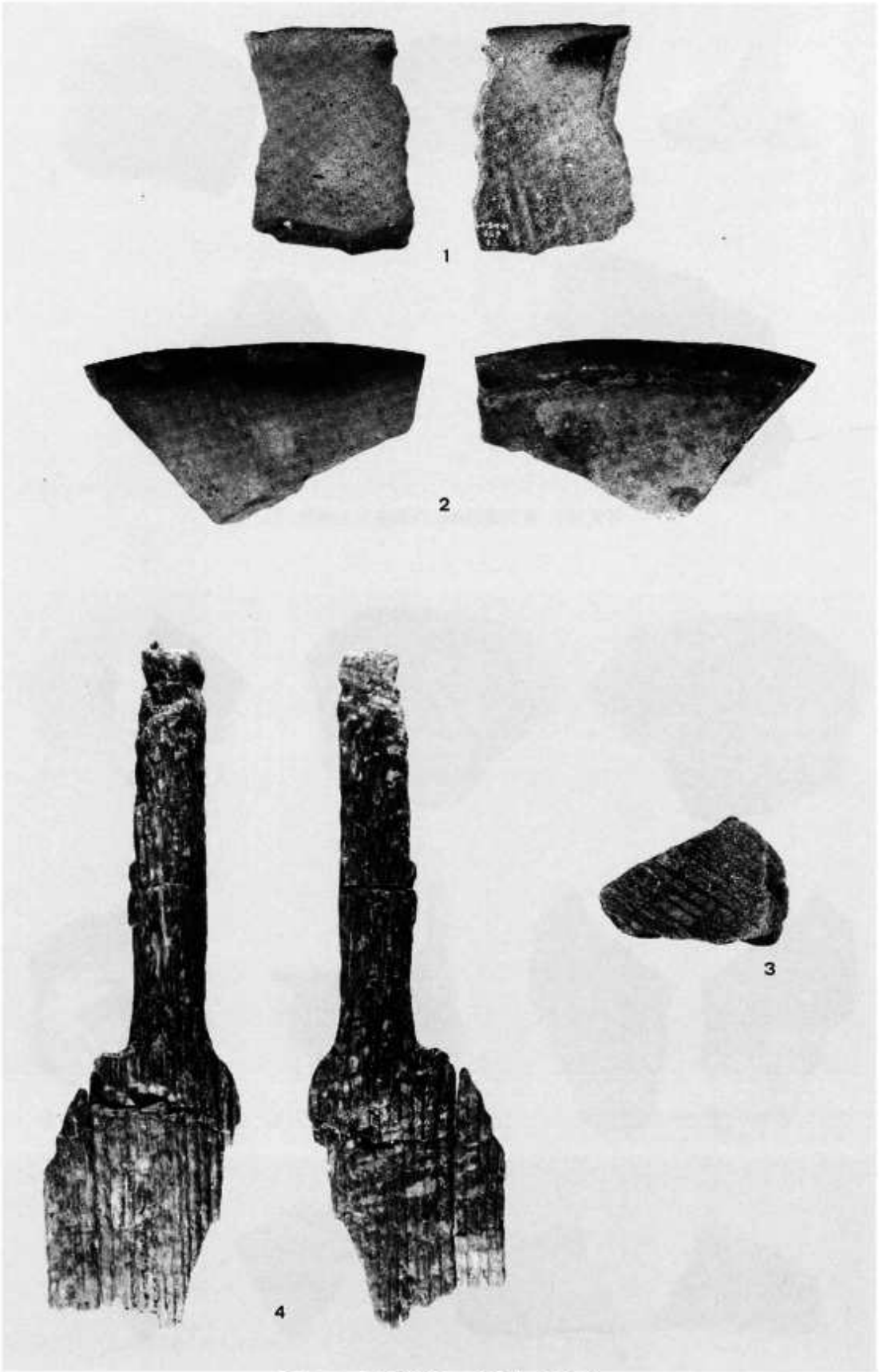


写真145　富沢遺跡第65次調査出土遺物

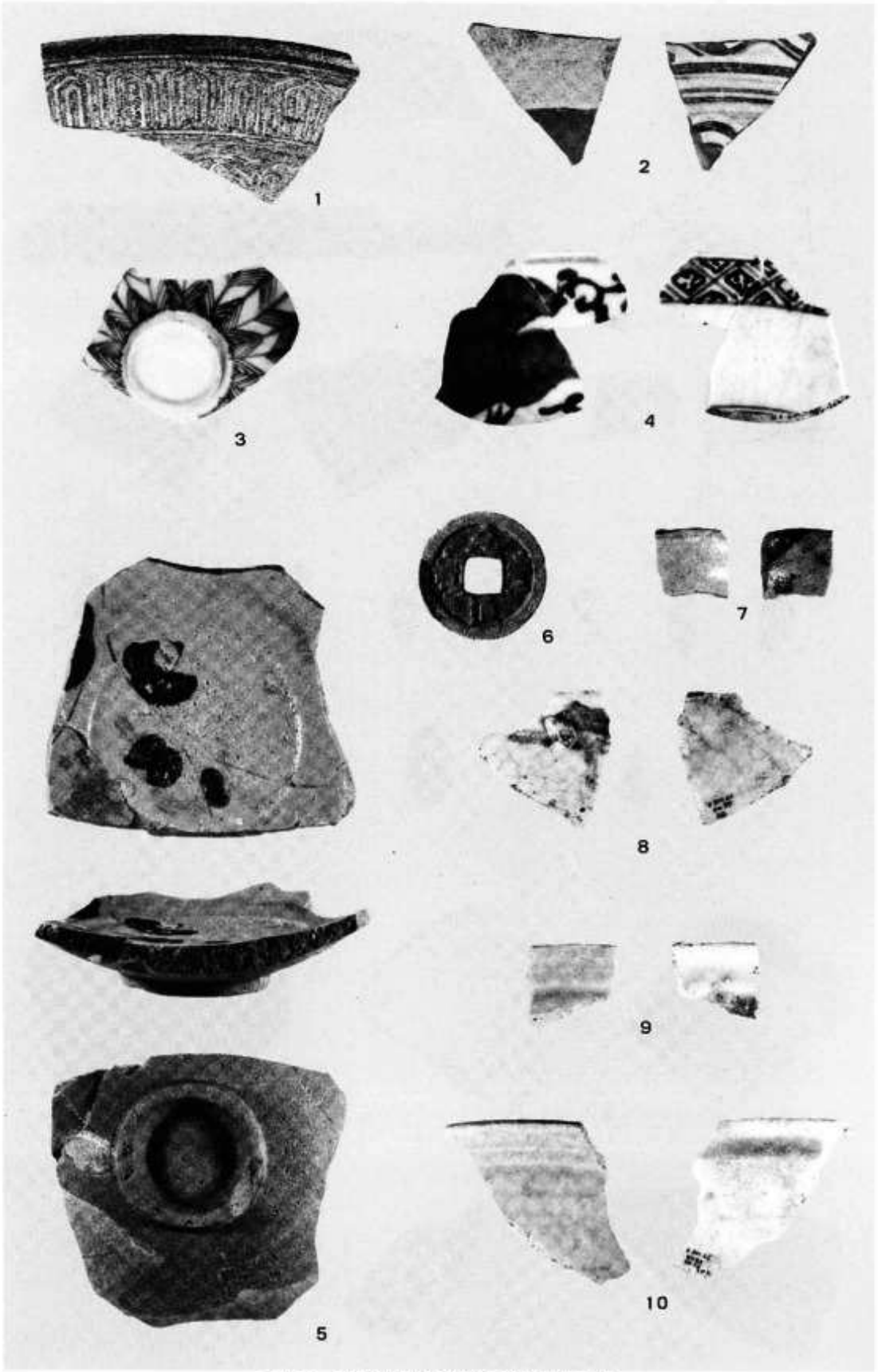


写真146　富沢遺跡第66次調査出土遺物(1)

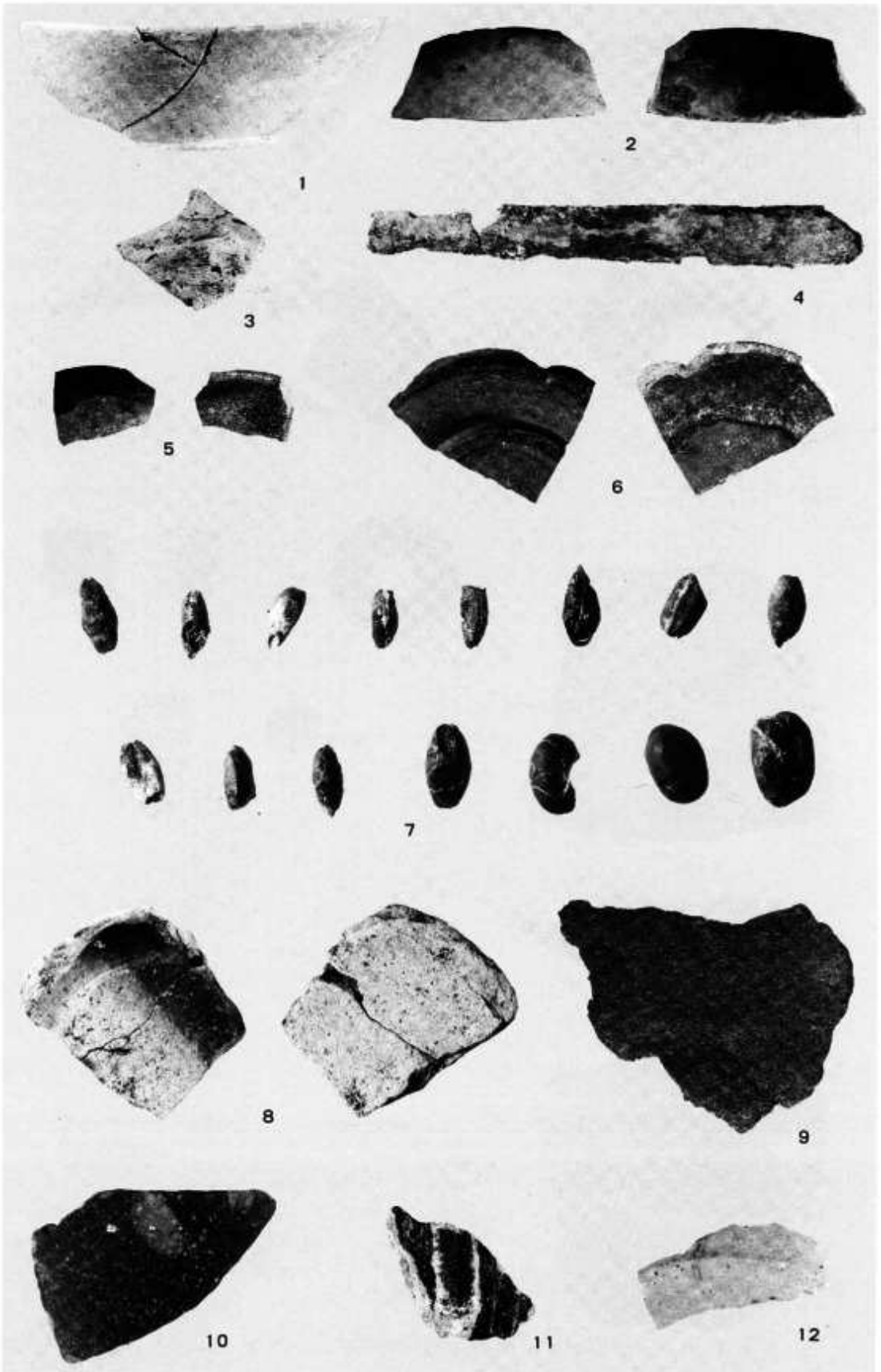


写真147　富沢遺跡第66次調査出土遺物(2)

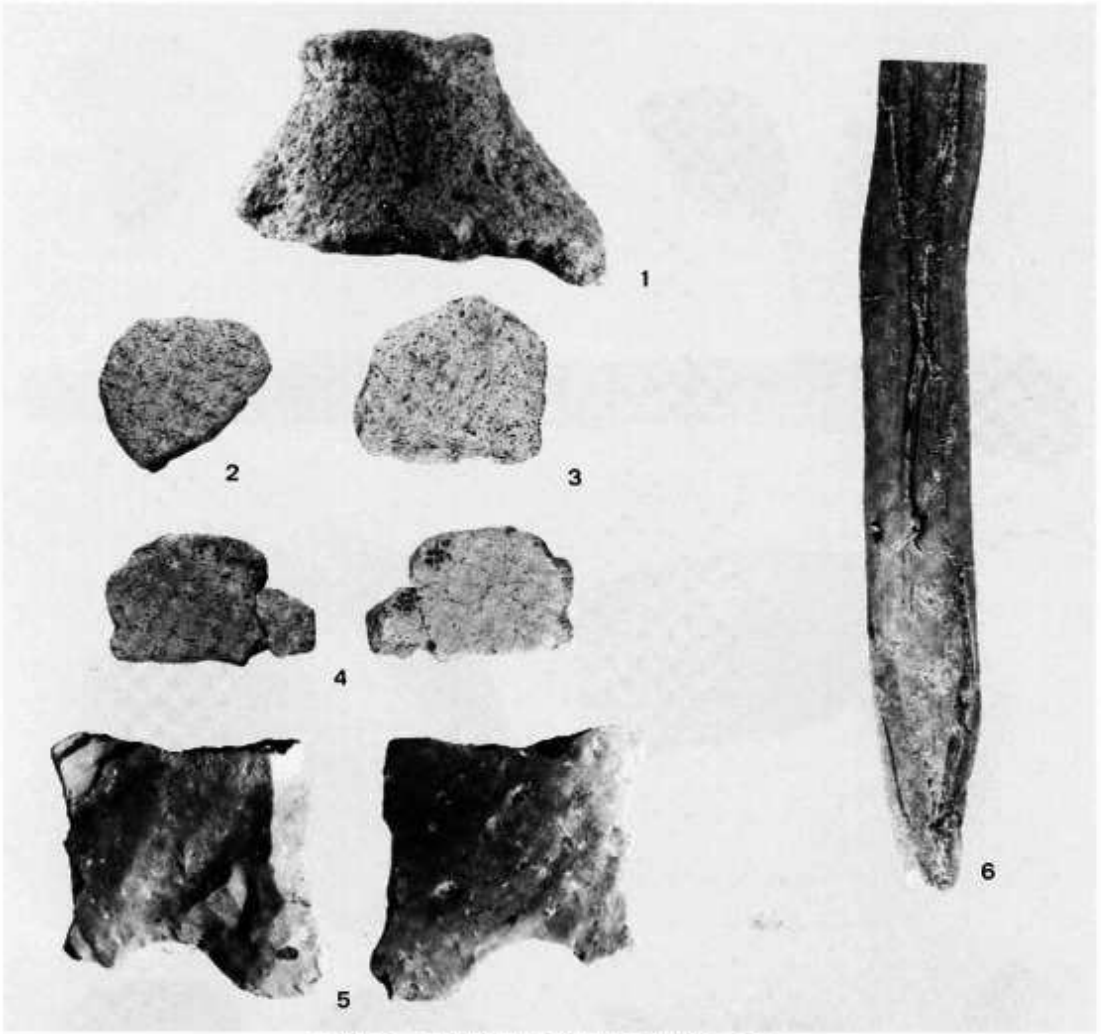


写真148　富沢遺跡第66次調査出土遺物(3)

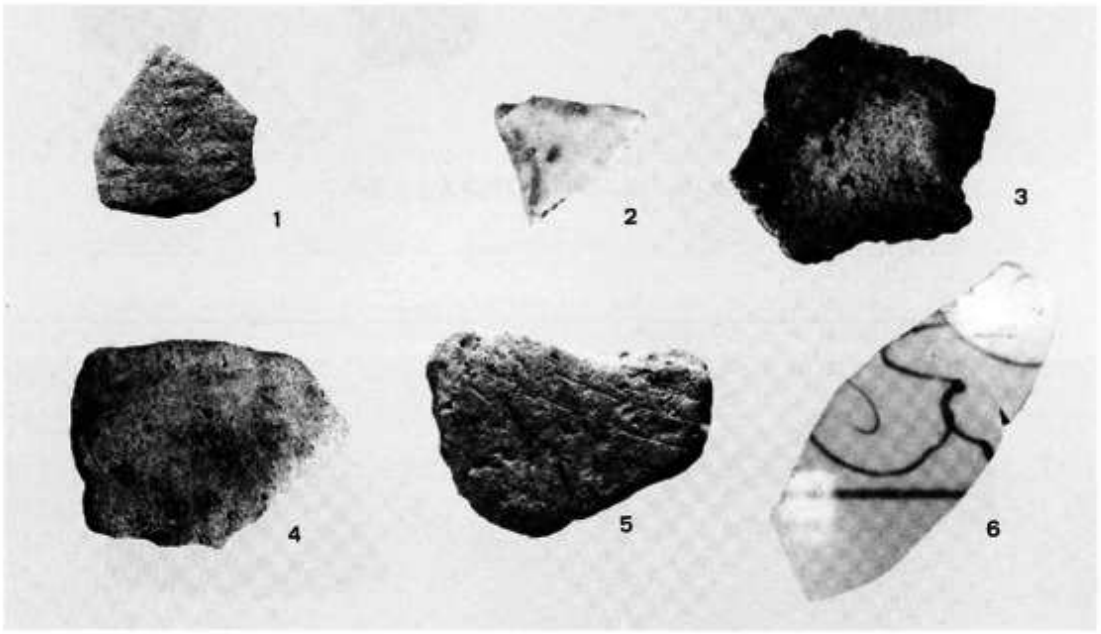


写真149　富沢遺跡第68次調査出土遺物

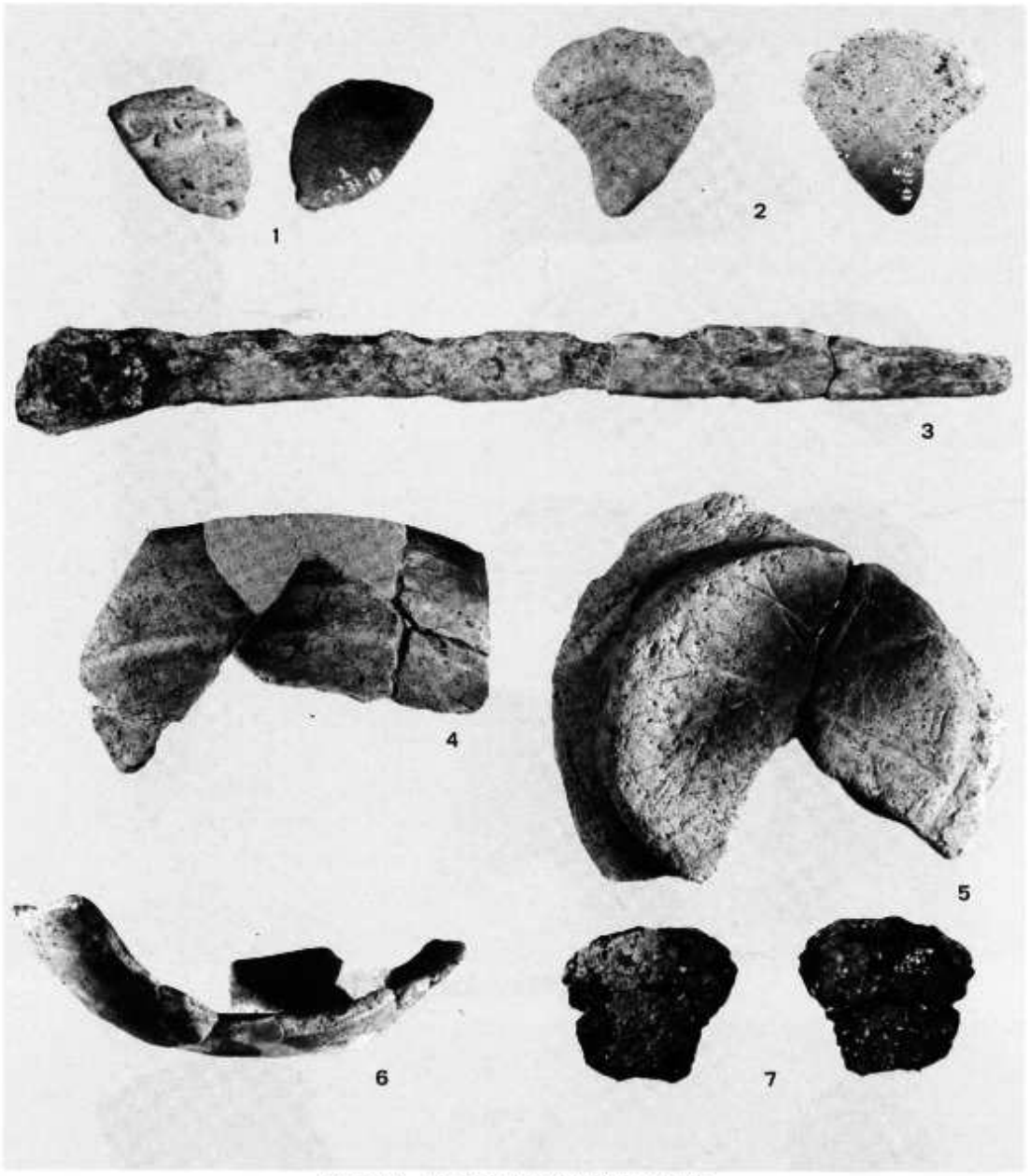


写真150　山口遺跡第13次調査出土遺物

写真151　山口遺跡第14次調査出土遺物(1)

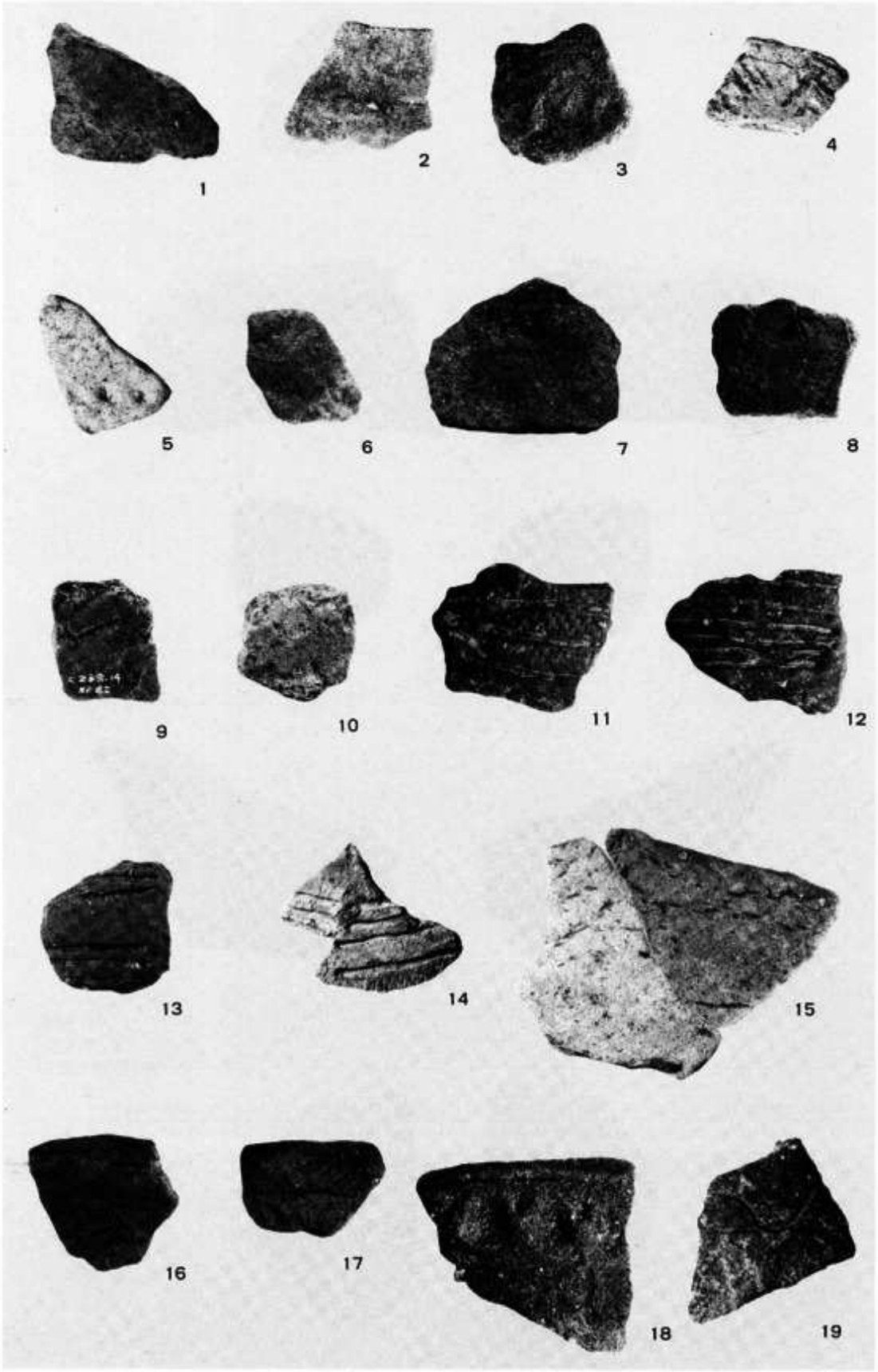
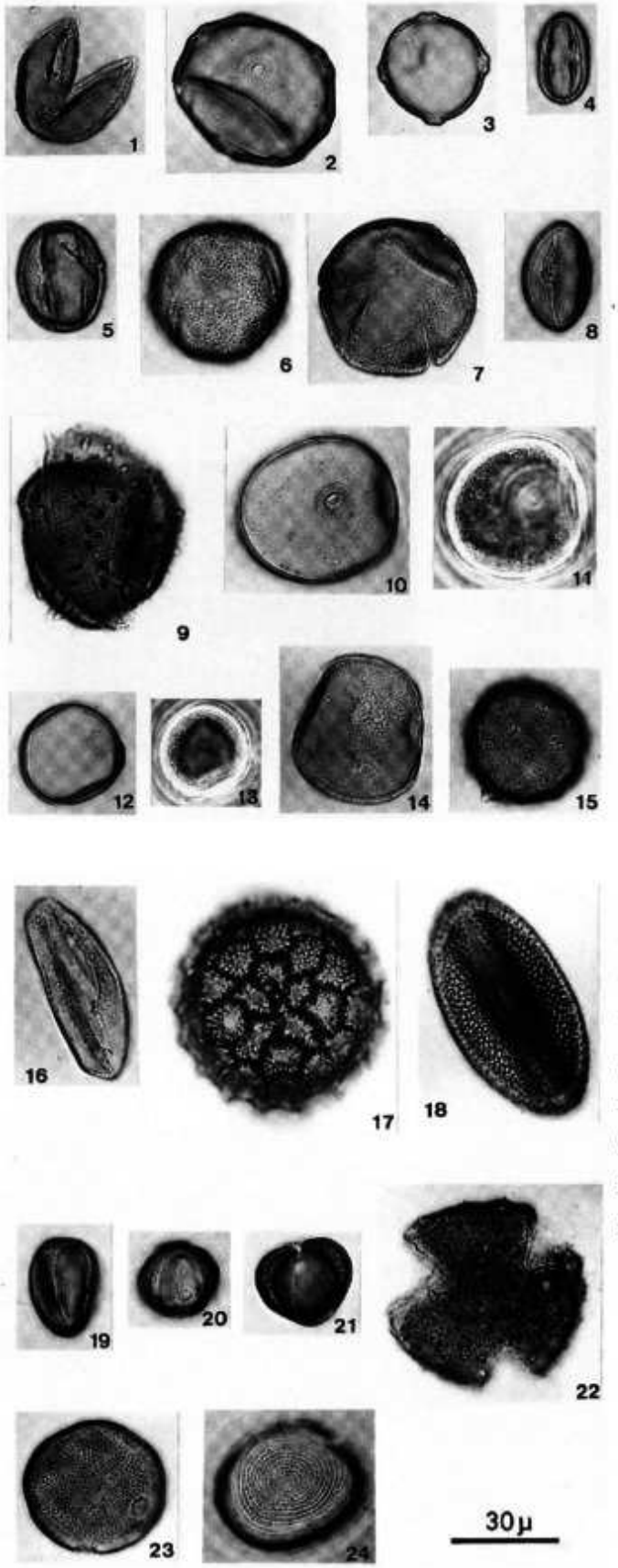


写真152　山口遺跡第14次調査出土遺物(2)

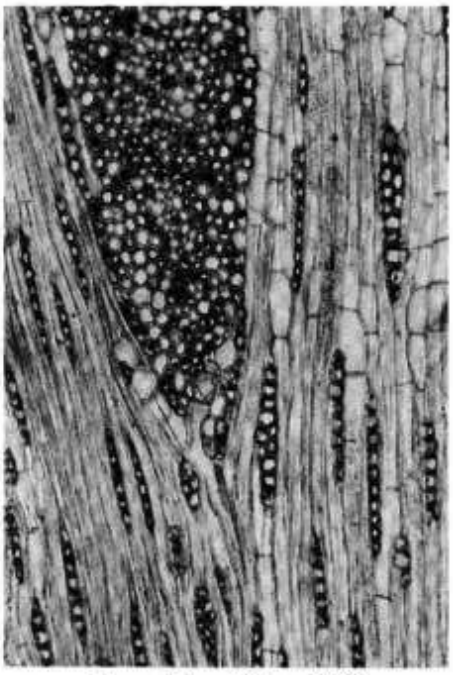
写真153　山口遺跡第14次調査出土遺物(3)



1	*Cryptomeria*	№1－4 a
2	*Juglans*	№3－13
3	*Carpinus*	№3－13
4	*Castanea*	№3－14
5	*Cyclobalanopsis*	№3－13
6	*Quercus*	№3－13
7	*Fagus*	№1－3
8	*Aesculus*	№3－13
9	*Viscum*	№1－4 a
10	*Gramineae*(*Oryza* type)	№1－3
11	同　上，位相差像	
12	*Gramineae*(*Wild* type)	№1－4 a
13	同　上，位相差像	
14	*Cyperaceae*	№1－3
15	*Alisma*	№1－4 a
16	*Monochoria*	№1－2 a
17	*Persicaria*	№3－14
18	*Fagopyrum*	№1－2 a
19	*Rotala*	№1－4 a
20	*Lythrum*	№3－14
21	*Artemisia*	№1－3
22	*Patrinia*	№1－2 a
23	*Liquidamber*	№3－16 a
24	*Concentricystis*	№1－2 a

写真154　富沢遺跡第58次調査出土花粉顕微鏡写真

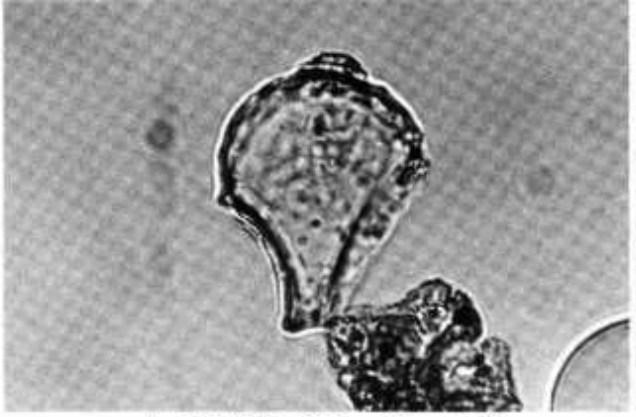
1　クヌギ節（MYG－747）木口　×40



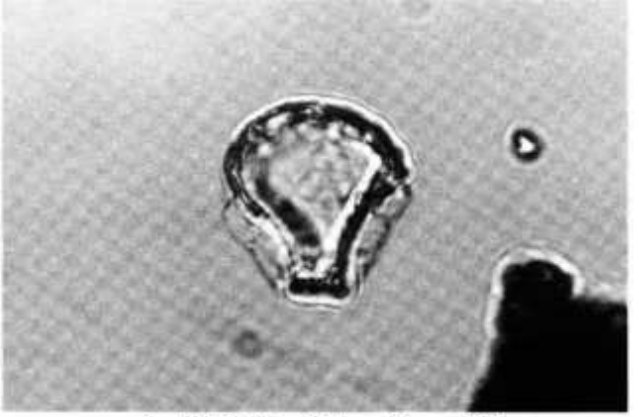
2　同　板目　×100

3　同　柾目　×200

写真155　富沢遺跡第65次調査出土着柄鋤鍬樹種顕微鏡写真

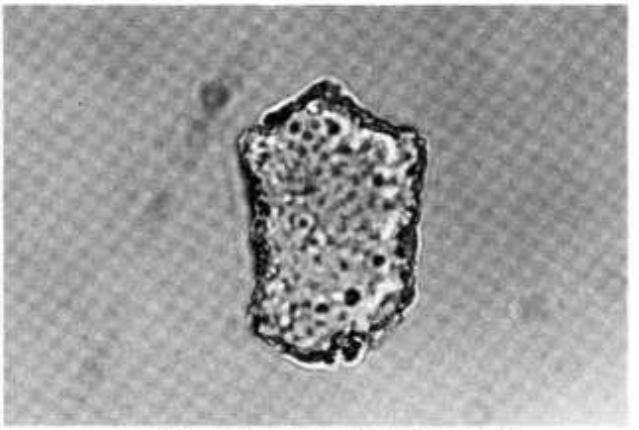


1　富沢60次　12層　イネ　×400

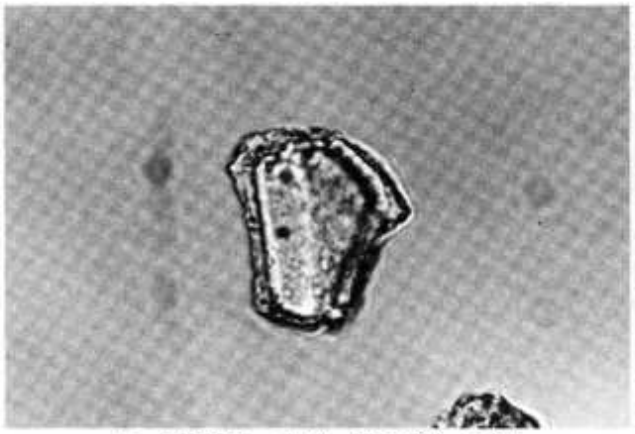


2　富沢61次　9層　イネ　×400

3　富沢62次　10層　イネ　×400

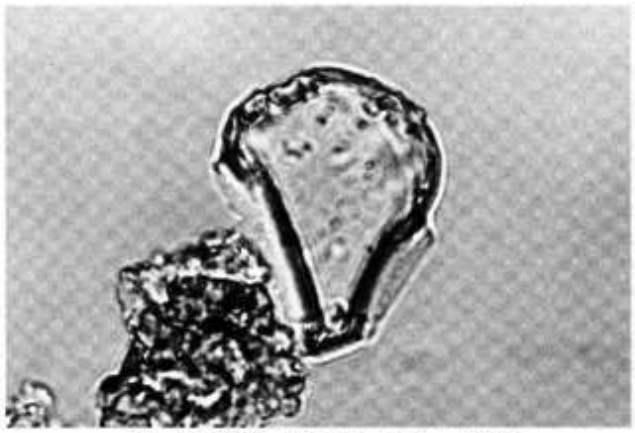


4　富沢63次　9層　タケ亜科　×400

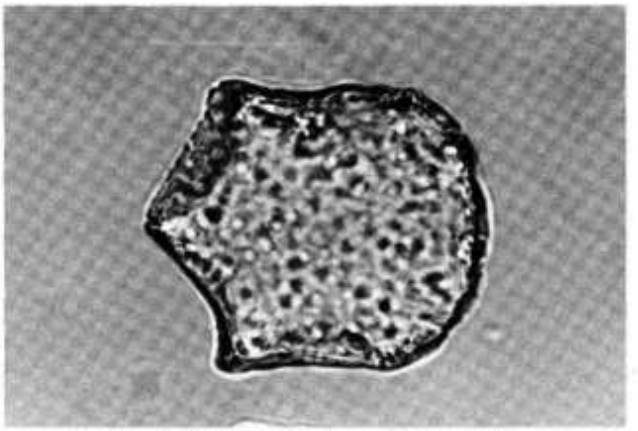


5　富沢63次　9層　タケ亜科　×400

6　富沢64次　6a層　イネ　×400



7　富沢65次　8a層　イネ　×400

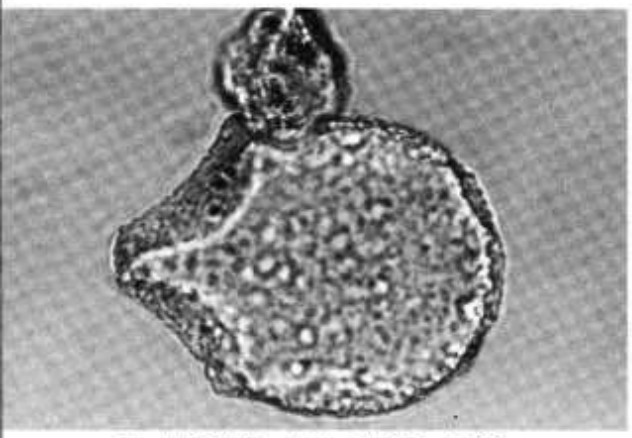


8　富沢65次　8a層　ヨシ属　×400

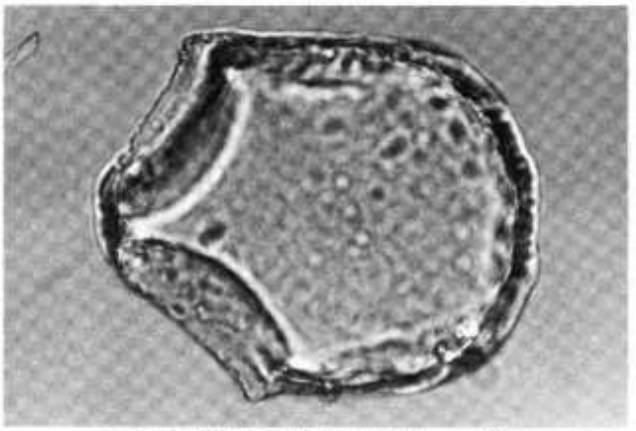
写真156　プラント・オパール顕微鏡写真1

9　富沢65次　8ａ層　タケ亜科　×400

10　山口13次　5層　イネ　×400

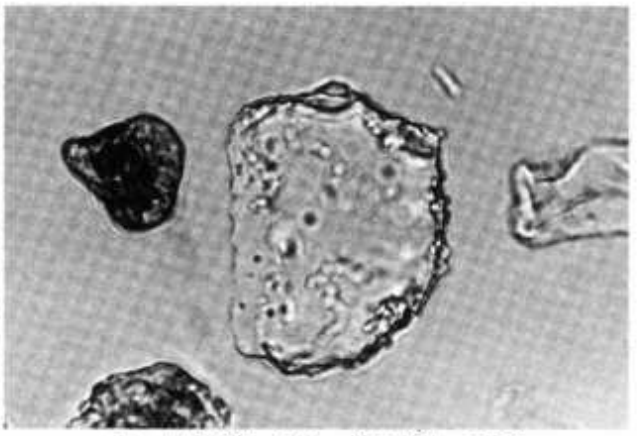


11　山口13次　5層　ヨシ属　×400

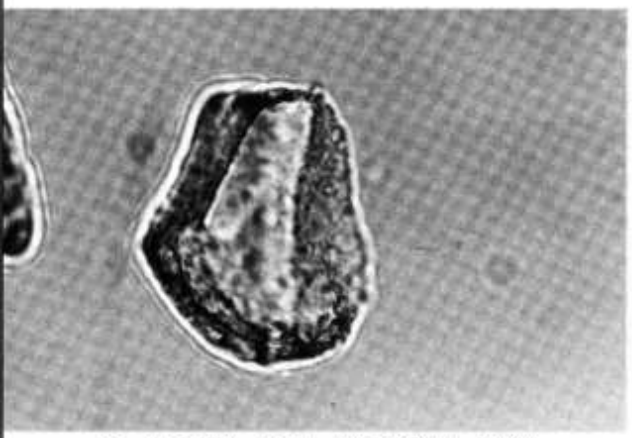


12　山口13次　5層　ヨシ属　×400

13　山口14次　5層　イネ　×400



14　山口14次　5層　タケ亜科　×400



15　山口14次　5層　タケ亜科属　×400

写真157　プラント・オパール顕微鏡写真2

文化財課職員録

課　長　早坂春一

管理係		調査第一係			
係　長	鴨田義幸	係　長	佐藤　隆	主　事	佐藤　洋
主　事	白幡靖子	主　任	田中則和	〃	金森安孝
〃	佐藤良文	教　諭	太田昭夫	〃	佐藤甲二
〃	高橋三也	主　任	篠原信彦	教　諭	小川淳一
〃	庄司　厚	〃	木村浩二	主　事	渡部弘美
		主　事	吉岡恭平	〃	工藤哲司
		〃	斎野裕彦	〃	主浜光朗
		教　諭	五十嵐康洋	〃	長島榮一
		〃	渡辺雄二	〃	工藤信一郎
		主　事	大江美智代	〃	荒井　格
				〃	中富　洋
		調査第二係		〃	平間亮輔
		係　長	加藤正範	教　諭	高倉祐一
		主　任	熊谷幹男	主　事	佐藤　淳
		教　諭	佐藤好一	〃	渡部　紀

仙台市文化財調査報告㉒第152集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)

——富沢遺跡第57～68次，
山口遺跡第13・14次発掘調査報告㉑——

平成3年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社共新精版印刷
仙台市宮城野区日の出町2－4－2
TEL 236－7181